岳　山

第二十三年

第三號

山岳

第二十三年第三號　昭和四年九月發行

目次

臺灣の山旅　大平晟

緒言……一
發程……六
新高山……四一
日月潭……一三〇
南湖大山……一七〇
七星山……二一五
歸途……二二五
尾言……二三二

圖版　對頁

○雲懸橋（北口陳有蘭溪に架設せる鐵線橋）……一六
○觀高より見たる新高山……三二

○八通關駐在所……四八
○八通關の後丘から望んだ新高山……六四
○御岳標高地點附近の溪流と樹林……八〇
○富士山標高地點附近に於ける植物景觀……九六
○新高主山の肩部より仰いだ主山の絶巓……一一二
○南湖大山頂上より東方を望む（其一）……一二八
○同　（其二）……一四四
○同　（其三）……一六〇
○同　（其四）……一六八
○南湖大山頂上より南方を望む……一七六
○南湖大山頂上より南西方を望む……一八四
○南湖大山頂上より西方次高山を望む……一九二
○南湖大山頂上より雲海を隔てゝ西北方に大覇尖山を望む……二〇八

會報

自二三六
至二四六
○第二十二回大會記事○第四十二回小集會記事○幹事改選○新入會員紹介○會員章再交附○會員の訃報○退會者○會務報告○交換及寄贈圖書目

臺灣の山旅

臺灣の山旅

目次

緒言　一頁
一、予が山岳興味の起り　一
二、臺灣山旅の思ひ立ち　三
三、臺灣入り時期選定　三
發程　六
四、連帶乘車船券　六
五、來迎寺より大阪へ　七
片山津温泉、牡蠣船。
六、航海　九
瀬戸内海、船内設備、門司寄港、東支那海、演藝會。
七、基隆より臺北へ　一五
八、臺灣山岳會　一八
九、臺灣神社　一八

劍潭寺。
一〇、臺　灣　二〇
地勢、民族、蕃情、行政區。
一一、臺　北　二五
官廳、博物館、植物園、市街狀況。
一二、臺北より臺南へ　二八
臺中州廳、北回歸線標塔、臺南神社、嘉義、入蕃許可證。

新高山

一三、總　論　四一
位置、山態、御命名記、森林、高山植物。
一四、登　山　口　四六
宿泊料、人夫料、各種日程、登山心得。
一五、嘉義より阿里山へ　五一
阿里山鐵道、地名難、大塔山、沼ノ平、緋櫻、神木。
一六、阿里山より新高山へ　六五
準備、日程、鹿林山、水鹿、帝雉、西山之險、楠梓仙溪頭。
一七、嗚呼新高主山　七九
死線に入る、霧氷。
一八、主山下より阿里山へ引返す　八二
雨氷、石南の巨樹。

一九、方向轉換、阿里山より水裡坑へ　八五
新高郡役所、臺車。
二〇、水裡坑より八通關へ　九〇
鐵線橋、始めて新高山を拜す、山通大海碑、對比標高柱、東埔溫泉、雲龍瀑、觀高の大觀、八通關。
二一、再び新高主山に向ふ　一一五
新高瀧、長命水、富士山標高點、東山の大岩壁、氷雪、狂風、遺憾千萬、新高と富士の標高比、新高觀。
二二、八通關より水裡坑に降る　一二二
ナマカバン社、高頭氏歸京。
二三、さらば新高　一二五
西口北口對批、落情不穩。

日月潭

二四、神湖日月潭　一三〇
魚池、石印社、水社、臺灣劇。
二五、櫻茂れる霧社　一三〇
埔里、眉溪の蝶群、首狩、人止關、霧社、警務部長巡視。
二六、ピヤナン道路　一三九
立鷹、マレッバ、八角蓮、松嶺、平岩山、高山鱒、タイリントキサウ、淡紅櫻、ピヤナン鞍部。

南湖大山　一四七

二七、總論　一七〇

一七〇

位置、山態、發水。
二八、南湖大山に登る　一七一
堂々たる搜索隊、日程、胸突五町之險、蔚々たる原始林、仙境の蘭科園、高原的大草地、ビヤケン之險、高山の月夜、天界の石南園、天下の大觀、臺灣高山の氣象積雪。
二九、南湖大山より天降る　一八九
石南の種々、仙境の午睡、安全歸着。
三〇、ビヤナンより羅東へ　一九三
シキクン、梓、樟、蕃人の概況、劉銘傳の理蕃策、ビヤナン道路禮讚。
三一、羅東より臺北へ　二〇四
礁溪溫泉、大里、日本一の金山。
三二、ヲガタマ薫る烏來　二〇六
新店の深潭、ウライ公設浴場、ウライ瀑。
三三、龍山寺　二一三
西門市場、阿片。
七星山
三四、總論　二一五
位置、大屯火山彙、霧島火山帶。
三五、臺北より草山へ　二一六
芝山巖、紗帽山、草山溫泉。
三六、好展望臺七星山　二一九

七星山頂の展望、噴氣孔、竹子湖、北投溫泉。

歸　途

三七、航　海　二二五
鯊の大群、下ノ關の櫻花。

三八、大　阪　附　近　二二六
箕面公園、天王寺公園、六甲山、生駒山。

三九、大阪より東京へ　二二八
裾野より拜した新雪の富士山、御殿場より仰いだ富士山、箱根より眺めた富士山、東京博覽會。

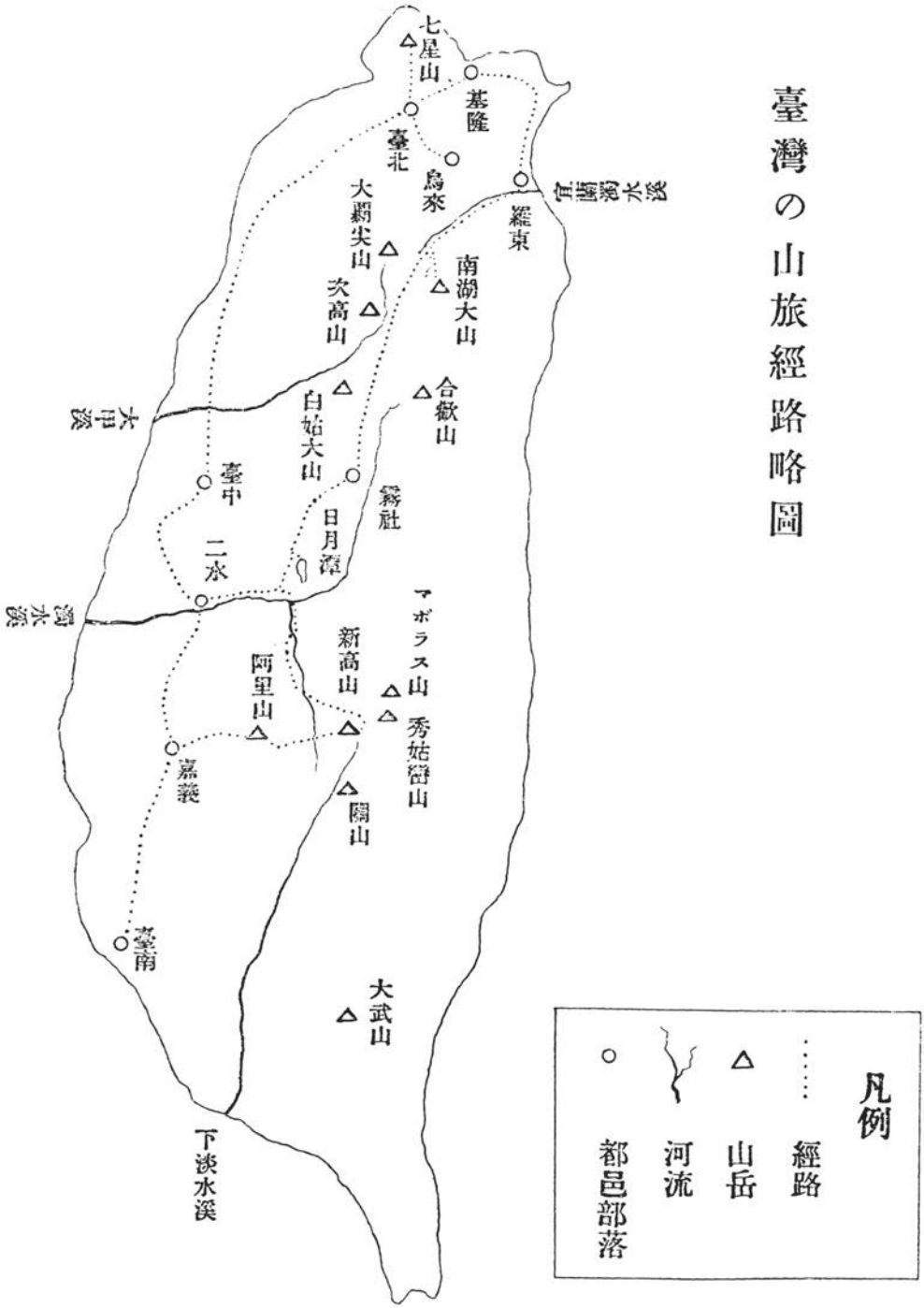
四〇、東京より歸鄉　二三一
碓氷峠、田口に於ける妙高山。

尾　言

四一、參考圖書　二三二

四二、臺灣就航船　二三四

臺灣の山旅經路略圖


七星山
基隆
臺北
烏來
淡水
宜蘭
羅東
大霸尖山
次高山
南湖大山
合歡山
大甲溪
白姑大山
霧社
臺中
日月潭
二水
濁水溪
マボラス山
秀姑巒山
新高山
阿里山
嘉義
關山
臺南
大武山
下淡水溪
凡例
經路
山岳
河流
都邑部落

臺灣の山旅

大平晟

緒言

一、予が山岳趣味の起り

予は幼少時代から、少からず山に對する興味を持つた。それは宅地が近く信濃川を隔てて、東方直距約一里の天に、金倉山(カナクラヤマ)(五八一・四メートル)を仰ぎ得るのと。河岸に立つて北望すると、洋々たる流れの左手遙かに、端麗な彌彦山(ヤヒコ)(二六三三・八メートル)を望み得るのが、一つの原因でもあるやうだが、父が始終自ら山に登られた經驗談話をされたのが、更に大なる動機となつたのである。

當時天にも續く高い山として仰いだ其金倉山の頂上を殆ど中心とする、日の出を常に拜するので、あの山の頂上に登つたならば、赫々たる日輪は、親しく手に捕ることが出來やうかと、幼な心の想像も涌いた。

一たび其頂上に立つた時、日輪は天空高く遠ざかり、本山の裏には、深い谷もあれば、本山よりも更に高い山々が果しもなく續いて居り、而かも郷里は既に殘雪の姿も見ることが出來ぬ時節に、銀冠を戴いた峯々の立ち並ぶのを眺め、之が近く守門山(スモンザン)、八海山(ハッカイサン)、中ノ岳、駒ヶ岳、遠くは苗場山(ナハバサン)、妙高山若くは上越、岩越の國境乃至國境外の山々であることは、當時知らう筈も無かつたが、山其ものの

崇嚴を感じた始めであつた。それと共に當時の知識界に於ける、宇宙の大なることをも感得したのであつた。

金倉の頂上からは、東の谷底に虫鮑（ムシガメ）、西の山腹に小栗山（コグリヤマ）の部落が見える。當時耽讀してゐた『里見八犬傳』中の力士犬田小文吾が、この所謂二十村に於て、牛の角突を見物したといふ事など思ひ浮べて、異樣の感興に打たれたこともある。

予が父の實驗的山話は、主として鄕國の八海山、苗場山、妙高山であつたが、時には戸隱山（トガクシヤマ）や、御嶽山のことも話された。そうして登山は精神を鍊り、身體を鍛へる上に、至大の効果があるからとて、先づ其階段として、比較的危險の虞れがない彌彥山と、米山（ヨネヤマ）（九九二・九メートル）とを指示された。

予がこの二山に登つたのは、小學校の十四五歲の時で、同行者は學友二人であつた。二山とも海岸に屹立することとて、海濤山脚を洗ふの壯觀も佳かつたが、特に入日が海に沒するの美觀は、終生忘れ得ぬ印象となつたのである。

彌彥山上には、越後の一の宮彌彥神社の祭神天香語山命（アメノカグヤマ）の靈廟鎭まりまし、米山の頂上には、高僧泰澄作の藥師如來を安置してゐる。

師範學校卒業前後に於て、八海山（一七七五米）、苗場山（二一四五・三）に登つて、大に山岳趣味を體驗し、壯年時代に於て、代表的名山としての富士山、代表的火山としての淺間山を探り、彼の大雅堂が、富士山と共に日本の三名山と謳（ウタ）つた白山、立山を尋ね、次いで近時の所謂日本アルプス方面の諸山を攀ぢ、奥羽地方より北海道の山々を訪ひ、近年西南地方の山岳を巡り、朝鮮にも及ぼしたのであつたが、唯我が帝國領土内、最高の山を有する臺灣には、まだ一歩も踏み入れぬのであつた。

二、臺灣山旅の思ひ立ち

新高山の登山は、深く希望したのであつたが、遠き海路の厄介があるのと、風土病として惡性のマラリヤがあるのと、好んで人の首狩をする蕃人のあるのが、予の臺灣行を最後に延期させた譯である。然るに近來この航路に從事する汽船が、新式型一萬噸級といふ優良なものとなり、衞生施設整備のため、マラリヤが甚だ減少したのと、理蕃事業が着々効を奏し、今は殆ど首狩も無くなつたといはれ。且つ予は年齡既に六十を超えること數歲であるので、若し荏苒數年の後、折角臺灣に渡つても、其體力が既に登山不可能となつては、それこそ取返しのつかぬ遺憾であるから、昭和二年を以て、臺灣行を計畫したのであつたが、圖らずも平素人並勝れて强健であつた家妻が、其年一月突如心臟病を發し、病床に呻吟すること一年有餘、其間予は始終看護の任に當つたので、心身共に疲勞し、頗る神經衰弱を覺える樣になつた。其後妻は病狀漸次輕快に向ひ、且つ相當な家庭的助手を得たので、予が臺灣行計畫の無期延期に同情して、切に決行を勸め、予も亦自己疲勞恢復のため、生活狀態の一轉機を感じ居たので、愈〻昭和三年春季を以て、臺灣行を決意し、偶〻面會した高頭仁兵衞氏に此の事を話した。予が家庭の事情を知悉してゐる氏は、予がこの行を壯とし、進んで同行を約された。氏が同行は、唯同好の道連れを得たといふ愉快ばかりでなく、實に家妻に安心を與へる無上の福音であつたことは、感謝に堪へぬ所である。

三、臺灣入り時期選定

臺灣入りの時期選定については、種々考慮したのである。長岡圖書館について、參考書を漁つたり、臺灣各方面に向つて照會もした。五六月は蚊の最も多い時節だといふから、從つてマラリヤ傳播

の媒介者であるアノフェレスも多い譯である。七八九月は雨季でもあり、又颱風の最も多い時期である。臺灣總督府の技師であつて、多年山地の測量に從事された野呂寧氏は、其經驗上、十月下旬から十一月頃が、高山の氣象最も穩かで、晴朗の日が最も多いと言はれてゐるが、予は成るべく春季尙ほ幾分の殘雪をも味つて見たいのと、臺灣特有の山櫻と石南の花を見たいのであつた。

予が照會に對する霧社（ムシヤ）警察分室の回答（二月六日付）には

一、緋櫻は二月、白櫻の開花期は四月中旬

二、蓉萊主（ヨライシユ）山あたりの石楠花開花期は、五月半ば頃より六月初頃まで

とあり、又能高郡警察課の回答（二月四日付）には

一、緋櫻は一月中、白櫻は二月下旬頃滿開

とあつた。櫻の開花期について、前記兩者の回答に、甚だしき差異があるのは、土地の高低にもよるであらうが、又幾分觀察者に於て、精確を缺くか、若くば臆測的の點もある樣に思はれた。兎に角、緋櫻白櫻及び石南の花を充分見ようとするには、一月から五月に亙らねばならぬ。それは時日と經費の點に於て許さぬのであるから、其中間三月を選び、櫻の殿をなすもの、石南の先驅をなすものに逢はばやと希望したのである。

次に登山の準備上、臺灣高山の雪の狀態を知りたいのである。

小學校の現敎科書には「冬季新高山の頂上でも雪の積ることは珍しい」とあり。

明治三十九年出版、野口保興氏の帝國大地誌には「冬季は高山の頂に雪を戴くことあり」とあり。

明治四十二年出版、大日本地名辭書（臺灣の部は伊能嘉矩氏執筆）には「降雪は高山の山頂にあらざれば見るべからず」とあり。

大正四年出版、大日本地誌地勢の部には「中央主山脈の高峯には、十二月より翌年二月までの間、

多少の降雪を望見し得べし」とあり。又氣候の部には「雪は高山に於て、稀に之を見ることあるに過ぎず」とある。大日本地誌は地理學界の權威山崎、佐藤兩氏の共著であり、且つ大正四年といへば、領臺以來既に二十年も經過してゐるから、其調査も行屆いてゐる筈で、最も信據せねばならぬのである。

前記數書によれば、高山でも雪の降らぬのが普通で、若し降つても甚だ少量であると想はねばならぬが、茲に絶對的反對の記錄もある。

大正十四年出版、横井春野氏の日本登山案内、新高山の部に「山頂四時雪なし」とあるのに對し、臺灣府誌には、玉山人跡罕至（中略）終歳雪封」とある。玉山とは、支那人が新高山を稱するのである。終歳雪が封ずるならば、所謂萬年雪である。それに對し四時雪なしとは、餘りに奇しき反照である。横井氏自身には、臺灣には渡つたが、蕃地不穩のため、總督府が入蕃を許さぬので、新高山には登らなかつたといふことは、其記事にも見える。臺灣府誌は、領臺以前に於ける支那人の編纂ではあるが、記事詳細なので、頗る參考となるといはれる。

其他新高山登山紀行も、幾らか見たが、其期節が、大抵七月頃から十一月頃であるので、予が希望する三月に於ける雪の狀態を、山麓の警察官に照會した。

新高郡楠子脚（ナマカバシ）萬警察官吏駐在所の回答（二月十三日付）には、「三月中旬、新高山頂多少の雪があるとしても、登山には差支無き事と存じます」とあつたが、嘉義郡警察課からは「三月登山の能否は、其時の氣象如何によるを以て、斷言し難し、昨年は四月に入るも、積雪のため、登山不可能なりき」といふ回答（二月八日付）に接した。

この回答に接し、稍〻不安の點が無いでもなかつたが、決然三月初旬を以て、渡臺することとした。

發程

四、連帶乘車船券

臺灣航路には、大阪商船會社と、日本郵船會社が、總督府補助の下に、定期航運をなしてゐるが、殊に近年大阪商船會社では、一萬噸級新式巨船蓬萊、扶桑、瑞穗の三艘を以て、毎月往復六回就航してゐる。其所要時數は、期節によつて幾分の違ひはあるが、神戸、基隆間約三晝夜と數時間を費し、發着時刻も亦期節によつて變更がある。

我等は三月四日正午神戸發の扶桑丸に乘るべく相談し、高頭氏は都合上、東京の寓居から出發し、神戸で待受けられることとした。

△二月二十九日　晴　溫度　朝　片貝三〇　夕　來迎寺四二

昭和三年二月二十九日は閏年の餘澤である。この日午後三時二分、鄉里高梨驛發の魚沼線汽車に乘り、三時二十五分來迎寺驛着、驛前西九旅館（西脇總太郎）に投宿した。

予は來迎寺驛より臺北驛まで通じての連帶乘車船券を得べく、早速驛長高寺喜三郎氏に面會した。當驛では斯やうな特別切符發賣を取扱はぬので、賃金を前納し、長岡驛から次ぎの列車によつて送附されたので、予が手に入つたのは、其夜の七時過ぎであつた。又扶桑丸の乘船に對しては、二週間程前に、大阪商船會社神戸支店に申込んだ。これは船室の優先權を得たいためである。

この特別切符は、汽車は全部三等、汽船は二等室を選び、通計賃金五十一圓六十錢。途中下車三回、通用期間は一箇月であつた。

この長岡驛發行の連帶乘車船券が第一號であつたのは、意外とする所で、殊に券面には、予が住所

氏名年齡船名、船室番號、寢床番號まで記入されてあるから、好個の記念として保存したいので、其方法をも講じて見たのである。

神戸より基隆までの船賃、三等は二十圓、二等は四十五圓、一等は六十五圓、更に特別室は使用料四十圓となつてゐる。

五、來迎寺より大阪へ

片山津溫泉、牡蠣船。

△三月一日　晴　朝　來迎寺四〇　夕　片山津五〇

西丸旅館主は予が敎へ子であるので、予が今回の臺灣行に祝意を表し、此朝特に心盡しの調理を添へた方餅を饗された。

午前六時二十八分信越線來迎寺發の汽車に搭じ、八時五十五分直江津驛で、北陸線に乘換へた。

我鄕里附近では、殘雪の厚さ尙ほ約四尺程もあつたが、海岸通りは全く消え、越後越中の國境丘陵には、少しばかりの雪を見、富山、金澤あたりでは、畔塗(あぜぬり)に從事する農夫がある。

予が多年の親しみある立山群峯は、其胸のあたりに雪の肌を見せ、頭には淡靄(うすもや)の帽子を戴いてあつたが、名物あんころ餅と、賣子の聲も高く聞える松任(マツダウ)驛あたりからは、全山白妙の姿、夕陽に輝く白山を眺めた。

午後三時五十二分動橋(イブリハシ)驛に下車し、電車に運ばれて、四時十分片山津驛着、徒步三町ばかり、溫泉旅館矢田屋(矢田松太郎)に投宿した。予はこの行、途中に於ける汽車汽船の疲勞を、出來得る限り輕減し、渡臺の後、登山の行動に餘力を得たいので、汽車の夜行を避けて、此處に下車したのである。

附近には、山中、山代、粟津など、北陸著名の溫泉數多く、殊に山中は、風景も佳く、高頭氏曾遊

のよしのやといふ優良な旅館のあることも聞いてゐたが、時節尚ほ早く、殘雪もあるらしいので、海に近く、湖に臨んだ片山津を選んだのである。年浴客十數萬に上ると云はれる、こゝの溫泉も、今は入湯時期では無いので、十數軒の旅館は、何れも閑寂を極め、第一流といはれる宏壯な矢田屋も、京都の人だといふ客の外、僅か數人であつたのは、予が休養には、寧ろ幸であつた。室には當代雄辯を以て謳はれる政治家永井柳太郎氏揮毫の「大心海」と題した、大きな額が掲げてある。

旅館は柴山潟に臨み、湖中から涌き出る溫泉を、發動機によつて引いてある。「脚氣山中、かさ粟津、胃腸に痼氣片山津」と謳はれてゐる通り、慢性胃腸病を始とし、僂麻質斯、神經痛、痔疾には特効があるとのことである。泉質はアルカリ性で、無色透明、强い鹽分を含み、又ラヂウムの含有量も多いといはれる。溫度は攝氏三十二度乃至六十度である。

對岸に三湖臺と稱する小山がある。臺上に立つと、柴山、今江、木場の三湖を見下し、遠く白山の英姿を望むといふ好展望臺である。溫泉より北十町ばかりに、實盛塚があり、附近に手塚山、首洗池などあつて、壽永の哀史を物語るのである。

又辨慶が勸進帳によつて、昔を偲ぶ安宅關は、今は遠く沖合二里餘波の底に沒して了つたといはれる。

潟には鯉、鮒、鰻を產する。晩食の膳に上つた鮒の洗ひ醋味噌料理は、甚だ結構であつた。

△三月二日　少雨　朝　片山津　四八　夕　大阪　六〇

午前八時二十五分片山津發の電車に乘り、八時四十九分動橋驛にて、北陸線に乘換へた。昨日夕陽に浴びて迎へてくれた、白山の秀峯は、今は旭光を横面に受けて、見參するも嬉しい。

福井市の北郊に「新田公菩提所」と註した標柱が見える。

武生（ムケフ）から杉津（スイツ）邊では、一二尺の殘雪を見たが、琵琶湖畔に近寄ると、梅花も綻びて、全く春色を呈

し、農夫の田打するもの、畑の畦を作るのも見える。

午後四時四十七分大阪驛下車、次男富士雄の出迎を受け、五時半過ぎ、鐘紡社宅富士雄が寓居に投宿した。

△三月三日　快晴　朝　大阪五〇　夕　大阪五〇

夕方富士雄夫妻、及び宮岡良治氏の案内により、淀川に浮んだ、かき豊の船室で、大阪名物の牡蠣料理を初めて試食し、美津濃商店にて、登山用の準備品を購入した。

六、海　航

瀨戸内海、船内設備、門司寄港、東支那海、演藝會。

△三月四日　快晴　朝　大阪三六　夕　門司、船室七〇

今日の正午は、神戸解纜の扶桑丸に乘り込む日である。

富士雄と其妻常子、及び宮岡氏の見送を受け、午前八時二十一分大阪驛發の汽車に搭じ、九時十三分三ノ宮驛に下車し、曩さに來迎寺驛でチッキに附した行李を受取り、直ちに腕車を驅り、神戸海岸通三丁目薩摩屋旅館に投じた。高頭氏は從者谷内田虎吉君と共に、此處で待受けられたのである。谷内田君は、主人のお供して、屢〻予と山行を共にした、實直で才氣もあり、屈竟な好漢である。

我等が行李は、番頭に依頼して、前以て扶桑丸に運び入れてある。薩摩屋を出發したのは、午前十時半であつた。ここにあはや一大珍事に逢着しようとしたのである。それは店員が、我等の臺灣行を大連行であると聞き違ひ、將に解纜せんとする大連行のばいかる丸の船内に導いたのであつた。我等は船側に記された「ばいかる丸」といふ文字を認めたのだが、この船を通過して、其先きに續いて碇泊してゐる扶桑丸に乘り移るものと推察したので、導かれるまゝ船内に入つたが、何だか怪しいの

で能く聞き質すと、店員の聞き違ひであつたことが判り、急ぎ船を降り、扶桑丸まで駈け着いた。この間約八町程もあるが、幸解纜時刻までは、まだ一時間程もあつたので、行李は臺灣に、我等が身體は大連に運ばれるといふ喜劇否悲劇を免れたのであつた。世界を一周された高頭氏であり、數十年來毎年殆ど山の旅を缺かさぬ我身ではあつたが、間一髪、飛んだ失敗に陷らうとしたので、徒らに店員を責める譯にも行かず、事は細心の注意を要するものだと哄笑したのである。此時つくづく時間に餘裕を與へ置くべきことをも感じた。

發航時刻豫報の汽笛が鳴つた。銅鑼の音は船内に響き渡つた。解纜の時刻が近づいた。甲板上の乘客と、突堤上の見送人との、手と手に引かれた、幾百條といふ色とりどりのテップは、だんだん長く延びた、そうして緊張した。やがてぷつぷつ切れ始めた。我等が乘つた扶桑丸が、神戸の埠頭を離れ、一聲の汽笛と共に、進航を始めたのは、正に午時であつた。

一天麗かに晴れ渡り、波は穩かなること鏡のやうに、水は澄み透つて、紺碧の色は鮮かである。右には白沙青松を彩どる須磨、明石の濱つゞき、歴史を物語る山や谷を望み、左に千鳥鳴く淡路島が浮んで、磯邊に散在する人家も指點することが出來る。播磨灘を過ぎると、右には近く先年尋ねた小豆島星ヶ城山を仰ぎ、左には遠く五劍山屋島を眺め、島去り島來り、松は島々の簪となり、漣波は岩脚の裾模樣を作る。行き交ふ大小の汽船より吐き出す烟、或は淡く或は濃く、白帆を揚げた和船、櫓を操つる漁舟、島に隱れ島より現はれ、さながら繪卷物を展開するやうである。行手遙かに蒼空に聳えた四國の山々は、何時もながら、我等を歡待するやの感じがする。風光明媚なる瀬戸内海の舟行は、實に愉快である。されど我等の船が、瀬戸内海の約三分一を過ぎ、多度津の沖合にかゝつた頃は、既に蒼然たる暮色に閉されて了つたことは遺憾である。予は先年多度津から、大阪商船會社の利根川丸に乘込み、幸ひ晴朗なる天候に惠まれ、海に浮ぶ鳥居の宮島まで、航行したことがあるので、これで

瀬戸内海の大觀大要を見ることが出來たのである。

扶桑丸は排水噸數一萬五千噸、速力十七浬、船客定員、一等四十二人、二等百一人、三等五百九十二人となつてゐる。予が船室は、二等一號の四で、高頭氏は隣室の二號の二、虎吉君は三等室に、それぞれ案内されて、四日間の假住居が決つた譯である。

零時半晝食、四時入浴、六時半夕食の卓に就いた。食事には振鈴の合圖を用ひる。食堂は頗る綺麗である。高級事務員達は、時々我等と食卓を共にし、氣持良い接待振りを提供してゐる。この日夕食の膳に上つたものは、新鮮な魚肉の刺身、魚肉のフライ、魚肉の照燒、茄子の鴫燒(シギヤキ)、鳥賊の醋の物、鳥肉の吸物、奈良漬で、申分の無い調理であつた。銚子は需めに應ずるので、高頭氏は毎夕食に、二本づつ註文された。

二等浴室は、白色タイル張で、同時に四五人入浴が出來、別に揚り湯がある。戸附の脱衣棚もある。洗面所、浴室、便所は、各男女を區別し、大便所には内錠を設け、用紙の卷き出し機械まで備へ、流水裝置であるから、極めて清潔である。別に婦人化粧室もある。

乘船賃金の中には、食事、入浴、及び寢具(優良な毛布三枚)も含んでゐる。三等室は、毛布一枚貸料四十錢を徴收してゐるが、乘客多い場合には、品切となることがある。一日一二回茶菓子を提供する。朝鮮への連絡船では、二等客でも、食料及び毛布料は、別に徴收した。

食堂に隣した娯樂室には、圓机、座蒲團を備へ、碁、將棋、麻雀、蓄音器もある。別に談話室もある。

賣店では、菓子、果物、酒類、鑵詰、繪葉書、雜誌など賣つてゐる。

郵便局もあり、無線電信局もあつて、電報料は一回八十錢と掲示してある。

船醫、看護手、按摩も居る。按摩は一二等は一圓、三等客は七十錢としてあるが、こゝまで差額を

つけ、施術時間に長短があるとは少し可笑しい。理髮料は五十錢である。

夕食を終つて、甲板に出て見ると、望月には少々早いが、皎々たる月明に、海原はさながら眞晝のやうで、舷頭波を劈き、白雪の泡沫迸る所、月影亦碎けて、銀光四散する光景、眞に壯快である。左に電光高く天を照らす四坂製鍊所を見、程なく來島(クルシマ)海峽の危險帶にかゝると、左に紅燈が點滅するのと、右に紅綠燈が交互に點滅する警戒燈臺が見え、船は餘程徐行する。瀨戸内海夜航の光景、亦棄て難いのであるが、肌に迫る冷氣に辟易して、室に歸り寢に就いた。

△三月五日　晴　朝　門司船内七〇　同　船室外五四

船は午前六時三十分門司に着いた。神戸より二百四十浬である。

神戸を發すると、多くの汽船を送迎したが、大概皆我等が船よりも小形であり、速力も亦劣るので、續いて來る船は、益〻後れて遠ざかり、前に居るのは、追ひ越されるといふ有樣で、つくづく十七浬といふ快速力と、新型巨船の有り難みを感じた。神戸を殆ど同時に解纜したばいかる丸（約五千噸）は、約一時間後れて門司に着いた。昨日誤つたまゝ解纜に接したとしても、此處で何とか乘換する方法も出來たのだと苦笑もした。

近海航路に從事する小汽船は、各所に立寄るが、我等が扶桑丸は、神戸から門司まで直航し、此處で船客の乘り降り、貨物の揚げ卸しをなし、正午出航すると、其後は長崎にも那覇にも寄らず、基隆まで直航するのである。

此日朝食には、蒲鉾に甘藍、卵蒸、蜆汁、澤庵漬、蕪の淺漬などがあつた。

出航までは五時半の餘裕があるので、上陸して用事を辨ずる者もあり、散歩を試みるのもある。物賣人は頻りに廻つて來る、仲々巧みに賣り付ける。我等も果物や菓子を買入れた。バナナ羊羹は頗る優良であつたが、下關伊崎町神戸屋商會の製品であつた。

予は通信を船員に託して、門司の郵便函に投じて貰つた。

船は正午解纜、愈〻瀨戸内海の花道を過ぎて、本舞臺の大海に乘り出すのである。赤間關海峽を通つて、響灘、玄界灘に出ると、行手は七百五十二浬、天空海闊、波間に明けて波間に暮るゝ、航海三日の旅である。

予が室附給仕關根の話によると、此日は海上珍らしい靜穩だといつたが、流石は名にし負ふ玄界灘だけあつて、船には强からぬ予は、讀書どころか、甲板散歩の勇氣も無く、始終娯樂室に入つて仰臥した。二等室は四坪位づゝに障壁を以て區劃され、一室四人、上下二段に寢臺を設け、別に腰掛と茶道具臺がある。予が寢臺は上段であつたので、陰氣の感じもあるのに、下で吸ふ煙草の烟が立ち揚つて襲ひ來るのと、船の中央部に位置するので、汽鑵室の暖氣を受け、蒸し暑いこと夥しい。谷内田君の三等室を尋ねて見ると、數百人の乘客は、唯寢臺を並べただけで、上段なども無く、廣く開通してゐるので、餘程氣持が良い。北海道や朝鮮行の連絡船三等室は、餘りに混雜を極め、清潔でも無く、二等室は開通式で、氣持が良かつたので、今回長途の航海、特に二等室を選んだのだが、意外の失敗に接した。乃木大將では無けれど、歸りには三等に限るよと思つた。然し高頭氏は一向平氣で、多々益〻辯ずといふ樣子で、相變らず銚子を傾けてゐられるのは、まさか其功德でもあるまいが羨ましい。船内特に喫煙室も設けてあるが、無頓着の乘客が多いのである。

△三月六日　快晴

この日は珍らしい快晴と靜穩とに惠まれ、壯觀美觀の極みを呈する日の出を拜した。

船内の掲示所を見ると、此日正午本船の位置は、種子島（タネ）の西方稍南に當るとか。無電によれば、基隆の溫度は六十六度、及び風の方向、速度、氣壓は何々とか掲示してゐる。又時計は今夜三十分遲らすといふ掲示もあつた。これは標準時の關係で、臺灣では一時間遲らさねばならぬ。

此日『扶桑丸無線電報新聞』と題したものを配布された。其記事に、久宮御容態稍御良好、昨夜九時宮内省發表、御體溫三十八度二分、御脈搏百三十六、御呼吸三十六、御油斷なり難き御容態。皇后陛下親しく御授乳、徹夜御看護遊ばさる。といふ事や。感冒患者東京府下のみにて約百萬人の見込、先月死亡者一千七百名に達す。といふ事や。尾崎咢堂選擧費精算三千三百五十六圓六十三錢五厘といふ記錄破り、流石理想選擧の本尊だけに、咢堂老一文も出さず、篤志有志の寄附のみ。といふ事など見えた。

夜八時頃から、三等船室に舞臺が出來て、ボーイ連の自慢の演藝會が開かれた。薩摩琵琶、落語、劍舞、茶番、演劇數幕あり、樂隊附きで、仲々賑かであつた。觀客からは有志寄附を募集した。

△三月七日　曇

今日午後は、臺灣着の日である。朝臺北の旅館吾妻(アヅマ)から、予に宛てた無線電信が來た。「ゴケンカウヲシユクシ　ゴアンチャクヲマツ　アヅマ」とあつた。予が郷里出發前、豫め宿泊のことや、其他用件を依頼したとはいへ、能くも行屆いたものである。

朝來曇天で、屢〻霧雨もあつたが、波が荒いといはれる基隆沖も、案外穩かであつた。久振りで左手に小島が見える、彭佳嶼である。程なく基隆嶼と、西班牙人が築城の名殘を留めたといふ社寮島を近く左に見、午後二時四十分基隆港内に入つた。神戸より九百九十二浬である。

基隆は内地と本島とを連絡する最重要の港であるが、領臺當時は、港内水淺く、千噸内外の小船でも、一浬以外の沖合に停らねばならぬ程であつたが、明治三十二年度より三十一個年に亙り、數回の繼續築港工事に、總經費二千五百餘萬圓を投じ、今は殆ど完成し、岸壁には三千噸乃至一萬噸級の船舶十五艘、浮標には六艘を繫留することが出來、本島第一の良港となつたのである。

停船すると、早速沼井鐵太郎氏の歡迎に接した。氏は多年東京に在つて、日本山岳會の幹事として

誌された人だが、昨年臺灣總督府專賣局技師に轉任され、今は臺灣山岳會の幹事として、中心的活動を發揮しつゝあり、仍ほ日本山岳會の幹事も兼任され、今後に於ける臺灣山岳の研究は、氏に待つ所、實に多いのである。氏は船内入口の乘客氏名表に、我々の名が見えたので、此の船内に乘つて居ることを確め得たとて、喜色面に溢れて挨拶された。氏の案内にて、直ちにランチに乘り移り名物舢舨の繰り成す中を貫いて上陸した。高頭氏は、二十年程前、臺灣に遊ばれたのであるが、予はこの第一歩が、新領土に始めて足跡を印するのだと思ふと、何となく嬉しい。

基隆岸頭に峙つ總督府專賣局出張所に至り、所長渡利玄眞氏の案内により、所内に陳列された參考品を巡覽し、樓上に休み、烏龍茶と菓子の饗にあづかり、汽車の時刻を待つた。

七、基隆より臺北へ

白鷺、旅館吾妻。

臺灣縱貫鐵道幹線は、今基隆を起點として、臺北、新竹、臺中、臺南を經て、高雄に至る二百四十六哩餘である。

汽車は四時二十分基隆驛を發した。車窓から目に入る臺灣の風物、常夏の國と謳はれる臺灣の光景は、如何にも軟かみある濃厚な氣分が漂うてゐるのは、朝鮮釜山に上陸して京城に至る沿道の、如何にも淋しい殺風景な感を與へるのとは、實に霄壤の差がある。我郷里では、殘雪尙ほ三四尺といふのに、一週間後の今日、臺灣では、稻苗既に一尺許りに伸びてゐるにも驚いたが、膝頭を田に突きつゝ進む、所謂膝行式で、田草取をするのは珍らしい。一方にはまだ水牛を使役して、田搔をするのもある。そうして幾十百とも數知れぬ白鷺が、農夫の前後左右に群れ集ひ、頻りに獲物を漁りつゝ、時には水牛の背に立ち止るとは、確かに臺灣名物の一つであらねばならぬ。數日の後、臺中、臺南地方に

行つた時、稻苗は却つて短いのが多く、寧ろ田搔作業の多かつたのは、甘蔗刈取時期の關係もあるのであらうが、氣候が更に暖かいので、其生育も早いから、手廻り次第田植する樣にも思はれた。稻作は全島通じて、年二回の收穫である。

尙ほ珍らしく目に映ずるものに鳳梨（パインアップル）がある、芭蕉（バナナ）がある。前者は剛强で大形な厚葉を附けた莖頭に、巨大な松毬式の一果を提供するも勇ましく。後者は六尺にも餘る廣い柔かい叢葉の元に、累々幾層を作る果實を垂れるのは優しい。

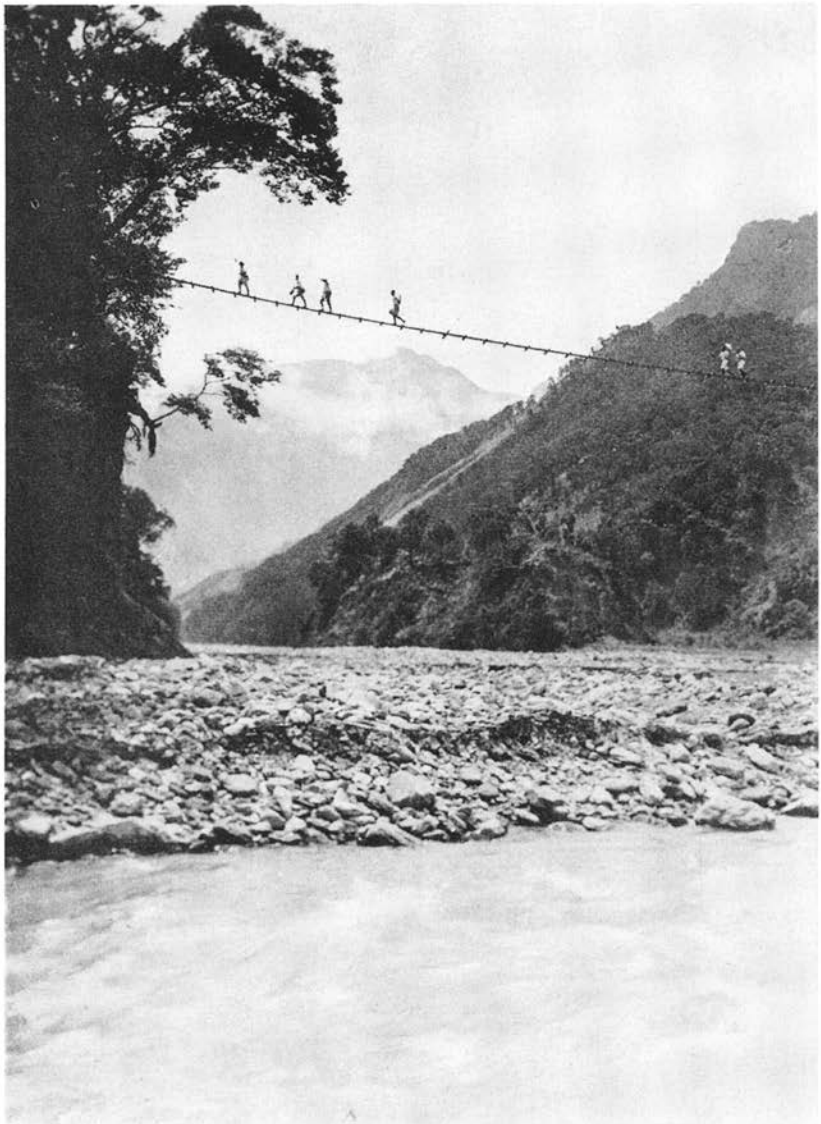
予が鄕里出發の際、手に入れた、長岡驛より扶桑丸を通じ、臺北驛までの連帶乘車船券が、第一號といふ珍らしい番號であるので、記念のため保存すべく高頭氏と相談し、臺北驛より一驛手前の松山驛に途中下車し、同驛からの切符を別に購入するといふ作戰計畫は、惜しくも放棄するの止むなきに至つた。それは沼井氏が懇篤にも、扶桑丸まで御足を運んで歡迎されたのと、尙ほ臺灣山岳會幹部の方々が、歡迎のため、臺北驛にて御待受の事を聞いたからである。

汽車は五時十分臺北驛に着いた。

プラットフォームには、臺灣山岳會代表者生駒高常氏を始め、會員の方々や、新聞記者達が歡迎された。偶〻興行師の一團が下車し、樂隊附の出迎連が、ホームにまで入つて、景氣を添へるといふ混雜に、二等車の口で待受けられた生駒氏の方々は、我等が三等車室から降りたので、搜し廻られたのは、甚だ勿體ない。殊に氏は、我等が豫定の旅館吾妻が、驛前近くで賑か過ぎるから、長途の疲勞靜養のため、草山溫泉まで案內するとて、總督府の自動車を用意し置かれたのは、更に恐縮であつた。

草山溫泉は、先年　今上陛下が東宮にましまし、本島に行啓の際、御登遊の光榮に浴して以來、其名大に著はれる樣になつた。

北投溫泉は、臺灣一の溫泉場だが、實は內地に於ける熱海で、餘り繁昌過ぎて、靜養には不適當で



雲懸橋。陳有幽溪に架けた七個鐵線橋中最終のもの。長六十一間水面を
距ること二十二間。橋詰の樹木はキヤケキ。谷間の遠山は新高山北一頂とす。

あるから、高爽で展望の風景を得たる靜淨境、草山溫泉を選ばれたのであるが、當驛からは約四里もあり、而かも可なり山路を登るのであるから、數日船內で碌々通常食も取らなかつた予は、自動車にて搖られるのも如何かと思つたので、非常な厚意を深く拜謝して、之を斷つたのである。それで此の自動車で運ばれて、驛前旅館吾妻（藤井節子）に投じた。

室に入ると、早速臺灣日々新報社の撮影班に襲はれた。そうして翌日の同社の紙上には「高砂の山に憬がれて內地登山の兩大家來る」といふ大々的見出しの下に、我等が經歷やら行程やら、旅裝までも報道し、撮影を揭げて、大に景氣を附けられたのは、最近臺灣では、登山熱が勃興して來た一斑を窺ひ得るのである。

曩さにプラットフォームで頂戴した、生駒氏の名刺は、混雜の際とて、丁寧に見る譯にも行かなかつたが、宿に落着いて能く視ると、頭書に「臺灣總督府事務官、兼臺灣總督祕書官とあり、肩書に「總督官房文書課長兼調査課長兼審議室勤務」とあり、更にインキにて「臺灣山岳會幹事」とあつた。氏は臺灣山岳會を代表しての歡迎であつたのは勿論であるが、斯かる重要位置に居られる高等官が、親しく歡迎され、且つ總督府文書課員であり、臺灣山岳會の庶務係である井上一男氏が、始終懇篤熱心な斡旋の勞を取られたことは、我等が今回の行動に、如何に裨益便宜を得たかは、感謝に堪へぬ所である。

我等が此の旅行を終へて歸鄉後、程なく生駒氏は、臺中州知事に轉任された。

臺灣日々新報社は、臺灣第一流の新聞社である。其編輯主任中曾根武多氏は、我越後高田の產であつたのは、懷かしくあつた。

旅館吾妻は、當市第一流の旅館で、客室には、卓上電話機を備付け、客附女中あり、常雇の車夫もある。浴室では三助脊を洗つてくれ、便所の設備など申分がない。蚊は殆ど認めないが、安全を期するため、蚊帳は用ひてゐる。

夜沼井氏及び臺北圖書館長山中樵氏來訪された。山中氏は曾て新潟圖書館長であつたので、高頭氏とは懇意の人である。

八、臺灣山岳會

臺灣山岳會の事に就いては、『山岳』（第二十二年第三號）に、沼井氏が「臺灣登山界の概觀」と題し、其狀況を報道されてある通り、臺灣山岳會は、生駒氏が中心となり、警務局保安課長小林光政氏、專賣局杉本良氏及沼井鐵太郎氏、中曾根武多氏等發起人となり、大正十五年十一月八日に設立され、總務長官後藤文夫氏を會長に推し、事務所を總督府文書課内に置いてある。現在會員約二百名、其大部分は、總督府を始め、各官廳吏員、學校教員である。從つて登山者の多くは、官界の人及び學生であつて、一般的民衆化するには、まだ相當の距離があるらしい。

臺灣の如く、淮新開地植民地に於ては、革新的産業の勃興を來し、其裏面には、兎角奢侈放縱の弊風に傾き易いのは、人情の弱點であるが、之を矯正し、剛健質實の氣風、所謂人心作興の一要素として、登山氣風の指導助長は、本會の前途に待つ所、大なるを思はしめる。

九、臺灣神社

△三月八日　薄曇　朝　臺北六八　夕　同六八　劍潭寺。

朝戸を開けば薄曇である。宿の前、街道を隔てた、鐵道ホテル庭内には、淡黄色な密穗狀花序を呈する、シュロに似たビラウ（蒲葵）が目に着く。

臺灣に入つては、何人も故北白川宮殿下の御功績を思ひ出さずにはゐられぬ。從つて眞先に臺灣神

社に參拜するのは當然の事である。

朝沼井氏の案内にて、臺灣神社に參拜すべく、淡水線八時二十分、臺北發の汽車に搭じ、同三十二分圓山驛に下車した。そこが臺北第一流の景勝といはれる圓山公園である。動物園の前を過ぎると、明治橋にかゝる、長さ三百尺、中央は車道、左右は人道に區劃され、欄干に桐葉を鏤めた美しい石橋が、流れも淀む深い基隆河に架けられ、幾百の家鴨が、彼方此方、いとも長閑に游泳する。坂路を登ると、全島の鎮守、臺灣神社に達する。臺北市を距る北約一里、本島唯一の官幣大社で、北白川宮能久親王、大國魂命、大己貴命、少彦名命の四神を奉祀する。神域は劍潭山の中腹に位し、高燥清淨、後に大直山の青巒を負ひ、前は基隆河の碧潭に臨み、臺北平野を一直線に劃する勅使街道の盡る所、臺北市街も指點することが出來る。宮司に請うて、記念帖に社印を受け、山麓の劍潭寺に詣づ。寺は鄭氏時代の建立と傳へ、觀音菩薩を祀つてゐる。支那式構造の堂宇、頗る古雅を感ずる。數人の男女が、頻りに香を燒いて祈禱したり、筮卜三昧に入るの有樣、何處も同じと見える。

明治橋畔に、警官招魂碑がある。領臺以來殉職警官の靈を祀り、題字は兒玉總督の揮毫である。

劍潭寺の境内にも、圓山公園にも、沿道にも、燃えるやうな眞紅の美花爛漫たるブッサウゲが目を惹いた。佛桑花又扶桑花の文字を當てゝあるが、琉球に多いので、又リウキウムクゲの名もある。花の形も大さも、ムクゲに類した灌木で、葉は卵形濃綠である。其濃紅の花は、如何にも熱帶固有の色調を呈するが、又隨分淡紅色のもある。園藝變種には、白色のも黃色のもあり、重瓣千瓣のもある。予は曾て庭園に植ゑ込んで、綠樹の間を彩どる其鮮紅の花を賞したのであつたが、哀れ冬の寒氣に堪へ兼ね、一夏だけで枯死して了つた。内地では、夏秋の交に、開花を見るのだが、臺灣では、二月より既に咲くとのことである。

沿道に碧紫色の花を捧げたヒルガホの一品を見た。

この附近の山中には、石器時代の遺物を發見するといはれる。

一〇、臺　灣

地勢、民族、蕃情、行政區。

臺灣の旅行、臺灣山地の旅には、特に全島の地勢蕃情を考察すべき必要がある。

臺灣は、鹿兒島を距ること、南西六百四十一浬に位し、南北約百里、東西約三十六里、面積は九州と略〻等しいが、其人口は約四百二十萬で、之を九州の約八百五十萬に比すれば、約其半であるのは、山地が全面積の約三分二を占め、其山地の大部分は、所謂蕃地で、蕃人の繩張區域に屬するからである。

本島の殆ど北端より南端に縱走した大分水嶺即ち臺灣山脈は、中央よりも東方に偏して位置し、主として古生層の雲母粘板岩から構成され、峩々天を摩するの高峯相連り、海拔一萬尺以上のもの四十八座、七千尺以上の高山總數は、實に百十五座の多きに達し、所謂高山國の名に背かずと謂はねばならぬ。中にも富士山を拔くもの、新高山の一萬三千三十五尺に第一指を屈し、次高山の一萬二千九百七十二尺に第二指、秀姑巒山の一萬二千六百五十尺に第三指、マボラス山の一萬二千五百六十尺に第四指、南湖大山の一萬二千五百三十一尺に第五指を算し、帝國全領土を通じて、富士山は第六位となるのである。

予は本邦第一の高峯新高山に登るのは、今回旅行の主眼とするは勿論であるが、尙ほ北方の雄鎭次高山、及び頂上景致の壯麗、展望の雄大なること、天下無雙と謂はれる南湖大山をも探りたいと思つた。

今本島に移住してゐる內地人は約二十萬、蕃界內の蕃人は約十萬、殘りの約三百九十萬即ち全人口

の九割强は、元の支那人で、行政上之を本島人と言つてゐる。

今より約三百餘年前までは、臺灣島は、全部蕃人の居住する所で、蕃人は即ち本島の主人公であつた。

豐臣秀吉が、臺灣に移牒して朝貢を促したといふ其文に

「夫日輪所照臨、至海岳山川草木禽虫、悉莫不受他恩光也、予際欲處慈母胎之時、有瑞夢、其夜已日光滿室、室中如晝、諸人不勝驚懼、相士相聚、占筮之日、及壯年、輝德色於四海、發威光於萬方之奇異也、故不出十年之中而誅不義、之有功、平定海內、異邦遐陬嚮風者、忽出鄕國、遠泛滄海、冠蓋相望、結轍於道、爭先而服從矣、朝鮮國者自往代於本朝有牛耳之盟、久背其約、況又予欲征大明之日、有反謀、此故命諸將伐之、國王出奔國城附一炬也、聞事已急、大明出數十萬援兵雖及戰鬪、終依不得其利、來勅使於本邦肥之前州、而乞降繇之築數十个城營、收兵於朝鮮城中、慶尙道、而屢々決眞僞也、如南蠻琉球者、年々献土宜、海陸通舟車、而仰我德光、其國未入幕中、不廷之罪彌天、雖然不知四方成享、則非其地疎志、故原田氏奉使命而發船、若是不來朝可令諸將攻伐之、生長萬邦者日也、枯渴萬物者亦日也、思之、

文祿二歲星集癸巳十一月初五日　　不具

日本國　前關白　豐

高山國

とある。されど當時本島蕃人には、統一した主權者がないので、何等の反響も無かつたのであるが、我が日本民族は、尙其以前から、本島とは既に交涉を重ねつゝあり、淡水や、澎湖島、高雄は、南洋、南支方面に通商往來の中繼場であつて、今の高雄（舊打狗）を高砂、轉じて高山國（タカサゴ）といふ稱呼も、日本人によつて作られたのだといはれる。

この頃歐洲列强は、東方發展に雄飛を競うた時代で、和蘭人先づ本島の高雄、臺南邊を占領し、西班牙人は基隆、淡水邊に割據して、漸次植民政策を圖つたのであつたが、程無く西人は蘭人に逐はれた。

約二百六十餘年前、明の遺臣鄭成功なるもの、二萬五千の部下を率ゐて、臺南に渡り、蘭人を逐ひ拂つて本島を占有し、明朝の恢復を謀つたが、哀れ其名を裏切つて、遂不成功に終つたのである。然しこれが動機となつて、爾後對岸支那人の移住するもの、陸續として絶えず、平地肥沃の土地は、漸次この支那人のために占められ、蕃人は山地に退くの止む無きに至つた。

此の蕃人の祖先は、南洋諸島に住するマレー系統の民族で、各地より海流によつて、數次本島に漂着したのであらうと言はれてゐるが、移住の時と所とを異にした關係上、幾分言語風俗も違つて居り且つ點々居住する、各部落の間、互に交渉連絡を取り、攻守同盟をなすもあり、蕃族相互の間、祖先以來敵對行動を繼續するもある。現在約七種族あるが、同種族は必ずしも全部同盟團結する譯でも無い。蕃人は概して軀幹細長で、內地人よりも高く、性質慓悍敏捷、排他的觀念が强烈であるが、中にも臺灣山脈の北部、南湖大山邊に住むタイヤル族が、最も獰猛殺伐の氣風を存し、中部巒大山（ランダイサン）の東方に住むブヌン族、南部新高山の南方に住むバイワン族が、之に亞ぐといはれてゐる。

佐久間總督の所謂武斷政策、即ち明治四十三年より大正三年に至る、五ヶ年計畫の理蕃事業の終局には、三千餘人の警官隊と、步兵二個聯隊及び山砲隊の一部隊とを以て、彼等に大々的討伐を加へたのであるが、山岳は高峻であり、氣象は激變あるので、彼等に最大脅威を示すべき、飛行機爆彈投下も意の如くならず、山砲も運搬に苦み、僅かに機關銃によつて、威壓を加へ得たのであつた。彼等は行動機敏、屢〻勇猛なる作戰計畫を以て、夜襲を試み、討伐隊の或部隊は、全滅の厄に陷つたことさへある程である。當時歸順した者は、悉く銃器を押收し、其數二萬挺、領臺以來を通算すれば、約三

萬挺に上るとのことであるが、今尙深山幽谷にて、歸順せぬ者があつて、往々彼等が得意とする、首狩の慘劇を演ずるのである。然し首狩をなす者は、必ずしも未歸順蕃のみでは無い。其動機を概記すれば、

一、壯年（約十七八歳）の班に入らうとする時。
二、爭論の勝敗を決しようとする時。
三、嫌疑を解き、又は寃罪を雪がうとする時。
四、娶婦の競爭に勝たうとする時。
五、凶事惡疫を祓はうとする時。
六、自己の武勇を誇らうとする時。
七、開墾祭又は粟祭の儀式を行ふの時。
八、自殺を企つる場合、冥途の道連れを得ようとする時。

等であるが、要するに首狩に對する彼等の信念は、祖先傳來の遺訓であり、又根本道德であるとするのは、首祭に於ける彼等が歌詞、之を表明してゐる。

首狩に出かけることを、出草といつてゐるが、彼等は巨樹岩蔭又は密藪の裡に潛伏し、能く數晝夜の飢渴に堪へ、通行する人が、極めて近距離に至るのを待ち、轟然一發、實に一發一中、躍り出でて直ちに其首を切り、雲を霞と蕃社（社とは蕃人部落のことである）に駈け歸り、盛んなる儀式を行ひ、連日連夜の宴を張るのである。彼等は同部落は勿論、同盟部落のものは、決して馘首せぬのである。彼等が首狩も、敎化の漸進によつて、今は甚だ稀有となつた。

五ヶ年計畫の理蕃大事業あつて以來、彼等は頗る官廳の威光を感じて、漸次歸順し、總督府亦力を敎化事業に盡し、農具種苗を給與して、農耕生活を指導奬勵してゐる。されど狩獵は、彼等が祖先以

來の慣習であり、又無上の娯樂でもあれば、各警察官吏駐在所では、其願出により、一週間の期限を附して、銃を貸し、彈藥五發を下附することとなつてゐる。臺灣では、普通行政區域內は、警察官吏派出所といひ、蕃地に入ると、警察官吏駐在所と稱してゐる。

樞要なる交通道路には、蕃人部落の有無如何に拘はらず、約一里隔てに、警察官吏駐在所があつて、數名乃至十數名の巡査が駐在し、殊に重要地點には、巡査部長若くは警部補、警部を配置し、鐵條網逆茂木を設け、機關銃まで備へてある。蕃地勤務の警官は、主として除隊軍人を採用し、蕃語の講習をなすのである。其俸給は、內地のそれに比すれば、甚だ豐かである。

蕃人部落は、二三十戶以下が普通であつて、七八十戶以上は、極めて稀である。一戶の家族大抵五六人であるが、種族部落によつては、數十人同居するのもある。其適當な場所には、州立公學校を設け、特に教員を配置して蕃童の教育を行つてあるが、其他の部落は、便宜駐在警官が教員兼務である。

子を思ふ親心で、彼等は警官に對し、畏服すると同時に、又其恩誼を感ずるので、蕃地警官の威力は、實に想像以上の點がある。

十數年前までは、彼等の多くは、遊牧原始的生活を營み、物々交換であるので、貨幣には何等の價値をも認めぬのであつた。從つて彼等が勞力に酬ゆるには、綿布、マッチ、藥品、食鹽などの日用品裝飾品を用ひねばならぬのであつたが、今は漸く經濟的生活に轉じつゝあり、且つ適當な場所には、公設交易所があつて、彼等はそこで賣買の便宜を得、始めて貨幣の價値を感ずる樣になつた。

蕃人は元來淡白率直純良である。然るに不良の徒が、蕃地に出入して、彼等が低知識に乘じて、之を欺瞞し、或は煽動するのは、彼等が教化上、甚だ障害となるので、蕃地取締規則があつて、蕃界內に入らうとする者は、必ず其目的、通過地域、期間を具して、所轄郡守(內地の元の郡長相當)より、

入蕃許可證を受けねばならぬ。其手數料は一人につき二十錢である。この手續を履まないで蕃地に入ると、二ヶ月以内の禁錮、若くは二百圓以下の罰金に處せられる。蕃地とは、普通行政區域外の意で、本島全面積の約二分一を占めてゐる。

予が通過すべき蕃界内の地域は、六郡に亙つてゐるので、先づ總督府を訪ひ、總括的の便宜取計ひを受けたのである。

現今に於ける地方行政區は、五州、三廳とし、州下に五市、四十五郡あり、州に知事、廳に廳長、郡に郡守、市に市尹を置いてある。

一一、臺北

官廳、博物館、植物園、市街狀況。

八日午後、沼井氏の案内にて、總督府を訪ひ、生駒文書課長殿に面會し、非常な便宜を受けた。氏は第一高等學校在學時代に、高頭氏が編纂された『日本山嶽志』によつて、大に登山の指南を蒙つたことがあるとか。臺灣では、最近漸く登山の氣風が起りつゝあるので、我々の臺灣入りは、大に刺戟鼓舞の效果があるといふ樣のことなど語られ、何等城壁をも設けぬ、極めて快活な應接振りであつた。氏から參考書として、總督府の編纂にかゝる『臺灣事情』、『臺灣現勢要覽』、『臺灣大觀』、『最近の臺灣』、臺灣山岳會發行の『新高登山のしをり』、營林所發行の『阿里山登山者のために、附新高登山の栞』等を寄贈され、又我等が登山に關係ある臺中、臺南兩州の警務部長（内地の警察部長相當）其他關係官憲宛の極めて鄭重な紹介狀を附與されたのは、感謝に堪へぬ。氏の肝煎で、山入りに關係を有する警務局理蕃課長、營林所庶務課長にも面會した。

生駒課長殿の厚意で、總督府の自動車に乘り、井上一男氏の案内を受け、臺北州廳及び博物館を訪

問し、夕刻旅館吾妻に歸つた。

總督府は、市の中央に位し、宏壯輪奐の美を極め、巍然として峙つ十二階の高閣は、全市を脚下に瞰下す。建築費は三百餘萬圓を要したといはれる。朝鮮といひ、臺灣といひ、總督府廳舍の壯麗は、內地諸官省を凌駕する觀あるのは、新附の人民に對する政策の一つであらねばならぬ。

博物館では、屋崎秀眞、松倉鐵藏兩氏が案內說明された。地質、鑛物、植物、動物、人類、歷史、敎育、農業、林業、水產、工藝、雜の十二部に分ち、全島の產物を始とし、蕃人の風俗、人情なども窺はれて、絕好の參考資料となつた。

この日朝、長谷川龜之助氏夫人菊子さんから「お伺ひ致したいから、御都合は如何でありますか」との電話がかゝつたが、臺灣神社參拜に出かけようとする眞際であつたので、斷つて置いた。昨日夫婦で、プラットフォームまで出迎へされ、二等車室を尋ねられたが、それらしい人が見えないので、空しく歸られた。今朝の新聞紙上に、我等の入臺記事が見えたので、電話で照會されたのである。菊子さんは予の從姪で、最近長谷川氏に嫁いたのだが、新夫婦とも、まだ面識が無いのと、我等が三等車から降りたのと、當時非常に混雜であつたので、判らなかつたのである。長谷川氏は醫學專門學校の敎官である。それで市內巡廻の際、一寸自動車を停めて面會し、後日の再會を約した。我等が三等車で乘り込んだのは、各方面に、飛んだ御迷惑をかけて、氣の毒であつた。

昭和元年末の調査によると、臺北市の人口は、二十萬五千六百十三人で、其中內地人は五萬六千百五十四人となつてゐる。

大正十一年市區改正の前までは、城內、大稻埕（ダイタウテイ）、艋舺（マンカ）の三市街に大別し、城內には主として內地人が居住し、新領土の政都としての諸機關は、概ね此處に置かれ、大稻埕、艋舺は主として本島人が居住し、前者は今商業地として發展しつゝあるも、後者は今衰退して、往時船舶の輻輳した河港の面影

をも留めぬ樣になつた。艋舺とは舟の義なりとのことである。

市區改正以前に於ける城内を圍んだ城壁は、今は撤去されて、城門だけが淋しく名殘を存し、城壁の跡は、所謂三線道路となつた。それは中央が車道で、左右兩側にある人道との界には、蒲鉾形の低い土堤を設け、植込んだ椰子の並木の根元に、綠の芝草軟かに道を緣どる快感は、内地では味はれぬ。

市内の大通りは、中央に幅十間の車道を設け、兩側には各二間の人道がある。人道は所謂亭仔脚(覆亭)で、炎天にも降雨にも、傘の必要が無い。これは降雪の多い我北國地方の所謂雁木(ガンギ)に似てゐるが、これは煉瓦造の重々しい感じが違つてゐる。亭仔脚の上部は、倉庫又は居室に充てゝゐる。

家屋は主として三層の煉瓦造若くは鐵筋コンクリート造り、道路はアスファルトで、區劃整然として、極めて清潔であるは、是れ亦内地では見られぬ。唯まだ電車だけは無い。

市の東部に、步兵聯隊、山砲隊がある。

夜沼井、井上兩氏及び鹿野忠雄氏が來訪され、我等がために、深更まで、旅行日程調製に從事されたのは、感謝に堪えぬ。

予は鄕里出發前、臺灣山岳資料に供する圖書には、少からず苦心した。臺灣山岳會から、其發行にかゝる雜誌『臺灣山岳』の寄贈に接したことは、至大の參考となつたのであるが、地圖には頗る閉口した。陸地測量部明治三十年の輯製にかゝる假製二十萬分一圖は、手に入れたが、今は地名も多く改まり、山地は概ね疑問符を註してある通り、殆ど全く當てにはならぬ。東京大阪方面の書林を物色したが、用立つものは見當らぬ。出發眞際に至り、沼井氏から、三十萬分一臺灣全圖(總督府警務局調製)を周旋して貰つたので、始めて蕃地地勢の精細を窺ふことが出來たが、然し特殊の事情を有する蕃地は、單に圖上の縮尺を辿つて、日程を調製する譯には行かぬ。鹿野氏は現に高等學校の學生では

あるが、飄然單獨にて屢〻蕃地山岳を跋渉し、生死の間に出沒して、蕃情を探り、動植物の研究調査に精進しつゝある一種の奇骨を有する人で、其沈毅精悍の特性は、烱々たる眼光、引き締つた眉宇の間にも讀まれる。我等が旅行日程は、主として氏が意見に基いたのである。この日程が、總督府から、關係各州郡警察當局へ通知されたのは、至大の便宜となつたのである。

△三月九日　少雨　朝　臺北六六　夕　竹南五六

午前は井上、沼井兩氏の案内にて、總督府の自動車に乘り、臺灣日々新報社を訪問して敬意を表し、沼井氏勤務の專賣局及び植物園を見學した。

植物園では、主任佐々木舜一氏説明の下に、珍卉美花の間を縫ひつゝ巡つたが、熱帶的植物の多い中にも、特に棕櫚科に屬する多種多樣の椰子類が、葉は飽くまでも綠濃く、風姿の雄壯であるのは、一種の快感を與へる。

臺北公園には、兒玉總督の大理石像が、其功績を物語つてゐる。

昨日は臺灣山岳會幹部の方々が發企人となり、我等がために、臺灣料理で、歡迎晩餐會を催す計畫をされたのだが、偶〻久宮樣薨去の公報に接したので、延期となつた。發企者の方では、尙數日臺北に滯在して、市内及附近の巡覽をと勸められたのであるが、斯くては恐縮の點があるので、此日午後、突如山入りの途に就くこととした。

一二、臺北より臺南へ

臺中州廳、北回歸線標塔、臺南神社、嘉義、入蕃許可証。

沼井、井上兩氏及び旅館吾妻の主婦、番頭達の見送を受け、午後三時五十七分臺北發の汽車に搭じた。臺北驛前には、縱貫鐵道建設技師長長谷川謹介氏の銅像が高く聳えて、人目を惹いてゐる。

臺灣では、汽車の車掌を車長といつてゐる。車長室に居た乘務員三人の中、一人が內地人であつたので、特に沿道色々と說明して呉れた。

新店溪の鐵橋を渡ると、水田廣く開け、右手には觀音山兀として聳え、左手には蕃地の山々が、遠く雲霧の裡にぼかされてゐる。本島第一の富豪林本源の邸園で名高い板橋驛を過ぎると、淡水河の上流である大嵙崁溪附近一帶の山地からは、石炭が出るので、山子脚、鶯歌の二驛には、石炭が山と積まれてゐる。茶の產地で名高い桃園附近は、到る處平地といはず、丘陵といはず、見渡す限り茶畑で、綺麗に刈り込まれた團々たる樹株、整然たる區劃が目につく。

七時新竹州廳所在地の新竹驛を過ぎ、同三十六分竹南驛に下車し、夕闇の中、淋しい電燈の光を辿つて、鹽田旅館に投じた。我等と相前後して、大行李を運んだ三人の客もあつたので、殆ど滿員の狀況であつた。

板橋は舊枋橋といつた。巨萬の富を有した林本源は、領臺以來、我が治下に住むを不快とし、支那本土に去つて歸らぬが、其邸宅庭園は、阿房宮の賦を現實に觀るといはれる純支那式の建築美豪奢を極め、一時は三千の兵を擁したといふが、今は其家族が分管してゐるとのことである。

茶は本島北部の主產地で、桃園が其集散中心地として、全島產額の七割以上を占めてゐる。臺灣茶には烏龍茶、包種茶、紅茶、綠茶等種々あるが、主なるものは烏龍茶及包種茶である。殊に前者は香氣芳烈、風味亦豐醇であるので、賞用される。

桃園街は、元粵族（廣東省）の移住地であるので、隣接した新竹街が、元閩族（福建省）の植民地であるのと、對照して面白い。街とは內地の町に相當する。

桃園の南東九里半、輕便鐵道によつて、角板山の勝地に達する。こゝの蕃人は、夙に敎化に浴し、數多の秀才を出してゐる。地は海拔二千百尺、大嵙崁溪の淸流を脚下に見下し、東に近く插天山（海

拔六三三八尺）を仰ぎ、南に大霸尖山（一一七二九尺）の奇峯を望み、風景の雄大を以て知られ、大正十四年秩父宮殿下が御成り遊ばされた蕃地である。

臺灣では、構内呼賣に、蜜柑と芭蕉ノ實といふ聲を聞かぬ所は、殆ど無い程だが、蜜柑は新竹を中心とし、附近新埔の產が、顆肉豐美、風味佳良を以て著はれてゐる。今の時期は、椪柑といふ品種である。

竹南驛は、山手線（臺中線）と海岸線との分岐點で、我等が乘つた列車は、山手線によれば、夜の十時三十七分には、臺中に着くのだが、それでは餘り遲くなるので、竹南驛で下車し、鹽田旅館に宿つたのである。館主は山口縣人ださうで、新聞紙上によつて、我等が登山のことを知つて居り、出來るだけの優待をしたらしい。支那式赤煉瓦造の家屋に、洋風のガラス窓を附け、玄關の一方に理髮所があるのは兼業と見える。臺灣の理髮所では「理髮館」、又は「調髮館」、「美髮館」などいふ看板を見るのは、流石文字の國支那式が窺はれる。

便所は、煉瓦屋根道を通過する奇態な構造である。浴室は、薄暗い掛出式であつたが、若い女中が來て、脊を丁寧に洗つてくれたとて、高頭氏の賞讃を博した。

食膳には、鷄肉と生卵、卵蒸といふ鷄料理攻めであつたが、アカメといふ海魚の刺身と、其煮附があつた。これは赤目鯛又夷鯛の名があり、形體鯛に似て稍〻長めで、鱗は甚だ細かく、其紅色は更に濃い、皮は甚だ硬いので、剝いで料理するが、肉味は隨分結構である。曩きに臺灣神社參拜の途、明治橋の上で、行商人が澤山擔つて行くのを見たが、この魚であつた。

△三月十日　曇　朝　竹南五六　夕　臺南六〇

朝食前街道を散歩すると、センダンの並木が多く見える。新綠の芽吹き鮮かに朝風に靡く、この優しく柔かな感じを與へる淡紫色の花は、予は先年五月下旬、九州旅行で、始終賞鑑したのであつた。

此地は今當であつたが、臺中以南は、花盛りであつた。九州地方のに比べると、花色は稍〻淡い。この木は相思樹（サウシシュ）と共に、並木や庭園樹として、觀賞用となり、又好個の薪炭材料となるのである。臺北植物園で見た、所謂二葉より芳しといふ印度產の栴檀は、常綠樹で葉振りは甚だサカキに似てゐる。

此地方では、南瓜、夕顏は、成り花が見え、玉蜀黍は、既に熟してゐた。

道行く本島人を見るに、殆ど皆跣足である。婦人達が、袋樣のもので、子供を脊負ふ樣子は、リュックサック式である。

鹽田旅館の筋向ひに「新華軒理髮館」と書いた看板も見えた。

竹南驛賣店に、新高羊羹といふのが目に入る。

午前八時八分竹南發の汽車に搭じた。石油で名高い苗栗驛では、蜜柑、枇杷の本場とて、其呼賣の聲は一際高い。美味本島一の評判ある西瓜も見えた。

此邊甘蔗刈取の最盛期で、黃牛や水牛が、山と積んだ車を引くもの、自動車で運ぶもの、貨車數臺に積み入れたのも見える。

爪先上りの勾配で、汽車は速力が鈍る。沿道の崖側多くは赤色粘土である。靑紫花のヒルガホ、淡桃色のアザミ花もあり、ヤマツツジもある。このツツジは、葉が割合に小さく、鮮かな紅赤色の花が密生し、爛漫たる樣、目を惹いた。

新竹、苗栗邊では、中央山脈北方の雄鎭といはれる次高山や、大雪山が見えるといはれるが、此日は、始終雲霧に鎖されてあつた。

從貫線中最高地點である、十六分（ジウロクフン）停車場には「海拔一千二百二十呎」と書いた標柱が見える。

長いトンネル（トンネル）を出ると、大安溪の鐵橋を渡り、眼界豁然として開け、水田遠く連り、本島特產の最上米所謂葫蘆墩（コロトン）米產地の本場である豐原（トヨハラ）驛を過ぎ、十一時二分臺中驛に下車した。

豐原は、舊名葫蘆墩といつた。八仙山の入口である。八仙山は、此處から大甲溪に沿ひ遡ること約二十里の地點にあつて、中央山脈中部の重鎭合歡山（ガウクワン）から西に分岐した、支脈中の主峯白姑大山（ハツクダイサン）の西方に連る檜、樟を主とする森林で、所謂本島三大森林の一に數へられ、又近時臺灣八景の一つに推された景勝の地である。

豐原の附近に、殖産局の蔗苗養成所がある。本島甘蔗の品種は、數次の選擇を經て、今は瓜哇産の優良品種を採用し、栽培及製糖の改良、糖政上の施設進歩の結果、最近の産額は、約七億五千萬斤、其價格約一億七千萬圓に上り、本島産米の價格と相伯仲し、內地の需要を充たし、更に輸出の盛運を見つゝあるのは喜ばしい。

我等が臺中驛に途中下車したのは、今回跋涉する山岳は、臺中州の所管地域が、其大部分を占めるので、州廳を訪ひ。種々便宜を受けるためである。谷內田君は停車場で留守役に當り、予は高頭氏と腕車を馳せ、州廳に警務部長兒玉魯一氏を訪ふたが、氏は八通關道路方面視察出張中であつたので、警務課長熊井才吉氏に面會した。氏の語る所によると、兒玉氏は、天候によつては、本日八通關から新高山に登られる豫定であるとのことであつた。

引返し、驛の側にある鐵道倶樂部に於て、卵燒、豌豆の甘煮、澤庵漬といふ簡單な副食物を添へた一食二十五錢の晝食を取つた。

臺中市は、臺北を距る百哩、臺南へは九十九哩、略〻兩者の中央に位し、人口約四萬四千の中、內地人は約一萬一千である。土地高燥、氣候中和、綠川、柳川が市中を流れるので、架橋も多く、市區井然、瀟洒の光景は、たしかに京都を聯想せしめる。並木には相思樹もあるが、今は唯藤のそれよりも大形な莢果だけあつて、葉の無いビルマネムといふのが、目に着いた。

歩兵大隊がある。臺灣新聞社がある。本島第一といはれるバナナの市場がある。臺灣の代表的果實

観高より見たる新高山。右方積雪の多いのが主山．其左の尖つたのが東山である。

といはれるバナナは、全島到る所に栽培されるが、其主産地は臺中州で、全島産額の七割强を占めてゐる。昭和元年に於ける全島の輸移出高は、約二億萬斤、其價格は一千四百萬圓に上り、重要産業となつてゐる。バナナは其株から、始終發茅生長し、漸次開花結實するので、年中收穫が出來る。果實は八段乃至十二段を有する房狀に垂れ、一房の重量二三十斤であるが、稀には百斤に達するのがあるさうだ、一顆の形、弓狀をなすので、芎蕉(キンチョ)の名があり、本島人は概して芭蕉實(バセウノミ)といつてゐる。原産地はマダガスカル島といはれる。

午後一時四十六分發の列車で臺南に向つた。臺北以來、本島名物の相思樹の並木は、始終目に入つたが、南するに從ひ、椰子、檳榔漸く多く、其並木もあれば林もあつて、益〻熱帶氣分の感じがする。この邊は、本島第一の平野所謂臺中平野で、一望數十里、見渡す限り、稻田で無ければ蔗園、丘陵地には、芭蕉(バナナ)が廣く連つてゐる。甘蔗は今刈取の最中だが、既に刈取つた跡には、七八寸位に切つた甘蔗の莖を伏せ植ゑするもあり、又新莖既に伸びて、一二尺となるもある。充分成長した莖の長さは、六七尺乃至十尺に達し、莖皮は赤褐色のが多いが、綠色、黃綠色、暗赤色、暗褐紫色のもある。

臺灣神社參拜の途、各所店頭に、甘蔗の莖を並べて販賣するのを見た。一尺位の長さに切り、先きの方四五寸の皮を削つて置く、其部分は黃白色である。莖皮は紫黑色のが多い。この種のものが、甘味が多いとのことである。子供は更なり、大人までも、この甘蔗を買ひ求め、行く行く之を咬み締め、甘液を吸うては、所構はず其滓を吐き出すのであるが、この光景は汽車の中にも見られる。東京人の燒藷、大阪人の昆布の類である。この甘蔗囓りは、稍〻青臭味はあるが、清凉醫渴の効はあるといはれる。

臺中邊から以南に至ると、車中でも往々これとは違つた檳榔子(ビンラウジ)囓りを見るのである。檳榔の實は桃形で、長さ一寸餘、之を數片に切り、蠣殼灰を塗り、荖藤の葉に包んで嚙むのであるが、其暗赤色の

液を吐き出すのは、吐血に似て、不快の感を起させる。この喫用者は、婦人に多く、唇赤く染り、齒は黑い。彼等は瘴氣を防ぐ効があるといつてゐる。

汽車の乘客を見ると、北部では內地人が割合に多いが、南するに從ひ、漸次本島人が數を增し、而も閩族が全人口の約八割を占めることとて、福建人の風習を有し、纏足婦人が多い、甚だしきは、靴の長さ二寸五分位のがあり、汽車の昇降には、人の肩に倚らねばならぬ不便さも哀れである。この風習は、粵族には無いさうだ。服裝は勿論支那式で、髮は普通支那人に見る樣に、髮を前から後に堅く引き締めて結び、後長く綯ひ、丸く束ねて簪で止めるのだが、中には銀髮鬃とて、內地の島田髷に似て、更に長い髮を結ぶもあり、笄又は生花など插すもある。耳朶に金環を附け、指環、腕環もある。甚だしきは金の腕環を三つ四つも並べて着けたのもある。少女達は、耳にも袖口にも靴にも、小鈴を着け、動けば鳴るといふ一種の愛らしさも感ずる。然し女學生達は、內地のそれの服裝と、全然同樣で、擧動活潑である。本島人の男子には、洋服が流行し、日本語を巧みに操るのは、殆ど區別がつかぬ。唯屢〻ニンニクの臭氣に襲はれるのは、朝鮮、滿洲旅行に於けると同じい。

員林驛では、滿開を呈するセンダン並木の淡紫花に伍して、夾竹桃の眞紅の花が、調和良い感じを與へた。こゝの蜜柑、バナナ、パイナップルも名高い。

林內驛邊から、竹林が著しく目に入る。概して麻竹で、根株から、數十百の幹莖が密に叢生し、一大群束の異觀を呈する。幹高さ七八丈、周圍三尺以上にも達するのがあつて、輪切りとしては、盥が出來る。名物竹筏の材料となり、近頃盛んに製紙の原料に用ひられる。節に枝が密生するので、往々烏の巢が見えるも珍らしい。籬根用には、刺を有する本島特有の刺竹といふのがある。莖の周圍は一尺五寸程となり、多肉强靭であるので、建築用となり、又擔棒の材料となる。擔棒には、この竹を二つ割りとし、割つた方を上に向けて肩に載せるのは、昔時に於ける江州商人のそれに似てゐる。到る處

この種の荷擔を見るのは、亦本島名物の一つであらねばならぬ。

予と對坐した、華美の洋服姿の岡山縣人だといふものゝ話によると、この邊の土地は、財界好況の頃は、一甲（約一町歩）一萬圓に上つたのだが、今は七千圓位となつた。今植え附けつゝある稻は、六月末に收穫し、第二期のは、十一月の收穫となる。第二期の收穫高は、第一期のに比すると、約一割五分の減收であるとのことである。

列車が嘉義を發すると、六七分で、右手即ち線路を距る西方一町ばかりに、白く塗つた北回歸線標塔が目に入る。我等は此處から、圖面上に於ける熱帶圏に入るので、本島の約五分二は、この圏内に屬するのである。

臺南に着いたのは、八時二十分である。驛前東屋旅館（山口富太）に投宿した。館主は我新潟縣村松の人であるといふ因緣から、心盡しの優待をした。當地第一流の旅館とて、非常に明るい快感を與へた。優良な設備に加ふるに、料理亦甚だ優秀であつた。本島の物價は、概して南方程低廉であるので、臺北旅館吾妻では、一泊料三圓五十錢、臺南東屋旅館では三圓、其他は二圓乃至三圓であつた。一般に内地よりは安い。昭和元年調の日雇賃銀は、左の通りである。

種別	土地	臺北	臺中	臺南
内地人		二、〇〇圓	一、〇〇圓	一、〇〇圓
本島人		八〇	七〇	七〇

東屋旅館では、名物のウシェピが膳に上つた。添膳には、七を添へた果實があつたので、高頭氏に質すと、木瓜（モククワ）（ババイヤ）であつた。予は此時初めて見參に入つたので、其食べ方をも聞いた。形は甜瓜の如く楕圓形で、長さ七八寸、外皮は黄綠色である。縦に二つ割りにしたのを、匕で内部を食べ

るのだが、甜瓜に似た甘味で、一種の佳香がある。蛋白質をペプトーン化する作用があり、鳥獸の肉と共に煮れば、大に肉を軟かにする。食後に用ひれば、消化を助くる効がある。青きは蔬菜となり、液汁は驅虫劑、防腐劑に用うる。臺南以南が本場で、臺北邊では、稍〻寒いので、成果不良であるといはれる。後蕃地に入つた時、標高低い地方の蕃人も栽培してゐた。これは落葉亞喬木で、一年に幹の高さ一丈以上となり、葉は缺刻ある大形な掌狀で、白花を開き、一株に數十百の結果を得、漸次成熟するので、年中採收が出來る。一名バンクヮジュ（蕃瓜樹）、マンジュクヮ（萬壽果）又ナンバンウリの名がある。果實を糖蜜漬としたのが、菓子店に見えた。

何れの旅館でも、殆ど皆筍の料理に接した。臺灣では、年中筍が取れるので、從つて其料理法にも、色々あつて上手である。

小皿に、黑色の西瓜の種子も見えた。これは鹽炒としたので、臺灣では、各所で膳に上つたのである。大道でも賣つてゐる。

△三月十一日　晴　朝　臺南六〇　夕　嘉義六五

朝食前散歩すると、東屋の前の廣場に、蔚蒼たる大樹がある。榕樹（ガジマル）であつた。幹圍目通り二丈餘、常綠樹で、葉はサカキに似て光澤がある。枝からは、數多の氣根が垂れてゐるが、地に達するものは無い。恒春（カウシュン）邊のは、氣根も發達し、所々純林を見るとのことである。宿の女中に聞いた時、タイワンマツと言つた。松杉科のマツとは似もつかぬ闊葉樹であるが、本島では、一般に斯く言ふ樣である。材は堅緻、木理錯綜して、頗る美しいといはれる。

この日は嘉義まで引返し、新高登山の準備をなす必要があるので、日曜日といふ早朝訪問は、失禮とは思つたが、七時半南州廳宿直の方に伺つて、警務部長石井龍猪氏の私宅を訪問した。氏は理蕃課長を呼んで、種々便宜を與へられた。氏は昨年朝香宮殿下が、阿里山から祝山（イハヒヤマ）（八二六三尺）に御登

りの際、知事と共に隨行したが、殿下は始終御元氣で、頂上に先着されたのに、知事も自分も、身體肥つてゐるので、遙か後れて、喘ぎながら漸く登り着いたのは、恐縮至極であつたなどと語られた。

理蕃課長殿の案内で、官幣中社臺南神社に參拜した。

境内は開豁瀟洒である。記念印を請ふべく、社務所を訪ふて刺を通じた。宮司は、我縣の彌彦神社の宮司齋藤氏とは知人であると語り。丁寧に寶物殿に案内された。臺南は明治二十八年十月二十八日北白川宮殿下が、陣中御終焉の地で、御遺品として當時の御軍帽、軍服、軍刀を始め、擔架、寢臺、毛布等を藏してある。殿側には、同妃殿下御手植の菩提樹(ボダイジュ)があつて、幹徑約二尺に生長してゐる。琵琶歌「臺灣入り」を思ひ出し、暗涙を催さずにはゐられぬ。

歸途孔子廟に詣づ、外門の額に「全臺首學」と刻んである。鄭成功の參軍陳永華の主唱によつて創立され、清朝時代には、臺南學府と稱され、俗に文廟と呼ばれ、大成殿を始め、禮樂庫、祠堂相並び、構造純支那式を呈し、今尙毎年盛んなる祭典が行はれるとのことである。

この地には、蘭人の治城赤嵌樓(セキカン)(所謂紅毛城)、鄭成功を祀る開山神社などあるが、時間の都合上、之を略した。赤嵌とは其地名である。

臺南は、本島の最舊都で、劉銘傳が、巡撫衙門を臺北に置くまでは、全島の首府であつた。今安平(アンピン)を併せ、人口約八萬八千、内地人約一萬四千、本島第二の大都會で、臺北が政都であるのに對し、これは商都の觀がある。州廳前に於ける兒玉大將の壽像を中心として、街路は八方に分派し、公園は、本島都市中最も雄大な趣があるといはれる。

歩兵聯隊がある。臺南新報社がある。

十時十九分臺南發の急行列車に投じた。三等急行料金は、五十哩未滿二十錢、百哩未滿三十錢、二百哩未滿五十錢、二百哩以上七十錢とあるから、内地のとは違つて、甚だ細かに刻んである。

十時四十二分嘉義驛下車、青柳旅館の番頭に迎へられ、驛前の同旅館（宇野貞雄）に投じた、昨日當驛通過の際、本日宿泊のことを名刺裏に認め、驛員を煩はし、當旅館に通じて置いたのであつた。青柳旅館は、この地第一流の旅館である。

驛の掲示は「吳鳳廟東二里二十町」、「阿里山森林東十八里三十二町」とあつた。

時間の經濟上、親子丼（七十錢）を取り寄せて晝食とし、午後登山の準備品購入に出かける。

嘉義は舊名諸羅といつた。乾隆の末年、林爽文の叛亂に孤城獨り能く守つたので、其義を嘉すといふ意味から、勅命によつて、此名を賜はつたのだといはれる。

この地は、明治三十九年三月、大地震のため、全潰家屋約七千、死亡者約一千二百六十人を算し、殆ど全滅の災害を受けたのであつたが、今は林業、糖業の中心地として、活氣ある發達の機運に向ひつゝある。

停車場から、東方山子頂に至る所謂停車場通は、この地目拔の場所で、街路廣く、整然たる景觀は頗る快感を與へる。この通りには、新高館といふ頗る優等な旅館がある、新高軒といふ雜貨店がある。竹南驛では、新高羊羹を賣り、臺北には、新高堂といふ有名な書店があり、新高キャラメル、新高饅頭がある。如何に新高山が、最近に於ける風雲兒であるかが窺はれる。

數ヶ所に活動寫眞館もある。劇場には、支那式演劇の賑かな騷がしい樂隊の音も聞えた。

登山の準備品として、此處では、鰯、鮭、海苔、福神漬、パイナップルの鑵詰、鹽鮭、食鹽、砂糖、草鞋など買入れ、其他は阿里山沼ノ平（ヒラ）で整ふこととした。

停車場で販賣してゐる、嘉義商工補習學校學生の製作にかゝる、檜材の金剛杖を買入れた。「新高登山記念」といふ燒印がある。一本四十錢であつた。

市場を觀ると、魚類、豚肉、鳥肉、卵、蔬菜類、西瓜、木瓜、パインアップル、李などの果實も豐

富であるが、殊に鮮かな黄いバナナが山と積まれてゐる。最上バナナ一斤が四五錢といふから、我郷國長岡邊の百匁十四五錢といふに比べると、約六分一の廉價である。木瓜は一斤四錢といふが、大きなのは一顆三四斤もある。

予は郷里の家族に、試味させようと思つて、甘蔗の莖の直徑一寸五分、長さ一丈位なのを、一本十五錢で買入れ、宿に持歸り、適宜の長さに切つて、小包郵便に附したが、高價で買入れたとて、番頭に笑はれた。大正十三年全國勸業博覽會に於て、金牌賞受領の額を掲げた嘉義珍商店（店主林炎）から、龍眼飴、バナナ煎餅、木瓜及文旦の砂糖漬も買求め、同時に小包郵便に出した、此處にバナナ羊羹、芭蕉飴、干龍眼肉なども見えた。

龍眼の産地は、嘉義を中心とし、本島果實の王として珍重されるのだが、三四月に開花し、八九月に熟果するので、其生果を試みることの出來なかつたのは、甚だ遺憾であつた。これは生長遲々たる常綠亞喬木で、南天に似た羽狀複葉をなし、甚だ光澤ある濃綠を呈するので、特に目立つのである。複總狀花序に數百の小花を簇生し、果實は徑一寸許り、球形にして剛毛を密生すること、海栗（ウニ）の殼のやうである。生果は松脂的一種の佳香甘味を有するが、二週間を保たぬので、乾して貯へるのである。

嘉義製材所は、殖産局營林所の經營で、阿里山より搬出した巨材は、此處で製材される。十六萬坪の貯木場には、新式機械を裝置し、一ヶ年の製材能力二十五萬石に上り、其規模の大なること、東洋第一といはれる。

嘉義郊外には、並木として將た造林として、相思樹が多い。臺北板橋の邊にも、竹南にも、この並木が多く見えた。遠望すると、柳の樹振り葉振りに似てゐるが、更に深綠で光澤がある。臺灣特生の有名な常綠喬木で、葉は倒披針形の全邊を呈し、葉身と葉柄の區別が無い。黄色な小形の花を簇生し、長き雄蕊は、多數花冠外に突出して、球狀の雅致を呈するのだが、今はまだ蕾も小さかつた。觀賞用

とし、又薪炭の好材料となるのである。

この地で、我等が目を惹いた、如何にも熱帶的植物の風致を發揮したのに、猩々木と、九重桐（ココノヘキリ）（ワタノキ）がある。猩々木は、高さ數尺の常綠灌木で、狹披針形の葉を有し、梢頭の數葉は、鮮かな紅色を呈し、宛然花の如く、人目も惹き、昆蟲を誘致するには、充分の役目を有するので、其間に綠黃色の小花を忍ばせてゐるのも、相應しい。

九重桐は、本島特有の落葉喬木で、葉に先ちて開花し、花冠四寸程もあり、淡紫紅色に黃點を密布し、頗る美しい。嘉義郊外から、獨立山中に亙り、所々で認めたが、賞觀用として、庭園にも多く植附けられてあつた。材は白色輕軟、簞笥に用ひられる。分布區域は、阿里山西麓より、埔里（ホリ）附近に亙るといはれる。

この邊の名物には、ヤモリ（蝘蜓）がある。形はトカゲ（蜥蜴）に似て、長さ五六寸、灰色で腹は白色を帶びてゐる。予は青柳旅館の便所で、電燈の外ホヤの中に、數匹居るのを見たが、夜更けると、彼等は群をなし、ツーツーと發聲しつゝ、室の壁でも、天井でも、蚊帳の上でも、自由自在に駈け廻る。主として蚊を捕食する益蟲ではあるが、餘り氣持良い感じを與へぬ。

この日、嘉義郡守荒木藤吉氏より、入蕃許可證を受けた。

第二一六號　入蕃許可證

原　籍　新潟縣三島郡片貝村

現住所　同

職業　農　大　平　晨　當六十四歲

入蕃目的　見學

入蕃地域　新高山
入蕃期間　自昭和三年三月十二日　至同　年同　十七日
右入蕃ヲ許可ス
昭明三年三月十一日

臺南州　嘉義郡役所印

⊙注意　本證ハ下山ト共ニ直チニ下附官廳ニ返納スベシ

新高山

一三、總論

位置、山態、御命名記、岩質、森林、高山植物。

新高山は、臺灣山脈即ち中央分水嶺より、少し西に偏して崛起した山彙で、中央主山は、東經百二十度五十七分十二秒、北緯二十三度二十八分六秒、殆ど北回歸線上に位し、臺中、臺南、高雄の三州に跨り、臺中州に屬する地積が最も多い。本山彙と、中央分水嶺とを連結する鞍部が、有名なる八通關である。

本山彙は、一萬三千三十五尺即ち本邦最高の榮冠を戴ける中央主山を盟主とし、東南方約七百米に東山（海拔一二八一六尺）、西方約二千四百米に西山（一一六九八尺）、南方約二千五百米に南山（一二七六八尺）、北方約二千米に北山（一二七六〇尺）が相聳え、主山を中心として、各峯を連結すると、略〻十字形をなしてゐる。

支那人は、玉山又は祿山と稱し、阿里山蕃人（ツオオ族）は、バトンカンと呼んだ。又英國汽船ア

レキサンダー號船長モリソンの名によつて、モリソン山の名があり、この名が最も廣く世界的に傳つたのだが、本島が我領有に歸して後、明治三十年六月二十八日、畏くも明治大帝より、新高山と御命名遊ばされたことは、數多い全國の山々の中にも、實に無比の光榮であらねばならぬ。

新高山御命名記

巍々トシテ高峻ナルモノハ山ナリ、鞏固トシテ動カザルモ亦山ナリ、故ニ古ヨリ君父ノ恩德ヲ表シ、國家ノ安寧ヲ欲スル、常ニ譬ヲ富岳ニ取ル、蓋シ富士山ハ我國山岳中ノ最高キモノナレバナリ、明治二十八年戰捷ノ結果ニ因リ、臺灣島ノ我ニ歸スルヤ、又是ト伯仲スル高山ヲ得タリ、「モリソン山」即チ是ナリ、此名ハ歐洲人ノ稱スル所トイフ、其七月參謀本部ヨリ、測量部員ヲ此ノ島ニ派シ、全島ノ測量ニ着手スルヤ、參謀總長殿下、大本營ノ御前會議ニ於テ、其事ヲ奏上セラレ、談此山ノ名ニ及ビシ時、陛下其ノ測量完成ノ日ニ至ラバ、朕更ニ之ニ命名セント勅シ給ヘリト云フ、其後測量部ハ、尙ホ部員數班ヲ增發シ、土匪生蕃起伏叛亂ノ間ヲ崎嶇間關シテ、爲シ得ル限リヲ測量シ、其區域往々政化ノ未ダ達セザル所ニ及ビ、昨年九月竣功シ、爾來製圖ニ勉メ、本年六月將ニ之ヲ印刷セントスルニ臨ミ、殿下ハ副官將校ヲシテ京都ニ至リ、奏上スル所アラシメシニ、同下旬參謀本部次長川上閣下ノ西上シテ、天機ヲ伺ハルヽニ及ビ、忝クモ新高山ノ嘉名ヲ下シ賜ハリ、乃チ之ヲ地圖上ニ銘刻シ、以テ萬古不易ノ名ト爲シタルガ如シ、子ノ始メテ生ルヽヤ、父之ニ命名ス、今上陛下ノ此ノ島中第一ノ高山ニ命名シ給ヘル、即チ亦以テ此ノ新邦ヲ子愛シ給フノ聖德ヲ仰ギ奉ルベシ、嗚呼我大八洲、今上陛下ノ御代ニ於テ、更ニ此一大島ヲ加ヘ、皇德ノ益々高キコト、此山ノ高キヨリ高ク、國家ノ益々鞏固ナルコト、此山ノ動カザルヨリ鞏固ナリ、畏クモ陛下ノ宸慮ヲ臺灣島ニ注ギ給フコト、前述ノ如シ、臣民タルモノ、豈益々其經營ニ鞠躬シテ、皇威ヲ宣揚シ奉ラザル可ンヤ

明治三十年七月　　藤井包總識

明治天皇の御製に

新高の山の麓は民草も茂りまさると聞くそうれしさ

尙ほ本島には、特に御因緣深くまします、北白川宮妃富子殿下の御歌を記したい。

國のためたてしいさほは新高の山より高くおもほゆるかな

全山古生層乃至中生層の水成岩に層する粘板岩で、石英條脈の夾雜を所々に見る。北山は概して硬砂岩から出來てゐるといはれる。

山岳風景の一大要素は、植物である。植物は山體の衣である、さうして森林は其盛裝であり、所謂御花畑は、其髮飾であり胸飾であらねばならぬ。臺灣の山地は、今尙ほこの盛裝的森林に包まれてゐる。往時ポルトガル人が、海上から遠望して、フォルモサと歎美の聲を放つたのが、やがて本島の稱呼となつたとは、如何にもと首肯れるのである。

新高山は、北回歸線上に位し、頂上は一萬三千尺を突破するので、山麓より頂上に登るに從ひ、熱帶的森林より、順次寒帶的森林に移り行き、豐富なる其變化に接することが出來るのは、初めての人には珍らしく感ぜられる。

高度に對する、植物分布の概略を記すれば、

熱帶林（約二千尺以下）

榕樹（ガジマル）、椰子樹、檳榔樹、龍眼、芭蕉、棕櫚（ヘゴ）、籐（トウ）、麻竹。

暖帶林（自約二千尺至約六千尺）

樟、楠（タブ）、櫧（カシ）、柯（シヒ）、交讓木（ユズリハ）、柃（サカキ）、烏心石（ヨガタマノキ）、楢（ナラ）、榎（エノキ）。

溫帶林（自約六千尺至約一萬尺）

紅檜（ベニヒ）、扁柏（ヒノキ）、臺灣栂（ツガ）、臺灣五葉松、新高唐檜（タウヒ）、栂（ブナ）、櫸（シキミ）、椹（アセビ）木。

寒帶林（約一萬尺以上）

新高椴松（トマツ）、新高柏槇（ヒヤクシン）、新高石南（シヤクナゲ）。

武内貞義氏の『臺灣』には、高度に對する、代表的植物として、左の如く擧げてある。

樹木

一千尺以下	榕樹	二千尺	ナンキンハゼ
三千尺	クリカシ	四千尺	アベマキ
五千尺	アラカシ	六千尺	ヤマグルマ
七千尺	扁柏	八千尺	シマコシアブラ
九千尺	新高椴松	一萬尺以上	ニヒタカムロ

草本

一千尺以下	中原唐松	二千尺	永澤菫
三千尺	宮尾草	四千尺	島草紫陽花
五千尺	川上菫	六千尺	新高三ツ葉
七千尺	佐久間草	八千尺	新高釣舟
九千尺	森草	一萬尺以上	新高薄雪

地質學者によれば、日本全列島は、元相連絡して、亞細亞洲の東部を形成したのであるから、臺灣高山植物は、琉球、九州、四國、本州、北海道にも存在する。新高椴松が、八甲田山（ハツカウダサン）椴松や、北海道椴松と、多少の差異を生ずるのは、多年風土の然らしむる所であるといつてゐる。

臺灣の高地帶が、對岸支那内地では、既に滅絶して見ることが出來ぬ植物を、今尚存有し、而かも

それが、ヒマラヤ山乃至マレー諸島の高地帶のと、共通若くは甚だ近似するとは、頗る興味ある問題であるが、哺乳類、鳥類、其他の動物も、亦この關係を有し、殊に本島最初の住民、即ち現在の蕃人が、マレー系統に屬すといふに至つては、益〻以て奇蹟の感に打たれざるを得ぬのである。

內地の植物、殊に高山植物の名稱には、初めて發見された山名を冠するのが多いが、又發見者の名に因んだのもある。彼の有名な可憐なるリンネサウや、雅致氣品に富んだチャウノスケサウや、石南の珍品とするネモトシャクナギの如きはそれである。臺灣には「タイワン」、若くは「ニヒタカ」或は「タカサゴ」の名を冠したのが、餘りに多くて、目まぐるしい程だが、又人名を附けたのも甚だ夥しい。それも單に發見者の名に因んだもののみならまだよいが、敬意的(?)に、團體長とか、上官とかの姓を冠したのが頗る多い樣に思はれる。武田久吉博士は其著『高山植物の話』に「由來植物には、優雅な和名がついてゐるが、近世の命名にかゝるものには、往々嫌なものがある。わけても人名から導かれたものは、調和しないのが、少くない」と言はれてあるが、臺灣に於ては、特に同感を表せざるを得ぬのである。

宮尾草（殖產局長宮尾舜治氏の姓に基く）は、又八角蓮（ハッカクレン）といつてゐる。臺灣山地三四千尺邊の陰地に產し、分布區域は隨分廣く、阿里山邊から、中央山地を通じ、北は大屯山彙にも見るのである。特に霧社よりビヤナン附近にかけて、最も豐富の樣である。莖高一二尺、葉は普通二個を附け、概形ッハブキに似た光澤ある多肉な極めて濃綠で、邊緣略〻八角を呈し、葉身の長徑は、一尺以上に達するのがある。花は下部の葉腋に、四五個を簇生するが、發育旺盛のものは、十個程もつけ、稀に上下二ヶ所に簇生する。花被は光澤ある暗紫色鐘狀を呈し、下垂する。其直徑は一寸位である。幽雅雄壯の趣を感ずるのである。大正十二年今上陛下が、東宮殿下として、本島に行啓の際、台覽に供し奉つたといふ光榮を有することは、明治三十五年長野縣師範學校に於て、皇太子殿下（大正天皇）の台覽

に供し、後青山御所に献納の光榮に浴したといふ戸隱升麻（トガクシショウマ）と、好一對として、本島著名の高山植物（實は低山植物）となつてゐる。この宮尾草の根は、消毒の効があるといはれる。

一四、登　山　口

宿泊料、人夫料、各種日程、登山者心得。

新高登山口として、水裡坑（スイリコウ）口、阿里山口、玉里（タマサト）口の三つがある。

水裡坑口は、縱貫線二水驛で、集々（シウシウ）線に乘換へ、水裡坑に下車し、こゝから陳有蘭（チンイウラン）溪に沿ひ、東埔（トンポ）、八通關を經て、新高山頂上に達する。之を北口とする。

阿里山口は、嘉義驛より四十餘哩、阿里山鐵道によつて、阿里山沼（スマ）ノ平（ヒラ）着、こゝから山脈傳ひに新高山頂上に達する。之を西口とする。又沼ノ平から、北方和社（ポーサ）溪を辿り、水裡坑登山道中の東埔に會することも出來る。

玉里口は、臺東線玉里から登り、八通關を經て、新高山頂に達する。之を東口とする。

東口は、蘇澳（スアウ）、花蓮港の間には、まだ鐵道が無いのと、玉里から八通關まで、二十五里六町といふ遠距離なのと、この方面には、尙兇蕃が時には出草するので、特殊の事情を有するものゝ外は、殆ど此口を取るものは無い。

北口は、水裡坑から八通關までは、所謂八通關道路で、この間十四里二十五町といふが、其中水裡坑から內茅埔（ナイフオンポ）まで四里十三町は、臺車の便があるのと、一里乃至一里半程隔てに、警察官吏駐在所があつて、宿泊を請ひ得る便宜があるのと、名物鐵線橋が多く、溪流の風色を味ひ得るのと、東埔には清澄な溫泉が涌いてゐるのと、爪先上りの頗る緩かな勾配を呈する廣い道路で、山道としては、沼井氏の所謂坦々たる（?）大道であるので、最も樂な登路ではあるが、唯始終溪谷を辿るので、觀高まで

は、展望が乏しい。

西口は、阿里山鐵道によつて、既に本山標高の半以上を登り得るのと、沼ノ平からは、殆ど始終所謂稜線（尾根）を辿るので、臺灣特有の深谷を見下し、且つ展望の恩惠に浴する。然し途中三ヶ所に休泊所はあるが、登山時期（七八月）の外は、無人の小屋であるのと、急坂の昇降が多いのと、山側路身の崩壞し易い危險が伴つてゐる。

沼ノ平から、新高山頂までの登山道路は、臺南州の大奮發によつて、一萬餘圓の經費を以て、開鑿され、大正十五年十一月十四日、其開通式を、鹿林山で擧げられたのである。

臺灣總督府交通局鐵道部の『新高山登山案內』には、普通脚力を有するものを標準とし、北口往復の日程として

日順	出發地	到着地	里程
第一日	水裡坑	東埔	一〇、七里
（備考）	水裡坑、內茅埔間四里十三町は、臺車約三時半を要す。		
第二日	東埔	八通關	四、一八
第三日	八通關を發し頂上を極めて降り觀高まで		六、一一
第四日	觀高	楠子脚萬	七、二
第五日	楠子脚萬	水裡坑	七、二
（備考）	內茅埔、水裡坑間は、臺車約二時半を要す。		

又西口往復の日程として

第一日	嘉義	沼ノ平	四四里
（備考）	汽車嘉義發午前七時、沼ノ平着約午後二時。		

第二日	沼ノ平	鹿林山	三、一九（里町）
第三日	鹿林山（新高下發、頂上を極め、下山、鹿林山まで）	新高下	三、〇〇
第四日			四、二二
第五日	鹿林山	沼ノ平	三、一九
第六日	沼ノ平	嘉義	四四（哩）

（備考）沼ノ平發午前八時十分、嘉義着約午後三時。

次に北口から登り、西口に降る日程として

日順	出發地	到着地	里程
第一日	水裡坑	東埔	一〇、七（里町）

（備考）水裡坑、內茅埔間は臺車による。

第二日	東埔	八通關	四、一八（里町）
第三日	八通關	鹿林山	六、二一
第四日	鹿林山	沼ノ平	三、一九
第五日	沼ノ平	嘉義	四四（哩）汽車

又西口から登り、北口に降る日程として

日順	出發地	到着地	里程
第一日	嘉義	沼ノ平	四四（哩）汽車
第二日	沼ノ平	鹿林山	三、一九（里町）
第三日	鹿林山	新高下	三、〇〇
第四日	新高下	東埔	八、五

八通關駐在所。海拔約千九百三千尺。土蠻の方外に濠壍、柴鹿、鐵條網があるる。新高山へのこの谷を辿る。附近の樹木は、ニヒタカタヒニ、フエゴカタヒニ、ヒウタカタヒニ、ナガツカタヒニ、などである。

第五日　東埔　水裡坑　一〇、七

（備考）内茅埔、水裡坑間は臺車による。

臺南州廳發刊の『阿里山口新高登山案内』には、健脚者を標準とし、西口より登り、北口に降る日程として

日順	出發地、到着地	里程	所要時間
第一日	自阿里山至新高下	六、一八（里町間）	四時間
第二日	自新高下經頂上、至觀高	四、九、二〇	二時間半
第三日	自觀高至ナマカバン	六、二五、一二	一時間
第四日	自ナマカバン至水裡坑	六、三三、二六	一時間半

（備考）新高絶頂より水裡坑まで十七里二町五十八間。

又同案内には、西口里程並に登山時間を、左の如く發表してゐる。

區間	里程（里町）	所要時間
沼ノ平、鹿林山	三、一九	四時間
鹿林山、前山	二、七	二時間半
前山、新高下	、二八	一時間
新高下、新高主山	、二九	一時間半
計	七、一一	九時間

西口阿里山沼ノ平には、立派な旅館が二軒あつて、宿泊料は辨當付一等三圓、二等二圓五十錢、三等一圓五十錢となつてゐる。

北口沿線警察官吏駐在所に宿泊を請ふた場合、其宿料に就いて、臺灣山岳會發行の『新高登山のし

をり』に「一泊辨當附奏任級で四五圓、判任級で二三圓、雇級一圓内外に内定してゐる。然しこれは公務出張の場合だが、普通の登山者は、一泊一圓乃至二圓位を見當とし、特殊の厚遇に接した際は、相當の謝禮を表すべきだ」と書いてある。

登山期には、西口沿線各休泊所へ、阿里山ホテルから出張して、一食六十錢で、需めに應じ、又毛布二十枚位は備へ附けてある。北口では、集々庄米增辰平といふのが、東埔と八通關とに出張して、一泊(三食)一圓五十錢で、引受けることゝなつてゐる。庄とは内地の村に相當する。

宿泊所の關係上、團體登山は、二十人位を制限とする必要がある。

携帶品運搬のため、人夫の必要あるときは、北口では、内茅埔。西口では、阿里山警察官吏駐在所に依賴するがよい。一人一日一圓乃至一圓五十錢位である。

北口登山道路所轄新高郡役所では、左記のビラを、一般登山者に頒つてゐる。

新高登山心得

一、蕃地に入るには、許可證を要します、豫め手續あれば、便宜の箇所で、交付することが出來ます。

二、盛夏の候でも、冬シャツを用意して下さい。

三、飯行李を携帶して下さい。

四、食糧品は、集々にて準備が出來ます。

五、草鞋や、人夫は、水裡坑にて準備が出來ます。

六、宿は、駐在所で引受けますが、萬事不自由を忍んで下さい。

七、宿の諸費は、實費を御拂ひ下さい。

八、蕃人が、敬禮や挨拶したら、會釋してやつて下さい。

九、蕃人に戯れない樣にして下さい。
一〇、蕃人には、良い事を敎へて下さい。
一一、救急藥品を用意して下さい。

一五、嘉義より阿里山へ

阿里山鐵道、地名難、大塔山、沼ノ平、緋櫻、神木。

△三月十二日　晴　朝　嘉義六二　夕　沼ノ平五六

我等は、西口から登り、北口に降る行程を選定した。

嘉義から阿里山までの、所謂阿里山森林鐵道は、總督府營林所の經營で、元木材運搬專用であつたのだが、近來木材伐出しも、幾分減少しつゝあるのと、一方阿里山の風光美が、世間に知れ渡ると共に、漸次探勝者の數を增しつゝあるので、今は嘉義、竹崎(タケサキ)間は、營業區域とし、毎日五回運轉するが、竹崎、沼ノ平間の列車は、一日一回だけの運轉で、客車二三臺を連結し、一般の乘客を、寧ろ歡迎する傾向ではあるが、元來の目的が、運材であるため、其乘客心得なるものが、頗る振つてゐる。今其概要を記すると、

「汽車發着時刻は、當所の都合により、變更することあるべし。當所の都合により、途中乘客の下車を求むることあるべし。乘客の事故災害に對しては、當所は其責に任ぜず。」

などと、停車場にも掲示し、切符の裏面にも記入してある。

又毎月第一第三日曜日は、竹崎、沼ノ平間の運轉を休止することとなつてゐる。

團體二十人以上は、本線は賃金三割引、阿里山線は五割引の特典がある。但學生は單獨でも、本島内は三割引となつてゐる。

近頃阿里山だけの探勝客が、年々數千人に上る盛況を呈するので、蕃界内に位置する同山も、昭和三年二月より、入蕃許可證は廢止され、登山隨意となつた。

汽車の時刻表には、嘉義發午前七時とあるが、此日は七時十八分の發車であつた。北門(ホクモン)驛に着くと、車外から予が姓を呼んで、面會を求められた人がある。差し出された名刺を見ると「營林所嘉義出張所庶務係長、臺灣總督府屬鄉光治」とあつた。總督府の通知に基き來訪されたので、總督府營林所發行の『阿里山登山者のために』と題した冊子と『阿里山口新高登山案内』及『阿里山鐵道圖』とを寄贈され、又我等を車長に紹介された。

灣橋驛から乘つた、通學兒童三十人許りあつたが、鹿麻産驛に下車し、嬉々として學校指して立ち去つた。この間に牛稠溪がある。數多の水牛が、彼方此方に游びゐるのも、相應しい名であると思はれた。

竹崎驛に着くと、列車は機關車を後方に連結した。此處から所謂山線にかゝり、多くのトンネルを通過するのであるが、煤烟に惱まされることは無い。一種獨特の構造を有する汽鑵とて、奇しき轟々の音を立てながら、登り行くのである。客車の構造も亦頗る違つてゐる。車臺の床下に、押入を設け、大行李や其他の貨物を入れるので、車内の出入には、幾つかの階段を昇降せねばならぬ。運材車は勿論特殊の構造である。

竹崎は舊竹頭崎(チクトウキ)といつた。附近は蔚然たる麻竹林を以て著はれてゐる。濃綠な龍眼樹が目につく。生籬を飾る赤い赤い簪をつけたブッサウゲが、此處にも歡迎してくれる。旅館も料理店も見える。構内呼賣にバナナ、パイナップル、木瓜、蜜柑がある、煤卵がある。竹崎を出ると、間も無く、スパイラル線（螺旋式）で有名な獨立山に登り始め、スイッチバックにより、樟腦寮停車場に入る。海拔一千六百七十尺である。專賣局の經營に屬する亞丹屋根の製腦所が幾棟も見える。この驛でもバナナや

燥卵など賣つてゐる、臺灣では、鷄も澤山飼つてゐるが、中部以北は、家鴨の方が多いこととて、驛販賣の卵は、殆ど皆家鴨のである。

この邊の山間には、ぽつぽつ野生のバセウがある。本島に於ける珍品といはれる。其淡黄花を護る暗赤紫色の大形な苞は、頗る奇態を呈するが、更に我等が目を惹いたのは、橙黄紫色の美花を、花傘を擴げたやうに數多着けた九重桐が、此處彼處、濃綠な林間を彩どるのであつた。

フウ、ナンキンハゼなどの落葉樹が、イヌビハ、ウラジロエノキなどの常綠樹に伍してゐる。

イヌビハは、又ヤマビハの名がある。果實はイチヂクの仲間で小さいから、コイチヂクともいつてゐる。熟すると葡萄糖に富み、好味を有するので、山行人士の禮讃する所、天仙果の尊號は如何にも首肯れる。其樹皮の纖維は、抄紙の料となり、嫩葉は燥でて、飯に混ぜ炊ぎ、熟果は果酒釀造の原料に供せられ、庭木としては、觀賞用となるといふ其効能は、實に豐富といはねばならぬ。

沿道所々異樣の葉振りを發揮するヘゴが目につく、これは木本狀の羊齒類で、莖の高さは約三十尺、直徑一尺餘に達するのがある。一本の枝も無い垂直的柱狀を呈する莖の頂に叢生した葉は、ワラビに似た大形の羽狀複葉で、大なるものは長さ二丈程もあつて、非常に壯觀である。葉の落ちた膚には、蛇皮紋を呈するので、蛇木の名がある。幹を床柱としたり、筆筒、生花筒、火鉢など、種々の器具を作るに用ひ、又根部を纏ふ黑色の纖維を、附着性蘭科植物などの植附けに用ひることは、普く人の知る所である。

樟腦寮驛を發すると、汽車は右へ右へと廻轉し、トンネルに入りトンネルを出で、山腹を巡つては、復トンネルに入り、旋廻又旋廻、獨立山を上へ上へと卷き登り、脚下に三たび樟腦寮驛を瞰下すのであるが、一廻轉毎に眼界漸次開け、風物は面を改め、宛も一大パノラマを觀る感がある。汽車は實に一氣七百餘尺を登り、獨立山停車場に着いた。海拔二千四百三十尺である。

こゝを發して不圖右手の深い谷を見下すと、谷底の凹地を埋めた一團の濃雲が宛も湖水のやうに見えた。高山の名物には、雲海といふのがあるが、これは正に雲湖とでも名けたいのであつた。

獨立山停車場から稜線を東に向つて進むと、梨園寮停車場附近に、美しい孟宗竹の殖林がある。白塗の標木に「孟宗」と註してある。

交力坪停車場（海拔三千三百尺）附近には、數里に亙る桂竹林の偉觀に接する。麻竹のやうな一大群束的の叢生は見ぬが、頗る密生し、莖幹は苦竹に似て眞直で、長さ七八丈、直徑五六寸に達するのがある。材質强靱耐久力を有するので、建築其他器具の材料となるが、近來大に製紙の原料に用ひられる。所謂竹紙で、主として包裝用となるのである。流石は中部山地桂竹林の本場とて、柱は勿論、床も屋根も、四方の壁代用にも、兩割の竹を巧みに組合せた、全部竹盡しの建築家屋が見え、「これは風雅である、一種の茶室向きだ」と高頭氏の賞讃を博したのも面白い。

當驛の呼賣にも、例によつて、バナナ、蝶卵も見えたが、暗褐色の葉で包んだ、一種のパンや、チマキ樣のものが目に着いた。乘客も、附近に休んでゐた人達も買入れて、頻りに之を食べてゐる。この包んだ葉が、縱貫線沿道にも、阿里山鐵道沿線にも、始終目に入つた月桃草の葉であつた。普通單に月桃と稱し、本島山野到る處に夥しく、其莖皮も葉も、餘程强靱であるので、繩、草鞋、行李、籠、筵などを作り、用途の隨分廣いことは、沼井氏からも聞いてゐたのであつた。概形頗る襄荷に似てゐるが、葉は甚だ厚く、光澤がある。發育旺盛なものは、莖の高さ一丈以上となり、葉の長さ三尺以上にも達する。宜蘭の名產月桃布は、これから製する。後ウライの溪谷で、奇狀を呈する其花も見た。

沿道始終野生的里芋らしいのが、夥しく目に入つた。山には山の幸がある、作らずして、里芋は食ひ餘るであらうと、警官の方々に聞くと、これは里芋では無く、クハズイモと云つて、食用にはならぬのである。根莖は有毒ではあるが、又一種の藥劑に用ひられる。蕃人達は、其葉を包み用とする位

のものであるとのことである。又マンシウイモの名があるが、根莖が甚だ硬いので、イシイモの名もある。サトイモダマシとは、當時高頭氏と共に命名したのであつた。

附近の原生林には、クス、イヌグス(タブ)、クリカシ、オホバカシ、シヒ、アベマキ、フウ、タイワンケヤキ、タイワンハンノキ、ツウダツボクなどの闊葉樹が、雜然として生ひ茂り、深い谷底までも埋め、蔚然蒼然たる深林の中、ヒロハノシヒノハカヅラ、ゴトウヅル、トウなど、偉大な纏繞植物がからみ揚り、正に暗中飛躍の大蛇ではあるまいかと思はしめ、樹幹や枝の所々に、オホタニワタリ、ナガバヤドリギなどの寄生植物が黑々した巨大な球狀を呈するのは、將に身を縮めて飛び附かんとする怪物ではあるまいかと疑はしめる。蔚々たる幽林に對し、晝尙暗いといふ形容詞は、吾も人も常に用ひるのであるが、臺灣の深山密林に於て、予は眞に其適切なるを感じた。苔蒸す古木には、セキコク(石斛)の寄生が多い。これは蕃人が魔除けとし、又藥用として珍重するのである。

殊にこの邊の林樹は、概ね常綠闊葉樹であるので、其深綠は更に濃厚を極め、如何にも臺灣らしい林相であるとは、高頭氏と共に、頻りに放つた讃辭であつた。予は曾て吉野群峯跋涉の際、大臺原山に於て、原生林の大觀に接し、內地では他に比類無からうと思つたのであつたが、臺灣山岳に於けるのそれは、更に大に偉觀を呈し、濃厚を極めるのであつた。

各種の木々が、今正に若芽を伸ばし始めてゐるので、淡綠色もあれば、淡紅色もある、黃綠色もあれば、褐色もあり、灰白色もある。而かもこれ等の色彩が、濃淡複雜を極めてゐるので、深谷を埋めた密林を見下すとき、其の美觀異觀は、到底內地では見ることは出來ぬ。沼井氏は、頻りに臺灣眞夏の林相をと勸告されたのであつたが、成る程それが最も臺灣山色の特徵を見得るかも知れぬが、予は孟春に於ける生氣潑剌たる今回の林相に接し得て、非常に快感に堪えぬのであつた。

路傍にドクダミ、オホバコがある。まだぽつぽつ野生のバセヲが目に入る。

カラピンの地は、二百餘年前　支那民族の移住と共に　植林を開始し　福州杉(廣葉杉)を植附け、其種子は全島各地に頒たれたといふが、昔時に於て、漢民族が、斯かる深山高地にまで發展したとは、頗る驚異に値するのである。今も其苗圃が澤山見える。

沿線闊葉樹林伐採の跡地へ、保續事業として、七年前營林所が植附けた廣葉杉及び內地種の杉は、非常な美しい發育振りを示し、高さ二丈程にも達し、其生長は、優に內地に於けるそれの二倍以上であり、而かも其材質は、些の遜色が無いといはれてゐる。

水社寮、奮起湖の二驛を經、零時三十分哆囉嗎停車場に着いた。海拔四千九百七十餘尺である。

水社寮の後方に聳える四天王山は、嘉義水道の水源地である。

奮起湖は舊發箕湖といつたが、餘り感心せぬ文字であるので、近頃改字したのである。臺灣の地名には、湖の字を附けたのが多い。一寸湖水かのやうに想像されるが、實は窪地を意味するのである。

當驛は阿里山鐵道の略〻中間に位し、機關庫、保線詰所、警察官吏駐在所、旅館茶屋などがある。

獨立山に登ると、前面稍〻左方に當つて、眞に驚異に堪えぬ一大偉觀が展開する。奇岩怪石の大塊を以て有名なる大塔山がそれである。全山岩石の肌を現はす巨鐘の樣な怪狀は、越中黑部溪谷の鐘釣山や奧鐘山に似て更に大きく、斷崖峭立幾千尺、河合の溪流が其岩脚を洗ふは、黑部別山の岩壁を聯想させるが、激流奔湍は、彼に三舍を避けねばならぬ。明治三十五年林學博士河合鈰太郎氏が、本山踏査の結果、この寶庫の開拓が決定されたので、この溪名は、氏が功績を傳ふるのである。

大塔山の偉容は、獨立山以來、各地點で時々見參に入つたのであるが、トロエンは殆ど其全容を望み得る好地點である。その飽くまでも雄大に、明瞭に、重疊たる層狀岩壁を呈示するは、眞に水成岩の特徵を發揮すと謂はねばならぬ。

左方河合溪の深谷を隔てた對山の肌は、崩え出た若草が、一面に蔽ひ包んで、實に目覺むるばかり

の淺綠美を呈し、背景遙かに淡青い山々の相重なる光景は、正に大自然の畫中に入る感じがした。驛の附近には、蕃人の家屋が十餘戸あつて、杉や廣葉杉苗圃の作業に從事してゐる。

河合溪の流域にて、狹いながら、所々綠鮮かな稻田を見下した。

予は玆に地名について所感を述べたい。糞箕湖の奮起湖となつたのは別問題とし、交力坪（カラビン）、哆囉嗎（トロエン）（陸測假製二十萬一圖には、多羅馬とある）などは、仲々讀み惡く、又現代の所謂死字に屬するものもあるが、元來蕃語に、支那民族が、近音の漢字を當てたので、難字難讀の地名は、蕃界內にも蕃界外にも甚だ多い。予は鄕里出發前、或る人達の新高登山紀行を讀んだが、北口登山の途中に、楠仔脚萬社と漢字で書いたのと、ナマカバン社と假名書のがあつて、地理上から考へたり、又其人の行程上から考へて、同一地名であらうかと推察はしたが、念のため、楠仔脚萬警察官吏駐在所（今同所の標札には、「楠子脚萬警察官吏駐在所」と書いてあつた）に照會して、果して同一であることを確め得たことがある。支那民族が命名した地名は無論音讀するが、領臺以來、新たに命名したのや、又は改正したのは、訓讀が多い。枋橋（バンキヨウ）を板橋（イタハシ）、打狗（タカオ）を高雄（タカオ）、阿緱（アコウ）を屏東（ヘイトウ）、竹頭崎（チクトウキ）を竹崎（タケサキ）と改めたなどは、結構であるが、更に進んで、蕃語に難字を當てた地名は、殆ど全然假名文字としたいのである。特に地圖に於ては、製圖上、又讀圖上、如何に便利であらう。唯八通關とか、觀高とか、特殊の語源意味を有するものは、除外とする。實際現在臺灣に於ける地名は、複雜混亂難字難讀を極めてゐるので、思ひ切つた整理の必要を感ずるのである。

トロエン驛から、幾つかの大きなカーブを描きつゝ、十字路驛（海拔五千二十尺）に達する。愈〻蕃地に入つたのである。驛の稍〻手前に「蕃界」と書いた標識が立てられ、入蕃者心得を掲示してある。予は停車時間を利用して、ワザワザ下車し、生れて以來初めての足跡を蕃地に印じて見た。

廣告掲示に「阿里山銘產蜂蜜一瓶白色一圓二十錢、紅色一圓」とあつた。

此處は、阿里山鐵道と、達邦(タッパン)蕃社方面と勞々柴(ラライ)蕃社方面との交通路が、相交叉する所であるので、この名が起つた。警察官吏駐在所、蕃產物交換所などがある。

體軀頑丈な、色飽くまでも黑々とした、皮膚の艶さへ心地よい感じを與へる數人の蕃人が、荷物運搬に從事してゐた。其荷物には、彼等が至大な嗜好とする糖蜜酒もある。元來彼等は、粟や甘藷を原料として、自家用の酒を造つたのであるが、近頃製糖業の進步發展に伴ひ、其副產物の糖蜜から、非常に廉價な酒が出來るので、彼等は大に之を歡迎する樣になつたとのことである。

蕃人等の腰には、異樣な蕃刀が目につく、蕃地に入ると、警官の身には、佩劍の外、肩には銃が見える。

この邊には、內地より吉野櫻を移植したのが咲いてゐた。數年前營林所が、沿道各地に、數千株を植附けたのださうだ。本島特有のタイワンヒザクラの殘花も、ぽつぽつ林間に散見した。

この邊に見える杉、廣葉杉の造林は、大正九年植栽のこととて、餘程立派に生長してゐた。所謂沿線造林とは、十字路以下をいふのである。

タッパン社は、十字路驛の南方約一里半、阿里山蕃中、第一の優勢蕃社で、戶數約七十、人口約八百ある。ララチ社は、驛の北方一里二十四町、戶數約五十、人口約二百五十ある。これ等の蕃社は、質朴從順、能く官命に服し、農耕を勵み、阿里山造林作業や、運搬や、案內人夫等に從事するものが多い。附近は大根、甘藍、牛蒡、葱等の栽培に適するとのことである。

吉野櫻と李の花が明るい平遮那(ハイシヤナ)驛（五千五百餘尺）を發すると、塔山の雄姿を樹間に隱見し、道は益〻險阻となり、棧道式橋梁を渡ること數回、羊腸たる山側を迂曲旋轉し、見上ぐれば懸崖車窗に迫り、見下せば幽谷脚下に現はれ、時には所謂危惧の冷汗を催すといふやうな場合が無いでもないが、又一種の痛快味に打たれ、特殊任務の目的の下に建築された阿里山鐵道でなくば、とても味ふことの

出來ぬ經驗である。

カシ、シヒ、タブ、ハンノキなどの密林蔚々たる中に、淡黄綠色のサルヲガセを裝うた紅檜の古木の混生するのが目に入り、汽車は第一第二の頗る長いスイッチバックによつて、益〻森林を縫ひつゝ進み、大廻りして二萬平に着いた。海拔六千五百五十四尺である。

この地は、約二萬坪の平坦地をなすので、此の名を得、所謂阿里山地帶中、第一の平かな廣い高原狀を呈し、戸數約百を算する。驛前に數個の腰掛がある。予は停車時間を利用して、一寸下車した。前面は深谷を隔てゝ、塔山の全景を仰ぎ、東南には近く黑木の衣を纏うた香雪山を控へ、遠くは霞にけぶる霞山を望み、朝暮雲海の壯觀に接するといふ、實に得易からぬ展望地である。

數十株の吉野櫻と、數株の紅桃が、花正に滿開である。十字路以來、ユキモチサウが多く目に入つた。

此處から鐵道は、十六分一といふ、最急勾配となるので、汽車は喘ぎながら、尙ほも森林を穿ちつつ、第三スイッチバックにより、本山の名物紅檜の巨木を以て著名な神木驛（海拔七千五十尺）にかゝり、所謂神木に謁し、第四スイッチにより、午後二時三十分沼ノ平停車場に達した。海拔七千四百五十七尺、嘉義起點を距る四十四哩餘である。汽車時刻表には、沼ノ平着は、午後一時五十分となつてゐる。嘉義、沼ノ平間汽車賃金三等二圓八十八錢である。

沼ノ平は、森林鐵道幹線の終點であり、阿里山森林作業の中心地であり、又新高山新登路の起點である。此處より以奥即ち北方約八哩杉山邊まで通ずる鐵道は、塔山線と稱し、其中間眠月驛は、便乘列車の終點となつてゐる。

我等は、營林所派出所の周旋により、阿里山倶樂部に宿泊することゝなつてゐるので、荷物は谷內田君に附託して倶樂部にやり、神木驛まで出迎へされた營林所の海老澤浪吉氏及び阿里山警察官吏駐

在所巡査德永福飯氏の案内にて、直ちに沼ノ平集材作業を視察すべく、驛から塔山線に乘り移り、眠月驛に下車し、徒歩約一哩の地點まで行つて、作業の一部を見た。

引揚機によつて、二千四百餘尺の下方から、一個の木材七八噸といふ巨物を引き揚げ、次ぎに起重機によつて、運搬用の臺車に積み込んでゐる。

沼ノ平驛と、眠月驛との中間に、塔山驛がある。海拔七千六百九十一尺、阿里山鐵道の最高地點であると共に、又日本全國中、最高の停車場である。驛より徒歩約十分で、塔山（八千三百十尺）の絕頂に達する。ツヽジ、シャクナギが多いので、又躑躅ヶ丘と稱してゐる。更に大塔山（即ち後藤山、八千八百三十尺）に登れば、眼界大に開け、脚下には垂直線的數千尺の岩脚を裾どつた原始的密林を瞰下し、西は雄大な中央山脈の景觀に接することが出來るのであるが、此日は薄曇りで、遠望不可能であるので、遺憾ながら之を略した。

附近の岩壁には、普通のヤマツツジもあるが、蕾は尙堅く、今綻びかけてゐるのは、ミヤマキリシマに似た淡紅紫色の小形の花であつた。シャクナギも花を見せたが、淡紅色の稍〻小形の方であつた。茲に特に我等が視線を惹いた、臺灣の特産、阿里山の誇りとするタイリントキサウがある。『阿里山登山者のために』の表紙にも、之を描いてある。好んで岩壁に生じ、水仙のやうな球莖を、半ば地上に現はし、一球より一莖を抽くこと四五寸、一莖一花を附け、半ば上方に向つて開展する。花被直徑一寸五分餘、外被は五枚、紫紅色を呈し、內瓣は鮮かな紅色で、唇瓣に鮮黃點と濃紅點とを有する。概形トキサウに似て、花大形であるので、タイリントキサウの命名を得たのだが、莖の中程に、平行脈を有する線狀の一葉を有するので、又一ッ葉蘭ともいつてゐる。實に佳麗を極めた可憐なる珍品で、今は採集禁止となつてゐる。予は此行、北部山地跋涉の際、各所で之を見たのである。

五時頃沼ノ平に歸り、阿里山警官吏駐在所を訪ひ、主任警官角田利重氏に、新高登山に關する食糧

品、及び人夫の件を依頼し、阿里山倶樂部に投じた。

阿里山作業地域は、總督府殖産局の經營に屬し、阿里山鐵道沿線に屬する造林地帶を除いて、西は十字路驛より、東鹿林山に及び、南は霞山より、北烏松坑山に至り、東西約二里、南北約五里、其面積は一萬二千餘町歩を有し、沼ノ平は營林所派出所の所在地であり、事業の中心地である。

森林は、針葉樹・闊葉樹の多種類を包含してゐるが、主要なるものは、扁柏、紅檜、亞杉（タイワンスギ）、栂（タイワンツガ）、臺灣五葉松（タイワンヒメコマツ）の五種、所謂阿里山五木であるが、殊に最も豊富で、且つ優良な木材は、扁柏と紅檜とである。

扁柏が、樹皮も葉も稍〻黑味を帶び、枝振りが強直であるのに對し、紅檜は、樹皮も葉も稍〻淡赤味を帶びて柔かく、一見椹に似て、枝振りは下垂し優しい。材質前者は、緻密淡紅黃白色を帶び、芳香を有し內地產のそれに比し、何等の差異は無く、後者は、淡褐紅色を帶び、質稍〻輕く、亦一種の香氣を有し、兩者とも、能く蟻害に堪えると云はれる。紅檜は本島特產の樹木であり、最も巨大となるので、世界的に名高い。本山紅檜が光榮に浴した明治神宮大華表の兩柱は、一は樹齡一千九百五歲、他は一千九十三歲を算する。紅檜に比すると、扁柏の方が、比較的高地に生產するのである。

亞杉は、前世界の遺物といはれる珍品で、葉は普通の杉よりも稍〻短くて密生し、材赤味を帶び、薄く剝ぐに便利なので、天井板に賞用される。

闊葉樹には、櫧、柯、楠、烏心石などの優良材がある。

沼ノ平は、常住の人口一千以上（內地人約五百）を有し、二萬平附近と共に、實に高山的氣分に浴する理想的文化村を形成してゐるやうな感じがする。氣候は盛夏華氏七十五度以上に昇らぬ、冬季三十五度を降ること甚だ稀であるとのことで、大氣清澄、水は清洌、蚊も蚤も居らぬ。從つてマラリヤなどの風土病は無い。年中蚊帳を張らねばならぬ本島としては、眞に俗塵を脫した、絕好の健康的避

暑地であり、其雄大な景觀は、正に世界的遊覽地として推奬せねばならぬ。雨期は六七八月を中心として、降雨量は頗る多いが、然し午前は大概快晴で、午後短時間驟雨的に來るので、白雨一過、爽快肌に佳なりといふ熱帶高地特有のものといはれる。

地は二萬平に比すれば、高低參差たる觀はあるが、他日發展に伴ひ、施設に相當の改修を加へたならば、却つて單調に失する憂が無いであらう。

沼ノ平驛の下方一帶の地は、飯包服山（フンパオ）といひ、驛の方面と合して、阿里山兒玉村と稱し、旅館には阿里山倶樂部の外、阿里山ホテルがあつて、各洋式間取りもあり、設備、料理は相當に宜しく、何れも旅客七八十人位の收容は出來る。電燈もある。海拔七千尺以上に位する村落としては、日本國中此地唯一つである。

營林所派出所を始とし、製材工場、營嘉購買組合配給所、郵便局、小學校、阿里山神社、阿里山寺、警察官吏駐在所、醫務室、及び數多の商店などがある。

夜營林所派出所主任田村綠郎氏來訪された。

△三月十三日　曇雨　朝　沼ノ平　五〇　夕　兒玉山工場　五〇

阿里山自慢の雲海を視察すべく、早朝起き出で、戸を開いたが、空は薄曇で、一面に霞の世界であつた。而かも霧雨であつた。

倶樂部の敷地の隅には、天然の立木を利用した、物見櫓が高く立つ。

庭前に、高さ二丈許り、幹の周圍二尺程ある、一株のタイワンヒザクラがあつた。これは臺灣特有の櫻として有名なのである。花は稍〻凋落に近づいてはゐたが、實驗上の好資料であつた。樹皮暗黑褐色を呈し、枝は細長く斜に立ち揚り、外形山櫻に似てゐる。花は葉に先つて開き、花梗短く、毛茸が無い。其附根に稍〻大形の苞葉二個を附け、梗は通常更に三小梗に分れ、其分岐點に又二三個の小

苞を附ける。萼は比較的長い管狀をなし、濃赤褐色である。花冠は鐘狀で、斜に、下に向き、充分に開かない。其口徑約七分、花瓣狹長、先端淺く二裂し、花色は濃紫紅色である。これは學名上、緋寒櫻の名を負ふ通り、櫻の中では、最も早く咲く方で、臺灣では地方により、十二月より咲き始め、普通一二月を滿開期とするが、高地では、三四月に亙るので、予は此行、各所山地で、始終其開花を見たのである。花壽長く、通常三週日に亙るといはれる。

昔時に於て、櫻の研究家として名高い松岡玄達の『櫻品』に「薩州に緋櫻といふあり、薩州より琉球に至る路に、三千の島といふあり、其所にあり。正月上元に花開く。京都の緋櫻にあらず、別種なり。花は八重紅櫻に似て早し、此種東山泉涌寺悲田院の庭にあり。然れども花着かず、暖國の木、京都の寒地へ移し來る故に、木長ぜず。予往て親しく目擊す。葉は全く此地の櫻葉と同じ」とある。

緋寒櫻は、薩摩には昔から傳つてゐたので、薩摩緋櫻といはれ、九州地方では、陰曆正月元日頃に咲くので、元日櫻ともいはれる。德川幕府時代に、江戸に渡り、珍重されたものであるが、この櫻の自生地は、近頃になつて、臺灣の阿里山であることが知れたので、阿里山櫻、又タイワンヒザクラとも稱される。土地の人達は、蕃地櫻ともいつてゐる。

松岡氏は、八重紅櫻に似たといつたが、實際は單瓣である。

櫻の博士といはれる三好學氏によれば、櫻として、花の眞紅な點に於ては、內地では、緋寒櫻に並ぶものが無い。唯印度のヒマラヤ櫻と甚だ似てゐるが、ヒマラヤ櫻の萼は粘るが、緋寒櫻の萼は粘らぬ。ヒマラヤ櫻の果實は、橢圓形で長さ五分あるが、緋寒櫻の果實は、圓錐形で、上部は肥大し、長さ四分五厘である。緋寒櫻は花盛りに葉は出ないが、ヒマラヤ櫻は花葉同時に出るといふ差異を擧げられてゐる。

成る程、緋寒櫻の花の色は、如何にも深紅である。紫紅色が濃過ぎて、寧ろ暗紫紅色である。從つ

て生々した鮮麗味が無い。光澤が無い。殊に予が奇異に感じたのは、合瓣花冠の點である。普通櫻花の各瓣が、翩々と個々に散り、飛び交ふ蝶のそれにも見まがふ趣あるのに比べると、これは一花のまるぼつりと落下するので、彼の琵琶歌の「手綱かいぐる其袖に、花の吹雪はかゝりけり」てふ風情は見られぬ。櫻花禮讃の我輩も、聊か失望の感なき能はずであつた。

この櫻の自生地は、阿里山ばかりでは無い。中部山地から、北は南湖大山、大霸尖山の北麓に及び、尙ほ臺北平野を隔て、山脈生成の全く違つた大屯火山(ダイトン)羣まで蔓延し、又南は、阿里山以南にも亙り、標高は、五六千尺邊に最も多いが、低い所は二千尺邊から、高い所は八千尺邊まで及ぼし、其分布區域は、甚だ廣いのである。

阿里山には、內地より移植した吉野櫻（大吉野）も隨分ある。花は今半ば咲き始めてゐたが、どうも花色が振はない。聞く所によれば、內地櫻苗の蕾附(ツボミツキ)のを、本島に移植すると、最初の花色は良いが、年一年と色が惡くなり、花附も疎らになるとのことである。

この地の郵便局長嵩岡末男氏が、我が縣村上(ムラカミ)の人だと聞いて、朝食前に訪問し、記念帖に局のスタンプを請ふた。氏は喜んで茶菓を饗し、「萬國郵便聯合加盟五十年記念」の切手を特に帖附して押印し、又自ら撮られた、本山の寫眞數葉を寄贈された。この記念切手には、我邦郵便創始の功績者前島密氏の肖像がある。前島氏は我が縣出身であるのに因まれた、嵩岡氏の好意は、感謝と共に永遠に記念するのである。

營林所の海老澤氏の案內にて、阿里山神社に參拜し、小學校を觀、神木驛に降り、所謂神木に見參に入つた。樹は紅檜で、幹の根元周圍百十三尺、目通り周圍六十四尺、長さ百五十尺、枝下四十五尺、材積一千八百石、樹齡三千年と推定される。四方には玉垣（木柵）を繞らしてある。檜としては東洋一の巨木であるといふので、宮尾殖產局長が、神木と命名し、保存を謀られたのださうだが、山

八通關後方の丘上から望んだ新高山。中央雪の多いのが主高山。其左が東山である。

近景の樹木はミヤマカアマツである。

奥には尙神木以上のものが多いといはれる。笹の茂つた細徑を降る數町、略〻同大の第二神木があつて、其空洞には、五六十人の收容が出來るといはれたのだが、先日不注意の人達によつて、半燒の災に罹かつたのは惜しい。昨日車窗から見た時の神木は、さほどとは思はなかつたが、今近づいて親しく之を視ると、驚くばかり巨大で、幹の膚には、千古の苔蒸し、樹枝は言ふに及ばず、この蘚苔や、木柵にまで、サルヲガセの勳章を粧ひ、如何にも神々しい。唯先年の暴風により、幹枝の大部分を破傷し、大に樹容を損したことは惜しい。

予は先年薩摩に遊び、高頭氏と共に、蒲生(カモ)八幡社の境内に於ける、所謂日本一の大樟を見たのであるが、其根元の周圍は百二十五尺四寸、目通り周圍七十六尺、長さ百餘尺であるから、幹圍はこゝの神木よりも大きい。又屋久島では、杉の大木で、目通周圍六十七尺のがあるといはれるから、單に大木とのみいつたら、この神木以上のがあるが、今の所、檜としては、まづ東洋一の榮冠を呈さねばならぬ。

一六、阿里山より新高山へ

日程、進備、鹿林山、水鹿、帝雉、西山之險、楠梓仙溪頭。

愈〻日本一の高山を訪ふ日が近づいた、我等が日本一の高地文化村である阿里山を發して、新高山に向ふの日が來た。我等は左の如く日程を定めた。

第一日　(三月十三日)沼ノ平發、鹿林山泊
第二日　(三月十四日)鹿林山發、新高下泊
第三日　(三月十五日)
新高下發、新高山頂乘越し、八通關泊

第四日　(三月十六日)八通關發、ナマカバン泊

第五日　(三月十七日)ナマカバン發、水裡坑着

第一日の行程は、三里十九町、而かも路は樂であるといふから、午前は阿里山上の見物散歩を試み、天候の模樣を待つたが、細雨は霽れさうも無い。然し日程第三日の天候恢復を期待しつゝ、營林所の田村氏、海老澤氏、駐在所主任角田氏等の見送りを受け、十三日正午阿里山沼ノ平を出發した。

昨日以來、御世話にあづかつた德永巡査は、我等が案内と護衞とを兼ねて、同行されることゝなつた。尙駐在所の斡旋で、人夫として蕃人三人を附けられ、一行合計七人である。

この蕃人は、十字路驛から南方四里餘の頂笨子(テンブナ)社のもので、其名は左の通りである。

ブォユー、ヤクマガナ　ヤクマガナ、アワイ　ペヨンシ、アワイ

人夫は斯やうに遠方から來るので、少くも一日前に駐在所に申込まねばならぬ。

德永巡査は、佩劍の外、腰に彈藥盒を帶び、肩に連發銃を擔ひ、蕃人は彼等が唯一の武器とする所謂蕃刀を帶び、貸附された舊式銃を、荷物に添へた。

食糧及び木炭其他我々の荷物は、夫々分擔を定めた。

こゝで周旋して貰つた準備品は、

內地米三升	一、二九四	本島糯米二升	、五二四
味噌百匁	、〇七	醬油四合	、二七
木炭一俵	、一六	糖蜜酒二瓶	一、五〇

高山で炊ぐ飯米には、糯米を加へた方が、食べよくて滋養もある。酒は蕃人に給するのである。

蕃人苦力の賃金は、山行一日一圓五十錢(食糧彼等持)、其蕃社から沼ノ平まで、及沼ノ平から蕃社に歸るのは、各一日一圓となつてゐる。右準備品の外、彼等は自己の食糧として粟、米、甘藷などを

携帶した。

沼ノ平驛前近く、檜の尺角、高さ一丈許りの標柱に「新高登山道路入口」と筆太に註してある。この標柱を右手に見て、直ちに木製階段の坂路を登ると、左手の山側に、點々たる人家が見える。顧ると沼ノ平の部落が、段々として展開する。

坂路を登ること數町で、坦々たる歩道となり、舊森林鐵道線路に沿ふこと十數町、軌條はまだ存してある。伐木跡の造林に於ける扁柏や、內地種の杉は、既に丈餘に伸びて、實に氣持良い發育振りを示してゐる。祝山、小笠原山を左に、後藤男爵が、頂上で萬歳を唱へたので、其名を得たといふ萬歳山を右に見て進むと、東山、兒玉山の晝尙暗き蔚然たる原始林地帶に入る。途中アキノキリンサウ、ヤマハヽコに伍して、淡紫紅色のスミレの花や、キイチゴ、タイワンシロバナヘビイチゴ、及ノイバラの一品も目に入つた。

林樹は、ベニヒ、ヒノキ、ゴエフマツ、ニヒタカタウヒ、ニヒタカシロダモ、カシ、イヌグス、ヤマビハ、モチノキ、シキミなど、針葉、闊葉の樹林であるが、東山には、タイワンハンノキ、タイワンブナ、タイワンエノキ、アベマキ、シマコシアブラなどの闊葉樹が殊に多い。老い倒れた大木に突き當つては、躍つて九郎判官を眞似、伏しては韓信を學び、時には大迂廻することもある。千古落ち敷く枯葉朽葉を踏めば、脚埋まること實に數寸。この幽林の下、往々所得顏なスキシャウランの御見舞に接するのは、更に一段の淋し味を添へる。銀白色であるので、ギンリュウサウ（銀龍草）といへば、莊嚴にも聞えるが、半ば透明な乳白色を呈するので、イウレイタケ（幽靈茸）といふと、如何にも氣味惡い。この林內には、所々陰濕な泥路もあるので、丸太や割木を縱に敷いたり、橫板を歩幅に置いた所もある。

東山と兒玉山との間に、丸太橋がある。狩獵に出かけた蕃人達の野營地であるので、附近に白骨の

累々散亂するのは、更に氣味惡いが、これは主に鹿や猿の骨であるさうだ。

兒玉山を稍〻登ると、眼界開け、晴れた日には、右手にボホーユ溪、楠梓仙溪を隔て、タイワンツガの純林を以て蔽はれるといふ、黑衣の禮裝つけた、霞山の山脚斷崖に對し、東方遙かに新高山を望み得るとのことだが、この日は雲霧濛々として、展望に惠まれぬを遺憾とする。殊に東山以來、雨は益〻降り頻り、外套の重みを訴へる有樣であるので、德永巡査の提議に從ひ、兒玉山麓の經木工場に宿泊を請ふこととした。

鹿林山の休泊小屋は、昨年七月十六日、暴風のため、五百餘尺の下方に吹飛ばされて、粉碎したので、其十一月再築されたが、設備はまだ不完全であるのに、この濡れ姿で乘り込んではといふのであつた。

程なく、經木工場道との岐點に達する「經木工場道」と註した小木標がある。備後三郎式に高く立木を削つて、「右新高登山道、左經木工場經由、新高登路近路昭和三年一月二十五日」と書いたのが、傍に見えた。

この邊に「兒玉瀧」と書いた標木も見えた。兒玉山、兒玉瀧、言ふまでもなく、兒玉總督の英名を傳ふるのであるが、瀧は餘りに貧弱であるといはれる。和社溪の水源である。新道の右手に、亞杉の大樹が數株見えた。この邊には、蕃刀の鞘材に供されるといふヒヒラギナンテンが多い。葉の緣邊に鋭い針狀鋸齒を有する羽狀複葉である。

本道路は、右手兒玉山の頂上を通るのであるが、この經木工場道を取ると、約十八町近くなるとのことである。

經木工場の岐點より、程なく工場に着いた。時に午後一時半を稍〻過ぎた。沼ノ平より二里强である。

工場主落神嘉助氏（讃岐、琴平人）の快諾を得、早速工場の一部に、大火鉢を圍んで暖を取つた。落神氏の語る所によると、附近にはニヒタカタウヒが隨分多いので、之を材料とし、臺灣全島に於ける、鐵道驛内の辨當折箱類（年額十八萬圓）を供給し、餘力を以て、尙其他の方面にも及ぼしたいとのことで、本年一月から作業を開始されたさうで、現に七八人許りの職工が居て、幹材を輪切りにするもの、縱に截つもの、鉋削りするものなど見た。

ニヒタカタウヒは、好んで山嶺高燥地に生じ、樹幹亭々として、枝は傘狀に展開し、樅に似た極めて雄壯な樹容を呈するが、葉は樅よりも細く短く密生する。材は薄片とするに適し、殊に食品に嫌惡すべき木香を與へぬので、賞用される。土地の人達は、エゾマツと言つてゐるが、北海道、樺太に多いそれとは別種である。

やがて風呂の案内を受けた。まだ開業匆々のこととて、立派な設備は勿論望まれぬが、木の香も新らしい檜の浴槽は心地よい。

晩食には、水鹿の肉を或はすき燒とし、或は刺身として、豐富に饗應された。この邊には熊も猿も山羊も猪もゐるが、鹿が最も多い。猴即ちムンチャク（キヨンアー）といふ小形の鹿もゐるが、水鹿（スキロク）といふ大形のもゐる。水鹿は肉味は甚だ優良だが、角と毛皮は、内地産の鹿に比べると、甚だ劣るとのことである。毛皮には斑紋が無い、角は太く短く、先端二岐となつてゐる。體重は七十貫以上の大物があるさうだ。又この邊には、ミヤマテッケイ、サンケイもゐるが、世界的に有名なミカドキジ（帝雉）が多い。このミカドキジは、本島の特産珍品であるので、先年ロンドン動物園から、本島に依頼し、其雌雄一番を六千圓で買入れ、同園では、今繁殖しつゝあるとのことである。予は此行歸途、大阪天王寺公園の動物園で、この雌雄を飼養してゐるのを見て、喫驚したのである。形内地産の雉よりは稍〻大きく、羽毛藍黑色に白斑がある、尾羽も亦藍黑色で、幅五厘乃至一分位の白い横斑がある。落神工場に、

其羽毛があつたので、二本貰ひ受けた。長い尾羽には、横斑が十三段あつた。この雉は、阿里山で始めて發見されたので、阿里山雉といつたのだが、後帝雉と改名した。臺灣山岳會の印章は、新高山の英姿に、この帝雉の雌雄を配したのである。鹿野忠雄氏の實地調査によると、新高山附近から、能高山、嵩萊主山、合歡山、ビヤナン方面にも、少からず產し、殊にタロコ地方には、非常に低い所まで、分布してゐるとのことである。

△三月十四日　雨　朝　兒玉山工場五〇　夕　新高下小屋四〇

細雨を冒して、午前八時四十分落神經木工場を發した。程なく兒玉山を越して來る本道に會する。ボホーユ溪の源頭に當る鞍部である。やがて急坂にかゝる。大きなタウヒが多い中に、常綠闊葉樹も混ずる。森林を脫すると、笹原となる。山腹に幾筋かの小徑が見えるが、鹿の通路であるといはれる。鹿は木の葉も、草も食べるが、笹の芽と地下莖は、最も好むさうである。

タウヒ、コメツガ、ゴエフマツ、ヒノキなどの針葉樹の原始林を裝ふ石水山（九千五百八十三尺）を右に、岩嶂峨々たる石山（八千八百九十尺）を左に仰ぎながら、棧道多い山側を辿ると、所謂還曆坂（希望坂）にかゝる。晴れた日には、遙かに新高山及以南の最高峯關山（一萬二千百尺）の堂々たる山容を望み得るとのことである。

先年臺南中央寫眞館主林久三といふもの、還曆の齡を迎へた記念として、新高登山を心がけ、日本一の高峯新高山に登り果さば、死すとも遺憾が無いと公言して、登山の途に就き、この坂に到り、所謂山岳病に惱みながらも、尙屆せず、遂に新高山の頂上を極め、後幾許もなく、大往生を遂げたのである。還曆坂の名は之に基くといふ德永巡査の話を聞いて「我々も日本一の高峯に登りたい希望で、わざわざ來たのだから、登りたい一念でもあり、登り得たなら、限り無き愉快には相違無いが、然しまだまだ死ぬ氣にはなれぬ」と高頭氏の哄笑には、我輩も大に共鳴した。高頭氏は還曆の齡まで、ま

だ十年の隔たりがあるが、予は還暦を超えること三歳である。

ツヽジ、シャクナギ、ニヒタカシラタマノキが多い平地を進み、稜線を右に見、ゴエフマツ、コメツガなどの針葉樹林を貫くと、豁然たる草地に出る。短小なタカネスヽキを裝ふた、數千町歩に及ぶ一帶の草原は、所謂鹿林山草地である。實に氣持良い高原的大觀である。七八月以後は、所謂御花畑を現ずるといはれる。タカネスヽキを綴るヒカゲノカヅラ、アスヒカヅラが多い。

左方山側を下ること數町の所に、亞丹屋根の鹿林山休泊所が見える。こゝの飲用水は、和社溪の源頭となるのである。

右手の山稜に登ると、新高山を始め、南北に亙つた中央山脈の大觀に接することも出來、北には物凄い東埔山の斷崖や、東には西山の小屋も見えるさうだ。海拔九千四百五十尺である。

附近は、阿里山蕃の獵區で、鹿が多い。鹿林山の名は、之から來たのである。

沼ノ平から鹿林山休泊所までは、道幅四尺程で、山道としては上等の部であるが、こゝからは二尺乃至三尺幅となる。稜線の南側に通じた草原の細道を進むと、コメツガ、ゴエフマツの林に入るが、又草原となり、爪先上りとなり、嶺上にコメツガの林があり、老大のものは、幹圍一丈五尺餘に及び、枝にはサルヲガセを飾り、樹容愛すべきものがある。栂峠の名は、如何にもと頷かれる。

朝來の雨は、幾分小降りとなつた。路傍の岩塊に腰打ちかけて、辨當を開いた。落神工場主の好意を寄せられた、水鹿の燒肉に、隱元豆の甘煮、奈良漬といふ珍味を、栂の枝から滴る、天與の甘露水と共に食べたのも、亦山路の旅の情調を、永く記念される。

附近にニヒタカアザミ、ニヒタカリンダウ、タイワンシモツケ、アリサンマンネングサ、ニヒタカセキチク、スミレの數品、レンゲサウの一品を見た。ニヒタカアザミは刺狀鋸齒が極めて鋭く硬い。スミレは淡紫紅の花もあつたが、純白の花に、心臟形の葉をつけたアリサンスミレがある。ニヒタカ

セキチクは葉甚だ細く硬く、小形で、疎らに對生し、花は淡紅色、花瓣五個先端細裂、雄蕊十個、蕚は五裂し、暗褐色である。アリサンマンネングサは葉甚だ小形で、細く硬く密生し、花亦甚だ小形で極めて淡い帶紅黄白色である。ニヒタカリンダウは花容ミヤマリンダウの如く、色は帶黄白、内面基部に黄點があり、外面は綠褐色を帶びてゐる。レンゲサウの一品は、葉甚だ細かく、淡紅色の愛らしい花を着ける。

根峠から急坂を下ると、タータカ鞍部に達する。海拔約九千尺である。左手を稍〻下ると、滾々と清水が涌いてゐる。陳有蘭溪の上流の一つである沙里仙溪の源頭となる。尙北方へ下ると、タータカ蕃社がある。

タータカ鞍部は、阿里山塊と、新高山彙との區劃點であると共に、又兩者の連結點である。

德永巡査は、始終途中に於ける巨岩、大木若くは道の曲り目や、密藪などに差しかゝると、豫め深甚の注意を拂ひ、裝塡した銃を肩より卸して、右手に執り、緊急の場合に備へられるのであつたが、タータカ鞍部では、蕃人苦力にも、裝塡の用意を命ぜられた。それは數年前、この鞍部あたりで、タッバン社の蕃人六人が、南玉山方面兇蕃のため、首を取られたことがあつて、彼等の通路關門に當るからである。命がけで、我等を案内護衞される警官方の輕からぬ任務に對しては、眞に感謝に堪えぬのである。

行手は稜線に電光形を描く岩石崔嵬たる急坂である。努力坂といつてゐる。左手即ち稜線の北側は、ニヒタカトゞマツ、ニヒタカツガなどの蔚蒼たる原始林であるが、右手即ち南側は、山火事の跡に、燒木の殘骸が、淋しく白骨となつて存する。これはトンボ蕃人等が、時々火を放つのだと聞いた。後各所の山地でも、屢〻この現狀を目擊した。開闢以來の原始林美などいふ觀念が、彼等の腦裡に宿らぬも情無い。

路傍に數種のツツジ、シャクナギ、コバノヒヒラギ、ミヤマカヂイチゴ、アリサンカタバミ、ニヒタカカウゾリナ、キイチゴ、ニヒタカアセビ、ホウロクイチゴ、アキグミ、ニヒタカナナカマド、ニヒタカメギなど見た。このメギは、葉は小形で厚く、鋭い刺が三個乃至六個密生してゐるので、屢〻觸れては驚かされる。ヘビノボラズといふ名もある通り、これでは蛇も登れまい。ホウロクイチゴは、阿里山以來、澤山見えた。帶紅白色のアセビの花が始終目に入る。

針葉樹の黑衣を纏うた前山（一萬七百六尺）の南肩を曲折して辿ると、岩石崩壞して、殆ど足がかりも無く、右方脚下は、絶壁數千尺、目も眩むばかりの深谷を見下し、實に戰々兢々たらざるを得ぬのである。暴雨のためには、始終變動を免れぬ難所らしい。足場を作りつゝ、辛うじて通過したところ數ケ所もある、次いで奮鬪坂の急路を攀ぢ、午後二時四十分西山休泊所に着いた。海拔一萬一千尺。鹿林山休泊所を距る二里七町といはれる。

時に雨に小霰も交り、頗る寒さを增して來たので、小屋に入つて休憩し、焚火に暖を取つた。この小屋は、三間五間程の大さで、前山休泊所といつてゐるが、實は前山では無く、西山の南肩に當るから、予は西山休泊所と呼ぶ方が、穩當だと思ふのである。こゝは當面に西山の岩壁を仰ぎ、後方は南方の展望を得る好地點であるが、惜しいかな、飲料水を得るには、往復約三時間を要すといはれる。愈〻「西山之險」と銘打つた岩壁の登りにかゝる。前山の肩のやうな、碎壞し易い片質岩ではないが、岩塊累々たる間を縫ふ、仲々の急坂で、鐵鎖にすがる所もあり、四つ匐ひとなつて、攀ぢ登らねばならぬ所も多い。この岩壁にも亦メギとアザミの刺には、少からず惱まされるが、アセビ、ツツジ、シャクナギが一面に點綴してゐるから、花時には實に美觀を呈するであらう。殊にシャクナギは、辛うじて根を岩壁に保ち、始終猛烈な風威の見舞に接することとて、數百千年の壽齡を經たらんと思はれるも、高さは僅かに二三尺に足らぬ。葉裏は毛茸なく、淡綠色を呈する。所謂モリシャクナギ（森

丑之助氏の姓に基く）といふのであらうが、蕾はまだ堅い。解剖して見ると、花冠の紅色であるのが窺はれる。葉も樹姿に伴つて、甚だ縮まり、長さ二寸幅五六分に過ぎぬ。園藝家の愛着措く能はぬ所であらうが、予は後南湖大山の頂上で、更に其逸品に接したのである。

西山之險を攀ぢ登る半ば頃から、小霰は霙と變り、雪となり、滑り落ちる虞れがあるので、先頭に立たれた德永巡査は、ピッケルで足場を作りつゝ、始終注意を拂はれた御親切は有り難い。頂上に登つた頃は、純然たる降雪となつて、新雪積ること四五寸である。

西山は新高五峯の一つで、標高一萬一千六百九十八尺を算する。

頂上は一面に、臺灣高山植物代表者の一であるニヒタカトドマツの純林ともいふべき美しい清らかな森林帶で、ニヒタカビャクシン、ニヒタカコメツガ、モリシャクナギが、其間を綴り、新雪の純白と相映發して、崇嚴の極致を現出した。「西山之靈臺」といふ尊號を捧呈されてゐるのも、宜なるかなと思はしめる。殊にシャクナギの花時は、又一種の麗觀を想像するに足るのである。此處のトドマツには、幹圍六尺以上、ビャクシンは三尺以上のが見えた。樹の高さは、地盤と風當りとの相違により、二丈以上に伸びたのもあり、數尺に縮まつたのもある。

「西山神社大正十五年十一月七日」と註した木標が見える。この登山道路開鑿竣功當時の建立であることが窺はれる。

頂上の兩側は、大絶壁をなし、僅かにビャクシンとシャクナギの蝸附を特許するに過ぎぬ。天氣晴朗の日には、此處の東頂林間から仰いだ、新高の主峯は、實に嶄岩突兀たる偉觀を呈し、南は南山以南に亙り、北は北山の左方、陳有蘭溪の上流沙里仙溪が、白龍珠を追ふの光景を見遣り、眞に崇麗の感に打たれるといはれる。簡單な腰掛が、數臺あつた。

滑り勝ちなる東側を降ると、樹下にはニヒタカヤダケが頗る茂り、路傍のそれは雪に項垂れて、屢〻

我等が顏を見舞ふも情無く、降り頻る雪のため、暮色蒼然として襲ひ迫り、四面楚歌の聲ならで、樹枝から落ち來る雪塊は、ばさばさと、前後左右に音するも物淋しい。急な降りが隨分續いて、新高下休泊所の亞丹屋根の一角が、目に入つた時は、嬉しかつた。小屋に着くと、內部は旣に手探りする程薄暗い六時であつた。海拔約一萬一千尺、西山休泊所を距る二十八町といはれる。

西山頂上を挾んで、西山休泊所と、此處は、標高相伯仲するが、此處の積雪は、約一尺程であつた。

飲料用水は、數十間の近くにあるので、蕃人達は、早速手分けして、水を運ぶ、火を焚く、湯を沸かす。德永巡査は疲勞を事ともせず、我等が炊事に從事される。此處は、登山期の七八月なら、出張した小屋番人も居るのだが、今は唯不完全な一通りの炊事道具だけ殘されてある。それでも我等は至大の便利を得た譯である。小田原提灯の明りの下に、濡れた着物を着換へ、先づ砂糖湯で腹を暖めた。

飯は出來た、鮭の罐詰を開いて、晩食をしたゝめる。阿里山倶樂部から贈られた、奈良漬、澤庵漬は、始終副食物として賞味された。

小屋には備附けの毛布が十枚程あつたが、非常に濕けてゐるので、火で乾して使用し、寢に就いた。久し振りで、海拔一萬尺以上の地點で寢たのであつた。

小屋には、幸い燃料は澤山あつたが濕けてゐた。蕃人達は、途中で採集した、針葉樹枝の脂質材料を用ひて、巧みに焚火をする。携帶した木炭は、甚だ有效であつた。

蕃人達は、着のみ着のまゝ僅かに筵などを被り、焚火を擁しての轉寢であるが、而かも能く熟睡する。

△三月十五日　雨霙　朝　新高下四〇　夕　新高下四〇

この日は愈〻新高主山を極むるの日程であるが、降雪は止んで細雨である、時々霙が去來する。天候既に考慮に値するのであるが、茲に更に大に考慮を要する故障が起きた。それは一行中に、急性的下痢患者が二人と、蕃人苦力に、頭痛に惱むものが一人出來たことである。昨日來激變の寒氣に祟られたのである。それで今日は、滯在休養することゝ決定し、それぞれ用意の服藥した。

北口登山沿道には、既にそれぞれ固有の地名があるが、この阿里山口は、大正十五年の新築道路であるので、臨時急造的命名のこととて、感心せぬのがある。還曆坂はさて措き、西山の肩部にある小屋に、前山休泊所の名を附けたことの不穩當であるのは、前既に述べた通りであるが、この新高下休泊所の名稱も、餘り結構な感じを與へぬ。元來西山は、既に新高五峯の一でもあり、堂々たる山容、殊に針葉樹の美觀、莊嚴極みなき景觀を有することは、五峯中にも、比類無き異彩を發揮すと謂はねばならぬが、この西山が、既に新高山頂上に於ける一角を代表するならば、西山休泊所（所謂前山休泊所）も亦新高下であらねばならぬ。實際新高下休泊所は、西山と主山との間より發する楠梓仙溪の源頭に位置するから、楠梓仙溪頭休泊所と言つたら、最も適切であらうが、稍〻呼び惡い嫌ひがあるかも知れぬ。臺灣山岳會發行の『新高登山のしをり』には「主山下」としてあるが、この方が、比較的良いと思はれる。

主山下休泊所は、西山と主山との間に抱かれ、下淡水溪の支流である楠梓仙溪の上流右岸の小段丘にあつて、周圍にはニヒタカトゞマツ、ニヒタカビャクシン、ニヒタカゴエフマツ、ニヒタカコメツガなどの古木が立ち並び、樹下には、シャクナギ、ニヒタカヤダケ蔓衍して、景致も優れ、清冽豐富な溪水に近く、暴風も餘り當らぬ好地點を占め、晴天には、楠梓仙溪谷間の開く所、遙かに臺南平野の彼方に、青海原を望み得るのである。近く法音瀧がある。

小屋は間口三間奥行五間、中央には四尺幅ばかりの土間の通りを設け、中程に爐がある。窗は押上

式で、採光は不充分である。烟に涙ぐんでは窗を押し明け、風に見舞はれては、窗を閉ぢる。予は筆記したり、或は三十萬分一の大版地圖を擴げ、其細字を見るには、隨分閉口した。

屋外稍〻離れて、大便所の設備がある。富士山や御嶽山のやうに、千客萬來どころか、登山の人達が甚だ稀なので、不潔で無いのは幸である。

予は幾らか雨の小歇を待つて、附近を散歩し、溪流に行つて、所謂千古の淨水で、齒ブラシを使つたが、得意の冷水摩擦は、其機を得ぬのであつた。

附近にタイワンシロバナヘビイチゴ、アリサンカタバミ、ニヒタカスグリ、ニヒタカヤナギが目に入る。

休泊所の傍にあるトゞマツの立木を削つて、左の文字が記されてあつた。

「昭和二年十二月三十一日新竹州教育課六名此處に宿す」、「長州男子市川績一社會係」

この諸氏は、元日の日の出を拜みたい希望で登られたので、矢張德永氏が案内されたのださうだ。當時頂上の岩陰に、少々雪があつた位だと言はれた。

小屋板に「昭和二年十一月三日在鄕軍人臺南分會員四十二人登山」などと樂書が見えたが、實はこの日主山に向つて、成功坂の上まで登ると、風雪猛烈であつたので、空しく引返したさうである。

此月四日午後四時、富士山標高附近積雪三尺に及び、次高山、南湖大山は、七合目以上白雪皚々たる壯觀を呈し、前年より降雪は一ヶ月早かつたといはれてゐる。

林學博士田村剛氏は、我々と同じ經路を取り、この月三日、小雨を冒して、主山に登られた。頂上には、矢張岩陰に雪を見た位で、八通關方面に降りかける肩部は、膝まで沒する雪量であつたが、軟かであつたさうである。氏は總督府の委囑に應じ、國立公園候補地としての本山調査のためであつた。

徒然のまゝ、蕃人達の話を聞いたり、德永巡査からも、蕃地の狀況を聞いた。德永氏の名が頗る難かしいので、其讀み方を聞いたら、福飯は「フクイヒ」と讀み、福岡市で胎内にこもり、飯塚町で生れたのに因んだのだとのことで、氏は福岡縣人であつた。次ぎには氏から、予が名の讀み方を聞かれ「アキラ」といふのだが、普通使用せぬ文字で、始終質問を受けるのは考へものだと、共笑したのである。

蕃人苦力の中のブォーユーが、一番年長で三十位、體格優良、快活で才幹もある。内地語は半ば通ずる。他は二十前後であつた。彼等の服裝は、袖の無いシャツ樣のを着込み、毛皮製の胴着を纏うただけで、腕も脚の全部も現はしてゐたが、一人だけは、皮の脛當(スネアテ)樣なのを着けてゐた。頭部の雨除けには、皮製の折笠式のを用ひた。彼等は傳來の跣足である。始終阿里山や、十字路邊の勞役に服することとて、斷髪であつた。

この蕃人達の部落テンプナ社は、戸數十數戸、多數家族が同居するのが多いので、一戸五十人以上のがあるとのことである。後予が通過した、中央山地の蕃社の多くは、一戸の家族五六人位が、普通であつた。

蕃語は、別種族は勿論、同種族でも、遠距離で、餘り交渉が無い部落は、それぞれ違つて居り、且つ本島人にも、閩族と粤族には、差異があるから、其通語には、警官の人達は、仲々骨が折れる。德永氏は、我等がために、又通譯官兼務であつた。

この附近には、熊も居るが、羚羊と鹿は頗る多いとのことである。

一七、嗚呼新高主山

死線に入る、霧氷。

△三月十六日　曇　朝　主山下小屋内　四二　夕　同　三五

昨夜屢〻室外に出でて、天候を窺つた。時には雲霧の切れ間から、星の光も拜まれ、谷間の彼方遙かに臺南方面の空に映る、電燈の明りまで見えたことがあるので、翌日の天候には、少からず恢復の望みを屬してゐた。今朝空を窺ふと、雨も雪も歇んだが、霧は依然として深い。室外溫度は三十三度である。然し風は殆ど無いので、今日の行動について協議した。服藥の効によつて、患者は殆ど恢復した。唯高頭氏に、まだ衰弱の點が見えるので、最も氏の意見に重きを置かねばならぬのであつた。氏は斷然出發を主張された、而かも主山の頂上に向つてといふのである。予は愼重の行動を選ばねばならぬから、一旦阿里山に歸り、善後策を講じてはと發議した。氏はこの雪では、西山之險も、滑つて頗る危險とは思はれるが、それよりも尙前山肩部の缺壞部こそ、絕對的危險である。若しも多少の雪があるとせば、通過は到底不可能である。進むも死、退くも亦死、死は一である。寧ろ進んで死せんといふ主張であつた。阿里山口登山道路中、隨一の險坂といはれる西山之險は、固定的の岩塊であるから、少し位雪があつても、足場を選びつゝ、極めて靜かに降れば、比較的通過し得る望みはあるが、前山肩部の缺壞部は、予も同感であるので、暗涙を呑んで、高頭氏の主張に同意せざるを得ぬとは、悲痛の極であらねばならぬ。

徒跣で稜々たる碎岩を踏むこと、獸類のやうに平氣な蕃人も、昨日雪の急坂を辿るとき、屢〻滑つて危險を感じたのであるが、是から主山に向つて、雪量も益〻增加しあるべき急坂を攀ぢ登ること、益〻以て危險でもあり、且つ下肢の感覺を失ひ、凍傷にかゝるべきは勿論であるから、我等が準備し

て來た臺灣式草鞋を給與し、主山に向つて出發することとした。

主山下から、主山の頂上までは二十九町、通常二時間を要するといはれる。

午前八時主山休泊所を出發した。登るに從ひ、徑は益〻急となり、積雪は一尺五寸位となつた。唯半ば凝固してゐるので、脚を沒することは五六寸である。路傍の立木を倒り「昭和三年一月元旦、此邊積雪一寸五分、頂上一尺二寸、零下八度」と記してあつた。新竹州教育課の人達の揮毫であらう。

登ること約一時間、寒さが追々加はるので流石の蕃人達も顫ひ出し、退却の請願を始めた。徳永巡査は、勵ましたり叱つたりして、尙暫く登攀を繼續したが、彼等は遂に泣きつゝ歎願する樣になつた。裸脚の彼等は、そろそろ下肢の感覺を失ひゐると見え、頻りと滑り倒れるのである。見れば、其唇は既に暗紫色である。徳永氏は資性着實、責任觀念の强い人とて、我等が目的を達せしめようと、有らん限りの努力を拂はれたが、實は氏の服裝も、この寒氣に對しては、無理であつた。こゝに至つては、進んで死線に入つた我々も、前進又不可能となつた。自ら選んだ行動の下に、死を得るのは、自業自得とはいへ我々のために、徳永氏と蕃人達まで、犧牲とするに忍びぬは、人情である徳義である。糧食は節約すれば、尙二三日は支へ得るのである。主山下の小屋に歸着して、運を天候に仰ぐの一途あるのみとなつた。

徳永氏は、主山の頂上へは、既に二十回以上の經驗を有されるので、「尙前進を繼續し、若しも頂上を極め得ば僥倖である。不幸にして頂上を極め得ずとも、出來得るだけ登つて見ませう」と、切に予に勸告された。予は唯其好意を謝するに止め、一行全部一緒に退却しようとしたが、氏は熱心に頻りと勸められるので、高頭氏は谷内田君及び苦力全部を伴ひ、主山下の小屋に歸り、休憩することとし、予は徳永巡査と共に前進を繼續した。

ニヒタカトゞマツ、ニヒタカビャクシンは、老幹直徑尙五六寸位のがあるが、高さは追々縮まつ

御岳岳標高地點附近の溪流と樹林。流溪は茫漠溪頭。樹林はニヒタカウヒ、ニヒタカツガ、ニヒタカトバツマ、ニヒタカビャクシンなどである。

遠山は新高主山と東山が相重なつてゐる。

て、一丈前後となり、サルヲガセを裝ふた枝は、奇しく垂れ靡き、シャクナギやメギの年さびた矮株が、樹下を綴り、突兀たる岩塊は點在し、眞に天作の公園築山の光景を現ずる。雷光形の急坂所謂成功坂を登ると、木立は殆ど盡きて、唯シャクナギとハヒビャクシンの匍匐を見るばかりである。而かも半ば雪に埋もれてある。眼界豁然とも言ひたいが、實は濃霧四塞、展望數十メートルに過ぎぬ。寒さは愈〻加はる、風は追々烈しくなつて來たので、頂上までは餘す所僅か三十分といはれるが、遺憾ながら斷念して、退却の途に就いた。

然し予は、この僅かな繼續前進によつて、實に得難き景觀に遭遇したのである。それは樹枝といはず、岩角といはず、氷柱といはず、一面に盛裝の極を秘めた霧氷であつた。

內地でも、濃霧に鎖されることの多い山岳が、俄然嚴寒烈風に襲はれると、この霧氷を現出するのであるが、此處で目に入つたものは、實に一尺以上の發達振りを呈し、銀世界といひ、水晶宮裡といふ、常套式形容詞を超越して、更に捧呈すべき讃辭を發見せぬのである。樹枝岩角から垂れさがつた氷柱が、一尺乃至二尺にも達してゐることから、推察すると、時には氷點以上の暖風に接して、融雪水滴を生じ、忽にして氷點以下の寒風に襲はれては、氷結したものらしく、殊にこの氷柱の風に對する側面に、霧氷の發達した光景は、奇觀怪觀の極みであつた。若しも旭光之を射たならば、如何に驚異すべき莊嚴絕美の光景を呈したであらうと想像した。

十一時頃主山下の小屋に歸着し、早速火爐を圍み、砂糖湯を飲んで暖を取つた。

數日に亙る野營の副食物には、鑵詰の鮭、鰯、お多福豆、鹽鮭、漬物など、交互に使用したが、高山では、何時も鹽鮭の方が、食慾を進め、口に適するやうである。若布(ワカメ)の味噌汁にも、貝柱や鑵詰の鮭など崩して入れた、山上の味噌汁は、非常に良い。

一八、主山下より阿里山へ引返す

雨氷、石南の巨樹。

△三月十七日　曇　朝　主山下　四〇　夕　沼ノ平　五四

天候確かに恢復し、穏かな晴天に接したならば、主山の頂上を極めて、八通關に降るべき方法も立つのであるが、今日も依然たる濃霧である。止むを得ず、阿里山に引返すべく、主山下休泊所を立つたのは、午前七時である。

西山を辿ると、今日は幾分暖かいので、地上の雪も、餘程水氣を含んでゐる。此處では、昨日成功坂下で見た霧氷とは違つた、雨氷が、樹枝を飾つてゐる。而かもそれが暖氣に襲はれて、落ちたのが、積雪上一面に蔽ひ、歩々ざくざくと音を立て、宛然氷砂糖を踏むやうである。「これでは銀世界では無く、全く氷砂糖の世界に入つたやうだ」とは、高頭氏の滑稽的形容詞であつた。

西山之險にかゝると、上部には薄雪があつたが、幸ひ半腹以下には、殆ど無かつたので、案外樂に西山休泊所に到着し、焚火に暖を取つた。時に九時である。僅か二十八町の所、二時間を費したのであるから、其行歩が如何に遲々たるかが讀まれる。

霧も餘程減じたので、屋後の崖頭に立つと、朧氣ながら、楠梓仙の溪谷を隔てて、幾多の尾根が、綠も淺き春衣を裝ひ、相重疊する其奥に、南玉山（一萬一千百九十一尺）の威容を望み得たのは、得易からぬ景觀であつた。

標高相伯仲する主山下休泊所邊が、積雪約一尺といふに、西山之險を過ぎると、西山休泊所では、全く雪を見ぬとは、地形の關係とはいへ、頗る奇現象であると共に、所謂九死に一生を得た、我等の幸運を感謝せずにはゐられぬ。愈〻前山肩部の危險地帶にかゝつた。高頭氏は、二日間碌々食事を攝

られぬため、足元ふらふらと、覺束ないこと夥しいので、予と谷内田君は、前後に居て警戒した。相變らず、德永巡査はピッケルで足場を作られるのであつた。幾度かカーブを描く最大危險地帶の肩部も、無事通り越した。

タータカ鞍部から、鹿林山にかゝる坂路は、隨分長いので、强ひて高頭氏に勸め、苦力の脊を借ることゝした。數日來の疲勞があるのに、今夜不完全な鹿林山休泊所に宿ることも、如何と思はれるので、阿里山沼ノ平まで、一氣に强行したい希望があるからである。それで最も年長でもあり、體格の良いブォーユー君を煩はすことゝした。其方法は簡單である。彼は早速蕃刀を揮つて、手頃な立木を伐つて、長さ三尺程の棒を作り、一本の紐を取つて、棒の兩端に結び、棒に臀かけた高頭氏を負ひ、紐の中央を前額で支へるだけである。蕃人達は常に此の形式で、重荷を負ふのであるが、其頸力の頑强さ驚くばかりである。ブォーユーの荷物は、他の二人が分擔した。斯くて短身ではあるが、體重十七貫に餘る高頭氏を、いと輕快に坂上まで運んでくれた、彼の行動は、賞讃せずにはゐられぬ。內地山行の剛力は、荷物の重量、大抵六七貫を制限としてゐるが、此行我等の荷物並に食糧木炭を概算すると、苦力一人の分擔量、平均十四貫以上となつてゐる。出發前予は無理ではないかと、駐在所の方に言つたのだが、蕃人は强いからといふのであつた。實際三人では無理である、五人が相當で、少くも四人を要したのであつた。彼等はかやうに、過重の荷物に對しても、聊か不平の態度は無い、橫着の行動は無い。予は後各所で、蕃人苦力を使用したのだが、毎に感心の點が多い。之を內地の所謂剛力なるものに比べると、餘りに差があつて、其純情大に掬せざるを得ぬのである。

鹿林山の草地に腰打ちかけて、晝食を攝る。時に十一時四十分である。曇天ではあるが、濃霧が餘程薄らいだので、稍展望も利ける。高原的草地の此處は、暢び暢びした柔かい快感を與へる。タータカ鞍部を隔てゝ彼方に、十數回の電光形を描く努力坂を眺め、「あの坂を見せつけられては、大抵の登

山者は尻込みするであらう、我等が往路に、霧のため一寸先、否一町先きが見えなかつたのは、意外の仕合せであつた」と笑ひ合つた。

草地を降ると、針闊の混林に差しかゝる。谷内田君が「何だか綺麗な花が見えます」といふを仰げば、成る程綺麗だ、垂れさがつた枝のを見ると、シャクナギの樣だが、餘りの大木で、怪訝に堪へぬ。谷内田君が傍の木に攀ぢ上り、折つて來たのを見ると、疑ふべくも無いシャクナギであつた。目通り幹圍六尺强、地上三尺位の所に、枚が一本あるが、この枝の周圍が三尺五寸もあつた。幹の高さは約三丈、枝の擴がりは七八間に達する。附近には之に亞ぐ大木が尙多數あるから、この地を石南林と名けたい。この邊から北方に亙る山地は、東京帝國大學の演習林となつてゐる。

多くの植物書に、シャクナギは半灌木或は灌木で、高さ五六尺に達すとあり、或は七八尺に及ぶと書いたのもあるが、それ以上のは見ぬ。予は曾て大臺ヶ原山や黑部の溪谷で、地上一二尺の所で、幹の周圍二尺、高さ十五尺位のに接し、記錄破りの積りでゐたが、今この大木を見ては、半灌木どころか、優に灌木の籍を脫し、喬木の尊號を呈さねばならぬ。後中央山地跋涉の際、各所で更に巨大なものがあることを確め得たのである。

又普通植物書に、シャクナギの葉は、下面褐色の毛茸に富み、長さ通常二三寸なれども、大なるものは五六寸に及ぶものがあると書いてあるが、此處のは、下面無毛淡綠色で、長さ八寸、幅一寸以上に達するのがある。花は梢頭に大抵十個簇生し、花冠大形で、淡紅色を呈し、外面中央部縱に稍濃紅を彩どり、旗瓣には數百の濃紅點がある。雄蕊十個、褐色の葯を有し、雌蕊の柱頭は黃綠色である。花は今咲きかけたばかりであるから、滿開の美觀は、想ひやられる。登山の際には、雨に惱まされて、認めなかつた此の珍品に接し得て、「退却の悲劇を償ふことが出來た」と予が言つたら、高頭氏も大に共鳴された。この殊勳は谷内田君に呈さねばならぬ。

徳永氏によると、鹿林山附近には、高さ一尺五寸以上に達するニヒタカセンブリが、甚だ多いさうだが、今は唯枯莖の根元に、若芽が萠え出たばかりであつた。

鹿林山以來、高頭氏の元氣は大に恢復し、苦力の脊を辭された氏の脚力は、意外に捗り、午後五時十分阿里山倶樂部に歸着した。早速營林所派出所及警察官吏駐在所に到り、報告を兼ねて厚意を深謝した。山上の雪荒れは、平地でも全般に知れて居り、且つ十五日には、我々が新高主山を越して、八通關に降るといふ行程は、豫め總督府より、山麓警察課を經て、それぞれ通達があつたので、八通關方面からも、警官方が主山に向つて、出迎へされたのだが、更に消息が無いので、我等が行方は、全く不明となつた。總督府では、大に心配され、阿里山駐在所に對し、我等が登山に於ける食糧の分量やら、其他準備狀況の報告をも徵され、若しも此の日の夕方まで、我等が歸着せぬ場合には、西口北口の兩方面から、搜索隊を出す手筈にまでなつてゐたと聞いて、勿體なく思つた。全島各新聞には、我等が行方不明安否氣遣はるといふ大々的記事まで、載せられたと聞いては、尙更恐縮に堪えなかつた。

蕃人苦力には、慰勞の酒を贈り、徳永巡査と晩食を共にし、氣持良い笑話の境に入つたのは、印象深い山旅であつた。

一九、方向轉換、阿里山より水裡坑へ

新高郡役所、臺車。

△三月十八日　曇晴　朝　沼ノ平　五二　夕　二水　六八

この日快晴ならば、徳永巡査は、我等を祝山に案内される豫定であつたが、曇つて霧もあり、展望不能であるので、之を略し、方向轉換、北口から新高山に登るべく、下山することゝした。

この地には、展望の好地點として、大塔山、對高山、祝山、萬歳山などあるが、近頃祝山が最も流行兒となつてゐるといはれる。祝山は標高八千二百六十三尺、沼ノ平より往復約二時間を要するとのことである。昨年朝香宮殿下が御登りになり、大に御健脚を御示しになつたことは、評判となつてゐる。この山名は、民政長官祝辰巳氏の姓に基いたのである。

午前八時十分沼ノ平發の汽車に搭じた。蕃人苦力もこの列車に乘り、十字路驛で下車し、軍隊式に整列し、にこにこ顔で、我等に丁寧な禮儀を捧げたのは、どこまでも愛らしい。

車窗より、臺灣山岳特有の森林美を、飽くまでも鑑賞しつゝ、午後三時嘉義驛に着いた。

午後四時四十三分上りといふ、縱貫線嘉義驛發の汽車に乘り、六時二十分二水驛に下車した。時刻表には、六時九分着とある。臺灣の汽車は、少々づゝ遲れるのが、殆ど普通となつてゐるらしい。

驛に近い中央ホテル（豐川喜四郎）に投宿した。二水は集々線の分岐點に位し、濁水溪流域の上流地方交通の咽喉に當ることとて、旅館の設備も佳良である。主人は、新聞紙上に於ける我等が行程を知つてゐたとて、頗る優待してくれた。

此日臺灣新聞夕刊に「新高登山の二氏無事引返す」といふ見出しの下に、我等が北口に廻り、水裡（スキリ）坑（コウ）から再び新高登山を計畫した記事が見えた。

△三月十九日　晴曇　朝　二水　七〇　夕　内茅埔　六六

午前八時三十五分集々線二水發の汽車に乘つた。官線（内地の省線格）ではあるが、列車も小形であり、腰掛は板張りである。

鼻子頭驛を過ぎると、左手に、小規模ながら稜々たる岩山が現はれ、岩壁を飾る、點々たる灌木の萠え出た若葉の綠も鮮かである。右手は、廣い河原の中を幾筋かに分流する、濁水溪の水面には、旭光斜に射て、きらきらする。

彼方此方センダンの花は、淡く床しく、九重桐は、濃艶燃えるやうな色彩を呈する。大形なヤツデ式の葉を擴げた木瓜には、累々たる果實が目に着く。

例によつて、群束的麻竹の林が多い。そうして喬木の頂にも、麻竹の頂近くにも、タイワンカラスのらしい大きな鳥の巣が、所々に見える。所謂百尺竿頭的の御殿といはねばならぬ。

新高郡役所を訪問すべく、七時五十分集々驛に下車し、五町ばかりで、郡役所に着いた。郡守青木行清、警察課長菅野政衞氏に面會し、新高登山に關し、便宜を請ふた。臺灣では、郡役所内に警察課が設けられてゐるのである。

實は當該郡役所に於て、新高頂上積雪の多いのと、天候まだ確定的の恢復では無いとの理由の下に、萬一阻止的態度に出られたならば、先づ以て八通關までの視察旅行として、諒解を得、それ以上は、天機應變といふ作戰計畫で、豫め高頭氏と相談して置いたのだが、郡守、警察課長の兩氏は、非常に快活な態度を以て「極力御便宜を圖ります、御成功を祈ります」と言はれたので、幾分不安懸念の面持が見えた理蕃係の警官も、反對意見の申立てもならず、「精々愼重の行動を取つて下さい」といふことで、段落を告げたのは、幸ひであつた。

こゝでも復「あなた方が、行方不明といふので、臺灣全島を震動させました」と言はれ、「甚だ恐縮でありました。然し微力な私共が、臺灣全島を震動させたとは、一面又光榮の至りであります」と大笑したのである。

この郡が、新高山に因んだ名であるので、予は記念帖に、郡役所の印章を請ふた。郡守殿は手づから押印されたのである。尙當郡役所發行の『新高登山、日月潭遊覽案内』の寄贈を受けた。

郡役所を辭し、途安永館といふ寫眞屋に立寄り、新高山を撮つた繪葉書數百枚といふ、全部の買占めをなし、主婦を驚かした。

此地は濁水溪の右岸に位し、清の乾隆年間、漢民族が移住開拓したので、山に入る要路に當り、四民集々の意によつて名けられたといはれるが、街路は狹く曲りの多い、頗る支那臭味の深い、淋しい感じがする。然し樟腦の集散地として著はれてゐる。

十時三十八分集々驛發の汽車に乘り、十一時十分、新高山北口の起點である、水裡坑に下車した。此處から內茅埔（ナイフオシボ）まで四里十三町は、臺車が通ずる。

驛前に「新高山登山口」と筆太に書いた、尺角高さ一丈程の標柱が目につく。新高神社第一鳥居がある。新高神社は、新高山の頂上にあるのである。驛の名所案內標札に「東埔溫泉八里三十町」と書いてあつた。

一町ばかり歩いて、臺車發着所に到り、其發車時刻を尋ねたら、十二時頃といふので、河原に腰を卸して、辨當をしたゝめた。河原は隨分廣いが、其中を僅かな水が流れてゐる。濁水溪の支流で、魚池方面から來る水裡溪である。

臺灣は、豚の國である、鷄の國であるのは、對岸支那民族の移住を物語つてゐる。從つて都市は言ふに及ばず、到る處の田舍でも、人の集る所には、必ず名物（？）米粉（ビーフン）の立賣があると共に、必ず又豚肉鷄肉の煮附を賣つてゐる。予は好奇心から、經驗のため、群集に伍して之を試みた。簡單ながら、棄て難い風味があるのは、尙內地に於ける、傳來的茶屋鰊と、同一筆法の感があつた。

昭和元年に於ける、本島養豚の數は百五十四萬餘頭で、人口百に對する養豚數は、米國の約六十八に亞いで、約四十といふ、世界第二に位する。

同年の屠殺數は、九十二萬餘頭に達すといはれる。

新高山登山口のことゝて、登山館といふ支那式旅館が目を惹く。軒下に立つて、媚を呈する支那娘もある。

附近の山々を眺めると、落葉樹の鮮かな新綠に配する、闊葉常綠樹の若芽が、赤褐色、灰白色、灰紫色といふ、色とりどりの中を點綴する、キハギの玄綠が目を惹き、眞に春ならではとの色彩美を現ずる。

臺車は、臺灣名物の一つである。又手押臺車、手押軌道、或は單に軌道ともいつてゐる。鐵道主要驛より、地方の小都邑に向つて敷設され、所謂トロッコ式で、旅客の運搬と、貨物の集散とに從事してゐる。全島に於ける、この軌道の延長は、六百八十餘哩に及び、之を官設鐵道の約五百四十哩、私設鐵道の約一千三百六十哩に對し、如何に重要な補助的交通機關であるかが窺はれる。軌道の幅は一呎七吋半、軌條は大抵十二磅である。車輪の直徑は約一尺五寸、車臺は長さ五尺、幅三尺五寸位、四隅に握り勾配な高さ三尺位の棒が立つてゐる。臺上には、普通板張又は竹張の腰掛二個を置くが、特等は籐張又は革張である。一人又は二人の臺車苦力が、後方で押して走り、平地若しくは下り勾配にかゝると、其慣性を利用し、苦力自らも車臺の後方に乘つて走る時の痛快さは、內地ではとても味はれぬ。

發着所に掲げた賃金表を見ると、

內茅埔まで十一哩

一人乘	九十九錢	二人乘	一圓三十二錢
三人乘	一圓六十五錢	四人乘	一圓九十八錢

日出前、日沒後及雨天の時は二割增

としてある。

二〇、水裡坑より八通關へ

鐵線橋、新高を拜す、山通大海碑、對比標高柱、東埔溫泉、雲龍瀑、植物標識、觀高の展望、八通關。

臺車は零時四十五分漸く水裡坑を發した。二つの分流を渡ると、名に負ふ濁水溪の本流に架けた、龍神橋と銘打つた鐵線橋にかゝる。此間右手に「社子造林作業所」と書いた標札と、稚苗日除の簾を掛けた苗圃を見た。

濁水溪は、其水量の點に於て、其長さの點に於て、本島第一の大河といはれ、延長四十二里を算する。然し其水量は、暴雨の際に俄かに氾濫し、平時は細い流れが、或は分れ或は合しつゝ、勿體ない程の廣い河原の中を描くのである。臺灣府誌に「水濁りて迅く、泥沙滾々たり、人馬牛車之を渡るに疾行す、稍緩なれば、腹を沒し輪を埋むる患あり、夏秋水漲れば、月を竟ふるも渡ること能はず」といふやうなことが書いてある。これは勿論領臺以前の有樣であるが、今は架橋や、河川工事のため、面目一新したといはれる。本流は、中央山脈の合歡山に發源し、上流に於ける黑色粘板岩が、始終水滓を受けて溷濁し、黑沙集つた所は、恰も沙鐵の堆積を見るやうである。之について土人の迷信が、頗る振つてゐる。此川の上流に、二羽の金鴨が住み、晝夜岸を啄み崩してゐるので、水は始終濁るのだが、日本人渡來後、益〻甚だしくなつたといふのである。

武內貞義氏の『臺灣』に、濁水溪がシルビヤ山（次高山）に發源すと、書いてあるのは誤りである。鐵線橋は、所謂釣橋で、內地でも、黑部溪谷や、我鄕國の破間川（アブルマ）のやうに、橋臺の設置困難の個所で見るのであるが、臺灣山地溪流に於けるのそれは、構造堅牢、規模壯觀を極めてゐる。北口道路中には、七個の鐵線橋があるが、この龍神橋が最も大きい。長百四十餘間、厚二寸長六尺程の板を橫に

敷き詰め、左右の手摺として、太い針金を親綱から取つてある。中程まで渡つて出ると、上下にも左右にも動搖するので、馴れぬものは、一寸躊躇する。龍神橋は上下二段の構造で、上は人道、下は車道となつてゐる。

臺車は、痛快にこの橋を渡つて對岸に達し、スイッチバックによつて、人道に會する。この橋が蕃界で、我等は再ば蕃地に入つたのである。

登り路では、臺車は稍遲々とするが、降りに向ふと、實に爽快である。降りに向ふ時と、道の曲り目にかゝると、苦力は頻りに笛を吹いて、行手から來る人達や、臺車に警告する。「徐行（警笛使用）」と註した赤標が所々に見える。行手から來る臺車に出逢ふのが、甚だ厄介である。外車埕（ゲワイシナテイ）から埔里（ホリ）に通ずる軌道は、所々に停留所があり、複線となつてゐるので、都合が良いが、こゝのは單線であり、且つ途中に停留所もないから、臺車が出逢ふと、どちらか臺車を軌道から外して、避けねばならぬ。普通乘客の少い方か、又は貨物の輕い方が讓ることゝなつてゐるが、比較し難い場合には、妥協を要する。そうして兩方の苦力が共力して避ける方のを外（はづ）して、一方を通し、再び軌條に載せるので、此間避ける方の乘客は、下車せねばならぬ。これが頻繁とあつては、到着時刻の遲延を來すので、前途汽車に乘る豫定などは當てにはならぬ。

龍神橋を渡ると、道は濁水溪の支流陳有蘭（チンイウラン）溪の右岸に沿うて、大體は爪先上りであるが、時には下りもあり。屈曲が多い。警笛は頻りに鳴る。臺車には始終出逢ふ、もどかしさ夥しい。

沿道林間には、黑栗鼠（リス）が、枝から枝に飛び移るもある。樹陰には、例のサトイモダマシのクハズイモが多い。其地上莖は數尺に及び、葉柄五六尺、葉身の長徑三尺以上といふ壯大のものを見せつけられては、とても食はれさうもない。大形な綠白色を呈した佛燄狀の苞に抱かれる肉穗花序は、里芋に似てゐるが、規模が甚だ大きい。ヤマバセウも多い。

深綠な羽狀複葉の長五六尺にも達する、雄壯な景觀を呈するソテツジュロが、所々に見え、夏の庭木に欲しいと、高頭氏は頻りに賞讃された。

淡紅花或は青紫花をつけたヒルガホの一品を所々で見た。葉はヒルガホのやうに、狹長な戟狀をなすもあるが、深く五七裂するのもある。八重山唐草といふのらしい。

郡坑口といふ所に、十數戸の本島人部落があつて、怪しげな茶屋もある。鷄が澤山見え、卵も賣つてゐる。子供達は、蝶卵やバナナを持つて來て、賣りつける。檐端の木瓜には、數百の果實が、累々として見える。パイナップルの畑もある。苦力達は、休んで頻りと何か食べてゐる。

支流郡坑溪に架けた萬代橋といふ鐵線橋を渡ると、間も無く、臺車の終點內茅埔（海拔約一千六百尺）に着く、時に四時十分である。

「臺中州新高郡內茅埔警察官吏駐在所」の門標を掲げた玄關に入り、刺を通じて、宿泊及び前途に於ける苦力の周旋を依賴し、主任巡査奥平進氏の案內を受け、左手の別棟となつてゐる新築宿舍に、支度を解いた。

偶〻八通關駐在所巡査長澤久太郎氏が、降り來られたのに逢つた。氏は我等を出迎へのため、八通關から新高山に向はれた一行中の一人で、新高郡警察課長に、其狀況報告を齎すのであつた。

室に入ると、早速蕃地名物の粟餅を、點心として饗されたのは珍らしい。點心終ると、案內を受けて入浴した。浴場は別棟で、頗る廣い。傍に料理場がある。

晩食の御馳走には、鷄肉の刺身と、其剝燒が出た。內地製の酒も出た。この鷄が數刻前まで、庭を駈け廻つてゐたのだと思へば、彼等が壽命の果なさを感ぜずにはゐられぬ。それは谷內田君が入浴の際に於ける現狀瞥見の話であつた。斯うした客來には、彼等は常に犧牲に供されるのである。臺灣殊に山地では、魚肉の代りに、鷄肉獸肉の刺身が多く用ひられる。

内茅埔は、陳有蘭溪に跨る、百戸許りの部落で、本島人の居住地である。西は直距一里餘の天に鳳凰山（五千四百六十二尺）を仰ぎ、東は近く内茅埔山（三千七百八十五尺）を負ふので、其背後約二里の天に峙つ、一萬百五十尺の標高を有する巒大山（ランダイサン）の雄姿は、拜することが出來ぬ。巒大山に産するシャクナギは、其豐富と共に、花色の鮮麗を以て著れてゐる。溪流の左岸に、吳光亮時代の營盤跡がある。

夜に入り、種々の蟲聲頻りに耳に入る中にも、際立つて喧しいのは、蛙鳴である。

△三月二十日　快晴　朝（内茅埔 六〇）　夕（東埔 六六）

早朝「新高山が能く見えます」といふ警官の報告に、早速庭に出た。陳有蘭溪上流の谷奥に當り、新高主山は、東山北山と相重なり合つて、尨大な山容に銀冠を戴き、之に向つて稍右に、西山が尖塔式峯頭に白雪を飾り、尾根は緩かに引いて、鹿林山に亙つてゐる。新高山は、水裡坑邊でも望むことが出來るのだといふが、本邦第一高峯の其頂上を拜し得たのは、今日が初めてである。數日前の奮鬪が腦裡に浮び、一種無量の感慨に打たれた。この時入臺以來初めてである鶯の聲が、いと朗かに耳に入つたのも嬉しい。所謂タイワンウグヒスである。陳有蘭溪を辿る道中では、始終聞いた。其囀り方は、略〻内地のそれのやうだが、引く聲が稍短く、所謂餘韻嫋々たる點に於て、遜色があると、高頭氏は評されたが、予も同感を表した。

此處で、濁水溪に産する、本島唯一の硯材とする螺溪石といふを見たが、感心したものではない。

北口からの新高登山は、八通關を根據とするに於ては、純露營の必要が無いので、不要の荷物を、この駐在所に留置き、本島人苦力一人を雇ふことゝした。往復五日間の賃金七圓である。苦力は跣足で、名物割竹の擔棒で、荷物を兩擔ぎとし、竹の皮で作つた圓錐形の小笠を被つてゐる。

午前八時内茅埔を出發した。

この邊の溪谷は、まだ隨分廣く、河原も廣い。其廣々した河原の中を、細い溪流が、迂餘屈曲を描いてゐるのは、濁水溪に似てゐるが、彼の暗灰色を呈する水流に對し、これは稍澄んであるので、氣持よい。

朝日に輝く新高山の英姿を、行手に望みながら、尙陳有蘭溪の右岸を辿ると、濕地を通過する所、黑ばんだ泥濘、脚を沒すること五六寸にも及ぶので、路傍の草地を踏むと、じぶじぶと汚水地下足袋に侵入して、氣持惡さ夥しい。

對岸の山脚を裾どる段丘は、頗る長く、規律的に發展し、鮮綠な毛氈を布いた姿は、目を惹く。

沮洳地に茂る葦の中には、タカサゴモズが頻りに鳴く、附近目に入つた植物には、サルトリイバラ、ノイバラ、ヤブイチゴ、アキグミ、エビヅル、アケビ、ヨモギ、チガヤ、スヽキなどあり、稀にネヂバナの花を見た。ナハシロイチゴは、果實正に熟して、屢〻御馳走にあづかつた。

九時十五分支流十八頂溪に架けた常盤橋にかゝる。橋詰に「長百十六間、高五丈四尺、大正十二年三月竣工」と註し、又「三十人以上の時は、眞中を靜かに通つて下さい」といふ標札がある。「是よりナマカバン社受持區域、楠子脚萬駐在所」と書いた標木もある。

廣い河原の中を流れる水幅は、僅か二三間で、淺くもあるから、徒渉は出來るが、一朝暴雨の際は、この河原一面滔々たる水量となるであらう。岸に沿うて、僅かに足跡を認める細徑がある、蕃人の通路であるさうだ。

程なく本流に架けた稜威橋（ミイツ）（長六十九間、高六間）にかゝる。橋を渡ると「山通大海之碑、是より三町二十六間下流左岸」と書いた標札があるので、荷物番を谷内田君に賴み、左手に廻つて、河原に降り、僅かに蕃人達が通るといふ細徑を辿つて見たが、仲々見當らぬ。六七町も行つたが、駄目なので、引返すと、苦力は橋上で指さしてくれた。矢張三町餘の路の左、五六間隔てた所にあつたが、附近には

柳やドクウツギもあり、巨大な岩石が澤山散在してゐるので、目に入らぬのであつた。

碑は、自然石の横約二丈、高約一丈五尺位のを用ひ、地上五尺程の所に、横五尺、高二尺五寸位の額面を劃し「山通大海」の四字を、横書に凹刻し、一字の直徑は、約五寸である。五十餘年前、この横斷道路開鑿の任に當つた吳光亮の筆蹟だといふが、筆力は雄勁であり、凹字に塗り込んだ鮮かな朱は、大部分既に剝脱してあるが、其質の優良なことが窺はれる。碑石が餘程左方に傾いてゐるのは、洪水の作用らしく、又附近に大さ恰好とも、碑石以上の巨石が多いのは、是亦其後の變動によることと想はれる。

石碑探りに、三十分餘りも費し、十時三十分小支流に架けた常世橋「長三十四間五尺、高八間、大正十三年三月末竣工」を渡つた。こゝにも「三十人以上一度に渡らぬ樣にして下さい」との注意書が見えた。

橋詰に、三戸ばかりの本島人の部落があり、茶屋も見えた。附近にある營盤の跡には、礎石を存在する。

目に入つた植物には、タイワンネムノキ、エノキ、カタバミ(小形黄花)、ニガナ、アザミ、ヤマルリサウ、ハルノゲシ、ヨグルマなどある。紫色、淡紅、紅紫、藍色など、色とりどりのヤヘヤマカラクサがある。其葉には圓いもの、細長いもの、三裂するもの、掌狀のものなど雜多である。又タカサゴユリらしい細長い葉を叢生したのが、蕾はまだ小さい。

十一時三十分行手脚下に、ナマカバン社を見下す丘上に休んで、辨當をしたゝめた。タブの老樹があつて、日除となつてゐる。

對岸に峙つ白銀山の山側は、岩石の肌露はに陽光を浴びて、奇しき淡灰紫色を呈し、稜線には、萠え出た新綠の若芽いと鮮かに、窪みには、常綠闊葉樹の深綠特に濃かに、其色彩は、如何にも生々た

る陽春山地の氣分を與へる。

ナマカバン社は、十五戸ばかりの蕃人部落（ツオオ族）であるが、附近は、山懷廣く、地味も肥え、この溪谷中、第一の平坦地とする。麥は青々と一尺以上に伸び、甘藍は甚だ佳良な成績を示し、陸稻、葱、落花生、甘藷、バナナ、タバコなど見える。桑も栽培してあるから、養蠶することも推察される。臺灣でも、煙草は專賣制度となつてゐるが、蕃地は除外である。

楠子脚萬警察官吏駐在所（海拔二千七百尺）に立寄り、歸途に於ける宿泊を、豫め願つた。東京小石川原町の寓居高頭氏の奥樣から發送された、高頭氏宛ての書信を、こゝで受取つた。臺北吾妻旅館から、附箋廻送されたのである。郵便制度の行屆いてゐる御蔭で、郵便局の設けもない蕃地駐在所で、通信に接し得るとは有り難い。各駐在所間には、電話が架設されてゐる。郵便物は、一日一回、飛脚を使用してゐる。

楠子脚萬（ナマカバン）は、以前楠仔脚萬、又は南仔脚と書いてあつた。

駐在所前には「楠子脚萬兒童教育所」といふ標札を掲げた學校がある。オルガンの音も聞え、屋外には、鞦韆（ぶらんこ）も、鐵棒機械も見えた。近くに居た子供は、笑顔で「今日は」と丁寧な挨拶するも愛らしい。以前は標札に「蕃童教育所」と書いたのだが、總督府文教局の考慮によつて、改められたといはれる。

花園には、紅白のコスモスが、今花盛りであつた、こゝが蕃人兒童教育所の、我等が目に映じた嚆矢である。

ナマカバン駐在所を辭し、丘陵の側面を降る路傍に於て、野生のアカナスが、谷内田君によつて發見された。果實は正圓形で、直徑五六分程の小形であるが、赤熟してゐるので、之を試みると、餘程結構であつた。アカナスは、鮮紅累々珊瑚の珠を繋いだやうだとて、サンゴジュナスビの名がある。

富士山標高地點附近に於ける ビヒハ ンシクャとシクャギナの景觀。最左方が主山，其右は東山である。

ヴィタミンを多量に含有するので、近來貴重な蔬菜として謳はれる。原名トマト、南米ペルーの原産だといふが、栽培らしくもない此の原野に、可なり繁殖してゐるのは、奇異の感に打たれる。

零時十五分支流ナマカバン溪に架けた千歳橋といふ鐵線橋にかゝる「長百十間、高三十間、大正十五年三月末竣工」と記してある。水面を距る高さに於ては、この登路七個の鐵線橋中、第一に位し、支流に架けた橋としては、百間以上とは、頗る珍らしいが、實は廣い深い溪谷に架けたので、河原の中一面に生ひ茂つた竹藪の中を、さゝやかな流れが潜つてゐる。架橋以前の迂廻昇降が想ひ遣られる。

この溪谷の竹は、近頃ナマカバンに於て、登山用の金剛杖を作つて販賣したり、其他竹細工に使用されつゝある。

この邊には、スヽギ、ワラビに伍し、クラヽ、タカサゴユリ、キハギ、クサスギカヅラが目に入る。

零時五十分七大鐵線橋最後の橋である、其名も振つた雲懸橋にかゝつた。「長六十一間、高十二間」とある。渡り切つて橋詰に、一群のケヤキが蔽ひかゝり、其若芽は稍赤味を帶びてゐる。紅果累々たるドクウツギの數株が、崖頭に垂れかゝる。龍神橋以來の橋々は、皆附近に樹木が無い、所謂裸橋であつたが、この橋詰にある樹木の一群は、少からず風致を添加してくれた。殊に上流の谷間に、新高山及秀姑巒(シウコラン)山の一角を仰ぎ得るのは、嬉しい。

この橋は、本流と和社(ホサ)溪との合流點にある。正面には、兩溪流に挾まれた東埔(トンポ)山（七千五百六尺）屹然として峙ち、ホサ溪の左岸には、阿里山脈が蜿蜒として相連り、何れも原始的森林美を提供するのは、更に此橋上展望の好添景と謂はねばならぬ。

ホサ溪口に近く、ホサ蕃社（ツオオ族）がある。この溪谷を辿ると、約七里で、阿里山沼ノ平に達する山徑がある。

稜威橋以來、道は陳有蘭溪の左岸に通じてあつたが、雲懸橋を渡ると、右岸に移り、間も無く、「比叡山標高海拔二七九九尺」側面に「大正十二年八月第二回新高登山記念」と註した、白色ペンキ塗、高さ四尺程の標柱が目に入る。比叡山の頂上と、此處の地點が、同一標高であることを示したのである、附近に大なるフウ、アベマキ、ナラ、エノキ、シマサルスベリなどの落葉闊葉樹が相續く、フウ即ち楓は、本島原產の喬木で、分布區域は廣く、幹徑六尺、高さ八九丈餘に達する巨木となり、葉は內地の山椒（ヤマカヘデ）と板屋椒（イタヤカヘデ）との中間のやうな掌狀を呈し、秋季の紅葉賞すべく、又葉は、天蠶の養料となり、樹脂は香料に供すといはれる。

左手に近く二戶の蕃人家屋がある。屋根にも、四周にも、竹材を使用してゐる。鷄が澤山見えた。

雲懸橋以來、谷は大に狹まり、溪流は益〻清澄を加へ、急湍白雪を飛ばし、漸く深山氣分に打たれる。

午後一時四十分「六甲山標高　海拔三〇五九尺」地點に於て、正面直距約三里の天空に、新高山頂を仰いだ。陸測五萬一圖によれば、六甲山の頂上は、九三二米とあるから、三〇七五・六尺となる。予が小學時代に、始めて山上露營を試みた、鄕國の靈山米山（ヨネヤマ）と、其標高が相伯仲するので、特に懷かしみを感ずる。傍に高一尺程の石標に「山」裏面に「第四號」と刻んであるのを見た。

數十メートルの脚下に、急湍を見下しながら、崖側を辿ると、落葉闊葉樹は益〻多く、蕃屋點々たる附近には、頗る急勾配な傾斜地に、粟の栽培を見る、相當間隔に於て、横に石塊を列べたのが幾段もあるのは、表土の流失を防ぐためが讀まれる。粟は實に彼等が最も重要なる食料である。鷄も豚も澤山飼養してゐる。

途中屢〻蕃人に出逢ふ、「今日は」といふ底力ある挨拶をするのもあるが、唯張目の禮（？）で、通り過ぎるのもある。この邊の蕃人は、稍廣い筒袖の上衣の下に、略〻膝の邊にまで達する下衣を着

け、上衣には、白布を用ひたのが多く、男女とも好んで袖口には赤布を附けるらしく、時には內地製の派手な模樣ある木綿で作つた、所謂盛裝したものにも逢つた。そうして彼等が外出には、必ず離さぬといふ蕃刀を佩びてゐる。

午後二時「多良岳標高海拔三二四二尺」二時二十分「大屯山標高海拔三六〇九尺」の地點を通つた。陸測二萬五千分一地形圖によると、大屯山は一〇八〇・九米とあつて、三五六七尺となるから四十餘尺の差がある。

山の端を左に廻ると、谷間の稍開けた所、彼方此方に點々たる部落が見える。即ちトンボ社である。栽培した蘘荷畑を貫き、左手の小高い所にある東埔警察官吏駐在所に着いたのは、二時三十五分である。今日はこゝに宿泊を請ふのである。今朝既に內茅埔駐在所から、電話がかゝつてゐるので、早速導かれて、右手の新築客室に入り、案內によつて、客室の裏手に設けられた溫泉浴槽に投じた。

浴室は方二間、三四人位は、同時に入浴が出來る。客室も浴場も、皆檜造りといふ昨年の新築のことて、非常に氣持が良い。

溫泉の分析表によると、

クロールカルシューム	〇・〇〇六〇	クロールナトリューム	〇・〇〇七六
硫酸ナトリューム	〇・〇七八四	重炭酸ナトリューム	〇・二二八九
硫酸アルミニューム	〇・〇〇七一	重炭酸カルシューム	〇・一一五八
重炭酸マグネシューム	〇・〇〇五四	異性硅酸	〇・〇五六五

炭酸泉で、溫度は攝氏四十九度。外傷、打撲傷、慢性濕疹、神經衰弱、關節傻麻質斯、腺病等に效果があるといはれる。

予は幸に、平素身體が强健であるので、わざわざ湯治に出かけたことは無いが、高山の麓に於ける

溫泉は、下山に際し、連日の汗を洗ひ流し、且つ疲勞を醫し得るので、特に禮讃の辭を呈さねばならぬのである。

客室の床ノ間には、富士山に關する頂上其他の押印を集めた掛抽があり、長押には、大形な新高山頂の寫眞が掲げられてゐる。我邦第一の高山新高と、世界的名山富士の對照は、壯快の感無き能はずである。

床ノ間には、この邊の山で捕れた、熊鷹の剝製がある。弓矢も飾られてある。和琴が立てかけられてあるのは、奥樣の嗜みらしい。

活花には金盞花、庭には金蓮花とコスモスが、妍麗を競うてゐる。

臺灣の風土病として恐るべきは、マラリヤである。明末の義人鄭成功の死因は、マラリヤである。征臺に偉勳を留め給ふた北白川宮殿下の薨去も、亦マラリヤである。マラリヤは、蚊の一種であるアノフェレスが、媒介傳染するのだといはれてゐるが、免疫性的關係から、從來本島に居住してゐたものよりも、新來の人達の、罹る比率が、多いさうである。

アノフェレスの出るのは、夕方ばかりで、夜更けると、影を潛むるさうである。

予が經驗によると。內地では、我が鄕國魚沼駒ヶ岳の肩部、海拔約六千五百尺の高所笹藪の中に於て、八月中旬、ヤブカに襲はれたことがある。これは殆ど例外とする所である。通常三四千尺の高所であると、特に密林中で無い限り、大概蚊の憂は無い。臺灣では、四千尺以上になると、アノフェレスも棲息せぬので、マラリヤに對しては、安全地帶とされてゐる。

近年マラリヤ防遏規則を定め、施設勵行の結果、其成績は顯著であるといはれる。豫防劑としては、普通鹽酸キニーネがあるが、尙エスアノフェレスといふのがあり、六百六號の注射もある。されど六百六號の注射を受けるのは、淸淨無垢である紳士の體面を損するとて、高頭氏は笑殺され、一行

は唯平地旅行の際、毎日鹽酸キニーネ丸四五粒宛を服用するに止めたのである。この鹽酸キニーネは餘り連用すると。胃腸を害すといはれる。

東埔（トンポ）は、陳有蘭溪本流と、沙里仙溪との合流點に位し、海拔約三千九百尺。マラリヤに罹る憂も無く、東北近く郡大山（ゲンダイザン）（一萬八百六十五尺）の秀峯を背景とし、朝霧瀧、雲龍瀧の壯觀を現じ、正面には新高北山の北角（九千三十九尺）を仰ぎ、清澄豐富な溫泉の涌出地であるから、新高登山の目的を除外するとしても、優に遊士の情を惹くに足るのである。

この地は、又附近蕃社（ブヌン族）の總頭目の居住地であり、理蕃上の重要點地に位するので、駐在警官の數も多く、警部が主任となつてゐる。主任警部から貰つた名刺には「新高郡警察課勤務東埔駐在、臺中州警部勳七等猪瀨幸助」とあつた。栃木縣人とのことである。氏は十日程前に、臺中州警務部長兒玉魯一氏の案内をなし、新高山の頂上まで登られたさうで、これで新高登山は四十回目であると語られた。

門前の標柱に「新高郡役所間十二里八町五十七間、楠子脚萬駐在所間二里三十町一間、樂々駐在所間一里二十一町六間」と註してある。

晩食には、隣室に宿つた三人の客も加はり、猪瀨警部夫人の心盡しの御馳走に接した。鷄肉のフライ、蕃鯉の甘煮も出た。自然薯（クネンショ）のとろろ汁は、甚だ結構で、幾度も盛り替へて頂戴した。如才なき奥樣のお給仕で、高頭氏も、白鹿の滿を引いて、頗る氣燄を揚げられた。

蕃鯉は、こゝの川からの漁獲ださうで、ミゴヒの一種らしい。

和服であつた隣室の客は、警官とは思はなかつたが、差出された名刺によつて判つたのである。其一人は「大甲郡警察課勤務巡査部長、臺中州特務巡査藤島幸八」といふ名刺の末に、特に萬年筆で、「新潟縣南蒲原郡三條町大字一ノ木戸」と書き添へられたのは、我等と同縣人であることを表示された

のである。聞けば、我等が西口新高主山下から引返し、北口に廻つて、再擧新高登山を計畫したことが、新聞紙上に現はれたので、限りある日數、到底新高山の頂上までは、同行し得ぬとしても、せめては我等が風丰に接せばやとの希望から、他の警官二氏と謀り、三日間の休暇を得て、數十里を遠しとせず、わざわざ駈け附けられたのであつた。

晩餐が終ると、藤島氏は、かねて用意の硯と紙とを持出し、記念のためとて、我等が揮毫を需められた。予はそんな經驗を持たぬ惡筆であるからと斷つたが、猪瀨氏の援助をも得て、切に請求されるので、數十里の先きから來られたといふ、其心持を無にする譯にも行かず、所謂恥かき數葉を認めた。大町桂月氏が、其著『一簑一笠』に「立山の三夜」と題し、室堂（ムロダウ）で、神職から、天下の文士として推讃され、世に虛名を賣りたるを恥ぢたといふ意味の、一節があるのを思ひ出した。

猪瀨氏の話によると、この月十五日、我等が主山下から、新高頂上を越え、八通關に下るといふので、氏が指揮の下に、八通關駐在所勤務の佐藤巡査部長は、長澤巡査以下五人を引率して、我等を出迎のため、新高避難小屋まで出張し、同所から、十五分毎に、其消息の如何を、電話にて報告することは、十六日、十七日まで繼續されたとのことで、今更其厚意を謝すると共に、其苦心の程も痛察されたのである。

尙氏の談話を摘記すると、この附近の蕃人部落は、四十戸ばかりで、一戸の家族十五六人である。屋根には石板石を用ひる方が多い。目下彼等が水田開拓のため、朝霧瀧から、灌漑用水を引く工事中である。

新高山頂の晩降雪は五月二十七日といふ記錄があり、殘雪は七月下旬に及んだ年がある。

石南は、能高山（ノウカウ）方面七八千尺邊に、巨木が多い。そこで伐採したので、碁盤を作つたことがある。花色は絕對的純白なのは見ない。

鶯、時鳥も居るが、其鳴聲は、內地のに比すると流暢ではない。
河流に澤山河鹿も居るが、其鳴聲內地のほど優しみが無いとのことであつた。
成程夜更けると、隨分カジカの鳴聲も耳に入つたが、猪瀨氏の批評の通りであつた。然しこれ等動物の鳴聲は、其交尾期が、最も優良のものだといはれる。

△三月二十一日　晴　朝　東埔　六〇　夕　八通關　五四

早朝猪瀨氏の案內にて、近くにある朝霧瀧を見た。日光霧降瀧式で、水量は不足である。岩壁に樹木の乏しいのが遺憾である。途中輝綠岩らしい青い岩石を見たのは、この溪谷では珍らしい。駐在所の庭には、木瓜、紅竹が植ゑ込まれ、鉢には數種の蘭があつたが、阿里山自慢のタイリントキサウも、可憐な花を見せてゐた。タイリントキサウは、この邊の岩壁にも多い。

猪瀨氏、藤島氏其他警官諸氏の見送りを受け、東埔駐在所を出發したのは午前七時である。こゝからは、一人の警官が、肩銃帶劍といふ武裝で、我等を護衞された。

東埔、樂々間は、この登路中の最難所とされた所で、新道路開鑿以前は、左手數千尺の急坂を攀ぢ登り、更に數千尺を降つて、溪底を辿つたのださうである。今尙この間は、修繕を施しつゝあつて、蕃人を使役する警官達自身も、孜々として勞働に從事されるのを、所々で目擊し、並大抵のことではないと思はれた。蕃地に於ける警官方は、官吏であり、敎育者であり、政治家であり、技師であり、同時に又勞働者である。猪瀨警部は、鐵線橋の架設に取つては、オーソリチーとして推されてゐるとは、後に聞いたのである。

七時三十分「金剛山標高海拔四〇八二尺」が目に入つた。陸測五萬一圖によると、一一一二・二米とあつて、三千六百六十九・六尺となるから、四百十餘尺の過差がある。朝鮮金剛山とすれば、一六三八・二米即ち五千四百六尺であるから、一千三百二十四尺不足である。それで內地金剛山の標高とす

れば、この標木はずつと大屯山の方に遷座せねばならぬことゝなる。

此處を過ぎると、左方は暗灰色を呈した、絶壁的粘板岩の肌を露はし、往々この岩壁を穿ち、半トンネル式の奇道を作つた所もある。右方亦脚下直ちに斷崖數百尺、白龍珠を吐く底の急流を見下し、愈〻深山幽谷の氣分に打たれる。

林樹は尙アベマキ、ブナ、ケヤキ、シマサルスベリ、フウなどの落葉闊葉樹を主とし、クス、タブなどの常綠闊葉樹を混じ、其葉は淺綠、玄綠、淡紅、灰白とりどりの色彩を提供する。この邊秋季紅葉の美觀も想ひ遣られる。

岩壁には、イハヒバに伍して、例のタイリントキサウが鮮紅花を翳し、ムラサキミゾホホヅキの一品とも見たい大形の濃紫花が目を惹くのもある。苦味强く、食用には堪へぬといふ暗紅花のタイワンフキがある、其葉柄葉脈も著しく暗褐色を呈する。ニックヮウキスゲの一品が目に入る。全體頗る小形で、花は鮮黃色を呈し、六瓣花冠の內面に、白毛密生する。氣品ニックヮウキスゲに優ること數等である。

八時「溫泉岳標高海拔四四八七尺」、同十五分「箱根神山標高海拔四七四八尺」を通過し、同三十分「高千穗峯標高海拔五一九四尺」に着いた。こゝは尾根の突角に位し、眼界も開け、展望の好地點である。こゝの對比標木には、特に「內臺踏破二十名山標高、大正十二年八月第二回新高登山記念」といふ記入が見えた。これは臺灣山岳會の幹事で、臺北商業學校の敎諭である見元了氏の、企圖に成つたのだと聞いて、氏が自ら登られた、內地臺灣の所謂二十名山を、對比標識されたのだといふことが判つた。各地山岳に經驗を持たぬ人達が、この標識に接しても、さほど感興が起らぬかも知れぬが、自ら登つたことのある山名が目に入る時、其當時を追懷すると共に、この標高地點との比較聯想は、頗る興味ある印象となるであらう。

予はこの標木建設者には、多大の敬意を表するものであるが、唯踏破の文字に對し、何か穩當の語をと希望するのであつた。近頃此語が、ケーブルカーや自動車で登る山や、散歩的に、半日や一日で日歸りする登山までにも、使用される程、流行するのは、彼の探險濫用と共に、餘りに大袈裟過ぎる嫌ひがあるからである。殊に嫌はしいのは、征服の語である。人間の微力、仲々以て大自然を征服するなど言ひ得るものでは無い。予は唯大自然の一斑を窺ひ得たこと、其一片を拜し得たことの、感謝の念が涌くのみである。

予は山行に、マラソン的の行動は、勿論自分の柄でも無く、又好まぬので、到る所氣に入れば、路傍の石にも、芝の上にも、腰を卸して、西行然を極め込むのであるから、各地點の通過到着時刻は、唯大體の表示に止まるだけで、路程推測上、正確なる標準とはならぬことを、玆に附記するのである。

上方の岩壁から、脚下の崖側に亙つて、各種ツツジの花が點飾する。花は紅赤色を呈する普通のヤマツツジが多いが、淡紫色のミヤマキリシマやうのもあり、淡紅紫色の大形の花冠をつけたのに、濃綠な原葉を叢生した、西洋ツツジに似たのがあつて、葉の裏面にも蕚にも、白毛が密生する、花冠は五若くは六裂し、二個の上瓣には、數十の濃紅點があり、七個の雄蕊を有する。

帶紅白花のタイワンコバメグサ、ミヤマナデシコの一品が目に入る。このナデシコは、深綠の蕚著しく長く尖り、花冠先端の切込み甚だ淺く、內面に淡紫色の毛を密生する。

八時四十五分登山道路中の瀑王と稱される雲龍瀧に謁した。瀑は郡大山よりの溪流が、懸つて二段を作り、橋は二段の間を横ぎり、長さ六間許り、綾雲橋（アヤクモ）と名けられる。瀑の高さ、橋上百八十尺、橋下二百尺といはれてゐるが、惜いかな水量が乏しい。那智瀑が、西遊記の著者橋南谿子によつて、「美人の薄衣を着て立ちたるが如きものなり」と評されながらも、尙其水量は、優にこの數倍はある。「高八十丈餘、日本一の大瀑也和歌山縣」と註した、大々的標木が建てられ、縣が責任を負うて證明すると

いふやうに見えるが、果して日本一か否やは別問題とし、予が經驗した瀑中では、第一の高さとする。又南谿子は、更に那智瀑を評し「全體の奇にして美なること、言語に絶せり」と賞讃されたが、予は其赤褐色を呈した岩壁の、餘りに露はに過ぎ、且つ平面的であり、樹木の添景が貧弱であるを遺憾としたのだが、今この雲龍瀑に對しても、亦この感を同じうするのである。水量の豐富、瀑身の莊麗、副瀑の姿、岩壁の趣、樹木の添飾の點に於て、華嚴瀑は、實に優秀な景觀を具備すと謂はねばならぬ。

綾雲橋上からは、雲龍瀑の全景を見上げ見下すには、不便である。橋を過ぎて一町許り行くと、突角がある。瀑を見る最好地點であるので、數個の腰掛が設けられてゐる。

上瀑は、小闊葉樹や、小竹の點々たる、灰褐色を呈した岩壁の斜面を、所謂瀧式に滑り落ちるが、下瀑は殆ど直下的である。瀑壺の直徑は約十間、深くは無い。全體開放的であるから、幽邃の感は起らぬ。五六月の交には、水量が餘程增すさうである。瀑は山側彎入部の懷の奥に位し、この展望地と、高千穗峯標高地點とは、彎曲の兩端突角である。

瀑の展望臺から、程なく「阿蘇山標高海拔五二五五尺」がある。附近でヒメシヨンの一品を見た。咲始めは白色であるが、後淡紅色に變ずる。

スミレの數品も目に入る。白色に紅條あるのもある、鮮かな淡紫色を呈した花瓣の先端、優しく丸味を帶び、花冠の外面にも莖にも、細毛密生するのもある。紫白色で、花形イハチドリ式のもある。

林間を綴つた、ヤマビハの開花が目を惹く、圓錐花序を呈した黃白色五瓣の花は、頗る芳香に富み、若芽は赤褐色の毛を密生し、舊葉は普通のビハよりも更に硬く、深綠平滑であるから、庭木としては、寧ろ優つてゐる。大神宮忌火殿にて用ひる鑽火器は、ヒノキの盤と、ヤマビハの鑽とを使用すといはれる。

九時四十分樂々駐在所（海拔五千六百尺）に着く、東埔、樂々兩駐在所の中間で、樂々より出迎へ

られた警官と交代して、東埔からの警官は歸られた。各駐在所では、皆斯うして我等を護衞されるのである。

樂々（ラクラク）とは蕃語（ブヌン語）溫泉を意味し、この崖下數百米の溪底には、豐富なる溫泉が、數ヶ所に涌いてゐるが、位置不便のため、利用出來ぬとは惜しい。『臺灣府誌』の「望玉山記」に「山之麓有溫泉」とは、東埔や此處のを言ふのであらう。

駐在所の周圍には、數十株の吉野櫻が咲いてゐたが、花着き疎らで、色も良くない。單に若木のためのみでは無いらしい。

樂々駐在所から五町程行くと「藏王山標高海拔六〇七五尺」がある。十時十五分「石槌山標高海拔六五三七尺」に着いた。ウテフランの一品が目に入る。總狀花序に十花ばかりを着け、淡紅色を呈し、舌瓣內面基部稍黃を帶びてゐる。

十時四十五分「大山標高海拔六六七六尺」を見る。陸測五萬一圖によると、伯耆大山は一七一二・九米即ち五千六百五十二尺强であるから、一千二十餘尺の差がある。大日本地誌には一八七七米即ち六千百九十四尺とある。それでも餘りに過差があるので、高頭式氏著『日本山嶽志』を調べて見ると、我國で、大山と銘打つた山が八つある。其中最も有名なのは、年登客十五萬を算するといふ、相模の大山であるが、其標高は四千百三十五尺であるから、益〻以て低下する。其他の大山は、二千七百尺以下で、到底問題にはならぬ。この八個の大山の外、更に廣義に解釋すれば、役行者の修驗場として名高い大峯山がある。大山蓮華の發祥地として、大山の尊號を呈されてゐるのだが、この山彙中の最高峯佛經岳は一九一五米即ち六千三百十九・五尺であるから、尙頗る差がある。それで伯耆大山だとすれば、この標木は、阿蘇山と藏王岳との間に、移住せねばならぬ。

左手の崖壁にかゝる樂々瀧があるが、相變らず水量は甚だ乏しい。幾段階に數百尺を瀉下する姿

は、朝鮮金剛山の名物十二瀑に似てゐるが、規模は頗る小さい。又樹木の添景を缺くを遺憾とする。

樂々以來、原始林的大森林に入り、右手木ノ間より、脚下數百米に見下す陳有蘭溪は、水色益〻清徹を加へ、激しては珠玉を飛ばし、湛へては碧潭を作り、走つては白瀨となり、景は愈〻幽邃、境は益〻靜寂を感ずる。

樹種は尙アベマキ、ナラ、ブナ、ケヤキ、タイワンハンノキ、クス、シヒ、ウラジロヤツデなどの闊葉樹が多いが、追々ベニヒ、タイワンスギ、ヒノキなどの針葉樹が混じて來る。林樹には、シヒタケの自生が多い。先年この邊の林地を卜して、椎茸栽培を試みたものがあつたが、不備の點があつて、程なく廢止したとのことである。

林間を彩どるタイワンヒザクラの深紅も目を惹き、所々石斛（セキコク）が古木を裝ふ。

路傍を飾るスミレの品種は益〻多く、スミレサイシンの一品に、葉柄花梗暗紫色を呈し、花冠は白色に紫條あり、唇瓣は甚だ長く、先端二裂するのがあり（カハカミスミレ）。シハイスミレの一品に、葉裏暗紫色著しく、花冠は全體鮮かな淡紫色を呈し、唇瓣長く、先端二裂するのがある。

樹幹の標示に、「亞杉」、「臺灣椿」、「巒大肉桂」など註されたのを、ぽつぽつ路傍に見て來たが、幹の直徑二尺程のタブに「タブ一九九」といふ標札が、打ち附けられてゐた。これは臺中州廳の計畫で、臺北高等農林學校助教授鈴木重良氏の實地調査に基き、昨年水裡坑より新高山頂上に至る、各林帶代表的主要植物二百五十點の名稱說明附標札を設置されたのだと聞いた。登山者に大なる興味と、禊益とを與へる。

タイワンツバキ即ちシマツバキは、白花氣品に富み、種子からは、優良な油が採れるさうである。

この邊にはミカドキジが多い。

臺灣には、咬まれると、百歩の内に斃れるといふので、百歩蛇の名を得た毒蛇を始め、雨傘蛇、タ

イワンハブ其他數種の毒蛇が多いと聞いてゐたが、予は樂々、對關の間で、一匹のハブを見た外、ビヤナン道路の北部で、亦ハブの一匹を認めただけである。

十一時三十五分對關駐在所着。辨當をしたゝめた。こゝの名物といはれる牡丹餅に、漬菜を添へて饗されたのは、甚だ結構であつた。駐在所に接して「戸主岡崎乙作」といふ木札を掛けた住宅がある。登山期に於ける宿泊、賄等を引受けるのらしいので、辭退されたが、强ひて謝儀の心附を呈した。

此處は海拔七千一百尺。我鄉國の名山苗場山の頂上と、其標高が相伯仲するのも心地よく、附近の針葉樹林は、益〻高山氣分を唆るのである。

對關とは、八通關に對するといふ意味からの命名だといはれる。

十二時對關駐在所を出發した。

零時十五分「烏海山標高海拔七三五九尺」、同四十五分「旭岳標高海拔七五五八尺」が見參に入る。「自觀高駐在所二十一町五間」と註した標柱がある。この邊ベニヒの幹徑一丈にも餘るのが多く、路傍に其大なる空洞内に、蕃人が野宿焚火した形跡が存する。

一時五分老幼瀧といふ、珍奇な名を持つ、高さ約二十五尺の優しい瀧がある。この水清冽、盛夏に於ける登山者には、多大の恩惠を與へるといはれる。岩壁にツバキの一品を見、附近ミヤマキンバイ、ニヒタカリンダウ、ムラサキミゾホヽヅキの一品、ニヒタカミヤマチヽコ、ニヒタカシラタマ、ミヽナグサの一品が目に入る。このミヽナグサは、オホバナミヽナグサのやうな雪白の花で、五瓣の尖端は、僅かに切込あり、葉は長さ三寸位、奇數羽狀複葉で、小片は九個を有する。ヲサバミヽナグサとでも命名したい姿である。

一時三十分「男體山標高海拔八一九八尺」を經、同四十分觀高駐在所に休憩し、豫め歸途に於ける宿泊を願つた。巡査部長井上恒吉氏（山形縣人）の語る所によると、一昨日の寒さには、飲用水に供する

筧の水が凍つたとのことである。途アキノキリンサウ、アリサンマンネングサ、ニヒタカコケモモ、シマイハカヾミを見た。

觀高は海拔八千三百尺、眼界豁然と開け、西南には直距約一里、新高主山の豪壯な峯頭天に朝し、其右には、玄裳を纏うた北山が、近く侍立し、東方直距約一里半、山頂穩かな廣さ、緩かな側線を延べた秀姑巒山、マボラス山が握手し、郡大山は近く北に峙ち、更に北方には、中央山脈の高峯峻嶺蜿蜒として相連り、晴れた日には、次高山まで眸子に入るといふ絶好な展望臺で、觀高の名、眞に空しからずと首肯れる。この地は陳有蘭溪と、郡大溪との分水嶺に當るのである。

二時觀高駐在所を辭した。路傍に沿うて、十數町に亙るといふ筧は、觀高駐在所の飲用水道である。「吳光亮が建てた鐵門峒の遺蹟は此の溪谷にあり」と書いた標札がある。今は唯岩壁の鐵色を呈するのが、目に入るだけで、別に關門の形跡とか、洞窟とかは認めぬといはれる。鐵門峒は、鐵門洞、或は金門峒とも書いてある。

稜線を辿り、ヒノキ、ニヒタカコメツガ、ニヒタカゴエフマツ、ニヒタカタウヒなどの針葉樹下、シャクナギが、眞紅と淡紅の花を點飾するのは奥ゆかしい。この邊のシャクナギは、高さ丈餘に伸び、葉の裏面は、淡綠色で毛が無い。ニヒタカナナカマド、ヒヽラギナンテン、ウラジロヤツデがある。フカノキが多い。數種のツツジもあるが、花はまだ見せぬ。ツガには、幹徑一丈以上のが多い。針葉樹の枝々には、サルヲガセがかゝつて、奇しき綠白の色を裝ひ、愈〻高山氣分を加へる。

左手の崖側には、優しい瀧々もある。

同二十分「八通關十二町十二間」と註した境界標柱が目に入つた時、行手に「氣を附け」の號令が聞え、路傍に整列して「立て銃」の姿勢を取つた、軍人らしいのが見えるので、何んであるかと怪んだが、やがて指揮者の人が、差出された名刺を見ると「新高郡第五監視區第三巡視區監督、臺中州巡

査部長佐藤英三郎」とあつた。氏は特に我等を出迎へられたのである。こゝから一個部隊の警官の護衛を受けるとは勿體ない。黒と白の二頭の犬まで、前になり後になり、一見舊知の如しといはんばかり、馴れ馴れしいのも嬉しい。

同二十五分「白山標高海拔八九一七尺」、同三十五分「海拔九千三百尺」の標木を見、開闊なる草原に出で、二時四十五分今日の宿泊を豫め請ふてある八通關警察官吏駐在所に到着した。

我等は導かれて、左手にある、木の香尚新らしい檜造りの客室に入つた。こゝにも東埔駐在所で見たのと同型な、新高山頂の大寫眞が掲げられてゐる。

佐藤巡査部長の需めにより、登山者芳名錄といふに記名し、實費で讓り渡す新高山の繪葉書を需め、記念スタンプを請ふて、繪葉書にも、予が記念印帖にも押した。北口沿道の各駐在所には、各スタンプの備附があるが、皆圓い輪廓の中央に「新高登山」右に「駐在所所在の地名」、左に「海拔何米」、上部に富士山で用ひるスタンプに倣つて、富士山形を附けるといふ、一定形式であつたが、この富士形には、別に意匠を欲しいと思つた。八通關には、尚外に「新高山頂上、日本最高、海拔三千九百五十米」と刻んだのを保管してある。

登山期には、寫眞師が出張して居り、記念撮影の需めに應ずることゝなつてゐる。

西口では、登山期となれば、鹿林山、西山、新高下の各休泊所に、各記念スタンプを備附けるさうだが、我等のは、其時期で無いので、之を全部保管してある阿里山駐在所で、捺印を請ひ受けた。これは形式が各違つて居り、文字の書風彫刻も優れてゐる。殊に新高下休泊所のは、横楕圓形で、中央に新高山頂の形を入れてある。

時間に餘裕があるので、屋外散歩を試みた。この駐在所は、海拔二千八百十八米といふから、九千二百九十九・四尺を算し、能高越横斷道路にある能高駐在所（九千四百三十八尺）に亞いで、我邦駐

在所の絶高地點に位し、又人間の常住地としても、非常な高地點を占めるのである。八通關駐在所の地點は、五萬分一蕃地地形圖には、九千三百七十四尺とあれど、前記のが、最近の測定にかゝるのである。

八通關駐在所は、二子山の裾野に位し、附近は、豁然たる高原的草地を展開し、氣宇清爽、眞に仙境に入る感じがする。

二子山は、端麗な富士山型を呈し、水成岩的構造にかゝる山容としては、殆ど他に類例を見ぬ美しさであるが、左方其頂上近き側線に、數株の針葉樹が點飾するは、錦上更に光彩を添ふといふ趣がある。

前面緩かな斜面を呈した草原窪地を隔てゝ、八通關山がある。其尾根悠然として左に延び、是亦宛然築山の景致を展開する。然しこの築山に遮られて、秀姑巒山の英姿を見られぬは惜しい。この附近の山々には、松茸を多く產するさうである。

草原は、一面に高さ一尺程のタカネスヽキが蔓衍し、短縮したタイワンアセビ、アカゲツツジ、ヤマツツジ、ニヒタカアザミ、ニヒタカシラタマ、タイワンシモツケ、サクマリンダウ、アスヒカヅラなどが點綴してゐるが、散歩的行歩は、自由自在である。アセビは若芽淡紅を呈するのが多く、總狀花序に綴る帶紅白色の壺狀花は、ぽつぽつ咲き始めてゐるが、ツツジは尙蕾であつた。この草原を白化するといふタカサゴユリは、芽吹き尙短く、尺餘の枯葉が殘つてゐる。サクマリンダウは、形態タウヤクリンダウに酷似し、更に短小である。まだ花を見せぬ。この名は佐久間武斷總督の姓に基いたのである。

明治七年、我が西鄉都督の、臺灣征服の刺戟を受けて、大に目覺めた淸國は、光緒元年(明治八年)總督沈葆楨の建策に基き、蕃地横斷道路三線の開鑿を決行したのであるが、八通關道路は、即ち其一

新高主山の肩部より仰いだ主山の絶巓。前景の樹木はニヒタ
カビャクシン。雪下にはビャクシンとギナクャシとを藏す。

つである。當時其任に當つた吳光亮は、一千五百の兵勇を率ゐ、一ヶ年を費し、林圯埔（リンキホ）（今竹山）より、茅埔、東埔を經て、八通關に至り、關門屯營を設け、大崙溪底を經て、璞石閣（今玉里）に達したのである。當時この地は、將來四通八達の要衝を占めんとの意によつて、八通關と命名したのだといはれるが、今尙屢〻凶蕃出沒の巷を脫する能はずとは情ない。

大日本地名辭書によると「ツオオ蕃は、新高山をバットンコァヌといつてゐるから、八通關は、之に宛てたる近音譯字なること疑なし」とある。

八通關道路は、其後非常に荒廢に歸したので、大正八年以降、水裡坑より八通關を經て、玉里（ダマサト）に至る立派な警察道路が竣功し、今尙漸次改修を施しつゝある。又大正十三年、八通關より新高主山に至る、登山道路も開かれた。この間二里三十町である。臺灣山岳會の『新高登山のしをり』に、一里三十二町とあるは、誤りである。

八通關駐在所の門前に「舊蹟　吳光亮駐屯宿舍跡是より約一町」とあるが、今は唯雜草の裡、礎石の散在を見るばかりである。光亮が此の邊に建てた「過化存神」と題した碑石は、高さ七尺、幅三尺餘と言ひ傳へるが、是亦其所在、今以て不明であるといはれる。

八通關駐在所は、方一町ばかり、高さ六尺程の土壘を繞らし、塹濠、鐵條網、逆茂木を設け、機關銃を備へてある。內門の傍に、蕃刀掛がある。尺角高さ一丈許りの門柱に掛けた、長さ六尺の標札には「臺中州新高郡八通關警察官吏駐在所」と書いてある。

玄關正面、高さ二尺程の土盛りの上に「皇太子殿下臺灣御行啓記念植樹」と註した標木が建てられてゐる。所謂記念樹の主なるものの標示を見ると、

新高石楠木	ミヤマアカマツ	ヒヒラギガシ	新高ツゲ
アカゲツツジ	タイワンアセビ	シマ柏杉	新高柏杉

新高コケモモカマツカ（目下調査中）

とあるが、新高ツゲは、葉長さ一寸强、幅二分位、アカゲツツジは、葉の表面暗紅褐色、裏面淡綠色、莖及花梗蕚に、赤褐色の毛が密生する。シマ柏杉は、杜松に似てゐる。新高コケモモカマツカは、葉コケモモに似、裏面赤褐色を帶び、蕾はツツジに似てゐる。

新築室の玄關には「臺中州新高郡蕃地トンポ社二番戸佐藤英三郎」と記された小標札がある。此處も、トンポ蕃社の地籍と見える。

案内されて、下駄を引かけ、別棟となつてゐる浴場で入浴した。先年の暴風で、大破壞を被つたとて、假普請ではあるが、海拔九千餘尺の高地に於ける浴場で、全身の汗を洗ひ流すとは、生れ落ちてから、始めてであるので、言ひ得ぬ感興も涌いた。何れの駐在所でも、皆新らしい石鹼を提供されるといふ鄭重な取扱を受けるのは、恐縮である。

浴を終へ、別室で晩食が出た。山羊（羚羊の一種即ちタイワンカモシカ）の剝燒（すきやき）、鷄肉のフライ、烏賊の醋味噌和へ、菜浸し、甘藍漬、豆腐汁といふ、所謂山海の珍味を、この天界に於て饗されるとは、實に意外であつた。佐藤部長殿の快活振りに、警官の奥樣方の御給仕にて、白鹿の銘酒を侑められ、高頭氏の氣燄當るべからずである。饂飩のしつぽくを添へられたのは、下戸の腹をも思ひ遣られての心盡しの程勿體ない。この豆腐は、此處で製造される。佐藤部長殿は、東京の產ださうである。

宴酣なる時、遠雷のやうな音響を聞くと共に、我等が座敷は震動した。床板はむくむくする。屋舍はむつむつと音がする。地震であつた。釣りさげたランプが、三四寸も左右動する程の强震であつた。時計を探ると五時五十五分である。七時五分再び震動したが、前のより弱かつた。下界で大なる被害が無ければよいがなど言つたが、後日下山して、之を聞くと、何處も、地震などの感じが無かつたといふから、單に局部的高山地震であつたらしい。

星は爛として空に輝く、地震は門出の吉兆を示す諺があるなど、自分免許の氣餤の下に、快く華胥の夢路を辿つた。

この日は、彼岸の仲日に當るのであつた。

二一、再び新高主山に向ふ

新高瀧、長命水、富士山標高點、東山の大岩壁、氷雪、狂風、遺憾千萬、新高と富士の標高比、新高觀。

△三月二十二日　快晴　朝　八通關　三三　夕　觀高　五五

今日は再擧新高主山の絶頂を極めようとする日である。早起天を窺ふに、星は相變らず燦として紫紺の空に瞬く。珍らしい快晴さに、一同喜び勇み、午前七時八通關駐在所を出で立つた。佐藤部長殿は、自ら案内護衛の指揮を取られたのは、感謝に堪えぬ。

一行は我等三人及び

臺中州巡査部長　佐藤英三郎　臺中州巡査　早瀨定一

臺中州巡査　谷岡政喜　臺中州巡査　波鳳池（本島人）

臺中州警手　テンノアナ、アバリ（蕃人）　臺中州警手　ルァッアナ、テブスグ（蕃人）

警官六人、合計九人である。我等が苦力は、駐在所に休ませた。

駐在所門前に「新高登山道從是新高主山約三里」と註した、高さ六尺ばかりの標柱がある。登山道路は、駐在所の南から、二子山の南裾を辿り、尙草原に通じてゐる。ミヤマアカマツの低いのが、疎らに點在する。程なく左手數百尺の下方に、雪を吐きつゝ東南に向つて奔下する溪流を見下す。本島第二の長流といはれる下淡水溪（四十里）の上流茅濃（ロウノウ）溪である。道はこの溪流に沿うて、爪先上りに溪間

に進み入るのであるが、進むに從ひ、溪水はだんだん近づき、遂にはこの溪水を、或は左に或は右に縫ひつゝ進むのである。

同二十七分「御岳標高海拔一〇一〇九尺」の地點に着いた。新高山頂は愈〻近く、東山と相重なり接した主山の姿は、豪壯魁偉なる東山の岩壁に、其大部分は遮られるので、東山が寧ろ主體なるかの感じがする。二山の壁皺を劃する幾條の雪溪は、實に目覺ましい。

古色蒼然たる針葉樹が、漸次見參に入る。深山を物語るサルヲガセは枝にかゝる。樹下にはシャクナギが蟠る、蕾はまだ固い、葉裏は無毛淡綠である。ニヒタカヤダケが茂る、其高さは五六尺に達する。段通よりも、尙柔かい厚い蘚苔は、一面に地上を蔽ふ。高山氣分益〻濃かに、身は仙境を辿る感に打たれる。

幹徑一丈以上のコメツガが立ち並ぶ所、倒壞した小屋がある。

同五十分右手に一條の瀧を鑑賞した。曲折三四段をなし、高さ數百尺、コメツガ、ニヒタカゴエフ、ニヒタカタウヒ、ニヒタカトヾマツ、ニヒタカビャクシン、シャクナギなどの古木老幹は、森々として之を蔽ひ、其景致の點に於ては、雲龍瀧を凌駕すること、正に數等である。唯水量の稍乏しいのは遺憾である。この優秀な瀧に、まだ名が無いといふので、予は早速新高瀧の尊號を呈したいと提議した。この邊は、この十五日の降雪七八寸に達したとのことであるが、今は殆ど消え失せた。

程なく「能高越標高海拔一〇七三〇尺」を見た。名山に能高越といふも、稍おかしいが、我邦公道中の絕高地點といふに對し、大に敬意を表して置きたい。然し大正十四年陸地測量部の測定によると、能高道路最高地點の記念標は、三三〇七・八米とあるから、換算すると一萬九百十六尺弱となるのである。

八時二十五分「罪滅シ壽水」といふ難しい名の標示ある泉水を見た。盛夏炎天打續くも、涸れぬさうである。

同三十分「登山者避難所」といふ標札を掲げた小屋に到着休憩した。この邊今尚殘雪が七八寸あつた。

傍の標柱に「八通關一里三十七町、主山頂上一里三町」と註されてある。

避難所は、八間四間、中央を横ぎる土間の通りがあり、爐がある。窗や烟出しの設備は、西口の休泊所に比べると優つてゐる。此處で焚火で暖を取りつゝ、佐藤部長殿の厚意にかゝる、暖かい赤飯に、テンプラ、煮附、漬菜などの御馳走で、充分腹支度を整えた。

この避難所から、八通關駐在所まで、電話の架設があるので、部長殿は、こゝに到着の際、直ちに電話で「捜索隊一行、只今避難所到着、休憩、一行元氣旺盛」、又こゝを出發の際は「只今避難所出發、頂上に向ふ、八時四十五分」と報告された。蕃地駐在所では、斯うして場合に、總て捜索隊といふのが慣用語となつてゐるのである。

八時四十五分避難所出發、谷間から差して來る、麗かな朝日の光を背に受けつゝ、七八寸の雪を蹴立つて進むも心地良い。

高さ尚數丈の針葉樹が多い。たとへ谷間とはいへ、一萬一千尺以上の高地に於て、この景觀に接すること、臺灣ならではとの感を起させる。

九時十分「長命水」と題した、清冽な泉を見た。この登路に於ける最終の飲用水である。

高砂の島に名高き新高の峯に流れる長命の水

と記した新しい標札も見えた。「峯より漏るゝ」と修正したいなど、動議も出た。

所謂九十九折坂にかゝると、「子を連れた水鹿の新らしい足跡がある」と、先頭の人達から、聲が傳つた。この谷には、水鹿、羚羊が多い、熊も猿も隨分居るさうである。

九時四十分「富士山標高海拔一二四六七尺」が目に入つた時は、流石は日本否世界的名山であるだけ、

我等も亦數回の曾遊を追懷して、無限の感興を催したのである。この邊積雪は、約一尺五寸であるが、表面僅かに脚を沒する程の堅みであつた。

ニヒタカトゞマツ、ニヒタカビャクシンも既に縮つて、身長を超えるのは少い。シャクナギも地を匐ふ。其葉裏には、褐色の毛茸を有するのが交る、所謂ニヒタカシャクナギである。

正面近く主山東山を仰ぎ、豪壯な岩壁は、我等を威壓する。この地點は、正に二山の中間前面に位し、初めて主山の眞威容を拜し得るのである。こゝから見たる主山の絶巔は、恰も將棋の駒を稍斜めに立てたやうな姿を現じ、東山は、鋭尖三角形の尖頭を、稍碎き取つたといふやうな形を呈する。そうして稜々たる岩壁は、稍東に向つて低斜する層狀を明かに認め、二山とも當面岩壁が、著しき風化侵蝕作用を受け、殊に主山の頂部は、其崩壞の跡が、非常な急斜面否寧ろ垂直的絶壁を示してゐる。

更に東山左側の岩壁に至つては、稜々たる竅法の極致を現じ、絶巔より老濃溪底に達する幾千尺、七八十度の傾斜を以て、一氣に刷下する其凄絶、其壯絶、眞に驚異に堪へぬ。この岩壁を縱貫する、幾筋かの太き白い石英脈の奇觀が視線に入る。予は曾て黑部溪谷に於て、豪壯雄偉なる花崗岩壁を賞讃した。予は曾て我鄕國清津峽谷に於て、嶘々天を刺す、崇嚴偉麗を極めたる柱狀節理の安山岩壁を禮讃した。予は今東山の岩壁に對し、玆に予が經驗の範圍に於ける、岩壁景觀の三光を擧げ得たことを、永遠の印象とし、絶大の光榮とするのであるが、更に更に一頭地を抽いたものは、朝鮮金剛山に於て之を見るのである。金剛山の新萬物相がそれである。百鍊千磨の天工を經た銀劒玉筍、閃として虛空を衝くもの幾千萬。新萬物相は、實に花崗岩が作つた岩嶂美として、正に帝王の榮冠を捧呈せねばならぬと、予は推奬するのである。

東山を斜左に見、愈〻主山の頸部にかゝり、急斜面を半ば右に雁行形に辿る。雪は益〻深く、風漸く加はり、寒氣身に染む。凝結した雪面は、强く日光を反射して眩く、一行の行動は、頗る遲々と

なる。高頭氏は、既に金剛杖が折れたとて棄てられ、予ば攀登には寧ろ邪魔となるので、金剛杖を假柏槇の枝に一時預けとした。警官諸氏は、初め帽の顎紐をかけられたが、尙風に吹き飛ばされる虞れがあるので、手拭を以て、帽の上部から顎にかけて、確かと結ばれた。この邊の積雪は、三尺以上であると、佐藤部長は推測された。雪面の氷結は、漸次硬度を加へ、勾配益〻急となるので、唐鍬で足場を刻みつゝ、電光形を描いて登る。一歩踏み誤つて、滑り始めたならば、谷底まで墜落を免れぬ危險さであるので、用意周到なる佐藤部長殿は、數條の麻繩を以て、各自の體を連結することゝした。これは登山用ロープでは無くて、捕繩の利用であつた。

歩一歩、風と寒さは加はる。雪面は遂に堅氷のやうな狀態となり、打込む唐鍬は、時々撥ね返さる。我等は鐵樏(カナカンジキ)を携帶したのだが、この硬度狀態では、使用不能である。予は内地高山の殘雪に於て、未だ曾てこの樣な經驗は持たぬ。一は日光に强く照されて、水と融けたのが、俄然峯卸しの酷烈な寒風に接して、氷結するのか。一は著しき暖風寒風が、交互に吹き附けるので、この氷結を見るのか。殊に驚異に堪えぬのは、打ち込んだ唐鍬のために、碎けて片々となつたのが、數秒ならずして、各片復忽ち相結合するのである。これは正に前者の理由であらう。氷片の落下は、恰も、ガラスの破片のやうで、下方にゐる人達を惱ますこと、一通りでは無かつた。

斯うして一歩一歩踏み留めながら、匐ふやうにして攀ぢ登り、絶頂は既に數十尺といふ、手に取るばかり近づいたのだが、吹き下す風は益〻猛烈となり、岩角に衝き當つては、ヒューと唸りを發する程で、若しも我等が體を、岩陰から現はすに於ては、一溜りも無く、吹き飛ばされん勢となつた。秋にはこの邊の岩上に群生するコダマギクが、全身に銀白の錦毛を裝ひ、氣品高潔な、白色黄心の頭狀花を現じ、臺灣高山植物代表者の一として著名のものといはれる。この名は兒玉總督の姓に基いたのだが、又ニヒタカウスユキサウの名がある。飯豐山(イヒデサン)や、木曾駒ケ岳、甲斐白峯山(シラネサン)に見るミヤマウスユ

キサウの兄弟である。

我等が富士山標高附近に登り着いた時、本山頂上の經驗に富まれた佐藤部長殿は、「天上に風の音が聞えるが、大したことが無ければよいが」と言はれたのであつたが、果して風力は實に大したものとなつた。一片の雲も無い、この快晴に、この狂風とは、不思議に堪えぬが、所謂颱風本場の高山頂上氣象は、特異と謂はねばならぬ。

遺憾千萬ながら、岩陰にしがみ着きながら、天皇陛下の萬歳を三唱して、下山の途に就いた。時に十時十分であつた。富士山標高地點に降ると、夢かとばかり、風は殆ど無い。日光に融ける雪水は、岩角から滴り落ちる。寒さに震へた身體は、此處では、背に汗を催すのである。高距僅か五百尺前後の差で、斯くまで違ふものかと、唯々驚くばかりであつた。

我等は遂に海拔一萬三千三十五尺の峯頭に立つことが出來なかつた。されど西口及北口の兩方面から、殆ど其頂點に肉薄したのであつた。負け惜みでは無いが、見學としては、殆ど成功した。否寧ろ得易からぬ經驗に惠まれたのである。富士山に登る人達の、十中八九は、御鉢廻りをなすでも無く、況んや劍ヶ峯の尖頭に立つなどは、夢にも思はず、唯淺間(センゲン)神社奥院の參拜を以て、打切りとし、愴惶として下山の途に就き、これで富士山の頂上を極めたなどと放言するのに比べたなら、我等の新高登山は、大に意義ありと、自ら慰安せねばならぬ。殊に西口に於ては、德永巡査、北口に於ては、佐藤巡査部長を始め、官憲諸氏が與へられた、深甚な好意援助は、永遠の印象として、感謝に堪えぬ所であつた。

曩きに西口楠梓仙溪頭から、主山に向つた時、予は壯觀無比の霧氷に接したのだが、其生長は、南に向つて發達してゐた。即ち南烈風の成果であつた。今老濃溪頭から、主山に向つた時、吹き下す狂風は、矢張南からであつた。要するに、一小局部に於ける、突發的氣流の變調では無いといふこと

は、推察されるのである。

明治三十八年十一月三日午後三時に於ける、總督府員の、新高山頂氣象の觀測によると、

地點	氣壓	氣溫	濕度	風向	風力	天氣
新高山頂	四七五・七	一〇・〇	六二	北西	三	快晴
臺南	七五六・〇	二六・四	五六	北々東	二	晴

主山の標高は、明治三十年陸地測量部假製二十萬一圖には、四一四五米即ち一萬三千六百七十八・五尺とあるが、其後一萬三千二十尺に下落したこともあり、一萬三千七十五尺と稱されたこともあつたが、最近精査の結果、三九五〇米即ち一萬三千三十五尺と決定されたのである。

臺灣山岳會發行『新高登山のしをり』及總督府營林所發行の『新高登山案內』には「富士を拔くこと六百四十八尺」とあるが、これは明治四十四年頃の世界年鑑に、富士山の標高を、一萬二千三百八十七尺と書いてあるのに、比較したものらしい。又總督府發行の『臺灣事情』(昭和二年版)には「富士山を凌ぐこと實に六百三十五尺」とあるが、これは以前に於ける、多くの地理書に、富士山標高の概數を、一萬二千四百尺と書いてあるのに、比較したものらしい。陸測五萬分一圖によれば、富士山の絕巔劍ヶ峯の標高は、三七七八米とある。之を換算すると、一萬二千四百六十七・四尺となるから、實際富士山より高きこと、五百六十八尺弱でなければならぬ。

多年臺灣高山の測量に從事された、總督府技師野呂寧氏によると、新高山の頂上は、古生紀粘板岩及び砂岩より成り、側面は特に風化作用を受け、解體崩壞始終止まぬ。主山の絕巔は、幅十尺內外、長百尺ばかりに過ぎずとのことである。

臺灣山岳會發行の『臺灣山岳』(第三號)によると、新高山頂に、始めて神を祀つたのは、明治三十九年森丙午氏で、其後木造の小祠を建てたが、跡形も無くなつたので、大正十四年新高郡守今井昌治

氏及び警察職員によつて、今の石祠が建てられ、新高祠と稱し、臺灣神社一座、大山祇神一座を祀り、祠宇は北面し、普通の社殿風で、玉垣を繞らし、基礎東西四尺五寸、奥行四尺、高さ四尺、建築は全部石材で、濁水溪底産の砂岩であるとのことである。

北山は、絶巓近くまで、ハヒビャクシンの衣を纒ふてゐる。高山蕃と稱されるブヌン族は、其祖先發祥の地として、祖靈鎮座の所として、無上の敬意を拂つてゐるといはれる。

見元了氏によると、主山の山容は、西山の頂角から仰ぐと、巉岩削立した魁偉の容貌は、蝙蝠が翼を擴げたやうであり、東方大水窟附近から見ると、主山の手前に、東山が重なり、新高山彙の全部を見るには、最好地點ではあるが、主山の容姿は、平凡となり、北山から見れば、立派な急傾斜の富士形となつて、頗る美しいとのことである。

十一時避難所に歸着し、部長殿は直ちに電話で、八通關に報告された。主山の頂上にてといふ、準備の神酒を、此處で載き、赤飯に佳肴を賞味し晝食とした。

正午避難所を發し、午後一時八通關駐在所に歸着した。

二二、八通關より水裡坑に降る

ナマカバン社、高頭氏歸京。

八通關、觀高附近の景觀は、高山氣分に浴し得る、優秀な境地である。「こんな處には、幾日も滯在してみたい」と言はれた、高頭氏の推奬には、予も大に共鳴する。予は此處に數日滯在して、數回の主山訪問を試み、所謂絶巓呼號主義の遂行を得たい希望もあつたが、多年の經驗を有される佐藤部長氏が、當分氣象緩和の見込立たぬを表明され、高頭氏は、東京の寓居に、取急ぎ歸らねばならぬ事情があるので、予は深刻な未練を殘しながら、この恢復を南湖大山（ナンコダイサン）に期待して、下山の途に就くことゝ

した。

午後二時二十分警官諸氏の護衛を受け、八通關を出發し、同四十五分今日の宿泊を豫め請ふてある、觀高駐在所に投じた。時間は甚だ餘裕があるので、附近の散歩展望を縱にし、聊か以て主山絶巔逍遙不能の埋め合せとした。

△三月二十三日　快晴　朝　觀高　四八　夕　ナマカバン　八〇

例により、昨晩は鷄肉の料理に接したのだが、今朝亦鷄肉鷄卵を肴に、銘酒まで出されたので、高頭氏は、すつかり上機嫌となり、麗かな朝日の光を浴びつゝ、警官の護衛を受け、七時四十五分觀高を發した。

天氣は良し、道は下り一方、實に優々たるものである。對關より東埔に至る道すがら、タイワンヒザクラは始終其眞紅の異彩を、林間に放つて、見參に入つた。花の下蔭とは、歌にも詠まれるのであるが、予は見下す方を愛する。明るい其鮮かみは、この方に存するからである。幹の直徑二三尺以上のを、所々で認めた。

對關、樂々の間、岩壁に小規模な洞門式空隙があつて、內部に小形な鐘乳石を生ずるを見た。

雲龍瀧を品評し、高千穗峯標高地點に於ける、展望景觀に浸りながら、辨當を使つた。對關、樂々、東埔の各駐在所へは、一寸立寄り、午後三時二十分、我等を見覺えゐた愛らしい蕃童達の敬禮を浴びつゝ、楠子脚萬駐在所に投宿した。此處でも亦新築檜御殿に納まるとは勿體ない。

この地の兒童教育所で、今教育を受けつゝある蕃童は、二十五人あり。警官が教員兼務である。校庭に數株の葉櫻が茂る。

ナマカバン社は、阿里山蕃と同じく、和社と共に、ツオオ族に屬し、以前は、ブヌン族であるトンポ蕃とは、相敵視し、屢〻爭鬪したのであつたが、警官の教化により、近來漸く融和するやうになつ

たといはれる。

蕃人家屋は、間口二三間、奥行四五間、高さ一丈許り、掘立式の木柱を建て、茅を壁とし、籐にて結ぶ、屋根は茅葺で、四方に傾斜し、檐下四尺位、入口は、間口の中央と、其正反對側の中央とに、戸を設けてある。採光不充分で、甚だ暗い。入口の正面に爐を作り、室の中央に、長方形の大棚を釣つて、物置とし、四隅に寢臺を設けてある。

我等が夕食には、蕃鶏（バンアヒル）の料理が卓に上つた。生椎茸の料理もある、テンプラもある、竹の子の芥子和へは結構であつた。蕃鶏は、普通の家鴨より稍大形で、羽毛黑色、目の傍に赤毛を有し、嘴は赤褐色である。肉味は家鴨に優つてゐる。東埔では、名々膳を出されたが、其他は皆食卓を圍み、概況支那式である。

東埔以上は、マラリヤ蚊が居らぬので、蚊帳は無かつたが、こゝでは蚊帳を用ひられた。

今朝觀高では、褞袍（ドテラ）で火鉢を圍むといふ、氣溫四十八度を示したのに、この夕方ナマカバンでは、一飛三十二度を加へて、八十度となり、單衣で屋外を散歩すとは、餘りの違ひである。

△三月二十四日　晴　朝　ナマカバン六二　夕　魚池七〇

福岡縣人だといはれた主任巡査鯵淵直二氏は、快活の人である。其奥樣は、乳呑兒を抱いての、心盡しの料理を提供されたのは、感謝に堪えぬ。今朝は珍らしい猪肉の料理に、銘酒白鹿まで卓に上るとは、高頭氏の滿悅知るべしである。シュンギクの浸しもある、この溪流で捕れたといふ、小指大のエビのフライは、珍品であつた。この猪肉は、蕃人の獲物を、昨日夕食後、幸に手に入れたのだと言はれた。

七時三十分ナマカバン駐在所を辭した。常世橋の畔に在る、所謂營盤跡なるものを視た。方約二十間、石垣及礎石の一部が存する。ヒメヨモギの群落中にヤマキケマンが伍してゐる。

途中山竹の子を探る蕃婦達に、屢〻逢つた。黒い布で髪を包み、煙管で、笄式に挿し留めた形容もおかしい。婦人達も、煙草を嗜むことが窺はれる。

十時十分内茅埔駐在所に着き、留め置いた荷物を受取り、十一時十五分臺車に搭じた。今度は概して下りであるので、快速力で走る。午後二時水裡に着いた。

此處で歸京される高頭氏及び從者の谷内田君と袂を別たねばならぬ。顧れば、二十日の旅路に、起臥を共にし、殊に死線を超えて、尚且つ再擧新高山を尋ねた氏と別れるのは、何となく心淋しい。驛に隣れる松家旅館（小谷ぬい）にて、別れの宴を開いた。氏はこの行、全部予と行動を同じくする譯には行かぬのであるが、日月潭と霧社を探つた後、歸京される豫定であつた。然るに新高登路の西口にて、意外の時日を消費したので、止むを得ず、日月潭と霧社を略されたのである。

單獨の旅人となつた予は、集々線午後三時十分水裡坑發の下り列車に乘つて日月潭に向つた。高頭氏の上り列車は、四時二十九分發であるので、氏は谷内田君と共に、予を構内に見送り、予が前途を祝福して、別れを告げられた。

二三、さらば新高

西口北口登路對比、蕃情不穩。

顧れば、薄霞棚引く遙か彼方の空に、優然たる英姿を現はした新高山も、亦我輩を見送つて、無限の情を含むを覺える。

天下の名山富士山が、靜岡、山梨二縣に於て、登客吸收の對策に關し、近來益〻汲々たる有樣であるが、本邦の最高峯新高山でも、近年西口新道路の開鑿と共に、又北口との競爭を開始する樣になつた。臺南、臺中兩州の宣傳策が即ちそれである。唯花蓮港の東口は、交通が餘りに不便であり、高雄

州は、今の所、登路を持たぬので、超然たる態度を示してゐる。

臺南州發行の『阿里山口新高登山案内』に「從來新高登山道路としては、臺中州新高郡八通關經由の一路あるのみなりしが、同道路は、比較的山岳溪谷等の變化併に眺望に乏しく、眞に登山の妙味を體驗する能はず。(中略)今回開鑿せられたる阿里山口道路は、地勢の關係上、多く山岳の稜線を走るを以て、眺望の絶佳なるは言を俟たず、且つ森林あり、草原あり、斷崖絶壁あり、其間に清流の配するありて、極めて變化に富み、登山の興趣横溢するを見る」とある。又總督府營林所發行の『新高登山案内』の部に「阿里山口が、八通關口に優る點を述べると、第一行程の短縮である。八通關口によれば、水裡坑を立つて、六日を要するのであるが、阿里山口によれば、阿里山より三日、嘉義驛よりするも、往復五日である。次に展望の佳良なることである。阿里山口は、始終山脈の稜線を辿るのであるから、常に眺望を恣にすることが出來る。その上森林あり、草原あり、或は斷崖絶壁の妙に、淙々たる清流を配するあり、變化極まりなく、登山の興趣、眼界の變化は、苦難を忘れ、七里十一町にして、山巔を極めることが出來る」とある。

新高郡役所發行の『新高登山案内』は、至極穩當な文體であつた。

總督府の立場からすれば、勿論一視同仁であるべき筈だが、唯營林所の經營する製材所が、臺南州嘉義郡に在り、其阿里山作業地域が、又臺南州に屬する因緣からでもあらうが、營林所發行書の案内振りは、餘りに片寄つた團扇の揚げ方と謂はねばならぬ。殊に臺南州發行のと、語呂まで殆ど似寄つてあるのは、可笑しい。

高雄州人ならぬ予は、超然たる態度を以て、少々所感を述べたいのである。

元來大自然の景觀は、必ずしも展望の廣さのみが、基調とはならぬ。從て稜線通過のみを禮讃する譯には行かぬ。溪谷には、溪谷それ自身の景觀がある。予は阿里山經路の森林美には、大なる推賞の

辭を呈する。されど水裡坑登路にも、亦雲懸橋以上には、特殊の森林美がある。そうして清澄なる溪流が配せられてゐるのは、寧ろ西口登路で目に入る溪流よりは、景致に富んでゐる。西口登路に於ける、鹿林山あたりの草原は、予も亦非常に快感に打たれたのであるが、北口の方にも、觀高及八通關の草原がある。予は寧ろこの方に興趣を感ずる。凄絶極まる斷崖はといへば、それは大に西口に存するが、北口にも亦幽林を添加した斷崖は、東埔以上に見ることが出來る。景致的斷崖としては、予は復この方を選ばねばならぬ。北口では、水裡坑以來、谷間遙かに屢〻優然たる新高山の英姿を拜し得るのは、如何にも奥ゆかしい感じがする。これは西口にて、一度も其偉容に謁し得なかつた不平を漏らすのではない。觀高に於ける展望は、深谷密林を辿りに辿つた身には、俄然眼界が開けるので、一種言ひ得ぬ興味に打たれる。唯新高山彙に遮られて、それ以南の山々を望むことは出來ぬが、奇峯峻巒相連る、中軸山脈の蜿蜒たる左方、白姑大山、次高山の雄姿を雙眸に收め得る大觀は、大に禮讃せねばならぬ。雲懸橋以下は、平凡極まるといふ人もあるが、峩々たる峻嶺、磊砢たる岩壁のみが、必ずしも景致の極では無い。予は其悠々迫らぬ溪谷山側の趣にも、亦棄て難い景致を存するを喜ぶのである。殊に內茅埔あたり、陳有蘭溪の左岸を緣どる、長く續いた美しい段丘は、ビャナン道路に於ける、ビャナンあたり、宜蘭濁水溪畔を飾る段丘と共に、得易からぬ興趣を感じた。北口登路には、瀧が多い。溫泉がある、鐵線橋がある。予は湯治禮讃者でも無く、又橋渡りの演劇者でもないが、單に變化といふ點を擧げたならば、寧ろ北口の方が多いやうに思はれる。北口は、六尺道路といふ樂な登路で、老幼婦女も登り得るから、登山氣分を味ふことが出來ぬといふ人もあるが、登山の興趣は、必ずしも險路難行が伴はねばならぬといふ譯でも無い。

營林所發行のには、八通關口によれば、水裡坑より六日を要すとあるも。其實第一日、水裡坑發、東埔泊。第二日、東埔發、八通關泊。第三日、八通關發、新高主山を極め、下山觀高泊。第四日、觀

高發、水裡坑着。即ち四日で、往復が出來る。これは予が經驗によつて明かである。尙時間及經費の點をも考察すると、阿里山口によれば、二水驛から嘉義驛まで、汽車は約一時二三十分を費し、この乘車賃金は七十五錢（二水以北よりするものとして）。嘉義驛から阿里山沼ノ平まで、汽車は約七時間を費し、賃金は二圓八十八錢であるから、合計時間に於て約八時半、經費は三圓六十三錢を要することゝなる。八通關口によれば、二水驛から水裡坑まで、汽車は約二時間、賃金は四十五錢。水裡坑から內茅埔まで、臺車は約三時半を費し、賃金約一圓であるから、合計時間に於て約五時半、經費に於て約一圓四十五錢を要することゝなる。要するに時間及經費の點は、八通關口が、寧ろ有利を占めると謂はねばならぬ。然し經路の興趣價値が、眞に果して優るとすれば、些々たる時間經費の差などは、問題とはならぬのである。

以上、稍北口登路に味方して、西口を相手取り、對抗的の批評を試みたかの嫌があるやうだが、予は唯一種の宣傳振りに、雷同附和することを避けたいだけである。勿論西口には、西口特有の優秀な興趣があるが、同時に亦北口には、北口獨特の景致を有するであらうから、我等は最初、經路の難きを前にし、易きを後にする方針の下に、西口から登り、北口に降る日程を選んだのであつた。

予がこの行を終へて歸鄉後、總督府の井上一男氏より、本年は登山期に近き七月上旬、新高山方面蕃情不穩のため、新高登山は當分一切禁止することゝなつた。我等が時期の幸運であつたことを報道された。尙八通關駐在所警官佐藤英三郎氏、及阿里山駐在所警官德永福飯氏の通信によると、郡大溪（ダンダイ）流域に住む郡大社の蕃人が、連年凶作のため、生活困難となつたので、關山（クワンザン）の北方、茗濃溪流域に住む、ラックス蕃（未歸順蕃）の一部族タマホ社と協議の結果、其地方に脫走移住をなし、粟畑開墾祭に供するため、人の首の必要をも生じ、五月以來、幾組かに手分けをなし、駐在所を襲ふて、銃器彈藥の掠奪を謀つたり、屢〻出草を試み、七月八日對關、觀高兩駐在所の間で、警手一名の首を取り、

南湖大山頂上より東方を望む(其一)　昭和三年十月下旬．臺灣總督府山林課撮影。

（贈寄氏郎太鐵井沼）

尙引續き不穩の情態であるので、各駐在所では、晝夜嚴に警戒しつゝあるとのことである。

右の事情により、八通關道路中、八通關駐在所と、秀姑巒駐在所との間に一ヶ所、秀姑巒駐在所と、大水窟駐在所との間に二ヶ所。又新高登山道路に於ける、新高避難所の稍下方に一ヶ所、合計四ヶ所に、警察官吏駐在所を增設することゝなつた。この避難所下方のは、新高駐在所と命名されたさうだが、今後の新高登山者は、非常な利便に浴することゝなつた譯である。

生駒高常氏（臺中州知事）よりの通信によると、昭和三年十二月、大水窟山の肩部に新設された南駐在所は、海拔一萬一千二百尺の高所に位することであるから、從前本邦最高の駐在所といはれた能高及八通關の兩駐在所を凌いで、月柱冠の光榮を得たことゝなつた。尙新高駐在所も、南駐在所と其標高は、相伯仲するのである。

生駒氏は、昭和四年一月二十三日、當年に於ける、新高山最初の登山を試み、日本晴の快晴と、穩かな氣象とのため、視界の及ぶ限り、展望を縱にし、北方は遠く次高山を望み、南方は堂々たる關山の雄姿を眺められたさうであるが、近年に於ける稀なる晴天の續き方で、同山上は、一月中一二回の小降雪はあつたが、當時は殆ど殘雪なき有樣であつたさうである。

又德永福飯氏及嘉義郡警察課理蕃係栗橋政之介氏の通信によると、昭和三年十二月、西口登路の鹿林山と、新高下休泊所の稍上部に、駐在所の建設竣工し、前者はタータカ駐在所、後者は新高下駐在所と命名され、電話線は、同駐在所から、新高山頂を經て、八通關登路の新高駐在所に通ずるやうになつたさうだから、今後に於ける新高登山者に取つては、更に非常な利便となつた譯である。望蜀のやうだが、予は更に新高山の絕頂に、電話器の設置を希望するのである。

八通關登路に新高駐在所あり、阿里山口登路に新高下駐在所があつて、兩者一寸紛れ易いから、後者は、主山下駐在所とか、又は楠梓仙溪頭駐在所と、命名した方が良いと思はれる。

日月潭

二四、神湖日月潭

魚池、石印社、水社、臺灣劇。

汽車は程無く、終點外車埕に着いた。時に三時二十分である。

外車埕より、埔里を經て、霧社の入口眉溪までは、定期臺車がある。所々に停留所があり、必要な場所は、複線となつてゐるので、八通關道路に於ける。水裡坑、內茅埔間のやうに、屢〻出逢つて、睨み合つたり、臺車から降りて入れ替へするやうな不氣味は無い。こゝの臺車軌道は、全島一といはれるだけ、十數臺も揃つて發車するので、下り勾配快速力の場合には、前後の臺車が衝突するのを防ぐため、各車大抵一町位の間隔を保つやうにする。

三時三十分臺車は外車埕を發した。軌道は水裡溪に沿うて、爪先上りとなる。溪谷はタブ、シヒ、イヌビハ、フカノキ、ケヤキ、マンリャウなどの闊葉樹林蓊蔚として相茂り、大蕨の葉を擴げたやうな蛇木が多い。一丈以上のゼンマイもある。桂竹林もある。例の佛燄苞の奇花を捧げた巨大なクハズイモも多い。高みにはタイワンアカマツが見える。

四時二十五分「大正四年竣工」と刻んだ天龍橋を渡り、五時五城に着いた。「海拔一千七百二十五尺」と註した標柱と「名勝案內、日月潭道、五城、至日月潭一里十二町、臺灣バック埔里支局掲示」と書いた標札が目につく。予はこの經路を取る豫定であつたが、時刻が既に遲いのと、この道路は可なりの急坂もあり、日月溪に架けた、思案橋といふ、長二百五十八尺、高六十五尺の鐵線橋もあるとのことで、荷物運搬の關係上、之を變更し、尙臺車の搭乘を、魚池まで延長することゝした。

五城は即ち茅埔（フオンポ）である。高さ三尺ばかりの石垣の上に植ゑ込んだ、仙人掌（サボテン）の生籬が目を惹く、高二三尺に伸びたサボテンには、赤や白や黄の美しい花が點飾し、多肉質の綠の莖には、鋭い針が叢生するので、籬根用としては、一擧兩得の設備であり、又如何にも臺灣らしい風物といふ感じが涌く。北米アリゾナの山地に産するオホサボテンは、高さ六丈餘に及ぶ一大森林の壯觀を呈するのがあり、或は果實を食用に供し、或は一種の木蝨を寄生せしめ、美しい紅色臙脂を製するのがあるといはれる。

軌道は、兩崖絶壁の間を貫くこと數十分、眼界漸く開けて、相思樹の並木綠濃かである。

六時十五分魚池に着いた。「海拔二千百四十尺」と註した標柱と、「日月潭道、魚池、至日月潭一里二十町」と書いた掲示がある。

停留所に近い魚池館に投宿した。この地は廣い街道を挾んで、人家が立ち並び、小市街の形をなしてゐる。本島人經營の旅館は數戸あるが、內地人經營のは、この魚池館だけで、看板に「愛媛縣人篠原サカエ」とあつた。予に引續いて、宿泊を申込んだ一人の本島人客があつたが、主婦は體能く斷つたのである。

夕食を終はると、戸外から「お差支なくば、一寸お伺ひ致します」との聲がするので、「どうぞこちらへ」と答へると、戸を明けて入られたのは、新高山北口登路に向ふ前、懇情を寄せられた新高郡守青木行淸氏であつた。氏は我等が新高登山の狀況は、既に八通關佐藤部長からの報告に接してゐられるので、絶巔の直立不可能であつたのに、深く同情され、他日の再遊を勸められた。氏は翌日當地の學校證書授與式に臨んで、後日月潭に出向し、近く久邇若宮殿下が御成り遊ばされるといふ、下檢分のためであつた。氏は予が宿泊のことを、宿の主婦から聞かれたのであつた。

この宿で、日月潭で捕れたといふ、名物鮒の醋味噌料理が、膳に上つたのは、日月潭を探らうとする予には、前祝の感がある。

△三月二十五日　晴　朝　魚池六六　夕　水社七四

早起朝風に靡く相思樹の並木の下を散歩した。高さ一丈にも餘るブッサウゲが多く見え、滿枝爛漫と咲き誇れる其眞紅の花は、實に目覺むるばかりである。警察官吏派出所に近く學校がある。右の門柱に「魚池公學校」、左の門柱には「魚池尋常小學校」と書いた標札がある。

「能高郡役所三里十七町、水社派出所一里二十町」と註した標柱はよいが、「甘蔗を竊取し又は盜食することを嚴禁す、新高郡役所」といふ警告標が、所々目に入つたのは、慣習の弱點が窺はれて、氣まづい。

日月潭に向ふべく、荷物を旅館に預け置き、午前八時魚池を出發した。近く西南に魚池富士（約二千七百尺）が峙つ。道はこの小型富士を左に見て谷に入る。コシデは高さ四五尺にも茂り、茶畑は今を盛りと白花を飾る。田には水牛や黃牛が勞役に服する。稻の植附けは、既に略〻終つてゐるが、まだ田搔きもあり、田植もあつた。臺北あたりに比べると、頗る遲れてゐる。

猫囒といふ小部落を右手に見て、坂路にかゝり、細魚群游する、さゝやかな溪流を縫ひつゝ、九時丘陵を登り詰めると、行手脚下には、實に目覺むるばかりの景致が展開する。鏡のやうな水面の靜けさ、紺碧の湖面に、翠も濃かな其影を涵すは、對岸に聳える水社大山である。蓊蔚たる樹林は、湖畔を擁する。本島唯一の山湖とし、臺灣八景の一に推奬された日月潭がそれである。神湖の尊號空しからぬを思はしめる。

丘上には「魚池三十五町四十一間」と註した標柱がある。

此處に、鮮麗な淡紫紅花、人目を惹くタカサゴノボタンが、黃綠な小花を繖狀につけたタイワンクロモジに伍する。濃艶深紫の花をつけたムラサキミゾホゝヅキが見える。

ニクケイの葉に似た、このタカサゴノボタンは、予は各地で之を認めたのだが、其開花に接したの

は初めてである。魚池からの沿道崖側にも、屢〻この花が目に入つた。道連れとなつた、役場員だといふ本島人に聞いたら「アンケイカン」と言つた。常綠小灌木で、葉は對生し、尖頭卵形を呈し、微かに褐色を帶び、綠邊にも裏面にも、褐毛密生し、基部より頂端に向つて、平行せる顯著な五個の主脈がある。梢頭葉腋に、淡紫紅色を呈した鮮麗な花を、聚繖花序につける。花冠の直徑約二寸、花瓣は五個、卵形をなし、雄蕊五個、螺形の奇狀を呈し、先端は紅色であるが、中部につけた葯は黃色である、雄蕊の形態としては、實に珍奇を極めてゐる。

坂を降る十數分、湖畔に出ると「猫嶺嶺渡船場」と書いた標木がある。嶺は嶺の書き誤りらしい。附近に二三軒人家が見える。五十許りの男が出て來て、舟に乘せてくれた。兩手で左右の櫓を操りながら、時々何か言ふが、さっぱり判らぬ。舟は西岸に沿ひつゝ進んだ。岸にはエゴノキらしい白花が見える、アヅキナシのやうな繖房狀を呈した赤い果實も見える。魚躍つて波紋を作り、鳩(ニホ)は泳いで波脈を引き、鶯は林間に囀り、白鷺は悠々として水田に降り立つ、身は眞に仙境に入る感に打たれる。

十時水社の棧橋に着いた。偶〻四人の婦人と、學生の制服着けた男子を載せた舟が、今棧橋から出かけた。中に警官も同乘してゐられるので、この警官の通辯で、船頭に賃金三十錢を拂つた。この警官は、こゝの警察官吏派出所の主任巡査部長安岡幸利氏で、婦人の一人は、青木郡守夫人、學生は其長男で、臺北中學二年生であること、及び青木郡守の滋賀縣人であることも、後に判つた。

安岡部長は、この一行を案內して、對岸に於ける石印(チヤウイン)化蕃の視察に行かれるので、予も請ふて同乘した。

舟は湖中の小島珠子(シユシ)山(サン)島を右手に見て進み、二十分ばかりで石印社に着いた。社は湖畔に沿ひ、現在二十八戶、約百五十人を有し、狩獵漁撈と、農作で生計を立てゝゐる。言語は蕃語、支那語雙方を

使ふとのことである。

湖畔に「化蕃之由來」と題し、「今より二百四十餘年前靈元天皇天和元年後大埔猪母蚋蕃二十四人八通關より巒大山に獵し白鹿を追ふて來る云々」と書いた標札がある。

總督府發行『臺灣事情』には「口碑の傳ふる所によると、彼等の祖先は、今から百數十年前まで、嘉義方面の高山蕃であつたが、一日巒大山に獵して、一頭の白鹿を見出し、逐ふて水社大山に至り、其踪を失ひ、彷徨三日に及べる間、圖らずも、この山中の湖水を見出し、天が與へた樂土として、蕃社を擧げて移住したものであると。この化蕃が、米粟の類を搗くには、屋前の巨石を臼とするが、其響は四山に反響し、湖上に搖曳し、一種言ふべからざる哀音となつて、惻々として人に迫る。況して此の哀音に和する、妙齡蕃婦の蕃歌に至つては、更に斷腸の思を加ふるものがある。八勝の一景たる『蕃家杵聲』と稱せられるは其れである」と書いてある。

年代については、新高郡役所發行『日月潭遊覽案內』も略〻同樣に書いてあり、前記湖畔に於ける標札のと、百年許りの差がある。事實天和年間とすれば、前者に從はねばならぬ。

化蕃とは、所謂熟蕃で、首狩の兇行などは、既に絕對に見ぬ從順の蕃人で、男子は主として獵漁に從事し、耕作は婦人が主として營むのである。

安岡部長の案內で、蕃人の屋內を見た。所謂蕃家杵聲の情況を觀覽に供すべく、部長殿は、蕃婦を臨時召集された。集るもの二十人許り、圓陣を作り、石臼の上にて、粟搗きの形式を演じた。彼等は始終この召集演習を命ぜられるので、粟其ものも無く、從つて歌ふ調子も、外飾に囚はれて、眞の情調は窺はれぬ。惻々人に迫るとか、斷腸の思を加ふるとかいふ感じは、毫も起らぬ。月明の夜、一片の小舟を湖心に浮べ、遠く波より波に傳はる、彼等が歌聲杵音が、脈々として我が鼓膜に觸れるので無ければ、眞の情調を味ふことは、出來ぬであらう。

彼等が歌詞の意味は、其概要を部長殿から聞いたのだが、歌ふ調子は、意外にも悠暢なものであつた。最後に「出た出た月が」の童謠や「君が代」を歌つたあたり、或は大鼓の音のやうに、竹筒を叩いて調子を添へるなど、餘りに演劇的に傾いてゐる。部長殿は、一人當り十錢位として、報酬を渡されたので、予も幾分の負擔をと、後に申出たが、其れは辭されたのであつた。

彼等が歌の一つを意譯すると、

男は山に獵に行き、女湖は畔で粟を搗く、可哀さうに美しい、娘盛りを粟搗きに。

杵は所謂兎の餅搗の繪に見るやうな、兩端が太く、中間は握り勾配に細め、長さは六尺乃至八尺といふ、長短大小不揃であつて、杵の上下に從ひコンコン、コンコラコン、ポンポン。高く低く響く音は、仲々面白い。石臼の下には、空虛があるらしく思はれた。

彼等は澤山鷄を飼つてゐる。犬も豚も見えるが、所謂喪家の狗たる有樣であるので、安岡氏に聞くと、飼料の關係にや、皆瘠せてゐると語られた。

バナナや蔬菜が作られてゐる、李や桃の果實は、可なり大きくなつてゐた。

再び舟に乘つて歸りに就く、周圍約五町といはれる珠子山島には、闊葉樹が茂つてゐる。樹下には數戸の人家が見える。

舟の中で、我等と相前後して新高山阿里山に登られた田村剛博士が、歸鄕の途、三月二十一日門司上陸の際、ランテと岩壁の間に、脚を挾まれ、片脚切斷の奇禍を受け、生命危篤であることが、新聞紙上に見えたと、安岡部長殿から聞いて、氣の毒に堪えなかつた。

水社に上陸し、湖畔唯一の旅館涵碧樓（津田ユキ）に投じ、主婦の案内で、二階の眺望第一の室に導かれた。丁度正午頃であるので、緣側にある卓に就いて、湖景を眺めながら、晝食を攝つた。

樓は規模大きくは無いが、隨分高みにあるので、殆ど湖の大部分を眺め、正面には、黑木を裝ふた

水社大山（海拔七二〇二尺）が高く峙ち、其左に近く肩を接する大尖山（六九五四尺）を望み得る好地點に位する。

日月潭は、海拔二千四百尺、周圍四里强といふから、其廣さも、高距も、略〻信州の諏訪湖に似てゐるが、四圍の翠巒が、近く湖畔に迫るのと、水色比較的清澄なのと、湖岸線が出入多いのと、湖畔に都會的人家が無いだけ、其景致、其幽邃は、實に諏訪湖を凌駕すること數等である。湖の成因は、陷落に基くのであらうといはれる。舟で其深い所を渡ると、水色は紺碧を呈するが、中禪寺湖のやうな藍黑を帶びた凄味が無いのと、南部は淺くて、水藻浮び、蘆荻を生じ、綠鮮かな少許の水田もあるので、柔かな明るみを呈し、單調を破つて、非常に心地よい感じを與へる。蓮花はこの湖の一添景として賞されるのだが、今は其時期で無かつたのは惜しい。

湖は北部が廣く、西南部は狹く延び、其中間に、湖面を拔くこと約六十尺といふ珠子山島がある。島の北は、日輪の形を呈し、南は弦月の形を現ずるといふので、日月潭の名を生じたといひ、又日月の文字に似てゐるからとも言つてゐる。

大日本地名辭書によると、清の乾隆二十年に出來た臺灣府志に、水裏湖とあり、水裏社蕃人の所在なれば、この名を得たとある。水裏社とは水社のことである。道光の初年、北路理蕃同知鄧傳安の『遊水裏社記』に「水分丹碧二色、故名日月潭」とある。本湖の水色、北部は紺碧、南部は丹黃色を呈してゐる。月日潭には、又水社湖、龍潭、龍湖、瓢湖などの別名がある。陸測二十萬一圖には、竹湖とある。

湖の名物には、鮒があるが、小形であつて、七八寸以上のは、甚だ稀だとのことである。警官の話る所によると、湖の水溫は、攝氏十八度乃至二十度である。本年より、ワカサギの飼養を始めたさうであるが、養鯉は有望に思はれる。

名物に獨木舟がある。巨木を兩割りとし、內部を刳つた原始的のもので、材は樟を用ひるとのことである。竹筏(テッパイ)も見える。四ッ手網も所々に設けられてゐる。

臺灣電力會社が、經營する水電工事は、濁水溪の上流、霧社の南方姉妹ヶ原附近に、取入口を設けて、溪水をこの湖に導き、其水面を現在のより七十五尺高め、其水を利用して、十四萬キロワットの電力を得、之を全島に供給するため、大正八年に着手したのだが、財界不況の影響を受け、今は中止してゐる。若しこの設計通り、この湖に湛水するときは、あはれ名物の石印社を滅し、添景の美島珠子山を沒するとは情無い。

涵碧樓前を稍降つた所に「海拔二千四百八十五尺標水電計畫滿水標高」と書いた標木がある。この樓は、僅かに沈沒の厄を免れる譯である。

水社は、丘陵斜面幾段に拓かれた田や畑を綴つて、湖畔まで點々たる四十戸許りの本島人部落であるが、湖畔を繞る全部落は、百九十戸に上るとのことである。

予が隣室に、若い男女の客があつた。其男の人が一緒に入浴したので、京都同志社大學生で、松永榮三(二三)といひ、女の人は其妹(二〇)で、昨年高女を卒業したこと、姉の夫の人が、臺灣製糖會社に從事してゐるのを便つて、臺灣見物に來たのだといふことも判つた。鄕里は丹波の龜岡ださうで、體格容貌とも、立派な人達であつた。

午後この部落で芝居があるので、松永君兄妹と一緒に見に行つた。湖の排水口である日月溪(水社水尾溪)に架けた、二十間ばかりの橋を渡つて、劇場に着いた。無論臨時建設の劇場で、間口三間奥行二間ばかり、床は五尺程の高さである。大鼓、銅鑼、笛、喇叭、簫、胡弓、銅拍子、三絃など、樂器の音と、囃子(はやし)方だけは、甚だ賑かである。演者所謂優伶は、錦襴緞子のぴかぴか輝く美服を裝ふが、其言ふ所、さっぱり判らぬのと、動作不活潑極まるので、唯裝束展覽の感じがする。舊支那式臺灣劇

の、田舍廻りであつた。

宿に歸ると、階下で筑前琵琶を奏するのが聞えた。女中に聞くと、青木郡守夫人であつた。夕方郡守も來宿された。二度あれば三度の諺を、裏書したと笑つた。

淡い夕霞に、中ノ島（珠子島）や石印社から立揚る炊烟は、少からず詩情をそゝるのであつた。墨を磨つて持ち來られた、主婦の懇請にて、立派な表裝した、書畫帖に揮毫させられた。

夕食には、鳥肉を豐富に使用し、鮒の料理も出た。

この地の標高は、まだマラリヤ蚊の虞れがあるので、蚊帳を用ひねばならぬ。

一泊料は二圓五十錢であつた。

△三月二十六日　晴　朝　水社六六　夕　霧社七〇

晨を告げる鷄鳴が、頻りに各所から聞えるのは、養鷄の多いことが窺はれる。夜が明けかゝると、鶯が囀る、鳩が唸る。玉を轉がすやうな麗はしい聲、絹裂くやうな鋭い聲、高き低き種々雜多の小禽の鳴き聲が、夥しく耳に入る。

欄に倚つて、湖面を渡り行く朝霧を眺めると、湖畔に點々たる白鷺も、風情を添へる。臺灣には白鷺が多い。殊に基隆の郊外にある鷺山には、四五月の交、數萬の白鷺が群集し、滿山白花の異觀を呈すといはれる。

其冠毛は、軍帽其他の裝飾品として、頗る高價であるとのことである。

安岡部長の語る所を聞くと、臺中州では、近く、十五萬圓を投じて、水裡坑から山越えに、本湖に通ずる、自動車道路約五里を開鑿し、又二萬圓を以て、湖の北東丘上に、ホテル建設に着手するとのことである。

朝七時出發、湖畔にある警察官吏派出所を訪ひ、謝意を表し、此度は、わざと舟によらず、湖畔を

擁する林間の道を辿つた。氣持良い。

昨日深い印象を與へた、湖北の丘上から、顧みて湖景をつくづく眺め、惜しい別れを告げて、足を早め、八時半魚池着、魚池館に立ち寄つて、荷物を受取り、臺車發着所に行つて、臺車の來るのを待つた。

二五、櫻茂れる霧社

埔里、眉溪の蝶群、首狩、人止關、霧社の景觀、警務部長巡視。

午前十時松永君兄妹と一緒に臺車に搭じた。兄妹は一緒に霧社に遊びたいといふのである。十分ばかりで「海拔二千二百四尺」と註した大林停留所に着いた。此處からは爪先下りにかゝり、一瀉千里の快速力にて走り、十時四十五分「埔里耶馬溪」と註した溪谷を通り、程なく「臥龍洞大正十三年竣工」と題したトンネルを出ると、形勢一變、豁然たる沃野が展開する。十一時十五分埔里に着いた。魚池より三里半、僅か一時十五分費した、其速さ、其爽快味は、思ひ出すさへ心地よい。魚池埔里間の臺車賃金は、一圓二十四錢である。

近來耶馬溪の稱呼が、アルプスと共に流行を極め、所謂到る處靑山あり的である。臺東には、佐久間總督が命名されたといふ、臺東耶馬溪があるさうだが、此處には埔里耶馬溪がある。南港溪の兩崖絕壁を飾る樹林もあつて、埔里の遊覽地としては、良好な景勝であらうが、規模小なる憾みがある。

本島の峽谷には、臺灣八景の一に推された太魯閣(タロコ)峽がある。有名な兇蕃タロコ蕃の繩張區域であるタッキリ溪の峽谷で、花崗片麻岩から成る斷岩絕壁幾千尺、急湍碧淵相連り、原始的樹林は、崖上を飾り、溫泉は所々に涌くといふ、雄大豪壯を極め、これこそ本場の耶馬溪など、脚下に拜跪せねばな

らぬ絶景佳境と稱され、沼井氏は、其探勝を切に勸められたのであり、予も郷里出發前、豫め研海支廳に照會して、詳細な回答と、地圖にも接してあつたのだが、交通の不便と、新高山で、時日空費の祟りもあり、之を略したのは、非常な遺憾であつた。蘇花道路即ち蘇澳、花蓮港間の海岸道路は、二三千尺の斷崖岩脚を辿るので、世界無比の海岸道路と稱されてゐるが、地圖に就いて、海岸より約一里の近距離に、八千八十八尺の標高を有する清水山が峙つのを見ても、推察し得て、魂飛ぶの感がある。

埔里街は、人口約二萬四千、內地人約一千を算し、所謂埔里大盆地の中心都邑であり、能高郡役所の所在地である。海拔約一千五百尺、山水秀麗、小洛陽の稱がある。街とは、內地の町に相當する。

我等は、中央山地に於て、臺灣十二勝の一に推されてゐる霧社を探らうとするのである。日月潭は、蕃界が湖畔の稍東部を劃し、蕃界外に位置するので、入蕃手續を履む必要は無いのであつたが、霧社は蕃地であるから、入蕃許可證を受けねばならぬ。松永氏は、この事を知らなかつたので、一緒に郡役所を訪ふた。郡守は不在のため、警察課長警部絲井九吉氏に面會した。入蕃願書は、連名とか、代表とかいふ譯には行かぬので、松永氏の妹アイ子さんは、拇印を押された。予も規定によつて、願書を提出しようとしたら、「あなたのは、總督府から通知がありますから」といつて、課長殿は、この手續を省かれた。予はこの後、尙三郡の蕃地に入つたのだが、皆除外の特典に接したのである。

我等が郡役所を辭さうとした時、偶〻眉溪(バイケイ)駐在所から、意外な電話がかゝつて來た。それは我等が行手霧社の入口で、本島人が蕃人に首取られたといふことで、詳細は、取調の上、報告するといふ警察電話であつた。それで「あなた方の霧社入りは、禁止は致しませんが、充分注意を拂つて下さい」と、課長殿の警告であつた。

郡役所の筋向にある「權藤洋食店」と大々的な看板揭げた店頭に入り、カレーライスを取つて晝食

とした。居合せた男で、當地製糖會社のことや、農業發展の狀況を述べ、內地から來て、勞働に從事してゐるものも澤山あるが、生活程度の低い、そうして困苦缺乏に堪え得る本島人とは、到底競爭が出來ないで、漸次悲境に赴きつゝあるなど、歎息を漏らしたものがある。

當地の特產館には、名物蝶と、蛇の皮の細工物が、評判であるが、時間の關係上、其視察を略した。予は二水の停車場で、中將湯本舖順天堂大阪支店員上林菊太郎といふ人が、霧社からの歸りに、この地の特產館から買入れて來たといふ、蛇皮で裝飾した杖を見た。美しいには相違無いが、何んだか餘り氣乘りもせぬ品と思つた。

街頭に「霧社六里四町」と書いた標柱が見えた。

我等が乘つた臺車が、埔里を發したのは、午後一時三十分であつた。開豁な原野に、水田もあるが、主に甘蔗畑である。並木として植附けた、若木の櫻が多い。霧社と相待つて、遊覽客吸收の一策と見える。

蜈蚣崙の部落を右手に見、道は谷に入る所、「蕃界」と書いた、白塗の木標がある。時に二時三十分である。右の丘陵には、蔚然たる闊葉樹を見、左の山側は、木立疎らで、タイワンアカマツが點在する。

沿道三々五々散在する蕃屋には、子供と相伍する豚と鷄が多い。この邊には、松茸を多く產するとのことである。

蝶群の本場を以て著名な眉溪（バイケイ）の谷に入ると、そろそろ蝶に見舞はれる。白いもの、黃色なもの、斑のもの、紋あるもの、黑や、褐や、灰色、碧色と、其翅には種々雜多の色彩を見せ、大なるもの、小なるもの、立ち揚り、舞ひ降り、時には車上風切る我等が頰を撫で、胸を掠め、アイ子さんの髮に留る、其愛らしさ、美しさ。然し今は時期尙早いので、餘程少いのだと、苦力は言つた。

三時右手に「觀音瀑」といふ標札を見た。この溪谷が、蝶の本據といはれる。此處の蝶には、世界的珍品が多く、中には一個四五圓以上に値するのがあるとのことである。予は後七星山に同行された、臺灣山岳會員古平勝三氏が、本島産博物標本製作に從事してゐられるので、歸途大正町に於ける、同氏の宅に立寄り、蝶類蛇類などの珍品を見せて貰つた。この地のコノハテウ（木葉蝶）は、非常に優秀であつた。

岩壁の屏風を廻した獅子頭駐在所、霧社入りの關所かをしのぶ霧ケ關を過ぎ、四時二十分臺車の終點眉溪（海拔二五二八尺）に着いた。こゝには一軒の茶屋があるので、荷物運搬のため、苦力の周旋を賴んだ。例の首狩事件が、この附近であつたので、言を左右に託して埒明かぬ。五丈ばかりの崖上に駐在所があるので、警官に依賴しようと思つて登つた。駐在所には、十數人の蕃人どもが、取調を受けてゐるらしいので、すぐそれと首肯れた。

所内で警官の語る所によると、附近の製腦に雇はれてゐた本島人が、蕃婦に姦通したのが露顯し、蕃婦は彼等社會間の制裁を受け、面目が無いとて自殺した。其夫は悲觀の餘り、亦自殺を企て、冥途の道連れとすべく、この溪流で、洗濯物してゐた、本島人の一婦人の首を取つて、姿を消して了つたが、何處かで自殺したものらしいとのことである。これで首狩事件の眞相も判り、從つて我等が首の危險も、消滅した譯である。

警官の命令で選ばれた、二人の蕃人が、我等が荷物を運ぶことゝなつた。

眉溪駐在所からは、兩崖相迫り、岩壁數十丈、左方脚下數丈、眉溪の激流は、白沫を飛ばし、碧潭を作り、樹木は森々として頭上を蔽ひ、幽邃の景致は、霧社に入る人達に對し、既に深い印象を與へる。こゝを人止關といつてゐる。この邊に秋海棠が夥しい。程なく橋を渡ると、谷稍開け、道は右手の山側を辿り、坂は頗る急を加へる。女學校出だけあつて、松永アイ子さんは、能く足駄で通された。

蛇曲を描いた急坂を登り詰め、霧社に近くと、路傍に十人ばかりの蕃人の娘達が遊んでゐた。松永氏は、彼等を列ばせ、我等も其中に加はり、撮影された。五時四十分霧社着、警察分室を訪ひ、巡査部長奈須野喜一郎氏に面會し、附近の概況を聞き取り、駐在所に近い櫻旅館（藤岡キミ、山口縣人）に投宿した。内地人經營唯一の旅館で、設備も相當に良い。外に本島人經營の旅館は數軒ある。警察分室とは、内地の元の警察分署に相當する。

霧社は海拔三千七百九十尺の高臺で、霧社蕃の本據地である。この蕃社は、一時頑强で、官命に從はなかつたが、明治四十三年の大討伐後は、全部歸順し、今は官憲撫育の下に、狩獵農耕に勉めてゐる。其兒童を教育する、州立霧社公學校がある。

廣い市街の形作つた、警察分室前通りには、内地人、本島人の家屋が三十戸ばかり並んで居り、菓子、鑵詰、蜜柑、バナナなどの食料品店、雜貨店、呉服店、料理屋なども見える。

近くにあるバーラン社は、蕃人家屋百四十餘、尙附近に散在する部落は、隨分多く、所謂霧社蕃の一時頑强な抵抗を敢てしたのも想像される。

予が晩食を終つた後、室が皆塞がつてゐるとて、二人の相客をと、主婦が來て懇請したので、快諾してやつた。相客は臺中師範學校教諭高濱利久氏及この三月同校を卒業した、ホーゴー社蕃人花岡一郎（本名タッケス、ノーレー）といふものであつた。ホーゴー社は、霧社蕃に屬し、こゝから約一里程の近くにある。花岡君は、高濱氏の紹介で、立派な挨拶をした、仲々快活な男であつた。二日間ここで同宿した。彼が母から、謝恩の丹誠こめて、自ら織つた麻布を、高濱氏に寄贈したのを見ると、地質は甚だ頑丈で、染絲にて模樣を附けた意匠などは、頗る面白く感じたのだが、予は其純眞な人情美には、更に大に感に堪えぬのであつた。予はこの珍客によつて、彼等が情況視察には、少からぬ興味と資料とを得たことを喜ぶのである。高濱氏は、予がために、花岡君に、蕃人樂器の一であるロボ

(口琴)を吹奏させた。一種のハーモニカである。

この地は、殆どマラリヤ蚊の虞れは無いが、客の意を伺つて、蚊帳を用ひてゐる。

△三月二十七日　雨　朝　霧社　六六　夕　同　七〇

前の雜貨店から、繪葉書を買入れ、各方面に發信した。こゝには郵便受取所があつて、一日一回、埔里郵便局から集配する。こゝの發信は、午前十時前に投函せねばならぬ。

宿の中庭には、紅竹がある、梢頭の叢葉花をも欺く猩々木が、雨を浴びて、眞紅滴るばかりである。

前夜の宿帳によつて、予を尋ねて來た人がある。予が宿帳に、職業農と書き入れたので、頗る怪みながらも、同縣人といふ緣を便られたのであつた。それは霧社公學校教員梶原音吉氏で、元警官を勤めたこと、鄕里は我縣西蒲原郡内野であるなど語られ、「遠來の客は、兎角誇大に飾り勝ちのものだが、あなたが農と明記されたのは、其心事の程も窺はれて奥ゆかしい」など言はれて、こちらこそ、寧ろ笑止であつた。

氏の案内により、午後は州立霧社公學校を參觀した。校舍は南方約八町の高みに位し、四望開豁の好地點である。現在教員五人、兒童百五十人程ある。其書方、圖畫などを見るに、成績は仲々良い。彼等は始終跣足であるので、教室は總て土間である、教員室も相伴して土間であつた。

校前の花園には、コスモス、金盞花、金蓮花、サボテン、ケシ、カンナ、三色菫など、百花妍を競ふを見て、蕃童が眼底に映る、想像も涌いた。こゝに本島自慢の八角蓮(パッククレン)(宮尾草)が咲いてゐた。予は初めて見參に入つたのである。

梶原氏の案内にて、校舍より南五六町の高みにあるバーラン社を視察した。構造は、ナマカバン社や、トンボ社で見たのに比べると、一歩進んでゐる。簡單な機具で、麻布を織つてゐる婦人の傍で、

南湖大山頂上より東方を望む（其二）　臺灣總督府山林課撮影。

（沼井鐵太郎氏寄贈）

十四五の娘が、これも至極簡略な方法で、麻絲を撚りつゝあつた。

勢力家ベーリー、ルガの屋内には、州の品評會に粟を出品して、四等賞を受けた賞狀が、額の内に納つてゐる。賞狀に記された、當時の州知事が、現に總督府警務局長の本山文平氏で、予が鄉里に近い人だので、視線を惹いた。勢力家とは、頭目（會長）に亞ぐの家格である。

近來養蠶が漸次盛んとなり、一戸の收入、年百圓以上のが、隨分あるとのことである。養蠶講習所、養蠶指導所などいふ標札は、各蕃社で屢〻目に入つたのである。

霧社は、北方合歡山から南西に延びた尾根と、南方水社大山から北東に延びた尾根の連結點に位する高臺で、この尾根の連結は、眉溪、濁水溪の分水嶺となつてゐる。

公學校近く公園がある。數百株の櫻樹の下には、所々に腰掛がある。緋寒櫻即ち阿里山緋櫻と、霧社白櫻の二品種を植ゑ込んである。この地では、緋寒櫻は十二月より咲き始め、二月半ばまで續き、白櫻は二月中旬から、三月初旬に亙るとのことである。この白櫻は、霧社を中心とし、附近の山地海拔三四千尺邊に多い。單に霧社櫻といふのがそれである。予は後立鷹駐在所前にある其遲れ咲きのを見た。花冠は小形で、花瓣は圓味を帶び、一寸李の樣である。こゝでは今兩者とも、所謂葉櫻を見たのだが、緋寒櫻は枝梢比較的太く、葉も大形で、長三四寸、幅一寸五分位、甚だ濃綠であるが、霧社白櫻は枝極細く、葉も小形で、長二寸、幅五分位、淺綠で、裏面に綠白色の微毛がある。托葉は極めて小さい。樹皮は、前者の暗黑褐色に對し、後者は暗灰色を呈し、遠くから眺めても、兩者の區別は容易である。幹の直徑は、一尺以上のが多い。

附近に野生するツツジを檢すると、コメツツジのやうに細小で、葉の裏面に白毛を密生し、花は小形で、ミヤマキリシマに類し、花冠五裂、各裂片細く、淡紫紅色を呈してゐる。

公園に立つと、東は脚下數十丈に、濁水溪を瞰下し、快晴の日には、溪谷の彼方、直距約三里の天

に、中央山脈中に其名も高き能高山（海拔一一〇〇〇尺）、薺萊主山（一一八九五尺）、合歡山（一一二〇〇尺）の峻峰を仰ぎ、西は眉溪の深谷を隔てゝ、直距約二里に、主城大山（七九八二尺）、關刀山（六六五〇尺）を眺め、南は卓社大山（一〇九〇三尺）、干卓萬山（一〇〇〇三尺）など、一萬尺級の高山を數多望み得る、實に四望開豁の好展望臺である。

濁水溪畔には、水田も畑も見える。

降雨のため、この日の日程である、附近の探勝は、全く放棄せねばならなかつた。附近には櫻溫泉とマヘボ溫泉がある。櫻溫泉は、濁水溪の崖側にあつて、小規模の浴舍がある。無味無臭清澄な溫泉で、脚下に激流を見下し、花時は崖上櫻の美觀に接すといはれる。又鐵線橋によつて對岸に渡ると、岩壁の窪みに湛へた、天然風呂があるとのことである。

名物スーク鐵線橋がある。濁水溪に懸り、長八十間、高百二十間といふから、橋上から溪流を見下しては、大抵の人達は、眩暈もするであらう。この地に蕃產物交易所がある。鹿皮、鹿角、猿骨などは、蕃人から供給し、綿布、毛絲、髮飾等は、彼等の需要するものである。

此日夕方、蕃地巡視中の臺中州警務部長兒玉魯一氏が來宿されるので、警官や學校の職員方は、歡迎に出られた。氏は轎に乘つて來られた。轎は本島にて、中流以上のものが、山地旅行に於ける、唯一の交通機關となつてゐる。即ち竹輿で、四方に窗あり、前面より昇降する。兩側の中腹に、竹棒を貫くのは、內地に於ける昔時のそれの、全部釣下げ式とは違つてゐる。そうして前後の者が、兩肩にて擔ぐのである。普通は二人擔ぎであるが、高官や富豪の乘るのは、四人擔ぎであり、且つ交代者も要するのである。多數の隨行者に歡迎者に擁された、氏の一行は、宛然大名行列を偲ばしめる。

氏は予が隣室に入られた。夕食後、予は敬意を表すべく伺つた。曩きに臺中州廳を訪ふた時、氏は不在であつたので、生駒文書課長殿から、氏に宛てられた紹介狀は、此時提出した。氏は東勢郡方面

から蕃地に入り、能高郡埔里方面に向はれるので、送迎のため、兩郡警官の大多數は、こゝに集まられた。能高郡の絲井警察課長も見えられた。予は曩さに能高郡役所を訪ふた時、絲井課長殿より、以前は、能高郡と東勢郡との郡界が、白姑大山から次高山に向つて區劃されてあつたが、昨年、白姑大山から畢祿山に向つて區劃線を引き、ピヤナン道路に於ける、マレッバ駐在所より稍北が、郡界となつたといふことを聞いたので、兒玉氏に面會を好機とし、東勢郡内に於ける便宜の御取計を請ふた。氏は直ちに隨行された東勢郡警察課長を呼んで、この旨を命ぜられたのは、非常に好都合であつた。

兒玉氏の語る所によると、本年は三千圓の經費を以て、ピヤナン道路のシカヤウ社から、次高山の頂上まで、簡單ながら、登山道路を開鑿する豫定であるとのことであつたが、其後新高山方面蕃情不穩のため、八通關道路に於て、俄かに駐在所增設の必要を生じ、州では、次高山登路新設費を、全部轉出するの止む無き事情となつたとは、惜いことであつた。

この日は警務部長殿御光來の餘慶にや、夕食の膳に、鳥獸肉の料理の外に、小鯛の鹽燒や、鮮魚の刺身まで上つたことは、海を距る程遠い蕃地としては、容易に見られぬ、献立であらうと思はれた。

こゝの一泊料は二圓五十錢、晝食は五十錢であつた。

二六、ピヤナン道路

立麿、マレッバ、八角蓮、松嶺、平岩山、高山鱒、タイリントキサウの大群落、淡紅樓、ピヤナン鞍部。

△三月二十八日　雨　朝　霧社　六六　夕　立麿　六五

松永君兄妹は、旅館の前側にある雜貨店に行つて、油紙や雨傘など買入れ、そぼ降る雨の中、歸途に就かれた。日月潭の探勝以來、三日の旅連れとなつた、無邪氣な人達に、予は其門出を見送つて、

健康を祈つた。この松永君が歸鄕の後、程なく變死あらうとは、神ならぬ身の知る由も無かつた。松永榮三君は、この年八月十二日、單身にて、日本アルプスの跋渉を試み、踏み迷ふて、烏帽子岳の北方溪谷で、凍死したことが、新聞紙上に現はれたとき、予は曾遊を追懷し、暗涙を催したのである。

霧社は、數日滯在して、悠々探勝するの價値ある境地であることは、沼井氏から聞いてゐたが、この日も細雨蕭々として霽れさうも無いので、遺憾ながら斷念し、ピヤナン道路を辿つて、北方の山々を探るべく、警官に護られて、午前九時櫻旅館を出發した。宿の老母は、予が行を壯とし、途中の慰みにとて、珍菓を寄せられたのは優しい。荷物は十四五歳位の蕃人の娘が、運ぶことゝなつた。六貫目もあるので、どうやらと懸念したが、例の荷紐を前額で支へて、健氣にも歩を進めた。內地語も略ゝ通ずる、公學校の賜であらう。

霧社は、能高道路とピヤナン道路の分岐點に位する。能高道路は東方濁水溪に沿ひ、スーク鐵線橋を渡り、支流ブカサン溪に沿ひ、八通關駐在所よりも稍高い、海拔九千四百三十八尺といふ能高駐在所を過ぎ、更にこの横斷道路中、最高地點に建てられた記念標（一萬九百十六尺）を越えて、花蓮港に達してゐる。この道路は、單に通過するだけでも、特殊雄大な景觀に接し、高山氣分を、充分味ふことが出來、能高若くは聯帶山の駐在所を根據として、南は能高山、北は蒋萊主山にも、容易に登り得るのである。

ピヤナン道路は、霧社より北東蕃地を縱斷して、ピヤナン鞍部を經、臺北州の羅東に通じてゐる。青葉茂れる櫻の下道を通り、森林を穿つと、紫黑色を呈する、氣味惡い程の大蚯蚓が、屢ゝ道に匍ひ出てゐる。長さ二尺にも餘り、周圍二寸强、この種のものは、予は初めて見たのだが、この邊には頗る多いとのことである。

左に眉溪の溪谷を見下す山側を辿ると、路傍ヤマキケマン、ムラサキミゾホヽヅキ、ツリガネニン

ジン、ヨツバシホガマ、ヲミナヘシ、イチハツ、スミレなどが、黄や紫や紅や淡紫碧といふ、とりどりの彩色を見せた。スミレには、葉甚だ細長、花鮮かな淡紅色に紫條を有し、頗る可憐な趣あるのがあつた。

十時三十五分高臺的牧場中にある、ロードフ駐在所（海拔五二〇〇）に着き、主任警官中山久一氏より、茶菓の饗にあづかつた。

こゝを出ると、高原狀の萱地となり、樹木は短小である。ツツジも可なりにあるが、まだ蕾であつた。スミレが多い。

十二時立鷹（タツタカ）（タ、ツとは讀まぬ）駐在所に着き、今日は今處に泊めて貰ふことにした。

蕃人の娘には、警官の指圖に基き、賃金三十錢を與へた。彼は嬉しさうな顏で、歸る姿もいぢらしい。

この駐在所は、海拔七千三百三十二尺の高臺にあつて、展望の雄大は、霧社を凌ぐこと數等といはれ、本島の名瀑合歡瀧も眺め得るとのことだが、この日は濃霧細雨四方を塞ぎ、眼界僅か數十歩の外に出でぬとは情ない。

合歡瀑は、濁水溪頭合歡山の南側にかゝり、其壯大な景觀は、大日本地誌にも掲げてあるので、予はこの行何とかして、この瀑を探りたいと種々計畫もした。この溪谷最奥のトロック駐在所に泊めて貰ふとしても、尙約二里ばかりの里程があり、殊に上流數十町は、斷崖絕壁を辿らねばならぬ樣子であるので、斷念したのだが、せめては其埋合せに、立鷹を根據として、三角峯、櫻ヶ峯あたりまで、登つて見たいと思つたのであつたが、これも天候のため、放棄せねばならぬことゝなつた。

三角峯は、立鷹の北東一里强、七千八百餘尺の地點に位し、峯頭三角狀を呈するので、この名を得。討蕃當時砲臺となつた所で、今尙其記念の跡を存すといはれる。

櫻ヶ峯は、三角峯の東北半里程にあつて、標高は八千百三十尺を算し、展望更に優良である。以前は自生の櫻が多かつたので、この名を得たのだが、屢〻蕃人の放火に禍され、今は殆ど滅絶したとは惜しい。

規模雄大な合歡山の尾根は、西南に延びて櫻ヶ峯、三角峯、立鷹と遞下し、更にロードフ社、霧社に達する。

立鷹駐在所は、尾根の突角の高みに位し、周圍に土壘がある。討蕃當時には、隨分重要な地點であつたことが窺はれる。主任巡査部長千葉磯治氏（宮城縣人）は、最近まで、霧社の南方カンタバン駐在所に勤務されたさうで、同地方の獲物であつたといふ、大きな美しい豹の皮を持つてゐられた。同地方には、猪、熊、キワ（猴）、帝雉は多いさうだ。

此處の駐在所の用水は、可なり下方の溪水を汲み運ぶのであるから、風呂の案内を受けて、特に有り難く感じた。

雨の小降りを窺つて、敷地の周圍に咲き殘つた霧社白櫻を視察した。霧社よりも餘程高いので、今尚其開花に接し得たのは幸ひであつた。花柄は二梗に分れ、梗は毛を有する。花冠は小形で、直徑約五分、花瓣は殆ど圓く、先端殆ど切込が無い。花葉同時に出る。タイワンヒザクラも植込まれてあつたが、花どころか、花に後れて出る葉が、今は既に綠濃く茂つてゐた。

膳には例により、鷄肉と大根の煮込み、生椎茸の豐富な料理を賞味した。ミツバゼリの浸し、大根の卸しは、この深山高地としては珍らしい。この地は大根、甘藍は能く出來、風味は良いが、蔓性の瓜類は、全然駄目ださうである。椎茸の野生は、この邊一帶に甚だ豐富であるとのことであるが、霧社まで持ち出して、生椎茸五十斤僅か四五十錢とは、驚くばかりの安價である。

△三月二十九日　晴　朝　立鷹五八　夕　マレッパ六〇

雨は止んだが、朝霧が深いので、展望は利かぬ。昨日夕刻電話で、マレッバから予が荷擔ぎ人夫をよこすやう依頼し、今日早朝來てくれる筈であつたが、仲々見えぬので、警手から荷を擔いで貰ひ、巡査に護られて、午前十時立鷹を出發した。警手とは、巡査補のことで、以前警丁といつたのを改稱したのだが、慣習上矢張「ケイテイ」といつてゐる。主に本島人を採用してあるが、時には蕃人も內地人も用ひられてゐる。そうして駐在所附近に、人夫を雇ふべき蕃社が無いと、警手がいつも無料で、各駐在所間を、次から次へと運んでくれられるのは、勿體ない。

立鷹からは、晝尙暗い森林の中、自然の根段と、人工の木段とが交錯する非常な急坂を降るので、臺灣式竹棒荷擔ぎの警手は、隨分困られた。この邊の林中には、餘程椎茸が多いこととて、我等が目にも屢〻入つたのである。護衞警官勳八等吉村克己氏が語る所によると、暴風雨の後に於て、其發生が最も多いとのことである。

三十三町を隔つハボン駐在所に着いたのは、十一時であつた。マレッバからよこされた荷擔蕃人は、こゝで待つて居つた。コーヒーに菓子といふ饗にあづかつた。こゝの警官諸氏から貰つた名刺には「伊藤鐵一」、「嶺山三榮」、「川田淸」とあつた。

ハボン駐在所からは、ピヤナン道路の本道を通るので、大道坦々とも言ひたい、六尺幅の立派な街道である。昨日予が辿つた道は間道である。立鷹を根據として、櫻ヶ峯方面を探つて見たいからであつた。

この邊の崖側には、シウカイダウが夥しい。蕾も見えるから、春季咲くであらうが、これでは秋海棠では無くて、春海棠である、莖にも葉裏にも、赭色の毛がある、所謂シマシウカイダウであらうか。

本島自慢の八角蓮は、陰濕の樹下、所々其開花を見せた。

ムベが多いが、葉の形態が違つてゐるから、これもタイワンムベとでもいふのであらうか。

午後一時、右手から落ち來る溪流に架けた橋がある。長さは五間程ではあるが、「發祥橋」と註した其名が美しいので、護衞警官に其由緒を質したが、判らなかつた。唯用材が樟の巨木であつたと聞き、流石臺灣であると感じたのである。溪流は三四條の瀧となり、樹林の添景も棄て難い趣がある。五萬分一蕃地々形圖によると、この溪流は、櫻ヶ峯に發源する無名溪と記入されたのであつた。

程なく白狗（ハック）駐在所に着いて、晝食をしたゝめた。椎茸入のとろゝこぶ汁を饗されたのは嬉しい。主任警官は、巡査部長勳八等福岡德治氏であつた。

道は大肚溪の上流北港溪の左岸に沿ひ、午後四時マレッバ駐在所に投宿した。海拔約四千五百尺である。

導かれて客室に入つた。檜造りの新築で、十二疊敷の疊は、まだ新しい。床ノ間といひ、書院障子といひ、總ての建築施設甚だ優良で、予が蕃地に於て、警察官吏駐在所に宿泊を請ふた中では、隨一であつた。

旅裝を解くや、早速「お風呂に」との案内を受けた。矢張新しい檜造りであるが、其浴槽が樟材であつたので、樟脂特有の芳香に襲はれたのは嬉しい。警手の方が、三助代りとなつて、背を洗つてくれられたには、更に恐縮であつた。

蕃地駐在所に宿泊を請ふには、いつも其日の朝、警察電話で申込んで置き、途中各駐在所では、常に次から次へと、こちらの出發時刻を通知されるので、其到着時刻の豫定がつくから、到着すると、すぐ入浴の恩惠に接し得ることは、普通旅館に投宿するよりも、便利の點が多い。唯幾分氣遣ひの點があるのと、始終警官の護衞を受けるので、見學上種々質問の便宜はあるが、予が得意の西行然たる行動を取るには、こゝにも亦多少遠慮せねばならぬ。然しだんだん馴れて來て、所謂臨機應變の策に

出ることもある。

氣持良い湯から揚ると、提供された和服に、くつろいだ。

主任警官の差出された名刺に「能高郡マレッバ警察官吏駐在所駐在、臺中州警部補勳七等佐塚愛祐」とあつた。氏は予が隣縣の長野縣南佐久郡海瀨の產であつた。氏は討蕃以來、蕃地に勤續すること十八年、蕃情精通を以て有名な人で、其奥樣は、マシトバオン社頭目の娘で、非常な美人であることは、霧社で聞いて來たのであるが、其挨拶に出られたのを見ると、如何にも色白な美人である。唯額髮から眉間のあたりまでかけて、幅一寸位の淡い青い刺墨(イレズミ)のあるのが、それと首肯れるだけである。其刺墨は、稍離れて見ると、前髮を切り下げたやうで、一種の愛らしさもある。日本語は流暢に使はれる。頭腦は極めて明晰で、衣服裁縫から、日本料理にも、臺灣料理（支那料理）にも熟達されてゐるとのことである。年は三十五六に見えた。

佐塚警部補殿と相對し、豹の皮を敷いて、食卓に就いた。奥樣が心盡しの料理が、美しい樟木の卓上に運ばれた。鷄肉や卵燒、椎茸、鹿角菜、蓮根など、巧みに調理された。五目飯の出たのは珍らしい。筍と里芋と豚肉の甘煮もあつた。甘藍の浸しもあり、唐辛の風味が程能く加はつた朝鮮式の結構な薤漬もあつた。予が下戸だといふので、葡萄酒まで出されたのは、恐縮であつた。

臺中高等女學校の二年生だといふ、十六歳の令孃佐和子さんも、給仕に出られた。立派な體格と容貌との持主である。今は學年度休みのため、歸省中であつた。長男義雄さんは、今年尋常科を卒業して、中學に入られるのださうだ。

予は蕃地勤務の警官方が、其子供の教育には、少からず苦心されるのに、同情せざるを得ぬのである。蕃地と言つても、霧社や角板山などは、兎に角小學程度の設備はあるが、多くの部落は、少數の蕃童に對し、警官が教員兼務であるのは、まだよいとして、全然部落無くして、單に駐在所ばかりの

が多い。それで完全な教育を施さうとするには、小學時代から、父母の膝下を離れた、遠い平地に出さねばならぬ。予はこの途中、偶〻學年度末である關係上、かゝる兒童が、相當附添人の下に、平地への往復に疲れつゝあるのを、屢〻目擊して、そゞろ暗涙を催したのであつた。この場合には、州からは、教育費の補助支給をなし、又特に僻地加俸もあるとのことである。

予は佐塚氏の經歷と、今回厚き御世話にあづかつたこととを記念すべく、氏が白姑大山(ハックダイサン)で獲たといふ熊の牙を印材とした印章を、予が記念帖に押して貰つた。

室に「膽如斗」と彫刻した樟の木額がある。其木理は非常に緻密を極め、美しい環紋雲樣を呈する珍品であつた。

床の間と、檐先きには、數鉢の八角蓮が、花今や見頃であつた。こゝのは特に葉色深綠で光澤あり、花も亦光澤ある褐紫色を呈し、如何にも幽雅でもあり、勇壯であり、非常な氣品を感じた。霧社公學校の花園に植ゑ込んであるのは、陰地性植物に對し、日當りが過ぎたためか、花色も惡く、光澤が無かつた、特に葉の色合と光澤は、不良であつた。

佐塚氏によると、櫻ヶ峯附近の海拔七八千尺あたりには、石南の幹の直徑三尺以上のがあり、白姑大山にも亦同標高地點あたりに、直徑二尺以上のは、所々で見た。花は皆淡紅色である。岩石地に生育したのは、幹は節瘤立つて居り、木理も緻密な環紋狀を呈して、甚だ面白いとのことである。この客室の床柱は、石南であつた。火鉢もそれであつた。

櫻ヶ峯の上方八九千尺邊には、幹の直徑三尺以上の一位がある。この室の一隅にある机は、其一部を用ひたのだと言はれた。

氏は又次高山の頂上は、積雪本島第一である。最近陸地測量部の測定結果は、標高本邦第二となつてゐるが、事實尙高いやうな感じがする。畏多いことだが、彌高山(イヤタカヤマ)とでも御命名を仰ぎたかつたなど

と語られた。

裏庭に、霧社白櫻の花が、散りかゝつてゐた。

この邊には、ミカドキジが多い。鳩も見た。カジカの鳴聲も、頻りに耳に入る。

先年朝鮮金剛山で、虎には頗る敬遠主義を拂つたのだが、本島中央山地には、屢〻豹が逍遥するを聞いて、薄氣味惡くあつた。予は屢〻この敷皮に坐しては、毎に思ひ出さずにはゐられなかつた。

この駐在所の位置も、附近蕃社の所在も、近頃餘程異動したとのことで、五萬分一蕃地地形圖のとは、頗る相違がある。總督府警務局の調製にかゝる三十萬分一圖が良い參考となつた。

蕃人は、山林の燒跡に、粟や蔬菜、麻、煙草など栽培するが、四五年も經過して、地に養分が缺乏すると、他に移るのである。彼等は、人糞尿は不淨のものとして、決して肥料には施さなかつた。然るに近來は、警官の指導により、漸次糞尿をも用ひ、且つハンノキを栽培して、其葉を肥料に用ひ、輪轉耕作を營むやうになりつゝあるとのことである。

△三月三十日　晴　朝　マレッバ　五六　夕　松岑　五〇

朝裏庭から眺めると、脚下數百尺、北港溪の激流は、迂餘屈曲、白龍の如く南に走り、谷間の彼方には、遠山近岳、或は淡く或は濃く、近く右手に天を衝く堂々たる雄姿を呈するのは、海拔一萬一千九十二尺を算する白姑大山である。山側を刻む幾條の雪溪が見える。この日の朝景色は、予に少からぬ印象を與へたのであつた。

佐塚警部補殿、夫人、令孃、警官方の見送りを受け、午前八時マレッバ駐在所を出發した。

蕃社部落が彼處此處に散在する。從て畑が多い、隨分急斜面の山側に、能くも耕作し得るものだと思はれる所がある。桃や李の殘花が、淋しく目に入る。

同四十分、右手より流下して、北港溪に注ぐ溪流に架けた鐵線橋がある。長さ七十五間、高さ亦七

十五間ある。附近クス、カシ、シヒなどの闊葉樹林蔚蒼と茂り、橋下の兩崖にも、亦老樹の添景があり、脚下には白沫を飛ばす急湍を見下し、正面には、雪溪を刻む白姑大山を仰ぐといふ、得易からぬ景觀を呈し、八通關道路に於ける鐵線橋が、殆ど皆赤裸々といふ殺風景なのに比べると、霄壤の差がある。予は橋の中程に佇んで、暫く此の光景に見取れたのであつた。橋詰に橋名が見えぬので、護衞の警官眞砂氏に質したに、まだ命名が無いとのことである。

十時マリコワン駐在所（海拔約六千五百尺）に休み、主任巡査前田茂太郎氏より、茶菓の饗にあづかつた。

十一時頃、蔚蒼たる美しい原始的森林に入り、無量の快感に接した。闊葉樹を主とするが、追々タウヒ、アカマツが混じて來た。所謂タイワンアカマツは、亭々として伸び揚がり、樹姿ゴエフマツに似てゐる。サルヲガセが仙姿を添へる。道に白い落花が、一面に敷かれてゐる。近づいて見ると、ナツツバキの花である。仰ぎ見ると、其幹高さ三丈に餘り、直徑は二尺以上にも達し、予が經驗上、最大のものであつた。この木は又シャラの別名があるので、無責任なる植木屋の中には、「釋迦の靈木娑羅雙樹」などと廣告してゐるのがあるが、このナツツバキは內地にも多い落葉樹、彼は印度原產の常綠樹で、淡黃色の小花を圓錐花序に排列するなど、全く別科に屬するのである。

路傍ヤマキケマン、ニガナ、ミヤマカウゾリナ、チャルメルサウの花が目に入る。

ミカドキジが屢〻見參に入る。

零時四十分、今日の宿泊を請ふてある松嶺（マツミネ）駐在所に着いた。標高約八千五百六十尺である。この邊は、新道開鑿により、餘程變動してゐる。五萬分一蕃地地形圖にシカヤウと記入されてゐる地點がそれである。赤松の純林が廣く相連るので、松嶺の新名を得たのだが、警務局の三十萬一圖には、松嶺とある。「ショウレイ」、「ショウライ」、と音讀すると、蕃語肛門を意味する發音と、近似する嫌ひが

あるので、今「マツミネ」といつてゐる。

この日は强行軍すれば、平岩山(イガンザン)駐在所まで行くことは、難事では無いのだが、悠々松嶺附近の景觀を鑑賞したり、且つは南湖大山攀登の時日も近づいてゐるので、充分の豫備的餘力を得ようとの考へから、此處に泊ることゝした。

八千五百餘尺の標高といふと、樺太は勿論、北海道、四國、九州の高山と名のる山々は、皆其眼下に雌伏せねばならぬ。ビヤナン道路中の最高地點に位する松嶺は、合歡山の尾根が、北に延びた高臺の一突角を占め、尾根の走尙によつて、南西より北東に亙り、緩く遞下し、北西は數里の深谷を一眸に收め得る、天界の好望樓であるから、討蕃當時に於ける、頗る重要な地點であつたことが首肯れる。今尙周圍に、高い土壘を繞らし、記念の山砲が存してある。

壘上に立つと、北は大甲溪の深谷を隔て、兇蕃サラマオ蕃地の彼方、直距四里の天に、悠然たる偉大な山容を呈するものは、本邦第二の高峯、標高一萬二千九百七十二尺を算する次高山である。山頂銀冠を戴いて、威嚴は彌々加はる。右に延びた支脈の一角、シカヤウ大山の右肩の裏を擁するものは桃山(海拔一一一八八尺)である。左に延びた支脈は、大雪山(一一八八〇尺)、小雪山(一〇〇四三尺)を崛起し、これ亦山頂白雪を被つて、其名の空しからぬを證明する。眸子を東に一轉すれば、直距約二里半に畢祿(ヒツロク)山(一一一五一尺)を仰ぎ、其脈北に延びては、銳尖天を刺す中央尖山(一二二六〇尺)となり、規模雄大な南湖大山となり、南に延びては、近く合歡山となり、苛萊主山となり、中央山脈勇將の面々、所謂綺羅星の如しといふ壯觀を現ずる。松嶺は實にビヤナン道路に於ける、第一流の展望地點を占めるのである。赤松の老樹巨木は、點々として程よく配置し、視界を閉塞する憂も無く、木の間を透して、遠山近岳、歩々其景致を變ずるのは、寧ろ一種の趣を感ぜしめる。樹下は短い萱や芝が一面に敷き詰め、宛然絨氈の如く、ツツジ、センブリ、シャウジャウバカマ、センボンヤ

リ、ミヤマキンバイ、ミヤマリンダウなど、花模樣を織り成してゐる。松嶺附近は、實に一大公園の大觀を呈する。數里に亙つて、赤松が作る大地域の純林としても、亦恐らく本島中無比であらう。

此處には、ミヤマリンダウの二品種を見た。一は通常のミヤマリンダウのやうに、花冠紫碧を呈し、一莖一花を附け、莖の下部には、葉を密生する（ミヤマコケリンダウ）。一は花冠黃色を呈し、內面に褐綠點を撒布し、一莖七九花をつける（ニヒタカリンダウ？）。

此處には特に客室が無いので、主任巡査山下祐藏氏の住宅に宿ることゝなつた。氏は山口縣下關の人で、仲々如才無く語られた。こゝの勤務巡査の中に、我が新潟縣葛塚の產で、中村彰治といふ人が居られた。予を所轄境界まで出迎へされ、翌日亦予を次ぎの駐在所境界まで送られたのである。予が同縣人だといふので、特に自ら牡丹餅を造つて、饗應された好意は、有り難い。多藝多能を要する蕃地の警官方は、かうして又女房役にも堪能であるとは、實に驚き入る。

浴場は、可なり離れて、別棟となつてゐる。

△三月三十一日　小雨　朝　松嶺　四二　夕　平岩山　五八

流石は、八千五百餘尺の高地だけあつて、今日の朝は、四十二度といふ冷氣を示し、而かも細雨蕭蕭として、四面濛々の裡に鎖され、早朝に於ける展望は、全く期待を葬られた。

この天候のためか、昨日電話で、シカヤウ駐在所に依賴して置いた、予が荷物を運搬する蕃人も仲仲來ぬ。電話で照會すると、あちらは既に出發したとのことである。

その中に雨も止み、雪溪を刻む畢祿山、合歡山は、屢〻霧間から、鮮かな其雄姿を見せたが、次高山方面は、全く霧深く鎭座ましましてゐる。

荷擔のため、蕃女が三人來た。駐在所用の貨物もあつたからである。最も年若いのは、二十前らしく、色白な美人で、和服を着け、下げ髮にリボンといふ風姿は、とても蕃娘とは思はれぬ。道々護衞

の巡査中村氏と語る樣子を見ると、仲々快活な性質で、容貌に氣品もあつたが、これはシカヤウ社頭目の娘で、年は十八。評判の美人ださうである。近頃彼等は、好んで斯うした勞役に服し、得たる賃金は、裝飾品購入の資とするとのことであるが、彼地駐在所では、一つには、この美人をお目にかけたい好意もあつて、選定したといふことを後に聞いて、其粹意を謝せざるを得ぬのであつた。

頭目の令孃名は「アバン、タックン」といつた。道々內地の童謠を歌つたり、ハーモニカも吹いた。中村氏は、予を東京の先生だと告げられたが、東京といふことが、最も彼等の意識に上るらしい。最年長の女は、四十歲位で、額に入墨があつた。

十時四十分松嶺駐在所を出發した。松林は尙續いたが、漸次クヌギ（アベマキ）が混入し、遂には見渡す限り、全くクヌギの原始林となつた。松の玄綠に見馴れた眼には、其鮮かな淺綠美は、又一種の柔かみ、明るみを與へて、心地良い。視界の映畫は、轉換の必要を感ずる。こんな廣い地域に亙るクヌギの純林は、是れ亦他に比類無からう。而かも地面には、始終高低彫刻があつて、單調を破るのは嬉しい。

十一時四十分椚岡駐在所（クヌギガヲカ）（六七〇〇尺）に休んだ、クヌギに抱擁された此處の駐在所の名は、松嶺と共に、名實の合致を首肯せしめて、印象特に深い。椚岡駐在所主任巡査勳七等森今朝治氏より茶菓の饗にあづかつた。蕃地の警官方には、有勳者が多い。この駐在所からは、東勢郡に屬する。椚は尙十數町も續いてゐる。この椚は國字で、漢字は櫟である。

零時三十分左手に立派な岐路がある。大甲溪に沿うた、サラマオ蕃に屬する諸部落を過ぎて、東勢郡役所の所在地東勢庄に通ずる。庄とは內地の村に相當する。岐點に「椚岡二十一町二十五間、太保久二十五町二十五間、至ピヤテン鞍部六里一町三十八間」と註した標柱があつた。

程無く路傍左手の小高い所に、墓標が見え、戰死警官の墓だと聞いて參拜した。墓石に「故臺中州

警部長久保榮左衞門之墓」、「故臺中州巡査部長武藤八右衞門之墓」、裏面に「大正九年九月十八日戰死」と刻んである。外に警手三人の墓もあつた。サラマオ蕃は兇惡猜疑性を帶び、叛服常なきことを聞き、殉職警官諸氏の靈に對し、無量の感慨に打たれた。偶〻近く銃聲が耳に入つたのも、薄氣味惡い。これはサラマオ蕃人の狩獵であつた。最近この蕃人等は、歸順式に列したといふが、予は其歸順の永久的であるを祈るのである。

午後一時三十分、太保久（タホク）駐在所に着いた。此處で携帶した辨當を開かうとすると、主任警官は、強ひて別室に招じて、丁寧な饗應された。其献立は、豚肉のフライ、胡麻豆腐の餡かけ、蒲鉾など其材料といへ、其調理法といへ、交通不便なこの深山には、頗る不似合であつた。後に轉職された警官の別れの宴があつたことを聞き、其餘慶を蒙つたのだとうなづかれた。この主任警官は、熊本縣人上野善吉氏で、年も若く、予が阿蘇山登山談に對し、自分の曾遊をも、快活に話された。

平岩山駐在所から、巡査部長石戸勝市氏の出迎を受け、二時に此處を出發した。急坂を降り、大甲溪に架けた鐵線橋を渡り、再び急坂を登ると、眼界開け、路傍を飾る花盛りのツツジに送迎され、三時二十分平岩山駐在所に投宿した。

平岩山駐在所は海拔約六千尺、小高い突起點に位置し、前面即ち北方近く平岸山（海拔九五〇〇）の岩山を眺め、其右方稍退いて、南湖大山の雄姿を拜し、南西は大甲溪の谷間に、白姑大山が、雄大な山容を提示する。唯直距約二里の北西に聳える次高山は、鼻先きに、シカヤウ大山が遮つてゐるので、望むことは出來ぬ。左方脚下數百尺に、シカヤウ蕃社（ヤ、ウと發音する。ヤウとは發音せぬ）を瞰下す好地點に位する。

建設工事中の門前まで出迎へられた主任警官の案内によつて、新築客室に入つた。差出された名刺に「東勢郡平岩山警察官吏駐在所駐在、臺中州警部補川西常吉」とあつた。氏は滋賀縣人で、討蕃以來、

南湖大山頂上より東方を望む（其三）臺灣總督府山林課撮影。

（沼井鐵太郎氏寄贈）

蕃地に勤續する十八年、蕃情精通の點に於ては、マレッパ駐在所の佐塚氏と共に、雙璧と稱されてゐる。

氏は非常に植物に對する趣味の深い人で、庭園築山は、自ら考案者となり、築造者ともなられたさうで、泉水に清らかな瀧が落ち込んでゐるが、この突起地點に、この水を引き込むことは、其設計の苦心が窺はれた。

植ゑ込まれた樹木は、主として附近の山地からもたらしたのが多いが、中には鄕國から移植し、十數年の愛養を經た、梅の老木もあつた。桃の花は滿開である。鮮麗な淡紅の花が爛漫と蔽ふ、高さ五尺ばかりの一株が目を惹くので、之を檢すると、ツツジであつた、若芽も淡い赤味を呈し、花の色彩と相調和し、言ひ得ぬ優美さを感じた。附近の野生品であつたとのことである。

この邊、普通の赤いヤマツツジは、年中咲いてゐるのがあるさうだ。

附近を散歩すると、ツツジが非常に夥しく目に入るので、之を檢するに、少くも十品種位は、算することが出來る。ミヤマキリシマ式の小形な花冠で、淡紅紫色のが最も多いが、其の中にも、葉の形態に幾分の差異があり、雄蕊は五個のものと、十個のものとある。又ウンゼン式の極めて小形のもあるが、花は內地ウンゼンツツジのそれよりは稍大きく、淡紫色である（ナカハラツツジ？）。吉野山櫻の花かと見紛ふ程のツツジもある、花色極めて淡紅で、櫻花式の形態を呈し、若芽と蕚には白毛密生する。

氏は兩三年以來、この附近の丘陵や溪側に、四百本程の櫻樹を植附けられた。其成木した花時には、雄大莊麗なる山岳美に添ふる一大美觀を現ずるであらう。植附けられた櫻は、三品種である。それは阿里山緋櫻、霧社白櫻、及この地方自生の淡紅櫻である。

予はこの淡紅櫻については、非常な興味を持つたのである。元來本島特有の櫻としては、前二者が

有名な品種であるので、其花に接すべく、予が渡臺を早めた一因とはなつてゐたのだから、實際觀察し得たのは、甚だ幸とする所であるが、正直に告白すれば、餘り讃美の辭を呈することは出來ぬ。今平岩山に於て、圖らずもこの淡紅櫻の花景を拜し、眞に禮讃せざるを得ぬのであつた。この櫻は、花は葉と同時に生じ、若芽は赤味を帶び、濃淡の差あることは、吉野山櫻に酷似してゐる。唯花冠稍小形で、花瓣圓味を呈し、先端殆ど切込が無い。花柄は二三に分岐し、梗には殆ど毛が無い。蕚と苞に粘り氣がある。枝振りも吉野山櫻に似てゐる。葉は花に相應しく小形である。分布區域は、この附近から、ピヤナン鞍部の稍下方にまで亙つてゐるから、予は謹んで、ピヤナン紅櫻の尊號を奉呈したい。

この地では、阿里山緋櫻の花期は、一月より二月に亙り、霧社白櫻は、二月より三月上旬に亙り、淡紅櫻は、三月中旬より、四月上旬に亙るといふから、この三種の植込みは、花期の通計、一月より四月に亙るのである。

川西氏は、白姑大山七八千尺邊には、石南木の幹徑二尺以上の多いことを語り、又この附近には、白花の石南があるとのことで、其所在地の經驗を有する有勝駐在所の勤務巡査宮原理平氏を、翌日特に予が案内する樣、世話されたのは嬉しい。

氏は殊に蘭科植物を愛養され、附近から採集された蘭の品種も數多く、花は既に萎れたのもあるが、今正に唇を開き、芳香を放つのもあつた。クマガヒサウの怪奇な花、タイリントキサウの優美な花も、鉢植となつてゐた。床の間には、八角蓮が、雄壯高雅な葉振り花振りを呈してゐた。

氏は各方面に趣味深い人で、書畫も好まれ、記念の器物も多い。栂の瘤で作つたといふ机は、三尺四尺の一枚板で、木理紋樣實に雅致を極めたものであつた。野生の桑で作つた火鉢もある。

帝雉の一族だといふ剝製品が飾られてある。項に徑一寸程の白毛を生じ、尾羽は白の斑が著しく多

い。鹿林山で見たのよりは、一際鮮かである。

穿山甲（センザンカウ）の剝製もある。本島に於ける有名な奇獸で、埔里邊の山中に最も多いといはれるが、予は山地所々で、其掘つた穴だといふのを見た。好んで蟻を食ふので、アリクヒの名があり、頻りと山地に穴を穿つので、穿山甲の名を得たのである。又鯪鯉、石鯉などいふ難かしい名もある。體形鰐のやうに角鱗を有し尾は太くて長い。口先は細く尖つてゐる。大なるものは、二三尺にも達する。本島人は、其肉を食べ、甲にて器具を作り、又藥用とする。

氏は明治四十五年、討蕃夜襲の際、岩角で出逢ひ、敵蕃と思つて射擊したのが、蕃人では無くて、巨大な熊であつたので、記念のため、其牙を印材とされてある。予は請ふて、記念帖に押して貰つた。

氣持良い入浴をすまし、川西警部補殿と、夕食の卓に對坐した。鷄肉、卵蒸し、蕃鯉及び蕗の甘煮、細葱の山椒和へなど出たが、初めての試食である高山鱒は、珍中の珍品であつた。蕃鯉は、既に東埔で食べたのであるが、この高山鱒といふのは、次高山に發源する大甲溪の上流に於ける、特産だといはれてゐる。概形は、北海道阿寒湖原産のヒメマス（アイヌの所謂カバチェッポ）と、内地各所の深山溪流に多いイハナとの、間の子といひたい姿を呈し、七八寸位の小形で、一尺以上のは、甚だ稀であるさうだ。この高山鱒を刺身としたり。甘煮としたり、吸物にも使はれた。姬鱒よりは、更に淡泊美味で、其甘煮としたものは、頭骨まで、容易に食べ得る脆軟さである。これは予を饗應するため、特に蕃人に命じての獲物であるとは、感謝に堪えぬ。蕃鯉は之に比すると、骨は硬く、味も劣ること數等である。

山椒は、氏が郷里から、苗木を取寄せられたのださうである。蕗はこの地の産であつた。

此處でも、予が下戸であると云ふので、ビールまで出されたのである。

本邦第二の高峯で、御命名の光榮を蒙つた次高山は、以前はシルビヤ山といつた。これは六十餘年

前、西暦一千八百六十七年、本島の東海岸を通過して、本山を望見測定した、英國軍艦シルビヤ號の名に基いたのであつて、一時は本島第一の高山として、宣傳されたのである。支那人は、雪山、又雪翁山、或は雪高翁などと稱してゐた通り、積雪の多いことは、本島第一に位するのである。

次高山に登るには、シカヤウ社を根據とするのである。予は事情許す限りは、本山にも登りたい希望があつたので、平岩山駐在所に到着するや、川西警部補殿について、協議してみた。氏は用意さへ周到ならば差支無いから、案内の取計ひはすると言はれたが、同山は、シカヤウ蕃社から、大甲溪の支流シカイラン溪を縫ひつゝ徒渉すること、八回を要し、膝以上の水量であるが、殊に近頃は、暖かい天氣が打續き、雪融の水量が增加してゐるので、遺憾ながら、之を略することゝした。

△四月一日　快晴　朝　平岩山　五八　夕　ビヤナン鞍部　六〇

快晴なので、早起附近を散歩して、深山氣分に浸り、四周を擁する高山峻岳を禮讃した。予が所謂ビヤナン櫻花の朝日に匂ふ、優雅な風姿は、更に幾段の氣品を加へた。

八時十分、印象深い平岩山に別れを告げた。道はビヤナン鞍部に發源する大甲溪支流の左岸に沿ふ。赤松を交へた闊葉樹林の間、彼方此方淡紅櫻が點飾する。著しく赤味を帶びたミネカヘデが目に入る。渡臺後こゝで初めて春蟬の聲を聞いた。

途中銀冠を戴いた次高山の英姿を、屢〻顧みた。

十時志良節(シラセツ)駐在所に休憩した。勤務巡査思時哉氏（鹿兒島縣人）から、自ら撮られた「松嶺より望んだ次高山」及び「深雪の能高山」の優秀な寫眞を寄贈された。氏は能高駐在所に勤務すること三年、同地積雪の頗る多いことも語られた。

志良節駐在所附近から、クマガヒサウが屢〻目に入つたが、有勝橋を渡ると、右手の山側斜面には、其大群落が所々にあつた。又この花に伍するタイリントキサウもある。殊にタイリントキサウの純群落

は、驚くべき面積に蔓衍し、美觀を極めてゐる。以前に見たのは、概ね斷崖的岩壁に蝸附してゐたが、此處のは、緩傾斜の、而かも蘚苔や芝生の中に、敷いたやうに密生してゐた。そうしてピヤナン鞍部邊まで、豐富に目に入つたのである。

有勝駐在所に立寄ると、同所駐在巡査部長福田喜一郎氏は、電話にて、川西警部補殿からの通知があつたとて、特に同所勤務巡査宮原理平氏（佐賀縣人）に、予が案内を命ぜられた。白花石南の產地を示すがためである。其產地は、臺中、臺北兩州の境界附近、右手の崖上であつた。所謂白花石南は、まだ咲かないが、其蕾を開いて見ると、花冠は白いが、瓣端は微かに淡紅色を帶び、內面に紅點がある、これは滿開の後には、全體白色となるのかも知れぬが、紅點だけは存するらしい。此の木の葉は狹く尖り、裏面灰褐色を呈してゐる。

株を異にした白花といふ木の蕾を開くと、これは花冠が全部白色であつたが、極めて微かながら、矢張紅點がある。この木の葉は極めて狹長で、裏面は雲母的銀白を呈する。又其若芽は、美しい淡紅色を呈し、裏面には鮮かな白毛がある。此處には、紅花のもあつた、其葉裏は灰褐を呈する。

後南湖大山に登つた時、山腹標高約六七千尺あたりで。滿開した白花のを見た。旗瓣の內面には、紅點がある。葉裏は無毛淡綠色であつた。

以上の如く、葉の形態は、頗る複雜を極めてゐるが、所謂白花石南なるものは、內地に於けるシロシャクナギとは、全然別品種であつた。

近く小溪流に架けた、長さ四間ばかりの橋がある。一方の橋詰には「石楠木橋」、他方の橋詰には「しやくなぎばし」と刻んである。工事擔任の警官が、シャクナギと呼ぶ方言を有する地方の人であつたと見える。

程なく、臺中、臺北兩州を界する三間ばかりの境橋といふを渡り、午後二時三十分、羅東郡ピヤナ

ン鞍部駐在所に投宿した。標高約六千二百尺。予は既に臺北州の地域に宿つたのである。

正面の山は、緩かな斜面を見せてゐるが、後方は缺壞した急崖を呈し、稜々たる岩骨を現はす。コメツガ、ニヒタカモミ、イチヰ、アカマツ、ゴエフマツなどの針葉樹が多い林間を縫ふて、クヌギの淺綠と、淡紅櫻の花が、優しく點飾する。この邊一帶に、シャクナギが夥しい。ニヒタカシホガマ、ヤマアザミが目に入る。

この地には、警察の酒保がある。

客室の床の間には、藤田東湖正氣之歌の摺物が、掛けられてあつた。

此處を根據として、稜線を辿り、南湖大山に登ることも出來るのだが、予は準備の都合上、ピヤナン社から登ることゝしたのである。

勤務巡査石井源次、山口音松兩氏と談話中、偶然にも、この駐在所に「南湖大山」と刻んだ、風雅な竹印の備附のあることが判り、記念印帳に押してもらつた。

この邊の緋櫻は、三月上旬に咲くとのことである。又高山鱒の漁獲は、次高山と桃山から發する大甲溪上流の一であるキロン溪に於て、六七月暴雨の時を最好とすと聞いた。

△四月二日　晴　朝　ピヤナン鞍部五三　夕　ピヤナン七〇

味爽ウグヒスの聲に伍して、チリーン、チリーンと金鈴を振るやうな、或はヒュー、ヒューと笛吹くやうな、種々樣々な、小禽の鳴聲が耳に入る。

昨日夕食には、鷄肉の剝燒に、鷄肉の刺身を饗されたが、今朝は鷄肉と生椎茸の汁、生卵などがあつた。味附淺草海苔も添へられた。椎茸は、樫の木に產したのが、香味佳良であるとのことである。

山口巡査の護衞を受け、午前七時四十分ピヤナン鞍部駐在所を發すると、程なく展望臺がある。北東宜蘭濁水溪の深谷には、雲海の上に、ボンボン山（海拔五六七六尺）、棲蘭山（六四一〇尺）などの

峯頭が、島嶼の如く浮び、東南には南湖大山の堂々たる山容を仰ぐ好地點である。數個の腰掛と四阿があつた。

こゝから急な下り坂となる。カシ、シヒ、クルミ、ユヅリハ、タイワンヤツデ、トリカブト、エンゴサク、ニヒタカツクバネサウ、ニヒタカムグラなどが、目に入る。此處でも、朝日に匂ふ淡紅櫻が非常な快感を與へる。

稜線の突角に位する突稜(トツリヤウ)駐在所、斷崖の上に立つ斷崖(ダンガイ)駐在所に少憩する。近く桃山を仰ぎ、濁水溪の深谷に臨む好地點である。

この邊から、可憐白梅のやうな花を着けたウメバチサウが見參に入る。渡臺以來始めてである。莖の高四五寸を超えず、內地のに比すると、葉は甚だ小形で、著しく濃綠を呈し光澤があつて、頗る優秀を感じた。內地ウメバチサウの花期が、八月より十月に亙るのに比すると、こゝのは非常に早い。

ピヤナン鞍部以北約一里に亙り、闊葉樹林は、蔚蒼として頭上を蔽ひ、左方數百千尺の深谷、即ち濁水溪の源頭兩崖を埋めた、密林の幽邃美は、又秋季紅葉美の一大佳境たるを想はしめる。

櫻巡査部長殿の出迎を受け、十時ピヤナン駐在所に着いた。海拔約三千九百尺である。

明日は、愈〻南湖大山に向ふの日程であるので、充分休養を取り、且つ準備上の協議をしたのである。

ピヤナン社は、タイヤル族に屬し、戶數七十四、人口約三百五十、蕃社としては、大部落に屬する。濁水溪の左岸高臺地に位し、耕作地積も廣く、生計は比較的裕かである。濁水溪頭に位置するので、附近の蕃社と共に、溪頭蕃の稱がある。

駐在所玄關前に、花盛りを呈する一株の蜜柑が、芳香を漂はす。

駐在所に隣して、養蠶講習所がある、兒童教育所がある。オルガンの音が聞える。校前に十數株の

櫻が花を見せる。内地から移植した大吉野櫻は、正に滿開であつたが、八重櫻は、濃い紅の唇ゃ開かうとする。桃や李の樹も見えた。

蕃人の家屋は、兩面傾斜の皮葺、板葺が多いが、茅葺もある。風害を防ぐために、屋上に千木式裝置がある。これは霧社あたりでも見た。一般に檐が低く垂れ、且つ狹い入口だけの採光であるから、室内は暗く陰氣である。

服裝は、胴着のやうなのを着け、男は腰の前後に、幅五寸ばかりの布片を、前垂式に垂れてゐるが、彼等が跪（うずくま）ると、其一物は、側面からは能く見える。女は二枚の腰卷を、前後で重ね合せ、可なり嚴重に守つてゐる。大抵風呂敷形の布片を、左肩からかけ、右肩の上で結んである樣子は、袈裟式である。そうして彼等が身を離さぬ、武器の蕃刀は、其鞘先が、僅かにこの袈裟の下部に現はれてゐる。

昨年新築されたといふ、木の香も新らしい明るい客室に導かれた。主任巡査部長勳八等櫻正兵衞氏は、宮城縣人で、蕃地勤續十五年、最近までは、シキクン駐在所に五ヶ年勤續され、同地に於ける功績は頗る多い。同地に臺灣神社の分靈として、シキクン神社を創建したこと、桐樹四百本を植附けたが、今は幹徑一尺にも達したのが多い。原價十圓で買入れた土地に、桂竹林を栽培したが、其成績は頗る良好であつた。これは同地兒童教育所の財産中に寄附されたことなどがそれである。

氏は身長は稍低いが、筋骨は逞しく、膽力あり、才幹に富まれてゐることは、予が南湖大山攀登に於て、充分に發揮された。溪頭蕃人達は、氏に「タガロフ」といふ綽號（あだな）を呈してゐるが、それは熊を意味するのださうである。

奥樣は、助産婦の資格を有されてゐるので、蕃社からは、敬意を拂はれてゐる。この奥樣が愛養された、今二十八歳といふ蕃人がある。體格容貌も優れ、氣質純良才幹もあるので、警手に採用されてゐる。予が登山一行に加つた間瀬（マセ）八三（ハツサン）君がそれである。この名は、本名の近音漢字を取つたのださう

(四其)　南湖大山頂上より東方を望む。樹木はニヒタカトマツ、ニヒタカビカタシンシクヤ

などである。臺灣總督府林山課撮影。

(贈寄氏郎太鐵井沼)

である。

夕刻本駐在所より北方約二里のシキクン駐在所から、佐々木警部補殿が、數名の警官を引き連れて來宿された。臺北州廳理蕃課長瀬野尾寧氏の命令に基き、予が登山を護衛するためだと聞いて、感謝に堪えぬのであつた。

佐々木氏から頂戴した名刺に「羅東郡シキクン警察官吏駐在所駐在、臺北州警部補勳七等佐々木長松」とあつた。氏は櫻巡査部長殿と協議の上、登山護衛は、警官七名、蕃人人夫十五人、一行總勢二十三人といふ大部隊となつた。斯やうに多人數を要する理由は、左の通りである。

三年前に、南湖大山の東北方に住む南澳蕃が、狩獵繩張區域のことから、溪頭蕃の者を馘首したのが、遺恨となり、復讐となり、爭鬪となつた。其後溪頭蕃は、官命に從ひ、穩和に歸したが、兇暴性の南澳蕃の方は、今尚警戒を要するといふので、予が山行を案内するには、少くも十五人以上にしてくれといふ、當社蕃人からの申出に基いたのである。

この夜、櫻部長殿亭主役となり、佐々木警部補殿以下警官の方々と、卓を圍んで晩餐會が開かれた。鷄肉の煮付には、蕗も入り、牛蒡も入つた。卵蒸しには椎茸が入つた、筍の胡麻和へもある、饂飩のしっぽくも出た。部長殿は可なり上戸黨らしいが、警部補殿は、予と同樣の下戸であるので、酒の幕は早速閉され、御飯や饂飩の御馳走にあづかつた。

登山の際、携帶して、南湖大山の頂上に建てようといふ登山記念標が、恭しく床の間に立て掛けられた。予は各所の高山に、數多くは登つたが、まだそんな例が無い。時には唯名刺を壜に入れ置くことがある位だ。木標を建てたとて、永久的のものでもない、且つさう誇大的にする必要もないからと、反對意見も述べたが、警官の方々が、建標には熱心の樣子があるので、大したことでもないから、其意に委せた。

南湖大山

二七、總論

位置、山態、發水。

南湖大山は、臺灣山脈北方の重鎮で、臺北州、臺中州、花蓮港廳の境界に鎮座し、標高三七九七米、即ち一萬二千五百三十一尺、本邦第五の高峯で、富士山を拔くこと六十四尺である。野呂寧氏（元臺灣總督府測量技師）によると、本山の構成は、結板岩を主とし、硬質砂岩及び硅岩を交へ、頂上は、西峯、東峯、南峯の三峯鼎立し、西峯最も高く、兀々たる偉觀を呈し、東峯（海拔一二一二二尺）は、主山即ち西峯を距ること約一千五百米、粘板岩の層面を露はして削立し、南峯（一一九五三尺）は、主山を距ること約二千米、側面より頂上に亙つて、ニヒタカトゞマツ、柏心（ヒヤクシン）の玄衣を纏うて美しく、三峯の間は、緩斜なる底谷を作り、幾條の小溪流がある。昔時は湖水らしいと云はれる。

山態規模雄大、脈絡北に延びて、バトツノフ山（一〇六三〇尺）、ゲリロー山（八〇九〇尺）、カラサン山（七七五五尺）となり。更に有名な太平山の大森林地帶を包藏し。東に延びて、マビーサン山（一〇四五〇尺）。南に延びては、中央尖山（一二二六〇尺）、畢祿山、合歡山に連り、所謂中軸山脈を作り、西はピヤナン鞍部に遞下して、次高山、桃山、大霸尖山（一一七九二尺）の山彙と握手する。

本山より發源する溪流の主なるものを擧げると、宜蘭濁水溪は、北東に注ぎ。大濁水溪は、東に落ち。タッキリ溪は、南東に。大甲溪は、西南に流下し。本島著名の河流となつてゐる。

本山頂上景致の雄大、展望の壯觀は、本島第一否日本第一流に位すとは、野呂技師の極力唱道された所であるが、測量調査に關係する人達の外、最近まで殆ど登山者が無かつたので、登山道路の形な

どは、全然無く、唯蕃人が狩獵のため通行する、所謂蕃路を或る地點まで辿るだけである。從て山麓駐在所に於ける警官諸氏でも、其經驗を有するものは、極めて少いので、必ず蕃人を案内とせねばならぬ。途中に於ける小屋なども全く無いので、純露營の準備をなさねばならぬことゝなつてゐる。

明治三十年、陸地測量部輯製の二十萬一圖（蘇澳圖幅）を見ると、大濁水溪の源頭である南湖大山の位置に、外南湖山を置き、其北に大覇尖山を註し、一方畢祿山の北に雪高翁（次高山）を置き、其北大覇尖山の陣取るべきあたりに、南湖大山を註するなど、何れも？符を添附する通り、轉倒誤記複雜混沌を極め、何等參考とはならぬが、其當時の蕃情關係からすれば、止むを得ぬことゝして、唯其頃から既に南湖大山といふ稱呼が知れてあつたことだけが窺はれる。

二八、南湖大山に登る

堂々たる搜索隊、日程、胸突五町の險、蔚々たる原始林、仙境の隔科崗、高原的大草地、ピヤケンの險、高山の月夜、天界の石南岡、天下の大觀、臺灣高山の氣象積雪。

△四月三日　快晴　朝　ピヤナン五〇　夕　キレットイ蕃警地五〇

今日は神武天皇祭である。早朝鶯の誦經を聞いて寢床を辭すると、日の丸の旗は既に軒頭に飜る。薄靄は、前後の山の頂を包んではゐるが、後には晴天らしく思はれた。柑花の芳香朝風に漂うも嬉しい。

朝食を終へ、一行駐在所前に集つた。其門出を見ようとて、社中の老若男女が群集したのも、心地良い。

護衛の任に當られた警官は、

シキクン駐在所　警部補　佐々木長松（盛岡縣水澤）

同　巡査　海江田勇袈裟（鹿兒島縣）

ピヤナン駐在所　巡査部長　櫻　正兵衛（宮城縣）
同　巡査　吉良留雄（熊本縣大牟田）
カラップ駐在所　巡査　郷原富藏（福岡縣）
シキクン駐在所　警手　閒瀨八三（蕃人）
ピヤナン駐在所　警手　タイモ、ブユン（蕃人）

の七人である。出發前、ピヤナン駐在所玄關を背景とし、海江田氏が技術の下に、記念のため撮影した。氏はこの行、所々で撮られた寫眞を、後日予が滯在してゐた、臺北市旅館吾妻方に寄贈されたのは、有り難い。

警官方は、劍を佩び、銃を肩に、彈藥盒を腰に纏ひ。蕃人人夫は、得意の蕃刀を腰に、貸附された舊式銃を負ひ、彈藥は、五發づつ渡された。全く戰時武裝である。

警官の中には、吉良氏が唯一回の經驗を有されるだけであるので、櫻部長殿は、氏及び地理精通な主なる蕃人を集め、周到な注意の下に、日程は左の如く定められた。

第一日　ピヤナン出發、キレットイ露營
第二日　キレットイ出發、ブナッケェイ露營
第三日　ブナッケェイ出發、南湖大山頂上を極め、歸路キレットイ露營
第四日　キレットイ出發、ピヤナン歸着

愈〻南湖大山に向つて、一行がピヤナン駐在所を出發したのは、午前七時三十分であつた。出發に當り、櫻部長殿は、駐在所電話口に立たれ、羅東郡警察課長に宛て、「日本山岳會員大平晟殿、南湖大山登山につき、佐々木警部補以下警官七名、蕃人人夫十五名を以て、搜索隊を編成し、唯今午前七時三十分、ピヤナン駐在所を出發す、右報告に及びます」といふ電話をかけられた。

かくて一行は、勇ましくピヤナン社を出で立つ。路傍に茂るヤマキケマンが、足先に觸れて、黄金の花から、露の玉こぼすも風情がある。稀にムラサキケマンも混ずる。

昨日來た道を、二十町も復習すると、ピヤナン鞍部に發源する溪流との合流點に達する。左方から落ち來るのがエキジウ溪で、即ち濁水溪の上流である。この左岸を遡ること一町ばかりで、徒渉して右岸に移るのだが、流水の幅は十間ばかり、深さ膝を沒する位なので、櫻部長殿は氣を利かせ「早朝から、先生の服裝が濡れるのは、結構じやない」と言つて、屈竟な蕃人に、予を背負ふことを命ぜられた。彼はにこにことして背負つてくれた。予は生れ落ちてから、蕃人の背中には、此時始めて接したのである。

河岸は所々絶壁を呈するので、川を縫ひつゝ徒渉しては溯る。

八時三十分、左岸の崖側岩面の窪みに、數坪の水溜りがあつて、鳩の群集するのを見た。蕃稱タカラウライと言つてゐる。蕃語鳩の溫泉を意味するとのことで、溫度の低い、石灰質鑛泉であるさうだが、鳩が好んで始終飲用のため集まるので、蕃人達は、酒を器に入れ置き、醉はせて捕獲すると聞いて、鳥と蛇との違ひはあれど、籤ノ川上に於ける、素盞嗚命の計略が、思ひ出されて可笑しい。

八時四十五分、右岸にある蕃稱テリューに着いた。崖側の稍廣い地面を呈する所で、清らかな小溪流が落ち込んでゐる。燃料に供すべき樹木も多いので、狩に出た蕃人等が露營地となつてゐる。燃え殘りの木も見えた。

附近にウメバチサウが夥しく、花今眞盛りである。予は臺灣山地跋渉に於て、ウメバチサウを見たのは、斷崖駐在所附近と、このエキジウ溪畔だけであつた。內地のそれは、八月乃至十月を花期とするが、この地方のは、四月であるとは、餘りに違つたもので、曩さに秋海棠の春咲きに驚いたのと、同一轍と謂はねばならぬ。果實の相當熟したのも見えた。

程なく對岸に、急湍瀧を作つて、本流に落ち込む、景致に富んだ溪流を見、溯ること約一町にして左岸に移り、愈〻第一難場といはれる胸突五町の險にかゝつた。富士山の胸突八町に倣つての稱呼であらうが、富士山のより三町短いからなどと思つたら、とんだ間違である。富士山の登路は、始終甚だ緩かな傾斜を呈する、火山砂礫の上を、ざくざくと踏んで登り、この胸突八町に至ると、稍急勾配となつて、樣子が違つて來るが、然し固定的の所謂富士岩であるから、何等の不安を感ぜぬ。今この胸突五町を見上げると、四十五度以上の急勾配を呈し、四つ匍ひとなつて攀ぢ登るに、粘板岩の碎片は、指を掛けると缺けて落ち、爪先で踏むと、崩れ落ちるので、登者自身の危險を感ずるばかりではなく、下方に續く人達に對する危險もあつて、互に警戒しつゝ登らねばならぬ。尙この急崖の上部は、粘土となり、今度は滑り落ちるといふ虞れがある。若しも一歩誤つたならば、身を支ふべき餘地も無いから、谷底まで加速動を以て墜落し、粉微塵の厄を免れぬ。ウメバチサウは夥しくこの急崖を飾つてゐるが、惜しくも眺める餘地がない。この攀登中、櫻、鄕原兩氏が、近く我が身邊の前後に添はれて、警戒の厚意を拂はれたのは、感謝に堪えぬ。

胸突五町の登り口は、蕃地五萬一圖によると、ピヤナン鞍部から來た溪流との合流點から、約六町溯り、本流と、右手から流れ込む溪流との間に、州界稜線から岐れ來た支脈の末端突角に當つてゐる。

九時十分、胸突の險を登り詰めると、勾配稍緩かな森林地となり、樹下にはシダ類が茂つてゐる。帶褐紅花を綴る、濃淡種々のサイハイランを見ながら、稜線を辿る。森林は益〻蔚蓊を極め、所謂千古曾て斧鉞の入らぬ原始林相を呈する。樹種はクス、カシ、シヒ、タブ、ユヅリハ、クリ、クルミ、ケヤキ、ハゼ、カヘデ、フウ、ウリハダカヘデなどの、常綠樹、落葉樹の混淆である。山豚（猪）が草根を掘つた新らしい跡が所々にある。蕃人達は、頻りと眼を光らす。

十時十分、稜線上に於ける、稍平坦な森林樹下に休憩した。蕃人達は、早速焚火に甘藷を燒いて旨

さうに食べてゐる。腰を卸して休んでゐた予が被つた登山用毛皮製の帽子に見取れた、一人の蕃人が、一寸手の平で撫でて見て、櫻部長殿に叱られたのも、愛嬌がある。彼等の中には、籐で編んだ、半圓形の帽を被つたのが數人あつた。其技術は仲々緻密である。

この邊の樹下には、種々珍奇な蘭科植物が多い。最近に於ける、東京府下ヤマト種苗會社の月報を見ると、臺灣の名産として、豐蔵蘭、素心蘭といふを掲げ、前者は臺灣産の最長葉種で、葉幅廣く、雄大な姿勢を有し、駿河蘭に比すると、大に高尚優雅で、香氣ある花を多數着ける。後者は、駿河蘭に能く似て居り、更に雅趣氣品に富んでゐると、説明してある。休憩中、蕃人達が掘り取つて來たものには、前記のやうなものもあるが、春蘭の葉振りに似て、更に細長いもの、一莖一花のもの、一莖數花のもの、香氣高きもの、餘り芳香を持たぬもの、品種は頗る多い。又エビネの品種も多く、淡紅花のもの、淡紫花のもの、紅紫色のもの、濃黄のもの、淡黄のもの、雄壯な叢葉間に、尺餘の總狀花序を呈する美觀は、特に人目を惹き、原始林内に於ける、蘭科園の感がある。

綠林を飾つて、阿里山緋櫻もあり、ビヤナン紅櫻もある。前者は、既に花散りかゝつてゐたが、後者は、今眞盛りであつた。

この邊には、八角蓮も多い。櫻氏によると、近來其根を藥用に供するので、採集するものもある。乾燥品百匁約六十錢とのことである。

赤い球果と共に、鮮黄な重瓣小花を綴つたメギの針が、屢〻手を掻いてくれる。

大古以來の密林は、尚も續いてゐる。十一時林内で晝食をしたゝめた。蕃人達は復例によつて燒藷を始める。粟飯を食べるもある。

日光僅かに木の間より漏れ來る。朝來初めて日光を拜したのである。

この邊からぽつぽつツガ、モミ、ゴエフマツの巨木が混入する。胸突五町以來連續した、蔚々蒼々

たる密林を漸く脱し、緩斜面の草地に登り着いた。時に十二時である。

數町歩に亙る斜面草地の右手を辿つて低下すると、亭々として聳える巨大なゴエフマツが數株並び立つ所、清冽な小溪流がある。此處が今夜の露營地キレットイである。標高約七千尺。

櫻部長殿の指揮號令の下に、蕃人達は、早速例の蕃刀を揮つて、腕大の生木を伐り倒すもの、持ち運ぶもの、之を建てゝ組合せるもの、潑剌たる活動振りは、見るさへ心地良く、忽ちにして金殿玉樓は出來上つた。警官の方々は、唯蕃人を指揮するばかりで無く、いつも自身を勞働の渦中に投ぜられるのは感謝に堪えぬ。この貴き模範は、蕃地に於ける總ての作業に於て、好成績を擧げ得る所以であると、涙ぐましく感じたのである。

急造小屋の材料は、葉附きのまゝの樟の枝を、丁寧に組合せて、屋根も周圍も作つたので、大抵の雨は防ぎ得るのだが、萬一の準備として、大形の油紙數枚は携帶した。樟の芳香に抱擁された、この小屋こそは、眞に樟御殿の感がある。附近にはタカネスゝキが多いので、刈り取つて、厚さ七八寸に敷き込み、其上に藺莚毛布を延べた。蕃人達は、別に數個の小屋を、長屋式に造つた。こゝは蕃人狩獵の露營地として、選定されてゐる場所とて、飲用水、燃料も豐富で、且つ山側の懷に抱かれてあるので、風も防げる好地點である。

小屋の前に聳え立つ五葉松は、高約十丈、幹徑三四尺のが十數株ある。葉は長く、毬果は長さ四五寸に達し、種子も大きい。タカネゴエフ即ちシマテウセンマツであらうか。本島には、タイワンを代表してのシマを冠する植物名が多いが、テウセンの上に更にシマを添加した此の名などは、隨分厄介な名と謂はねばならぬ。枝には長さ五尺にも餘るサルヲガセが、夥しく垂れさがり、其奇しき綠白色を呈して風に靡く有樣は、老樹を益〻仙化せしめる。予はこんな長いサルヲガセには、初めて接したのである。ビャナン紅櫻の優しい花が、樹下を飾つてゐる。

南湖大山頂上より南方を望む。中央の尖峰は山主萊蒼く遠肩左其。山尖央中 最左端遠
。るな重が山獣合はに奥に更 .山祿畢は裏の肩右の山尖央中。山大コロタく
。影撮課林山府督總灣臺

（贈寄氏郎太鐵井沼）

溪水の畔には、ベニバナイバラに伍して、イラクサが繁茂してゐるので、時々痛いお見舞を受ける。タイワンチャルメルサウや、帶紅白花のヒメウヅの一品が目に入る。食べ頃のワラビが多い。

この溪水は、胸突五町登り口の下手に落ちる溪流の源頭である。五萬一圖に、州界稜線上、二個の針葉樹記號のある所より、約十七町北西に低下した支脈の岐點上に、草地記號のあるのが、此處である。

日沒までには、尙數時間の餘裕があるので、砂糖湯で腹を溫め、我等は斜面草地を蓐として仰臥し、麗かな日光浴に惠まれた。餘りの氣持よさに、華胥の鄉に入る人達もあつた。

附近目に入つた主なる植物は、ヒヽラギ、タイワンアセビ、アカゲツツジ、ミヤマキリシマの一品、シャウジャウバカマ、ミヤマキンバイ、ミヤマコケリンダウ、ニヒタカリンダウ、アキノキリンサウ、アスヒカヅラなどである。ヒヒラギには、廣葉のものと。細葉のものとあつた。ニヒタカリンダウは花冠白黃色、外面綠褐色を呈した。

草地の上部に立つて、眸子を西に放つと、ピヤナン鞍部を隔てた彼方、次高山、大覇尖山、桃山などの山々が、銀冠を戴いて、碧空を劃する雄姿は、眞に拜跪せざるを得ぬのであつた。

天日尙高く輝く四時半に、仙境に於ける夕食の會は開かれた。味噌汁に罐詰鮭と甘藍の刻み込みは、非常に旨い。福神漬もある。澤庵漬もある。蕃人達は、例によつて、粟の粥飯と燒藷である。甘藍などの蔬菜も食べてゐた。予は米飯と交換して、其粟飯を試食したが、可なり餅粟が交つてゐるので、食べ惡くはない。曾て北海道の上川原野の農家で、試食した稗飯に比べると、餘程上等である。蕃人が栽培する甘藷は、品種頗る雜多であるが、大抵外皮は白色のである。

この日は、穩かな暖かい日であつたので、快く睡眠が出來た。

△四月四日　快晴　朝（キレットイ 四五）　夕（ブナッケエイ 四〇）

露營には、洗顏不能の地點も多いが、此處では清洌な豐富な溪水で、顏を洗ふことが出來るので氣持良い。

朝食を濟まし、露營地キレットイを出發したのは、午前七時である。朝霧のため、展望は出來ぬ。この斜面草地の左上部から、第二難場といはれる、可なりの急坂にかゝる。この邊は、蕃人が始終狩獵に出かける地域であるので、怪しげながらも、草踏み分けた足跡を存する細徑がある。

坂は急だが、固定した岩面の現はれた所もあり、ツツジ、アセビなどの小灌木もあり、短小な矢竹や萱もあつて、胸突五町に比べると、甚だ安全である。上るに從ひ、ゴエフマツ、ツガ、モミなどが、ぽつぽつ續く。

蕃人達は、二頭の羚羊を見つけ、二發射て、追かけたが、やがて歸つて來て、血を流しながら逃げて了つたとて、悔しがつて報告した。

五百餘尺の急坂を登り詰めると、狹長の小平地を呈する萱原に出る、時に七時四十分である。前面數百尺の深谷を隔てゝ、稍右手の對崖には、數百尺の瀧がかゝる。濁水溪の上流即ちエキジウ溪の源頭である。この時朝霧は、拭つたやうに消え失せて、麗かな朝日の光を拜する。顧みると、次高山、大覇尖山、桃山は、蒼空を摩して相並び、峯頭に戴く白雪は、朝暉に映えて、莊嚴無比の觀を呈する。殊に次高山の絕巔より、北肩にかけての積雪は、甚だ多量を示してゐる。

この草地には、ミヤマキリシマ式のツツジが夥しく、小形の花冠は、淡紅紫色を彩どり、雄蕊は五個乃至十個である。右手に續く稜線上の狹い平地を辿ると、直徑數十尺の小窪地が所々にある。雨天續きには所謂御田式の小潴水を現ずるであらう。ミヤマコケリンダウが點飾する。

タカネスゝキは漸次伸びて、身長以上となる。やがて再び大森林に入る。樹種はツガ、ゴエフマツ、ニヒタカタウヒ、シラビ、ニヒタカトドマツなどであるが、太古以來の老木は、壽命既に盡きて朽ち

仆れ、縱横に相重なつて、苔蒸す寢卷を裝ふは、內地では殆ど見られぬ景觀である。予は先年、北海道の大雪山や、雄阿寒岳に登つた時、其山腹の原始林に於て、この種の景觀に接した當時を追懷した。この仆木の材質尙ほ堅いのは、其上を渡ることも出來るが、既に腐朽土化し、唯蘚苔の抱擁によつて、辛うじて其原形を保つてゐるのは、之を踏んで脚を沒することもあり、時には全身陷沒といふ厄にも逢ふので、之を避けて迂廻せねばならぬ。地は千古の落葉朽葉相重なつて、之を踏めば綿の如く、脛を沒する數寸に及び、蘚苔旺盛蔓衍する所は、毛氈を敷き詰めたるが如しなどいふ形容詞を超越して、更に提供すべき言葉も無い。コバノカウヤノマンネンスギに似たウチハヒラゴケが多い。ニヒタカイチヤクサウ、アリサンカタバミ、ゴゼンタチバナの一品、イハウチハの一品（ミヤマイハウチハ）が目に入る。

針葉樹下、石南が混在する。幹の高二丈餘、直徑一尺五寸以上のが、往々目に入る。滿開の花に、淡紅色もあれば、白花もある。何れも旗瓣の內面には、多數の紅點があるが、後者のは、餘程淡い。花は十個乃至十二個を簇生する、葉の裏面は、何れも無毛淡綠色であつたが、後者は、葉脈上に褐色の微毛を有するのがある。所々にヒヒラギ、ヒヒラギナンテン、メギなどが見える。幽林の中、白花を攢簇したニヒタカガマズミが目を惹く。

十時樹林の稍疎らとなつた所、萱生の小窪地がある。焚火に暖を取りつゝ、辨當を使つた。木の間より、鮮かな幾條の雪溪を刻んだ、南湖大山の英姿を拜した。

附近に黑い小毬果をつけたネズが目に入る。

十一時出發、尙ほツガを主とする針葉樹林を辿る。やがて森林を脫し、豁然たる草地に出で、登り切つた所は、臺北、臺中兩州の境界に當り、ピヤナン鞍部から、遞次高まり亙つた稜線上に位置し、標高一萬一千尺を算する。時に十二時である。この邊蕃稱レテックと言つてゐる。

この地眼界大に開け、西は大覇尖山、次高山の南に亙つて、大雪山、小雪山、白姑大山など、一萬餘尺の高峯相並び、各其誇りとする銀冠雪渓は、日光を受けて益〻鮮かに、行手の前面に聳える南湖大山は、綠濃かな密林を裾どり、主山（西峯）は巍然として中央に玉座を占め、右には中央尖山、畢祿山、合歡山などの勇將が、威儀嚴然と侍列する。

本山より北方に長く續いた稜線の、右方斜面に展開する草地は、數十町に亙り、八通關や鹿林山が誇りとする、其草地を凌駕すること數等である。予は內地の高山に於て、立山が其山腹に、彌陀ヶ原、五色原の高原を有するので、他に比類無き大觀として、深く之を愛鑑したのであるが、今本山の高原的草地の、更に豁然たる壯觀に接しては、爽快に堪えぬ。南湖大山は、實にこの草地を有することゝ、この草地に於ける雄大な山岳展望とだけでも、既に天下に雄視することが出來ると、予は推奬するのである。

草地は、タカネスヽキ、メダケの一品高さ尺にも滿たぬが、蓐のやうに密生し、數種のツツジ、ニヒタカアセビが點飾する。ミヤマコケリンダウがある、マンネンスギ、アスヒカヅラがある。ミヤマコケリンダウの碧色には、濃いのと、極めて淡いのがある。又濃紫紺色のも見えた。ニヒタカアセビは鹿林山以來、各所で見參に入つたのであるが、こゝの高原を飾るアセビは、特に予が視線を惹いた。それは花其ものよりも、寧ろ若芽の鮮かさであつた。短縮密生した其枝頭を彩どる赤い若芽は、遠く眺めると、さながら花のやうであるが、近く矚目すると、幾分褐色を帶びた落着味ある赤い叢葉の上に盛つた、直立性複總狀花序の愛らしい壺狀白花の風情は、花葉相調和して、眞に言ひ得ぬ感じがする。アセビは內地でも、西南地方の山々には、所々で見るのだが、こんな壯觀に接したことは、予は初めてである。アセボ、アセミ、アセモなどの別名があり、葉に激毒を含むので、馬が之を食べると、卒倒するとて、馬醉木といふ漢名があるが、鹿が之を食べると角が解脫すといふから、鹿の多い

臺灣では、解角木の稱號を附さねばならぬと思つた。然し其煎汁は、殺蟲劑に利用される。

鹿の糞が、所々に堆くあるが、メダケの葉と根は、彼が好んで食べる所であるとて、其新らしい足跡は、始終目に入る。

草地の中程より右手即ち南方に低下する斜面草地の盡くる所に針葉樹林がある、溪流がある。先年臺北第一中學の學生諸君が露營した所で、蕃稱タカジンといはれてゐる。

草地は、鹿が竹を食ふため、水を飲むために通ふ徑もあり、蕃人が狩に往復する足跡も微かにあるので、所謂獸徑鳥路に踏み迷ふ虞れもあるが、大體は、この草地斜面の上縁に近く、稜線を辿つて、東に進むのである。

南湖大山は益〻近づいた。我等は、直距約半里の眼前に、主山を仰ぎつゝ、愈〻第三難場蕃稱ピャケンにかゝる。蕃地五萬一圖の「一一九九〇」と記入された地點から、南に當り、二個の突起を超える所、左右は實に垂直的に一刀の下に切り取つたといふやうな、幾百米の斷崖を呈し、粘板岩質碎片は、始終風雨に決壞しつゝあるのである。ピャケンとは、蕃語岩石の崩壞を意味するさうである。決壞し易い岩壁に加ふるに、蜿蜒蟠屈するハヒビャクシンとシャクナギとがある、千古の風雨に晒されて、枯れた幹上は、銀白ミイラ化するもあり、半ば衣の樹皮を失つては、不撓の肌を蒼鉛色に染むるもあつて、一株實に千金に値する逸品がある。然しこの仙園の通過が、容易ではなかつた。或は踏み越えやうとしては、脚を捕られて倒れることもあり、或は其下を潜らうとしては、襟元を攫まれる有樣であるから、荷を負ふ人達の困難は思ひやられた。此處のシャクナギは、蕾まだ堅いが、解剖すると、淡紅色のを窺はれる。葉は縮まつて長さ約二寸、幅六七分、微尖頭を呈し、裏面は濃い褐毛を密生する。

樹間往々殘雪を踏んだ、鄉原氏は、十五年振りで、自然的の雪に接したとて、非常に珍らしがられ

た。蕃地警官方の精勤の程も窺はれる。

第二の突起を越えると、急轉直下的に、岩屑磊々たる急斜面を降ること約五百尺、午後二時、今夜の露營地蕃稱ブナッケェイに着いた。海拔約一萬一千五百尺。ブナッケェイとは、岩屑の河原を意味するさうである。清冽な小溪流がある。溪流に沿うて、高さ一丈ばかりのビャクシンが相連る。風も餘り當らぬ好露營地である。

この邊は、元湖であつた遺跡の峽谷だといはれてゐる。即ち南湖大山頂上の一部に屬する北谷で、溪水は西南下して、大甲溪の一源頭となるのである。尙稍下方左手の峽谷にも、小溪水が流れ、樹容枝振り古雅を極めたビャクシンや、シャクナギが點飾する。ビャクシンが丈餘に伸びてゐるのは、この風當りが、餘り激しくないことを想はしめる。

附近は、メダケが蔓衍し、マンネンスギ、アスヒカヅラを混ずる。

溪流の兩崖は、高さ一丈餘りあるので、防風的屏風代用とし、兩崖の間に、露營地點を選んだ。例により、櫻部長殿は、自ら陣頭に立ち、生木を伐つては持ち運び、忽ちにして、青葉のビャクシンを材料とした、美しい綠御殿が出來上つた。

蕃人達も、附近に分營した。米洗ひが始まる、鍋がかゝる。我等が食事は、全く警官方の御手に成るのだ、明るい中に、夕食は濟んだ。今夜は寒さのために、安眠の不能は覺悟である。燃料は出來るだけ集めた、全部ビャクシン、シャクナギである。

蓐敷の材料とする萱は無いので、ビャクシンの葉枝を下に敷いた。其下は轉石であるので、仲々痛い、痛いと寒いで、夢は屢〻破れる。下戸黨の佐々木警部補殿が、ポケットに忍ばせられた新高キャラメルが配られる、予が氷砂糖が、上戸黨にも歡迎される。焚火に炙られるので、喉は渴く、湯が盡きて、溪水に口つける。原始的生活の境味に浸るのである。

この新高キャラメルは、臺北市の製品であるだけ、バナナを調和した風味が、餘程佳良で、到底內地のそれの、比すべくも無いのである。

皎々たる明月が現はれた。それは主山の左方の空に當つてゐる。紫紺の空を劃した主山の輪廓、其肌を刻んだ白銀の雪溪は、月光に映えて、益〻鮮かに、眞に莊嚴の極を呈した。予は高山に露營して、月夜に逍遙したことは、數多いが、今夜のやうに、其崇高美、其淸淨美の感に打たれたことは、未だ曾て遭遇せざる所である。本邦無比の壯觀大景を有すといはれる南湖大山の頂上に宿つて、圖らずも十五夜の滿月に惠まれたことは、實に得難き幸運と謂はねばならぬ。

△四月五日　快晴　朝　ブナッケェイ　三五　夕　キレットイ　五三

莊嚴無比の山上月夜を送つた我等は、今日は又淸爽無比の曉天を迎へた。提燈の明りで、朝食を濟まし、輕裝な結束を以て、一氣南湖大山の頂上を極むべく、ブナッケェイの露營地を出發したのは、朝の六時であつた。

徑の形などは勿論無い。唯主山の左側を見當として進むのである。膝の高さ位の低いメダケの中を踏んで、露營地より降ること數十尺、舊湖跡といはれる底谷を穿つ幾多の小溪流を橫ぎり、岩石磊砢たる間を縫ひつゝ稍登ると、數町に亙る平地に出る。こゝも湖底の一部に屬する淺所であつたと想像される。唯一面の砂礫であつて、大きな岩塊は無い、草木も殆ど見えぬ。主峯と東峯との間に位するのである。

露營地から此處に到る途中は、マンネンスギ、アスヒカヅラで綴る芝草を根締として、ハヒビャクシン、シャクナギが甚だ夥しい。樹幹矮縮して、高さは二三尺を超えず、叢生した枝頭は、刈り込んだやうに美しく、眞に天つ乙女の技巧かと疑はしめる。

臺灣の高山には、ハヒマツは無い。內地高山の頂上を飾るハヒマツに相當するのが、このハヒビャ

クシンである。

シャクナギは、ビャケン之險で見たのより、更に縮まつて、葉も亦小形で、裏面は濃い褐毛を有するのもあるが、だんだん無毛淡綠色のが混じ、其蕾を解剖するに、矢張淡紅色であることが窺はれる。唯前者に比すると、極めて淡く、滿開には殆ど白花のやうに見えるのではないかと想はれた。ニヒタカヘビノボラズがこの仙姿の麗樹に伍して、我等が手を刺す、其針の鋭いのには、少からず惱まされた。このニヒタカヘビノボラズは、臺灣高山植物代表者の一として、著はれてゐる。

こゝから右折して、俄然主山の急斜面にかゝる。殘雪は散在する。ハヒビャクシン、シャクナギは、益〻低く地を匍ふ。此處のビャクシンには、天壽を以て長逝したのが多く、天風に晒されて、白骨化した景致は、一種異樣な淨寂感を與へる。シャクナギは益〻縮まり、葉は長一寸五分乃至二寸、幅五分ばかり、裏面は無毛淡綠色のものばかりとなつた。

時に東方太平洋の水平線上に現はれたる日輪は、暉々として背を照らし、防寒の裝束を嚴重にした我等は、汗ばんだのである。

我等は七時十五分、本邦第五位の高山、標高一萬二千五百三十一尺を算する南湖大山の絶巔に立つた。

我等は、櫻部長殿が用意された杯を手にし、白鹿の芳醇を捧げ、遙かに東北の方、宮城に面し、天皇陛下の萬歲を三唱して、乾杯したのである。

絶巔の稍平かな地面は、方約十間程であるが、稍低下して、緩かな斜面を呈する所もあつて、新高山の絶頂のやうに、垂直的岩壁では無い。又新高山が、岩石の肌を全く露出するのに比すると、これは幾分岩石の碎片に、砂土を混ずるので、草本散在の間に、極めて短縮したハヒビャクシンとシャクナギとを見るのである。

南湖大山頂上より南西方を望む。右方の谷は大甲溪で、谷間遠くピラミッド式の峰頭を
呈するは白姑大山である。臺灣總督府山林課撮影。

（贈寄氏郎太鐵井沼）

三角標木は、昨年の暴風によつて、吹き飛ばされ、僅かに其片材を存するばかりである。我等が記念標は、能く幾年を保ち得るや、頗る疑問である。

萬歳三唱後、旭日に向つて、今日の恩惠を拜謝し、視線は直ちに新高山に轉じた。中央山脈を構成する千山萬岳の上、更に一頭地を抽いて、泰然として天空に聳えるものは、我邦第一の高峯新高山である。此間直距約三十里を算する。其左に秀姑巒山、マボラス山の山塊が見える。面前近く直距約一里半、鋭尖天を刺すものは、名詮自稱の中央尖山（一二二六〇尺）である。中央尖山の尖頭は、稜線草地のレテックから見るのが、最も鋭い。さながら鎌の刃を立てたやうである。予は曾て飛驒山脈に於ける槍ヶ岳の絶巓、所謂槍の尖頭に直立した。當時同行した松本中學生五名の内、其三名は落伍したのである。然し同山の槍は、其後人工的足場を作つたので、餘程登り易くなつた。今この中央尖山に對しては、更に幾段の鋭尖振りを感じたのである。中央尖山の右奥には、畢祿山が峙つ、更に其右奥には、規模堂々たる合歡山が見える。其山側を幅射狀に刻んだ雪溪は、實に壯觀である。中央尖山の左側を穿つた溪谷には、兇猛無比といはれるタロコ蕃地を見下す。

眸子を西に轉ずると、本邦第二の高峯次高山は、非常に多量な積雪を示し、旭光を浴びて、鮮麗な淡紅色を呈し、莊嚴無比の感を與へた。予は昨夜月光を浴びた南湖大山に對し、寂的莊嚴美の極に接したのであつたが、今旭光を浴びた次高山に對しては、活的莊嚴美の極を拜し、予が山岳に對する終生の印象を得たことを、深く喜ぶのである。

次高山の南西には、大雪山、小雪山が遞下蜿蜒し、其南方に當り、富士式峯頭を呈する堂々たる山容を有するものは、白姑大山である。水成岩の山としては、甚だ珍らしい山容とする。次高山の北には、桃山と相重なつて、大覇尖山が某獨特怪偉な尖頭を現ずる。蕃稱バーバックとは、耳を意味するさうである。この鐵光色を帶びた尖頭は、此處から見ると、寶塔を梨割りとした、其一半を立てた

やうで、攀登頗る困難らしいが、昨年六月生駒、沼井、中曾根、古平の諸氏が、其絶巓を極められてゐる。予は後七星山からの歸途、古平氏の宅に立寄り、當時の寫眞數葉を拜見したのである。

本山と桃山との間は、濁水溪が刻んだ深谷である。北方に開いたこの深谷を埋め亙つた、一帶の雲海は、是亦稀に見る壯觀であつた。雲海の表面は、緩く波狀を描いて、悠々迫らぬ。旭光之を射て、白銀の波頭は、金紅色を緣どり、眞に淸淨潔白の極を呈する。雲海に浮ぶ島々は、シッキュス山、ボンボン山、棲蘭山などが、其峯頭を現はすのである。太平山の森林作業地は、脚下に展開する。

我等が露營した北谷を見下すと、一面にハヒビャクシンとシャクナギである。五月に於ける石南の滿開期には、深綠の柏槇（ビャクシン）と相映發して、無比の美觀壯觀を現ずるであらう。本島の高山は、到る處、石南が夥しく、巒大山のは、花冠大形で、色彩特に美しいといはれるが、尙ほ蒼萊主山、合歡山も其豐富を誇るといはれる。然し圖上に於ける諸山峯頭の形態から推察するに、本山の頂上は、三峯の間に、湖跡といはれる、可なり廣い底谷を有し、之を埋めた石南蔓延の狀態は、之を主山頂上から見下す點に於ても、將た其群落の間を逍遙する點に於ても、他に其追從を許さぬ景致を有することは、本山の誇りとして、予は大に推奬するのである。

繼つて南谷即ち蕃稱ブナーガンを見下すと、谷底より山側を經て、南峯の頂上に至るまで、ニヒタカトゞマツ、ニヒタカビャクシンの綠濃かな針葉樹林が密に之を蔽ひ、所謂樹海の壯觀を現ずる。

本山の頂上は、實に展望と景致と、二つながら兼備した、無比の大觀と謂はねばならぬ。

絶巓には、厚さ一尺ばかりの雪田が散在するが、其表面は、新高山のやうに氷結して居らぬ、强く踏み込めば、二三寸の窪みを印ずる。氣溫は四十度、殆ど無風狀態である。

元氣に滿ちた櫻部長殿は、眞裸となつて、若い警官方を相手に、雪田を土俵として、角力を取られ、「一萬二千五百尺以上の高山頂上での角力は、我々を以て嚆矢とする」と、大氣燄を吐かれたのも面白

い。この無類の光景は、海江田氏のカメラに收められた。

予は壯年時代に、富士山に登つた時、頂上の石室に數泊を試み、所謂御內院の內輪廻りも、外輪廻りもした。淺間神社奧ノ院に出張してゐる神職の諒解を得て、御內院即ち舊火口の底に降りて見た。劍ヶ峯を攀ぢ、其劍頭に直立して、一萬二千四百六十七尺の上、更に五尺二寸を加へたことがある。近來は、好んでこんな好奇的行動を取る氣も無いが、唯本邦第一の高峯といふそれだけ、新高山頂に直立呼號の榮に浴し得なかつたことは、至大の遺憾であつた。今南湖大山の絕巔に登つて、所謂日本晴といふ稀有の好天候に惠まれ、前者の遺憾を優に埋め得たことを、深く喜ぶのである。

予は玆に、臺灣高山に於ける氣象積雪に就いて、所感を述べたいのである。

野呂寧氏によると、氏が測量のため、大正三年五月一日、本山頂上我等が露營した、ブナッケェイに露營した時、非常に空氣の稀薄に惱まされ、所謂高山病にかかり、一行二百七十餘名、殆ど皆食事が出來ぬ有樣で、氏は飯に汁をかけて、僅かに咽に運んだ程であつたさうである。氏は在臺十六年、山地の測量に從事し、內地の高山にも、幾多の經驗を有されるが、南湖大山に於ける當時のそれのやうなことは、初めてであるとのことである。然るに我等が一行は、一人の異狀者も生ぜぬとは、不思議であつた。野呂氏が登られた當時の溫度は、丁度氷點であつたといふが、季節として、約一ヶ月前の我等が時は、朝三十五度を示し、日光を浴びた絕巔では、四十度であつた。

大正二年三月二十一日合歡山の頂上に於て、天候激變のため、探檢隊員五十二名の凍死者を出したことは、本島空前の遭難とされてゐる。

臺灣高山頂上に於ける降雪、積雪に至つては、更に驚異に値するのがある。「四時雪なし」と書いたり、「終歲雪封」と書いた、著者の無責任さは、別問題とし、地理學界の權威と推重される大日本地誌に「雪は高山に於て、稀に之を見ることあるに過ぎず」など書いてあるのは、頗る遺憾とする所であ

る。稀に之を見ることあるに過ぎずとせば、雪が降らぬが通常であらねばならぬ。又同書に「高山の頂上は、十二月より、翌年二月まで、多少の降雪を見る」とあるが、斯うした期間の限定は勿論、事實は決してさう簡單には行かぬのである。臺灣山岳會發行の『臺灣山岳』創刊號によると、

大正七年十二月二十五日から、一月七日に亙り、蓉萊主山地方、風雪引續き、積雪六尺五寸以上に及んだ。

大正十五年十一月三十日より、十二月一日に亙り、新高山の四合目以上、及び東郡大山（トウグンダイ）、東巒大山（トウランダイ）等中央山脈一帶は、皚々たる雪に掩はれ、積雪四五寸に達した。

昭和二年一月二十二日より、二十三日に亙り、標高僅か三千數百尺を有する大屯（ダイトン）山の頂は、積雪二尺に及んだといふ。これは頗る稀有の珍現象とされてゐる。

同年二月六日以來、能高道路に於ける能高駐在所附近は、猛烈な吹雪が引續き、積雪七尺以上に達し、電柱は倒れ、電線は到る處切斷され、道路の崩壞十八ヶ所、交通全く杜絶した。

次高山頂には、大正八年十月二十日と、大正九年五月二十一日といふ、早雪と、晩雪との例があり、新高山の大正七年八月十九日、南湖大山の大正七年九月十日、山頂に初雪を見たのは、時候外れの例外とされてゐる。

臺灣北部では、標高五千尺以上となると、例年降雪に逢ふのである。大正元年には、標高五千六百餘尺の梵々（ボンボン）山は、積雪一尺に達した。

嘉義郡警察課長よりの回答によると、新高山は、昭和二年四月に入り、積雪のため、登山不可能のこともあつたといはれる。

要するに、臺灣高山の頂上には、雪の降るのが通常である。唯積雪の量、及び降雪の時期が、甚だ不定であるだけである。さうして殘雪の表面が凝結する程度は、是亦甚だ不定のやうである。予が經

驗によると、新高山西口に於ける、主山下から十數町の上部に亙つた積雪や、南湖大山頂上に於ける積雪などは、內地高山のそれに比べて、頗る軟かであつた。これは降雪後間も無いといふ關係もあつたであらうが、唯新高山北口に於ける、肩部に積つた殘雪が、打ち込むピッケルや唐鍬の刄を撥ね返す程の氷結さを見せたのは、是亦頗る稀有の現象であるらしいのである。

臺灣總督府發行の『臺灣事情』に「高山で無ければ、降雪なし」と記し。小學校の『地理書』に「冬季新高山の頂上でも、雪の積ることは珍しい」と書いてあるのは、穩當な記事とせねばならぬ。

二九、南湖大山より天降る

石南の種々、仙境の午睡、安全歸着。

我等はこの天惠の下に、悠々南湖大山山頂の大觀美觀に浸ること一時間餘。八時二十分頂上を辭し九時二十分露營地ブナッケェイに歸着し、留守番が沸かして置いた湯に、ミルクコンアを投じて、渴を醫し、印象深き露營地に別れを告げて、歸途に就いた。

ビャケン之險にかゝると、右方脚下の深谷に、白沫を飛ばす濁水溪の源頭を見下す物凄さ。然し予が前途の行程は、尙ほ數日この溪流を友として、羅東に下るのだと思へば、何となく懷かしい。太平山の製材所が見える。

予はブナッケェイの露營地に於ても、歸途に於ても、尙根氣能く石南の葉裏を調べて見た。頂上主山にあるものは、悉く葉裏無毛淡綠色であり、頂上底谷にあるものは、無毛淡綠色のと、有毛濃褐色のと相混じ、稀に有毛白色のがある。ビャケン之險を飾る大群落は、殆ど皆有毛濃褐色のものばかりで、草原地帶レテック以下は、又殆ど皆無毛淡綠色のものとなるが、十花乃至十二花を簇生し、頂上に於ける無毛淡綠色のが、花梗甚だ長く、七八花を簇生するのとは、其他の點に於ても尙ほ差異あ

るらしく思はれた。予は頂上の花期に接せぬを、深く遺憾とする。

レテックに歸着、辨當を使つた。餘りに麗かな暖い日和なので、前夜の睡眠不足を補ふべく、一同天與の蓆に仰臥して、日光浴を取りつゝ、華胥の國に遊ぶこと一時間餘。

附近にアカゲツツジ、ヤマツツジが花を飾る。

佐々木警部補殿は、此處から、州界を劃する稜線を辿り、ビヤナン鞍部に下る調査のため、警官二名、蕃人七人を伴つて、左下方指して出發され、我等は、前日の登路を辿つて降つた。

午後三時キレットイの露營地に歸着した。一昨日作つた小屋は、其まゝ使用が出來るので、早速炊事にかゝり、明るい中に夕食を終へた。然しここに一大失敗を發見した。それはレテックで、佐々木氏の一行と別れる時、分けてやつた積りの米袋が、誤つてこちらの荷物の中に、混入してあつたのである。あちらでは、今夜空腹を抱いて、露營せねばならぬかと思ふと、氣の毒に堪えなかつた。

△四月六日　快晴　朝　キレットイ　四〇　夕　ビヤナン　六〇

早起爽かな曉氣を呑吐しつゝ、天與の公園草地を散歩した。ピラミッド式の雪峯を呈する次高山が、朝日の光に映えて、淡紫、淡紅、紅白、純白と移り行く、壯觀美觀を拜しては、魂飛び魄行いて無我の境に入つたのである。

二泊の親みあるキレットイに別れを告げて出發したのは、午前六時四十分である。再び千古蔚々たる闊葉樹林帶に入り、蘭科公園を鑑賞した。櫻氏は、數品種を掘り採つて、蕃人の荷物に添加された。武裝に花。一ノ谷に於ける源太の感がある。ギンリュウサウがあちこちに見舞ふ。

九時本山の最難場、胸突五町之險にかゝつた。こんな難場は、登りよりも、降りの方が餘程危險なので、一行は、足場を確めては、歩一歩と運んだのである。例によつて、櫻、鄕原二氏は、予が前後に添はれて、擁護された厚意は、感謝に堪えなかつた。

溪流を縫ひつゝ徒渉する所、蕃人は命令を待たずして、始終快活に、予を背負つてくれた純情の態度は、愛らしい。

最後の徒渉を終へて、谷間開けた所、左手ビャナン道路から、降つて來た一群がある。熟視すると、佐々木氏の一行であつた。萬歳の聲は、谷に反響する。氏の一行は、我等と別れて後、米袋の入れ違ひが判り、露營を略し、强行軍を以て、其日暗々にビャナン鞍部駐在所に到着し、今朝同所を發し、圖らずも此處で會合したといふは、奇遇であつた。

此處は、エキジウ溪に架ける、鐵線橋の工事中で、多數の警官方が、作業服に身を固め、蕃人に伍して、勞働に從事されてあつた。

十時二十分ビャナン駐在所に歸着した。櫻部長殿は、直ちに電話で、唯今無事歸着したこと、委細は追て文書で報告する旨、羅東郡警察課長に通話された。

駐在所前に整頓した搜索隊全員に對し、予は深く謝意を表した。搜索隊は茲に解散された。蕃人達は各銃器の點檢を受けて、夫々返納したのである。

予は蕃人人夫の慰勞として、酒をと言つたが、櫻部長殿は、弊害豫防のため、固辭されたのであつた。

南湖大山登山の行程は、隨分樂な日程であつた。出發時刻を早め、尙幾分行步を早めたならば、登降共大草原地の中程に位する、タカジンに露營することゝし、往復二夜露營に、節約することは出來るが、斯うすると、露營地の出發を午前六時としても、主山の絕巓に達する時刻は九時となる。高山の上に於ける、日の出と、雲海の美觀壯觀の極致は、日輪が水平線上に出現する刹那の間に求めねばならぬ。其光景は、刻一刻と減消し、八九時となると、多くの場合、雲海は平凡化するものである。殊に登高氣分を眞に味ふと思ふものは、飛脚的行動は避けねばならぬ。予は櫻氏の計畫日程に對し、

深甚の敬意謝意を表するのである。

胸突五町之險は、實際危險である。暴雨の直後は、特に危險である。この危險を避けようとするには、少々の迂廻を忍んでも、予はピヤナン鞍部から、州界稜線を辿ることを勸告するものである。さうするには、蕃人人夫は、ピヤナン社から、引率するを要する。

臺北州では、目下太平山、三星山方面から、ピヤナン鞍部の東方、州界稜線を經て、ピヤナン鞍部に達する、道路開鑿の計畫中であるが、この道路の開通は、南湖大山登山者に取つては、至大の福音であらう。

南湖大山登山は、至大の快感を以て終つた。豫期以上の好果を收め得た。畢竟總督府、臺北州廳、羅東郡役所の官憲各位、並に直接案內護衞の任務に當られた、佐々木警部補、櫻巡査部長始め、警官諸氏の深甚なる好意、周到なる用意の致す所と、予は永遠に感謝敬意を表するのである。

予は官憲各方面に對し、登山成功の報告を兼ねて、謝狀を發した。

佐々木警部補殿は、翌日に於ける予が宿泊を懇約して、シキクン駐在所に歸られた。

午後附近の散歩を試みた。蕃人住宅も視察した。山側には桂竹林が連る。この地は、前面に連る丘陵に遮られて、南湖大山の頂上は見えぬが、其左に引いた尾根が、僅かに丘上に其一角を現はしてゐる。

駐在所の敷地は、唯今修築工事中である。果樹も植ゑ附けられてゐる。庭山も築かれてゐる。櫻氏の長男で、六歳といふ正雄さんが、頻りに土に親んでゐる。

この日は三時頃、廣い浴室で、連日に亙る汗垢を洗ひ落した。吉良巡査殿が、石鹼を使つて、丁寧に脊を洗つてくれられたのは、恐れ入る。

この附近には、熊や猪の獲物もあるが、羚羊と獐仔（ムンチャク）が最も多いさうである。予は獐

く長に右方後其。部鞍ンナヤヒが巒左の海雲方右。む望を山高次方西りよ上頂山大湖南

。影撮課林山府督總灣臺。山雪小、山雪大はる亙に方後方左の山高次、山高次がく引を脈

（贈寄氏郎太鐵井沼）

仔の肉も試食した。櫻氏からは記念として、猿仔の角數本を寄贈された。

三〇、ピヤナンより羅東へ

シクキン、梓、樟、蕃人の概況、劉銘傳の理蕃策、ピヤナン道路禮讚。

△四月七日　快晴　朝　ピヤナン五〇　夕　シキクン六八

南湖大山登山について、深厚なるお世話を蒙つた、ピヤナン駐在所を辭去したのは、午前八時である。ピヤナン臺地より、急坂を降り、濁水溪を横ぎり、右岸に移つた。對岸には、綠も鮮かな毛氈を飾つた、美しい段丘が斷續する。

十時十五分シキクン駐在所に到着、約によつて一泊のお世話を蒙むることとした。先づ以てシキクン神社に參拜した、社は駐在所裏手の高みに在る。數株の八重櫻が、今將に紅唇を綻ばす。

佐々木警部補殿に導かれて客室に入ると、早速茶菓子として、珍らしいカステーラが出る。やがて美しい奥樣の御手によつて調理された、餡かけの白玉が運ばれる。かねて予が下戸黨の旗頭格であるを熟知の同好主人の心盡しの程が讀まれる。夕食には、鷄肉のすき燒、卵蒸し、內地から郵送されたといふ五加棒が卓に上つた。始めから日本酒を抜きにして、葡萄酒を注がれた。實に至れり盡せりの厚き饗しを、深く記念する。

午後は警部補殿の案內にて、見學に廻つた。この地は、蕃人家屋八十といふ大部落で、討蕃當時は、駐屯兵を置かれた程の重要地點を占め、蕃人亦頗る進化し、能く農耕に勵んでゐるといはれる。

兒童敎育所、療養所、養蠶指導所、蕃產物交易所、警察酒保等がある。敎育所附設の實習園には、美しく生育しつゝある蔬菜の手入に、從事されてゐた敎員が見えた。

今水田三甲餘の開墾中で、警官指導の下に、蕃人達が働いてゐた。區劃井然として、立派な耕地整

理式を呈する。濁水溪の左岸に於て、西から落ち來る溪流を、灌漑用水に導いてあるが、高さ五丈ばかりの瀑水が懸り、風致を添へてゐる。「文化の施設は、兎角自然の景致を破壞するのが常だが、こゝのは正反對である」と予が言つたら、佐々水氏は會心の笑を漏された。予はこの附近に櫻と楓の混植を提案した。

山側で屢〻壯大な百合の花が目に入つた。莖の高さ三四尺にも及び、葉は細長く密生し、莖頭數花梗に分岐し、發育旺盛のは、十花以上を附ける。花被の大さは、普通の山百合程で、稍喇叭狀をなして傾斜する。三片は甚だ狹く、三片は廣い。多肉にして光澤に富み、內面白色、中央の黃條は、基部綠色を呈し、外面は紫褐色を帶びる。葯は紫黑色、柱頭は淡綠色である。可なり芳香を有する。テッバウユリの一品である。

河原にドクウツギが散在する。內地のより小形な果實が、今黑みがかつた紅色を呈する。蕃人の子供達も、其劇毒は、能く承知してゐるとのことである。

駐在所客室の裏庭には、附近から移植したといふ、ツツジの數品種が、花を見せてゐる。其概況を記すると、

A、葉小形、花冠小形、淡紅色、雄蕊五個、一季咲。

B、葉小形、花冠小形、淡紅色、雄蕊七乃至十個、通年咲。

C、葉大形、稍毛あり、花冠淡紅色、裂片狹長、旗瓣に紅點を有す。一季咲。

D、葉極大形、花冠甚だ淡紅、裂片前者より廣い、旗瓣紅點を有す。品位高尙。一季咲。

淡紅花のエビネが、唇を綻ばす。

桃の果實は、可なり大きくなつてゐる。花は三月上旬咲くとのことである。

濁水溪の對岸には、大覇尖山式の小山が、好添景となつてゐる。

浴場は最近の新築で、廣くもあり、優良な設備である。此處は海拔約二千五百尺のこととて、久し振りで、復蚊帳の御厄介になつた。

佐々木氏から、記念として、香杉（カウサン）（巒大杉）の瘤を輪切にしたのと、梓の杖を貰つた。香杉は近來支那に輸出し、非常な好評を博してゐるさうである。

「かへらじとかねて思へば梓弓」小楠公によつて膾炙する、この梓に就いては、種々の異說がある。

（一）東北地方に多いアヅサ即ちキサヽゲは、又カミナリサヽゲの異名がある。我が地方では、古來この木を屋敷に植ゑて置くと、落雷を防ぎ得るといふ傳說がある。近頃三宅雪嶺博士夫人によつて、腎臟病の妙藥とし、植木屋連は宣傳する。河邊に多い、直立性落葉喬木で、葉の形は桐に似てゐるが小さい。淡黃色に紫色の斑紋を帶びた唇形花冠を、總狀花序につゞる。果實は細長く、長さ一尺ばかりに達し、ジフロクサヽゲに似てゐるので、キササゲの名がある。

（二）次に西南地方に多いアヅサ即ちアカメガシハ又シャウグンボクといふのがある。山野に自生する落葉喬木で、若芽が赤味を帶びてゐるので此名がある。葉は廣卵形、稍掌狀に淺裂する。綠黃色の小花を穗狀につゞる。材質は緻密强靱であり、且つ美しいので、器具の材料として珍重される。

（三）次に東北地方に多いアヅサ即ちヤマグハ又ヤマバウシといふのがある。落葉喬木で、葉は橢圓形を呈して對生し、光澤がある。白色の小花球狀に集まり、四片より成る美しい大形な總苞を有する。イチゴに似た、拇指大の紅果は、食用となる。材質緻密强靱である。我地方では、杵や槌の用材として、賞用される。

（四）最後に擧げるのが、タイワンアヅサ即ちシマアヅサである。衞矛（マユミ）科に屬する暖帶植物で、埔里地方を主とし、ビヤナン地方にも多い。其樹振り葉振りは、甚だツゲに似た常綠亞喬木で、葉は

濃綠光澤に富む。材質緻密强靱、美しい白色を呈するので、杖に愛用される。

梓弓だの、上梓だのといふは、所謂枕詞若くは常套語に過ぎぬと、葬り去るならば、それまでのことだが、弓の材料として、實効上からいふと、予は上述の中、(三)及び(四)を最も適當のものと推奬するのである。蕃人の弓は、主として(四)を用ひてゐる。

△四月八日　快晴　朝　シキクン五六　夕　土場七五

南湖大山捜索隊の一員であり、植物上の趣味を持たれた巡査郷原富藏氏の護衞を受け、午前八時シキクン駐在所を發した。氏の指示によつて、途中アヅサ及びタガヤサンを見た。ビラウ（蒲葵）又タガヤサンの別名もあるが、ビラウは棕櫚科に屬し、材質亦シュロに類し、用材としては、さう貴重のものではない。こゝのタガヤサンは、所謂鐵刀木で、光澤を有する披針形の甚だ厚い葉を對生し、材質堅緻美麗であるので、古來珍重されるのである。

アヅサは、この邊からシーセンあたりまでが、最も多いとのことである。

ルモアン駐在所を過ぎ、十時十分シーセン駐在所に着いた。主任巡査田中直橋氏は、我が縣人而かも數里の近郷の産であつたので、非常な懷かしみを以て歡迎され、時刻は尙早いが、强ひて引止められて、晝食を饗された。此處でも最も新鮮な生椎茸の料理を澤山頂戴した。奥樣も近郷の人とて、溢るゝ愛嬌を以て給仕され、頻りに日本酒を侑められるので、予は甚だ下戸であると辭退したら、優良な老紅酒（ロアンチュー）の貯へがあるとて、試味を勸められた。本島固有の酒には、玄米、糖蜜、甘藷、高粱などを原料とした白酒がある、之れに紅糀を加へた紅酒がある、製造當初は、紅色を呈するが、貯藏によつて、淡褐色に變じたものを、所謂老紅酒として賞讃するとのことである。「下戸なら、餅はお好きであらうから、晩食には、餅を搗いて差上げます、是非泊つて下さい」と頻りに勸められたが、深く其厚意を謝するだけに止めた。御夫婦と共に、二人の幼な兒達まで、別れを惜んで、遠くまで見送りされ

たのは、涙ぐましい。

十一時四十分、シーセン駐在所を辭すると、右方は太平山の尾根が迫り、左方はシッキュス山（八〇三六尺）の山側を仰ぎ、濁水溪流は始終屈折して、頗る幽邃な佳景を呈する。山側所々腦寮から立ち揚る烟が、一種の景致を添へる。

森林の女王と稱される樟は、本島に於て、北部山地が豐富である。標高約五千尺以下に產する。樟には赤樟、青樟、黑樟がある。黑樟には樟腦を含まぬ。青樟は樟腦の含量が乏しいので、製腦には不利ではあるが、他に貴重な香料を含んでゐる。製腦には赤樟が採用される。其含腦量は、產地によつて多少の差異があるが、樹齡の古い程多い、又同一の樹でも、幹の上部よりも下部、枝先よりも枝元、細い枝よりも太い枝、葉よりも枝の方が多いのである。樟腦は從來香料、防蟲劑、藥劑などに用ひられてあつたが、近頃セルロイドの發明以來、其原料として、需要俄かに增加し、現今世界需要の七八割は、我臺灣から供給すといはれる。製腦は、總督府の專賣事業に屬し、山中到る處に、其製腦所即ち腦寮が目に入る。この腦寮で製したのは、粗製品で後更に精製するのである。

附近にタブ、カシ、シヒ、イヒギリが多い。

黑部溪谷の東鐘釣山（ヒガシカネツル）に酷似した岩山の麓にある烏帽子駐在所を過ぎ、山側を廻ると、體格の逞しい例の蕃刀を下げた、血氣盛りの蕃人五人に逢つた。「今日は」「どこから來た」などと、元氣良い言葉がけをした。蕃地の終點に近いことも、うなづかれた。

タボー駐在所に立寄り、巡査岸良榮太郎氏の案內にて、今夜の宿所土場（ドバ）倶樂部に投じた。時に午後二時である。

土場倶樂部は、營林所の經營に屬する。濁水溪の支流の左岸數十尺の高みに位置し、對岸より鐵管にて溫泉を引いてゐる。鐵分を含んだ無色無臭の鹽類泉で、中風、リューマチスに効があるといはれ

る。

浴場はタイル張りである。

南方約二里半に、檜を以て有名なる太平山森林作業所があるので、主として同所關係往來者の便を圖つた旅館である。時偶〻警官の異動期であつたので、轉勤警官の家族なども入り込み、頗る雜沓を極め、客室は滿員の有樣である。予は營林所員と相客となつた。此處で卵蒸しに鰻の蒲燒を添へたのは珍しい。

太平山森林地帶は、南湖大山の北に延びた支脈ゲリロー山（八〇九〇尺）の北東に於て、長約十二里、幅約五里に亙り、千古斧鉞も入らぬ蔚蒼たる大森林の偉觀は、阿里山を凌駕すといはれ、總督府營林所では、大正四年より事業に着手するに至つた。樹種は扁柏、紅檜、香杉、栂の針葉樹を主とし、樟、櫧などの闊葉樹も多い。伐り出した木材は、土場から森林鐵道によつて、羅東貯木場へ搬出するのである。

營林所員の語る所によると、太平山作業所の奥には、シャクナギが甚だ豐富で、白花のも多い。又タイリントキサウの大群落は、所々で目に入り、時には大樹の幹を包んだ薜苔を蓐とし、絢爛の美觀を呈することもあるとのことである。

本山脈の東脚蘇澳では、良好な石版石を伐り出しつゝあるが、餘程有望視されてゐるとのことである。

△四月九日　快晴　朝　土場 六五　晝　礁溪 八四　夕　同 八〇

この日は太平山森林鐵道によつて、愈〻蕃界を辭して、普通行政區域といふ世間に出るのである。阿里山に入つて以來、蕃地生活を通計すると、二十八日である。半ば蕃化した我身は、再び黃塵の巷に晒さねばならぬかと思ふと、惜いやうな氣もする。

營林所の經營に屬する太平山鐵道は、土場から羅東に至る二十二哩八分。列車は一日三回往復する。阿里山のに比すると、餘程緩い勾配である。これも勿論運材主眼の運轉ではあるが、一般の便乘をも許してゐる、運賃は九十二錢である。

午前六時、土場發の汽車に乘ると、間も無く、濁水溪の支流に架けた鐵橋を渡り、濁水溪本流の右岸に沿うて下る。刻一刻谷漸く開けて山氣を離脱すると共に、濁水驛を過ぎると、やがて蕃界をも離脱する。牛鬪驛名が、我が近郷二十村名物のそれを思ひ出させ、天送埤、二萬五、歪々など、奇しき名前の數驛を過ぎ、九時羅東に着いた。

荷物を驛に一時預けとし、早速羅東郡役所を訪ひ、郡守横山利助氏、警察課長渡邊勝郁氏に面會し、登山に關する深甚の厚意援助に對し、謝意を表した。快活な横山郡守殿は、一夜滯在講演をと求められたが、予は唯其光榮を謝するだけとした。

予は蕃地に於ける、最も興味ある、最も愉快であつた山旅も、大段落を告げたので、茲に見聞に基き、聊か蕃人の概況を記述する。

蕃人の體格は、概して細長で、肥滿したものは、殆ど目に入らなかつた。毛髮は黑く眞直に伸び、鬚髯は少い。體毛は極めて少いといはれる。顴骨稍高く、眉は平で、二重瞼の愛らしさは、マレー系統の特徴を表示する。皮膚は黃褐色であるが、仲々色白な美人のあるのは、豫想以外であつた。

食物は、粟を主とするが、稗、麥、玉蜀黍、豆類も用ひ、標高低い地方では、陸稻、水稻も作る、甘藷、里芋は大に栽培する、甘藍、蘿蔔、南瓜などの蔬菜もある。山の獲物は、鹿、羚羊、猿、猪、熊などがあり、川には魚蝦を漁撈する。

味噌、醬油類は、平地に近いものが、僅かに用ひる位のもので、山奥に至ると、食鹽すら、使用する場合が少い。

食事は、普通一日三回である。

酒は、粟若くは甘藷を原料として釀造する、昔時は、嚙んで唾液を混じ、醱酵させたのだが、今は麴を用ひる。酒と共に、彼等が絶大な嗜好品である煙草は、各自栽培する、所謂自給自足である。臺灣では、酒も煙草も專賣制度となつてゐるが、蕃地は除外の特典を與へてゐる。餅は彼等が頗る珍重する所である。原料は多く餅粟である。

麻を作つて、機を織るが、近來は內地製の木綿を用ひるのが、漸次增しつゝあるのは、華美な模樣に引き附けられると見える。中にはメリンスを着用した美人も見えた。男女とも、赤色を好むやうである。彼等の上級者には、刺繡を施した衣袴もある。又禮裝には、眞紅な陣羽織式のがある。

男子は二十歲前後、女子は十七歲前後で結婚する。媒介人があつて、兩親の承諾を受け、相當の結納を要する。それは部落により、種々雜多であるが、多くは猪、鹿、豚などを贈る、近頃はだんだん織物を用ふる傾向となつた。男が養子に行くときは、小糠三合どころか、全く一文をも要さぬとは面白い。

私通は、社內の穢れとして、非常に排斥し、神に對して謝罪する。從つて男女間の風儀嚴肅であるは、文化自任の靑年男女こそ、寧ろ汗顏の感があらう。

或る部落では、男子十二三歲となると、公館に收容され、そこでスパルタ式の鍛錬敎育を受ける。彼等が筋骨の堅固であるは、一にはこの傳統的遺習にも基因する。この公館は、地上七八尺の床張りで、梯子を以て昇降する。此處には、女子の出入を絕對嚴禁する。この公館は、時には彼等が祭場となり、會議所となる神聖な場所とされてゐる。

彼等は、祖先は神となつて天に在すとして、崇拜の念は甚だ深いが、特に偶像とか、墳墓とかは設けてゐない。死體は埋葬するだけである。タイヤル族には、遺物を副葬する風習もある。

刺墨即ち入墨は、種族部落によつて、幾分の差異はあるが、全く施さぬもある。警官の教化により、漸次廢止の傾向を辿りつゝある。耳朶に竹管、又は金屬環をはめることも、入墨同樣の運命となつてゐる。

尙彼等には、耳飾の外、胸飾、腕輪もある。

簡單な方法で、鍬などは自分で作るが、蕃刀や、以前に於ける銃器は、西洋人や支那人と、物々交換したのであつた。

蕃刀は、種族部落によつて、其形式に幾分の差異はあるが、通じて幅廣身厚な段平(ダンビラ)式で、刀身の長さは約一尺五寸、簡單な構造の鞘がある。

十數年前までは、彼等は物々交換であるので、貨幣には何等の價値をも認めぬのであつたが、今は蕃地適當な場所には、公設交易所があり、且つ彼等は屢〻平地に出ては、貨幣で希望の物品を買ひ得る關係上、益〻其價値を感じ、好んで勞役に服するやうになつた。

彼等が勞働賃金は、場所によつて、非常な差がある。阿里山方面では、普通の作業は、一日一圓、山行は一圓五十錢。新高山北口方面では、一日六十錢。霧社方面は五十錢。マレッバ、シカヤウ方面は八十錢。ピヤナンは山行五十錢であつた。

內地では、山行の剛力を雇ふと、彼等は大抵荷物の重量五六貫を制限とするが、蕃人は十貫內外を擔つて、平氣で而かも輕快に、嶮坂を昇降するのは、多年鍛錬の體力もあらうが、一には又眞面目な純情愛すべき點もある。

以上蕃人の概況は、予が實驗の外は、主として蕃地に多年勤務された警官德永福飯、猪瀨幸助、梶原音吉、佐塚愛祐、川西常吉、櫻正兵衞諸氏の談話によつたのである。

彼等は、慓悍敏捷である。戰術には神出鬼沒、獨特の技能を有する。

光緒十四年、統領劉朝帶四百の兵を以て、南澳蕃を討伐し、彼等が奇襲に逢ひ、全軍死地に陷つたことがある。

光緒十五年、寶如田は二千の兵を以て、南澳を征し、前後より、彼等が急襲に遭ひ、全軍の半を失つて、退却したことがある。

明治二十九年、タロコ蕃人は、守備隊將校以下十三人を襲殺したことがある。

明治三十九年、タロコ蕃は、製腦事業に從事する官民三十餘人を襲殺したことがある。

南澳蕃、タロコ蕃は、皆タイヤル族に屬する。

佐久間總督の所謂五ヶ年理蕃計畫の最終の年である、大正三年五月には、警察隊三千餘名は、民政長官內田嘉吉氏指揮の下に、東海岸タッキリ溪方面より攻め入り、陸軍の二個聯隊及び砲兵隊は、總督陸軍大將佐久間左馬太氏總司令の下に、西方埔里方面より進んで、大々的討伐を加へたのである。この時軍司令部を、海拔一萬一千餘尺の合歡山上に設けたといふは、軍司令部として、我邦空前の最高地點であつた。

この大討伐によつて、彼等に充分な威力を示し置き、爾來撫育的敎化を施し、漸次其成績を擧げつつあるのだが、光緒十一年、時の巡撫劉銘傳の取つた理蕃策は、大に推重すべく、且つ現今我總督府の方策も、殆どこの政策を採りつゝあるから、左に略記する。

一、蕃地道路の開鑿は急務とすること。

二、先づ撫育を完うすること。

三、恩威並び行ふこと。

四、蕃童敎育を行ふこと。

五、授產の道を講ずること。

六、狡獪なる支那人の、妄りに蕃地を侵すを制限すること。

今や我が總督府の理蕃政策は、威壓時代を脱して、撫育時代に入り授產と教化に力を注ぎつゝある。總督府發行の『臺灣事情』によると

水田開墾は、逐年發展し、昭和元年の收穫玄米約九千三百石に達し、牧畜に於ては、豚約三萬三千頭、水牛及黃牛約五千五百頭に達する。蕃地の氣候は、養蠶に適合し、野桑亦豐富であるので、將來非常に有望視されてゐる。昭和元年の收繭は約八百五十石、其價格約三萬圓に及んだ。

蕃人の性質は、慓悍ではあるが、一面又淡泊正直で、頗る優しい氣性を持つてゐる。

近年蕃人の就學熱は、著しく旺盛となり、其教育所の卒業生で、上級學校に入るもの逐年增加し、現に教員、醫師、警官、看護婦或は會社の事務員となつて、活動しつゝあるものも、多數に上つてゐる。

先年秩父宮殿下が、角板山蕃童教育所御視察の際、「蕃人の腦力は、伸ばし得る素質がある、能く撫育せよ」との有り難き御言葉を賜つたと承つては、蕃人亦感泣せざるを得ぬであらう。

予はピャナン道路に別れを告げるに臨み、簡單に所感を記する。

霧社からピャナンまでは、標高約四千尺を下る地點は無い。松嶺の八千五百六十尺を最高とし、概ね五六千尺の山地を經過し、到る處、仰いでは、高巒峻峯の威容を拜し、俯しては、脚下に數千尺の深谷激流を見下し、原始的森林美が始終添景する。山川森林の總てが、內地では到底見られぬ雄大さ、壯麗さを現ずる。予は單にこの道路のみの通行を以てしても、他に多く求め得ぬ、高山深谷の氣分に浸ることが出來ると、推奬するのである。

殊にこの道路は、臺灣の地方病として嫌はれるマラリヤの媒介者アノフェレスの棲息を許さぬから、始終蚊帳生活に、充分足も伸ばし得ぬ本島人士に取つては、登山を拔きにしても、須らく杖を曳くべ

き、好修養地であると、予は信ずるのである。

ピヤナン以北、土場までの間、地は遞次標高を減ずるも、尙ほ山容溪流森林の美に於て、棄て難き景致を認められる。予は今この道路を辭するに臨み、謹んで禮讃の辭を呈するのである。

三一、羅東より臺北へ

礁溪温泉、大里、日本一の金山。

羅東驛で、汽車待つ間に、其改札口の上にある掲示を見ると、「尙未鉸車單去座車要提車錢重倍」と書いてあつた。本島人相手の用語とうなづかれた。

午前十時三十六分、宜蘭線羅東驛發の汽車に搭じ、米と老紅酒と月桃布で名高い、宜蘭街を車窓から眺め、十一時三十分礁溪驛に下車し、三町ばかりで、温泉浴場西山旅館（西山清次郎）に投じた。

室に入ると、早速目についたのは、「袖中藏日月圓了書」と書いた額面であつた。我が隣村の出身で、妖怪博士を以て名高い井上圓了氏の書である。氏は既に故人となつたが、熟知の人とて、少からず予が感興を惹いた。氏は曾て此處に遊んだとのことである。『臺灣名勝舊蹟誌』には「阿里山上望新高山」と題した氏の作がある。

林壑高低鐵道縫、遠山近水洗吟胸、仰見天半雲如海、浮出扶桑第一山、

西山旅館は、宏壯な建築で、設備は可なり整うてゐる。浴室は、屋外にもあり、屋内にも數ヶ所ある。女中には支那娘も交つてゐる。

温泉は、無色無臭清澄な鹽類泉で、微かに鹹味を有する。分析表は

クロール、ナトリューム	・〇三六	クロール、カリューム	・〇一二
炭酸カルシューム	・〇五〇	炭酸ナトリューム	・二五六

炭酸カリューム　・〇四八　炭酸マグネシューム　・〇二四
酸化鐵　・〇〇二六

一浴を終へて、郊外の散歩を試みた。この地後に鴻仔、金面の山々を負ひ、前は宜蘭平野を隔てゝ龜山嶼を望み、この地方第一流の樂園と稱される。溫泉は、驛の附近一帶に噴出し、從つて溫泉旅館も數戸ある。溫泉の河中で、村民が浴を取るのも見た。

眺望佳良な丘上に、公共浴場がある。「入浴一回五錢、娯樂室一日二十錢」などいふ掲示が見えた。唯旅館附近は、水田相連る平地なので、其地名に囚はれて、岩礁磊々たる溪谷に位置するものと豫想した予が期待は、全く裏切られたのであつた。

奇形を以て名高い龜山嶼を眺めるには、尙ほ後丘に登らねばならぬ。嶼は當地海岸を距ること、東方五浬にあつて、周圍二里八町、二個の圓錐形火山丘から成り、西丘は高さ一千二百尺、東丘は八百尺、其東端は懸崖をなし、西南から眺めると、恰も龜が頭を擡げたやうであるとて、この名を得、其南方近く數個の小島に、龜卵島の名を附けたのも可笑しい。

西山旅館の門前に、「德陽宮」と題した支那式小堂がある。「天增歲月人增壽、春滿乾坤福滿門」と書いた、赤紙の門聯が貼られてゐる。この句は本島到る處、最も多く目に入る。所謂普遍的支那式常套語であらう。

西山旅館の庭園は、隨分廣い。ツツジの數種が爛漫たる滿開を見せ、紫色の藤花は、既に散りかゝり、ヲガタマの黃綠花、ギンモクセイの白花が芳香を放つ、ジャボンの實は、胡桃大に生長し、林投（タコイキ）の果實は　鳳梨のそれに似てゐる。この木は、本島海岸に多く自生し、太い氣根は、タコの脚を擴げたやうであるので、この名を得てゐる。この葉で編んだ所謂臺灣バナマ帽は、頗る好評を博してゐる。

△四月十日　晴、風雨　朝　礁溪七六　夕　臺北六八

昨日午前中に、礁溪に到着し、快晴と溫泉場とを利用し、山行連日に亙る衣類の洗濯を依頼し、今日はそれ等の整理と、休養とを兼ね、悠々入湯散歩をなし、午前十一時二十八分礁溪發の汽車に搭じた。

沿道崖側に、紫紺花の八重山唐草と、白花の山百合を、ぽつぽつ見た。この百合は、莖の高さ一尺五寸ばかり、一莖一花、普通の鐵砲百合式雪白の花で、シキクンで見たのとは、全く違つてゐる。

岩床廣く海中に延び、本島十二勝の一に擧げられた大里の海岸景觀を、右に眺め、延長七千百二呎、本島最長の草嶺トンネルを潜り、明治二十八年北白川宮殿下麾下の軍の上陸地である澳底を、右手に見た。雙溪驛からは、各驛殆ど皆石炭の黑山が目に映ずる。本邦第一の金産地金瓜石、瑞芳兩金山を附近に控へた瑞芳驛を過ぎ、午後三時四十三分臺北驛下車、久し振りで、大都の旅館吾妻に歸着した。

この日、朝は快晴であつたが、大里海岸通過の頃から、俄かに曇り、間も無く風雨となつた。

三二、ヲガタマ薫る烏來

新店の深潭、ウライ公設浴場、ウライ瀑。

△四月十一日　曇　朝　臺北六八　夕　ウライ六〇

昨夕本町二ノ一日種印刷所に依頼した名刺百枚、今朝印刷を終へて持參した。

九時人力車を賃し、臺北州廳、總督府、臺灣日々新報社を訪ひ、山行に關し、特に深甚なる援助を蒙つた謝意を表した。偶〻予が總督府で、生駒文書課長殿と對話中、臺中州警務部長兒玉魯一氏が來訪されたのは奇緣であつた。予は臺灣山岳旅行に關し、永遠の記念とすべく、記念印帖に、生駒氏の捺印を請ひ受けた。

この日生駒氏、沼井氏、中曾根氏外數氏から、予がために旗亭中惣に於て、慰勞會を催され、鄭重な晝食の饗にあづかつたのは、感謝に堪へぬ。席上予が午後烏來(ウライ)行を語ると、生駒氏は直ちに電話で、文山郡役所に、便宜取計の依頼をされたのは有り難い。

ウライは文山郡に屬し、淡水河の支流南勢溪畔に位し、文山郡役所の所在地新店庄までは、汽車も自動車も通じ、そこから約四里溪谷に入るのである。予がウライ行は、溫泉其ものは目的では無く、霧社で合歡瀑に背いた罪滅しに、ウライ瀑と、新店の深潭とを見たいのであつた。

午後一時三十分、自動車に搭じて臺北市を發し、三時新店着、文山郡役所を訪ふた。郡守は不在であつたので、警察課長に面會して、入蕃上の便宜を請ふた。「唯今生駒文書課長殿から通知がありましたから」とて、入蕃許可證などいふ手續は略されたのである。頂戴した名刺に「文山郡警察課長、臺北州警部從七位勳八等高橋秀二」とあつた。

細長く屈曲した新店の部落を貫き、右折すると、新店溪の渡頭である。溪水幅約百間、水淀みて波さへ立たぬ靜けさ。紀州靜(シヅカ)八町(ハツチヤウ)に比べると、長さに於ては遜色あるが、規模は甚だ大きい。深さも數倍あるらしい。舟進んで對岸に近づくに從ひ、深さは益〻加はり、水色實に紺碧を呈する、水面靜かなること鏡の如しといふが、此境の形容詞として、眞に適切なるを感ずる。水面を見渡すと、魚躍つて音あり、波紋鏡面を破つて、言ひ得ぬ光景を呈する。對岸嶮岩絶壁幾十尺、奇しき影は水に映じ、岩頭樹木の添景もあるが、唯蔚蒼たる老樹巨木であらぬを遺憾とする。この深淵が、即ち新店溪深潭で、又赤壁潭の稱がある。靜觀の極を呈するこの深潭は、やがて矢を射る急瀨と變じ、臺北の西に流下して、淡水河に注ぐといふは、所謂三年不飛式の水觀と謂はねばならぬ。こゝは臺灣十二勝の一に列する。

深潭を渡り、徒歩十數町、渡船で再び新店溪を横ぎり、右岸に移る。岸頭に、第二發電所として、

小粗坑發電所がある。尙ほ上流の龜山發電所と共に、總督府の經營に屬し、合計五千馬力の電力を有し、臺北、基隆、瑞芳方面などに、燈用及動力を供給する。又この溪流は、臺北市水道の給水役をも勤めてゐるから、本島北部の水の神と崇めねばならぬ。

道は屈尺坂の名ある急坂にかゝる。丸石を並べて作つた階段は、歩幅を制限するので、疲れを覺える。登り詰めた所茶店あり、稍先きには、青年團の築造にかゝる、見晴らし休憩所がある。屈曲逶迤する新店溪を見下し、前面に青巒翠岳の重疊を望むは、頗る佳景である。今度は急な降り坂となる。後藤長官によつて、伸丈坂の名を得たとは、氏が性格を發揮して、大に面白い。

この坂で、野生の青紫花の風車と、テリハノイバラの一品を見た。このノイバラは、葉深綠光澤を有し、ナニハイバラに似た雪白色の花冠は、直徑約三寸、花瓣廣倒卵形を呈し、芳香に富み、氣品極めて高尙である。予はこんな品種のノイバラには、始めて見參に入つたのである。

花散りかゝつたセンダン並木の田道を通り、屈尺の部落に入つた。屈尺警察官吏派出所と屈尺公學校が、左手に見える。この地は、程なく蕃界に入る關門となつてゐる。

第二發電所用水の取入口は、新店溪の廣い河原に、堰堤を設け、堰堤を越した殘水は、幅廣い幾段の飛瀑を作つて、頗る壯觀である。瀑下に魚族が夥しく集つてゐるので、禁漁區の標木が見える。

數戸の茶店が並ぶ雙溪口の部落を過ぎ、渡船で左岸に移ると、愈〻蕃地に入るのである。北勢溪と南勢溪との合流點を占めた此の地は、雙溪口の名ある所以である。

この左岸に、第一發電所として、龜山發電所がある。谷奥に美しいピラミッド式のカウヤウ山（三二五〇尺）を仰ぐ。

長百二十間ある龜山鐵線橋を渡り、南勢溪に沿うて南すると、程なく三井合名會社經營の臺車軌道がある。同會社が、この山奥から、木材運搬のため敷設したのである。文山郡警察課長から電話があ

南湖大山頂上より海雲を隔てゝ西北方に大覇尖山を望む。山頂石碑を建てたうやうなものがある。それ方左は高峯の延べ山の北角。臺灣總督府林課撮影。

（贈寄氏郎太鐵井沼）

つたので、臺車上の客となることが出來た。而かも予一人のために、臺車を運轉するのであつた。軌道は左に南勢溪の激流を見下し、左岸の山側を、幾度か大なるカーブを描きつゝ登るのである。龜山以來、深山幽谷の感に打たれる。

前面に隆圓狀を呈する大桶山（ダイトウ）（三〇六五尺）を眺め、馴染の蛇木が頻りに目に入る。

六時對岸にウライ公設浴場を見る所で、臺車を辭すると、ウライ駐在所から、巡査部長岡山敬爾氏の出迎を受け、遊仙橋（長四十六間、高四十八尺）と題した、雅名の鐵線橋を渡ると、ウライ公設浴場である。警察課長から電話があつたので、早速廣い綺麗な客室に導かれた。緣側は三方を繞り、溪流を見下し、翠巒に對して氣持良い。

案內されて浴場に行つた。庭にはヲガタマの數株がある。滿枝を飾る花は、今眞盛りで、芳香四隣に漂ひ、予が鄕園を思ひ出て嬉しい。

ヲガタマは土名烏心石、又黃心樹の漢名がある。葉はサカキに似た光澤ある常綠樹で、花冠は直徑一寸位、白色に稍黃色を帶びて、餘り目立たぬが、バナナに似寄つた佳香は、甚だ好きであるので、予は庭園に植付けてある。材質堅緻美しい光澤があるので、器具用として珍重される。

浴場は、溪流近く設けられ、溫泉は鐵管にて引き、水も引いてある。泉質は無色無臭の炭酸泉で、鐵分を含み、皮膚病、腺病に効があるといはれる。年浴客一萬五千に上るとは、蕃狀視察地としては、臺北市に最も近いのと、又近くウライ瀑を有するのに因るらしい。溫泉は溫度華氏百六十度といふ高溫である。この溪畔には、各所に溫泉が涌き出てゐるので、蕃人達も入浴に利用してゐるとは、結構なことである。ウライとは、タイヤル語溫泉を意味するさうである。

この地海拔六百尺。蚊帳を要する。

室に「花意竹情珠水書」と題した大きい額がある。福田大將の揮毫である。

△四月十二日　少雨　朝　五〇　夕　臺北六八

緣側の籐椅子によつて、幽谷の朝景色に眸子を放つた。四圍の山々に生ひ茂る樹林は、落葉、常綠混淆の樹種とて、綠の色にも、濃いもの淡いもの、若芽が呈するとりどりの色彩は、團々として相重なり、小雨に烟つて幽邃極みなく、彼方此方の岸から立ち揚る溫泉の湯氣が、風情を添へる。

緣先には、ツツジとバラの數品種が、濃紅淡紅の花を翳す。

ウライ瀑を探るべく、岡山巡査部長殿の案內を受け、午前九時公設浴場を出發した。小雨は止んだが、空は一面に曇つてゐる。山の端を廻り、左手に溪流を見下し、屈曲した山側を遡る。クス、タブ、カシ、ナラ、ハンノキ、フウなどの闊葉樹が蓊蔚として、幽邃の景致を添へる。蛇木、蓮草木が多い。雄壯な月桃草の花が、幽谷を彩どる。

月桃草は、多年性草本で、本島到る處の沿道にも山地にも、始終目に入つたのだが、開花に接したのは、此處が初めてである。不整齊な白色の花被は、頗る大形で、唇瓣深紅色橙黃を帶び、黃蕊を有し、一尺ばかりの複總狀花序を呈する樣、人目を惹く、殊にこゝのは、發育旺盛を極め、莖の高さ七八尺、葉の長さ二三尺に達する。

蓮草木は、又通脫木と稱する小喬木で、葉は莖の上部に集つて着き、長い柄を有し、掌狀に分裂する樣、甚だヤツデに似てゐるが、光澤は無い。花は白色小形で、圓錐花序に綴ること、ウドに似てゐる。莖の中には、柔かな大なる白色の髓がある。之を薄く削つて紙とし、造花材料、活動紙、繪葉書等に使用され、當地方蕃產物中、著名のものとなつてゐる。蕃人が之を採集し、製作しつゝあるのも目に入つた。予は二十年程前、東京の知人から受信した葉書が、墨汁で書いた所だけが、膨れ上り、さながら天鵞絨文字の觀があつたのを、奇異に感じたのであつたが、それが後に所謂蓮草紙であることが判り、今この山旅で、臺灣の北部蕃地が、其生產の本場であることを實見して、一種の快感が涌

いた。

多年本島の植物調査に從事された川上瀧彌氏は、各地代表植物景觀として、「ウライの蛇木」といふを提示してあるが、これ亦當地方の蕃產物として著はれてゐる。

臺灣の產物として、茶器や其他の器具に賞用される、キククッボクといふのがある。其木理紋樣が、菊花のやうだといふので、この名を得たのであるが、主として本島の北部に自生し、其花も隨分美しいと聞いてゐたので、頗る注意を拂つたが、遂見參に入らなかつたのは、遺憾であつた。

兜巖（カブトイヘ）といふを、右手の崖上に仰ぎ、九時四十分ウライ瀑に見參に入つた。ウライ公設浴場から、約半里である。

瀑は寶岩山（タボーク山の一角）の絕壁に懸り、絕壁高さは四百尺と稱されてゐるが、華嚴の瀑壁よりは、少々低いやうに思はれた。

瀑身は、主瀑の左右に、二三條の副瀑を有するのは、本瀑の價値上、大なる要素である。落口から直下すること約三分の二にして、潭に落ち込み、溢れて更に落下するので、二段となつてゐる。副瀑は潭以下合して一條となり、直ちに南勢溪の河床岩面に落ち込み、全く瀧壺を有せぬは、莊嚴的添景の點に於て、遺憾とする。されど岩壁は、鐵光色を帶びた橫走的層狀を呈し、闊葉樹は適宜之を飾つて茂り、落口には數株の臺灣緋櫻を翳すなど、趣味ある瀑身と相待つて、復得易からぬ景觀を呈し、八通關道路に於ける雲龍瀑に比すれば、遙かに優秀である。予が本島跋涉中、目に入つた瀑瀧中では、本瀑と、八通關上に於ける茗濃溪頭予が所謂新高瀧を以て、白眉とする。唯本瀑も亦水量の少いのと、岩壁が稍平面的單調の缺點があるのは惜い。岡山氏によると、七八月頃の雨期には、水量大に增加して、壯觀を呈するとのことである。

瀑の對岸即ち左岸に、瀧見の四阿がある。數個の腰掛が並ぶ、近く木材伐出しに從事する人達の家

屋がある。

ウライ瀑鑑賞に、約三十分を費し、歸途に就いた。途中多く目に入つたハンノキに就いて、今下駄材として盛んに伐り出しつゝあると、岡山氏は語られた。氏は阿蘇山下宮地の産とのことで、予がッツジ滿開時期の同山會遊談には、頗る共鳴された。

歸途「南勢橋」と題した鐵線橋を渡る。南勢溪に架けた橋で、三井會社が、運材臺車の運轉に堪え得る、構造法を拂つただけあつて、施設堅牢美觀を呈すること、他に其比を見ない。「昭和三年一月竣成」と註してあるから、最近のものである。

十時五十分ウライ公設浴場に歸着した。

一浴の後、浴場客室から、近く鼻先に見える、兒童教育所を參觀した。南勢溪の支流桶後溪に架けた、長さ四十間ばかりの鐵線橋を渡ると、すぐ教育所である。構造簡略の釣橋であるので、頗る動搖するが、馴れた子供は、駈足で渡つてゐる。

三十人ばかりの兒童の一部は、教室で自習して居り、一部は屋外で運動してあつた。校長林氏は、福井縣人とのことで、この地の教育に從事すること九年、氏が父は、漢法醫で、其以前から、この地に居住された關係上、父子の撫育に浴した社内の人達は、氏を見ること神の如しとは、奥ゆかしい感に打たれた。

ウライ社は、戸數三十、人口百五十ばかり、屈尺蕃に屬し、タイヤル族である。豐富な溫泉があつて、始終入浴するためか、此處の兒童は、身體餘程清潔に見え、應接態度亦快活であつた。「この地の蕃社は、近年まで、彼等が誇りとする、首架(クビダナ)を以て著はれてゐたのであつたが、近頃著しく進化し、九年前に比すると、餘りに違つて、今昔の感に堪えません」と林校長氏は語られた。昨夜青年訓練の聲も耳に入つた。

浴場の庭園にも、この校庭にも、滿開のブッサウゲが、赤い心を見せた。九重葛(コヽノヘノクズ)が目を惹く、この花は、三個づつ花軸の頂に生じ、筒狀花被は、帶黃白色の內面と、紫紅色の外面とを有するも、甚だ小形なので目立たぬが、花下を擁する卵形の三苞は、頗る大形で、濃艶な紫紅色を呈し、蔓性美花の王と稱されてゐる。本島各所で目に入り、土地の人達は、イカダカヅラといつてゐる。

ウライ一泊の旅は、頗る愉快であつた。沼井氏の賞讃には、予も共鳴した。本島首都に間近く、この幽邃を極めた境地あらうとは、實に豫想以外であつた。

駐在所の好意により、龜山から、わざわざ用意した臺車が來たので、午後二時ウライを辭し、龜山に下車し、三井會社の出張所に謝意を表し、歸路を急いだ。

五時文山郡役所に寄り、謝意を表した。双溪口の渡船場から、道連れとなつた一商人も、この時一緒に郡役所に出頭し、二三日中に、復この谷に入る用件があるから、入蕃許可證の繼續的使用を請ふたが、毎回改めて許可證を受けねばならぬと諭されたのである。

此處から自動車に搭じ、六時頃臺北旅館吾妻に歸着した。

三三、龍山寺

西門市場、阿片。

△四月十二日　雨、晴、朝　臺北七〇　夕　同七〇

雨天であるので、落着いて、各方面へ繪葉書通信五十枚程出した。

「旅館吾妻」と大文字入の雨傘を借用し、雨中の市況を見物し、西門町にある市場を視察し、そこで豚肉料理で晝食をしたゝめた。場內は鳥獸魚肉、果實、蔬菜を始め、日用品、裝飾品等、材料も豐富であり、大規模の施設であつた。

繪葉書を購入するため、雜貨店に入つた時、文石といふのが目についた。これは澎湖島の産で、又霰石の名がある。玄武岩の空隙を充塡した炭酸石灰で、放射狀をなすもの、白、乳白、卵黃、橙黃、肉紅等、美麗な斑紋雲樣を呈するので、文石の美名を負ひ、琢磨して印材笄玉其他文房具に珍重される。

午後千歲町二ノ三八長谷川龜之助氏を訪ひ宿泊することゝした。山入前からの約を履んだのである。夜長谷川氏の案內にて、夜の市況を見物し、龍山寺に參詣した。寺は市の西部元の艋舺に在る。淸の乾隆年間の創建で、臺北最古の寺と稱されてゐる。近年巨費を投じて改修したので、結構壯麗、石柱の彫刻など、巧緻を極めてあるが、劍潭寺に比べると、古雅の點が乏しい。こゝも矢張觀音佛祖を祀つてゐる。

西門市場の夜況を見た、仲々賑かなものである。

△四月十四日　晴　朝　臺北七〇　夕　草山六〇

この日長谷川氏は、臺北第一流の旗亭で、臺灣料理を饗應するからと、强ひて滯在を勸められたのであるが、沼井氏と草山行を約してあるので、之を辭した。食慾よりも、山慾の方が、引力が强い。

沼井氏を、氏が主任の樟腦專賣局室に訪ひ、吾妻に歸つた。

專賣局では、阿片吸食者の實際を見せて貰つた。阿片問題の解決は、領臺當時難物の一であつた。阿片習癖、所謂中毒に陷つてゐる者に、俄かに吸食を禁止すると、其生命を害するから、漸禁の方針を取り、明治三十年阿片制度を設け、一般には之を禁じ、唯阿片中毒者と認むるものに限り、官製の阿片烟膏を購入吸食するを許可した。この特許鑑札を有するものにも、一人に對し、三日分以上は賣らぬことゝなつてゐる。『臺灣事情』によると、明治三十三年全島中毒者の數は、十六萬九千六十四人であつたが、明治四十四年には九萬二千九百七十五人、昭和元年には三萬一千四百三十四人といふ減

少を示してゐる。

七星山

三四、總論

位置、大屯火山彙、霧島火山帶。

臺灣山岳の殆ど總てが、水成岩褶曲山脈から出來てゐるのに對し、唯一の火山岩山彙がある。臺北州の北端を飾る大屯(タイトン)火山彙がそれである。

大屯火山彙は、臺北市を距ること、北方直距約三里の地點に位し、西に大屯山、東に七星山、北に竹子山、稍不正な鼎立をなしてゐる。陸測二萬五千分一圖によると、一千百十九・六米(約三千六百九十五尺)の七星山を最高とし、一千百三米(約三千六百四十尺)の竹子山之に亞ぎ、一千八十・九米(約三千五百六十七尺)の大屯山は、第三位であるが、山容秀麗航海の目標となつてゐる大屯山が、この十一座を有する火山彙の名稱を代表する。タイトンの名は、西麓にタイトン蕃社があつたのに基くといはれる。

地理學者によると、この火山彙は、南は澎湖島、北は琉球を經て、開聞岳、霧島山に連絡する所謂霧島火山帶に屬し、第三紀層を突破して、最初に竹子山を噴起し、次いで大屯、七星に及ぼし、最後に觀音山(六百十一・五米)が生じたのだとされてゐる。現に七星山腹、及び大屯山麓には、硫氣噴出孔を存するのである。

三五、臺北より草山へ

芝山巖、紗帽山、草山溫泉。

十四日午後沼井氏の來訪を受け、草山方面に遊ぶべく、輕裝して旅館吾妻を出で、淡水線臺北驛二時三十五分發の汽車に乘り、同五十五分士林驛に下車し、麗かな日和に、センダンの並木新綠を裝ふ下、水田を貫く街道を歩むも氣持良い。

十數町にして、左手水田の中に、蔚然たる樹林を翳した一小丘を見る。これぞ本島教育發祥の地として、深刻な印象を與へる芝山巖碑域である。明治二十八年七月總督府學務官楫取道明氏以下六人、初めて本島人の教育に着手し、國語傳習のため、この地に在つたが、翌二十九年一月元旦、匪徒の蜂起に遭ひ、其逆刃に斃れて、悲慘を留めた遺蹟である。碑文は、時の內閣總理大臣伊藤博文侯の撰にかゝる。

程なく山地に入り、人家は散在する、鷄は道に遊ぶ、竹林あり茶畑あり、桃林がある。桃の果實は既に指頭大となつてゐるが、隨分廣く亙つた桃林は、其花時（二月上旬）の美觀を偲ばしめる。この地の桃は、本島にも著名となつてゐるとのことである。

この道路は、今上陛下が、東宮に在して、御渡臺の際、即ち大正十二年四月二十五日草山に行啓あらせられた當時の開鑿とて、廣く美しい自動車道路である。四百二十一米あたりの地點に登ると、既に展望豁然として、臺北平野を見下すことが出來る。

正面に綠も濃かな衣裳を着けた、名詮自稱の端麗な紗帽山を仰ぎつゝ、道は稍下り氣味となり、やがて谷川に架けた橋を渡ると、草山溫泉である。士林驛から二里二十町と註さる。

この橋詰で、崖側の綠林を彩どる、淡紅色の美しい花叢が目を惹いた、石南としては、樹振りが稍

怪しいので、沼井氏と語り合つたが、遂不明に終つた。翌日七星山を降る途中にて、澤山目に入り、同行の林田稔氏から、セイシクワであることを敎へられた。花戸は聖紫花といつてゐる。伊藤篤太郎博士によると、學名クルマツツジ。常綠小喬木で、幹は直立二丈許りに達し、枝極細く、革質深綠光澤ある鋭頭楕圓形の葉は、枝端に五七輪生じ、淡紅艶美なる大形の三四花を簇生する。花冠は五深裂し、上瓣內面基部に黃綠の斑點あり、長短不同の雄蕊十個を有する。

草山溫泉は、海拔三百六十四米に位し、臺北州經營の公共浴場、療養所、旅館、別莊がある。大正十二年、東宮殿下が鶴駕を駐めさせられた貴賓館は、稍高みにある。

我等は五時、公共浴場に到着、今夜の宿泊を豫約し、直ちに紗帽山に足を向けた。

北投(ホクト)溫泉に通ずる自動車道路を進み、郵便局前を過ぎ、自動車道路と別れ、右折すると、すぐ紗帽山の急勾配な坂路を登るのである。相思樹を始とし、シヒ、クス、タブ、ナラ、ヒサカキ、ヒヒラギ、アセビなどの闊葉樹で、餘り大木は無いが、隨分生ひ茂つてゐる。林中幾度か電光形に迂る。右にも左にも岐路が多いが、唯本山熟知の沼井氏の後について、ひた登りに登つた。路傍の樹木には、其學名を記した木札が見える。

山の肩部あたりで、道は左へ卷いて、蔚蒼たる相思樹の密林に入る。火口の跡らしい窪地を存する小高原がある。程なく頂上に着いた。草山から約半里、約四十分を費した。

陸測二萬五千分一圖によると、頂上標高六百四十三・二米とある。地質學者は、七星山の寄生的火山とし、七里山が造つた集塊岩層を破つて噴出せる、輝石富士岩質の鐘狀火山だとしてゐる。頂上の凹地は、火口の崩壞した跡を想はしめる。

頂上は、火山岩塊磊々として相重なり、芝草に伍して、ツツジ、アセビなどが僅かに散點する位で、殆ど坊主頭である。植林された黑松は、まだ一尺程である。

北東に近く聳える七星山は、呼べば將に答へんとし、北西には大屯山を眺め、南は臺北平野を見下す。快晴の日には、平野の彼方、遙かに南湖大山、大覇尖山の雄姿を望むことが出來るさうだが、今日は奥深く、霞の御殿に鎮座ましました。

頂上の岩塊に踞して、沼井氏が用意された、蜜柑や菓子を食べ、休憩すること二十分許り。道を變へて下山の途に就いた。北側の山腹を辿ると、食蟲植物として、最も普遍的に知られてゐる、モウセンゴケが路上に出迎へする。予は本島跋渉中、モウセンゴケに接したのは、此處と七星山だけであつた。これは濕潤な腐植質の陽地に生ずるのが、其本性であるが、こゝのは半ば乾燥地、而かも赤土の路身に生ずるとは、其生態上頗る珍奇に値する。且つこの地のは、叢葉密生し、葉柄甚だ短く、葉面の腺毛は、著しく濃い褐赤色を呈するなど、内地のと幾分の差異があるやうだ、例によりタイワンモウセンゴケとでも言つたらよいか。花はまだ咲かないが、其蕾を解剖すると、紅色であるから、コモウセンゴケの一品であらう。

六時四十分、草山公共浴場に歸着し、早速廣い浴槽の溫泉に投じて、汗を洗つた。

臺北州發行の『北投草山地方案内』によると、東流水質は、强酸性白濁を帶び、活性〇・〇三四マッヘを有し、溫度攝氏七二・五度、其分析は

鐵	〇・〇七二四	アルミニューム	〇・〇七五一
カルシューム	〇・〇三六四	マグネシューム	〇・〇一四五
カリューム	〇・〇〇六二	ナトリューム	〇・〇〇九七
硅酸	〇・一五三五	クロール	〇・〇一八八
硫酸	〇・七八六六	燐酸	〇・〇一三六

この夜、臺北州廳地方課の林田稔氏と、本島産の博物標本製作に從事されてゐる古平勝三氏が來訪

された。兩氏は、今夜この附近にキャンプを張り、明日は我等と一緒に七星山に登ることを約して、歸營された。兩氏は臺灣山岳會員である。

三六、好展望臺七星山

山頂の展望、噴氣孔、竹子湖、北投溫泉。

△四月十五日　晴　朝　草山　五二　夕　基隆　六八

大屯火山彙中、最高の榮冠を戴いてゐる七星山に登るべく、午前七時三十分草山溫泉を出發した。一行四人。沼井、林田、古平三氏は、既に數回の經驗を有されるので、種々の示敎を得たのは幸ひであつた。

道は溫泉場背後の森林を穿つて、直ちに七星山の登りにかゝるのである。こゝにも樹木に附けた學名札が所々に見えた。公共浴場の庭にも、「コニシシャクナゲ」と札附の石南が、淡紅の花をかざしてゐたが、花冠の內面に紅點があり、葉の裏面は、無毛淡綠色であつた。

路傍に、ヒノキ、カウエフサン、カウヤマキなどの苗圃がある。

急坂を少し登ると、緩かな勾配を呈するスヽキ、ワラビなどの草地となり、身長以下の小灌木は、漸次短縮して、眼先を遮らぬ。一歩一歩視界は開ける。路傍に腰を卸しては、日光浴を取りつゝ展望する。麓の方では、鶯が朗かに經を誦し、空では、雲雀が頻りに天竺婆を尋ね廻る。氣持良い登山日和である。ノボタンもツハブキも見えた。此處の山地にも產すといふ、本島名物の八角蓮は、遂見參に入らなかつた。

頂上近く勾配急を加へ、九時七星山の絕頂に登り着いた。草山より約一里半といはれる。

眸子を放つと、眞先に目に入るのは、西方直距一里弱に於て、穩かな圓錐狀を呈する大屯山であ

る。其脈絡は、北に延びて起伏し、竹子山に連る。この起伏した脈絡中、一頭地を抽いた突起が、標高一千七十二米を有する小觀音山である。淡水河の左岸に屹立した觀音山に比べると、四百六十餘米も高いが、群峯の間に伍して、目立たぬので、小の字を冠されるのは、氣の毒である。小觀音山の此方に面する山側は、緩かな傾斜を以て、本山の西北に延びた尾根と握手して、分水嶺を作る。この分水嶺に發源して、東北に流下する磺溪の海に注ぐ所、金山溫泉があるといふあたり、海岸一帶を見下すも、胸の開ける心地する。

北方直距一里强に峙つ竹子山は、美しいピラミッド狀を呈する。其東北に延びた側線は、たしかに火山式裾野を展開する。この山は、一面に矢竹を以て蔽はれてゐるので、この名を得たのだといふが、こゝから見ては、全く毛氈を敷き詰めた草山のやうである。

竹子山ばかりで無い、大屯火山彙に屬する總ての峯々は、淺綠な草山式で、中央山脈に於けるやうな、濃綠な森林色彩、所謂臺灣特有の森林美は、味ふ譯には行かぬが、獨り紗帽山だけは、小規模なから、稍異彩を放つてゐる。

本山は紗帽山に比べると、遙かに高いので、展望は廣い。唯今日も亦薄霞のため、中央山脈北部の雄峯を遙拜する光榮に浴することの出來ぬは、遺憾であつた。

予は本山に登つて、予が少年時代から、始終登遊する、我が鄉國の米山（ヨネヤマ）をつくづく聯想するのであつた。其標高に於て其海岸に近く峙つ點に於て、其火山式の點に於て、其集塊岩質の點に於て、餘りに能く似てゐるのであつた。殊に七星山が、大屯山、竹子山と不整齊な鼎立をなすのに對し、米山が、尾神山、黑姫山と不正な鼎立をなすのと相類し、七星山が、寄生的火山紗帽山を有するは、米山が、旗持山を有するに似て居り、又七星山が、臺北平野を隔てた彼方に、中央山脈北部の高峯を望み得るのに對し、米山が、頸城（クビキ）平野を隔てゝ、所謂日本アルプス北方の雄鎭を望み得る景觀と酷似するので

あつた。

大屯火山彙は、實に安全な散歩場であり、好個の展望臺であると謂はねばならぬ。

七星山の頂上は、二突起を有し、角閃富士岩と稱される、巨大な岩塊が重なつてゐる。小禾本科莎草科植物に伍して、チゴユリ、テッパウユリ、スミレ、サギゴケが花を見せる。ミヤマリンダウの一品、サンセウイバラの一品が目に入る。

頂上の巨岩に箕坐し、諸氏が用意された、蜜柑や珍菓を賞味しつゝ、悠遊一時間ばかり、峯の北西側を辿つて、下山の途に就いた。この山肩路身にも、モウセンゴケがある。

十五分程で、爆裂口の所に降つた。爆裂口は長徑約百間、數個の硫氣孔よりは、轟々の音を立てて、硫黄、水蒸氣を噴出し、硫黄華に化粧された、四隣の草木も哀れである。以前は硫黄を採集したこともあるさうである。

集塊岩を踏んで降ると、鮮かな紅花のヤマツツジが、彼方此方の谷間を飾る。赤芽の叢葉に、淡紅の美花を盛つたセイシクワが、所々見參する。

十一時竹子湖に降り、蓬萊米原種田事務所に休憩を請ひ、晝食をしたゝめた。主任技師梶原通好氏、及び臺北州勸業課の平澤龜一郎氏より、珍らしい菓子や、料理の饗にあづかつた。下りの途中で出逢つた、臺灣山岳會員である、臺北州稅務課の植松益枝、木田文治兩氏も、一緒に休憩され、玄關前で、一同植松氏のカメラに收まつた。この寫眞を、後に郵送された好意は、有り難い。

この事務所は、最近の新築で、海拔約六百六十六米に位すといふから、紗帽山の頂上より稍高い地點を占め、七星山を負ひ、臺北平野を見下す、風光に富んだ所である。臺北州の經營に屬し、優良品種とされる所謂蓬萊米（九州種）の原種を、此處で栽培し、各地へ配附し、產米の改良を期することとなつてゐる。この原種田の面積は、約八十町歩である。

予は渡臺前、參考書を漁つた時「竹子湖には、野生の山櫻が著はれてゐる」といふのが目に入つた。それで臺北旅館吾妻に、其開花期を照會したら、「三月中旬花盛りである、但し移植したのが多い」との回答であつた。この野生櫻は即ちアリサンヒザクラで、其開花の時期は、三月以前であるが、別に內地の吉野櫻を移植したのも多いから、この原生種、移植種は相待つて、益〻この景勝地の添景となるであらう。

予はこの竹子湖を、湖水と思つたので、湖畔を彩どる櫻花が、其影を碧水に涵すの光景は、嵐山の保津川に於ける、それに比べてなど、想像を描いたのであつたが、それは全然裏切られて、實は盆地を意味する彼の阿里山腹の奮起湖の類であつた。尙ほ可笑しいのは、この奮起湖の原名糞箕湖の名が、本島各所に夥しいことであつた。竹子湖は、元竹仔湖と書いた。臺灣の地名には、仔の字の入つたのが甚だ多いが、今は特殊の場合の外は、全部子の字に改められた。

竹子湖は、七星山と大屯山との裾合谷に屬する窪地である。

十二時原種田事務所を辭し、草山への自動車道路を辿る。この日は日曜のこととて、草山方面から、散歩に來た人達が多い。婦人達も交つてゐる。我等は北投溫泉に向ふべく、右折間道を取つた。

この原野で林田氏から敎へられた、キキヤウランが多い、ニシキナスビも目に入つた。キキヤウランは、愛らしい桔梗色の小花を、圓錐花序に綴り。ニシキナスビは、直徑五分ばかりの球果が、始めは白綠色、後紅熟するので、紅白相交り、人目を惹くのである。

降るに從ひ、水田が多く現はれた。サトイモの一族ヤツガシラが、水を深く湛へた水田の中に、栽培されてゐるのを見た。濕潤を好む植物ではあるが、水田栽培は、初めて見參に入つたのである。

零時半、草山、北投間を連絡する自動車道路の紗帽橋に出た。橋の名に誘はれて、紗帽山を眺めると、如何にも優しい美しい姿を見せた。爪先下りの坦々たる大道を辿ると、右手は安山岩の崖壁峙

ち、左手は臺北平野を見下す、程なく頂北投（チヤウホクト）溫泉といふが、路傍にある。草山から北投に行く中間に位し、北投から約一里である。溪流に沿ひ、溫泉旅館、別莊がある。花をも欺く猩々木の若芽の眞紅が、あちこちに見える、紅竹も植ゑ込まれてゐる。紅竹と猩々木は、本島庭木の流行兒らしい。

やがて左に山側を仰ぎ、右方脚下數百尺の谷底に、硫氣孔を見下す。即ち大屯山麓に於ける爆裂口で、泥流の痕跡が窺はれる。そこには今盛んに硫黃を採集してゐる。大なるカーブを廻り、山の端を降ると、北投溫泉である。

溫泉場は、一帶に相思樹の綠林にて包まれ、溫泉旅館數十軒、林間に散在し、郵便局もある。淸の光緒二年、獨逸人の發見にかゝるさうだが、明治三十四年頃より、漸次發展し、大正二年州費を以て廣大なる公共浴場も設けられ、今は東洋有數のラヂウム溫泉とし、本島第一の溫泉鄕として、著名のものとなつた。海拔約四十米、臺北を距る三里。汽車、自動車の便がある。

この日は、日曜休日のこととて、特に繁昌雜沓を極めてゐるので、唯設備派手やかな旅館や、公共浴場の外觀を一瞥しただけで、歩を停車場に運んだのであつた。

臺北州の『北投草山地方案內』によると、この地は、硫黃泉、鹽類泉、單純泉を涌出し、溫度は攝氏四十三度である。公共浴場溫泉の分析表は、

無色透明無味無臭、弱アルカリ性、

硅酸	〇・一七八〇〇	硫酸	〇・〇九八七六
炭酸	〇・四七五〇〇	クロール	〇・一四九七五
礬土	〇・〇九三五〇	石灰	〇・一七五九二

この溫泉中に生ずる北投石は、ラヂオアクテブ性を含有し、美濃の苗木石、下野の櫻石と共に、日本に於ける三珍石と稱されてゐる。

午後一時五十分新北投驛發の汽車に乘り、二時二十五分大正街驛で下車し、大正町に於ける古平氏の宅に同行し、氏が技術に成つた、珍らしい標本や、氏が大覇尖山登攀當時の優秀な寫眞を多數見せて貰つたのは、得難き見學であつた。

四時旅館吾妻に歸着し、愈〻懷かしい臺灣の地を辭することゝなつた。

入臺以來、日を閲すること四十、其中蕃地の山旅に三十日を費し、豫期以上の効果を收め得たことは、畢竟總督府、臺灣山岳會を始め、到る處官憲及び有志者の、深甚なる好意、多大なる援助に依ることゝ、感謝に堪へぬ。臺灣山岳は、大屯火山彙を除くの外は、殆ど其全部が、蕃地に在るので、必ず官憲の護衞援助に待たねばならぬ。從つて或る一種の氣兼ねを要することも無いではないが、然しそれだけ、山容水態森林は、俗界の外に超越して、原始的大自然の景觀を保有し得るのである。予は渡臺前其面積が、九州と殆ど相伯仲するので、假令山岳の標高は卓越するも、規模は幾分小なるを免れぬであらうと、豫想したのであつたが、親しく之を跋渉して、山岳といひ、溪谷といひ、森林といひ、其雄大壯麗なるには、驚異せざるを得ぬのであつた。唯其時期が尚早いといふ、關係があつたのもあらうが、草本帶を飾る所謂御花畑式の景觀は、內地高山のそれに比べて、品種は少いやうに推察された。然し石南の一品だけでも、其豐富蔓延の景觀は、優に之を償ひ得て、尚餘りありと謂はねばならぬ。

予は櫻と石南を視察すべく、特に三四月を選び、幸ひにも兩者の開花に接し得たことを、深く喜ぶのである。

要するに臺灣の山旅は、非常に興味あり非常に愉快であり、予が旅行觀に、空前の印象を與へたことを、特筆大書するのである。

歸途

三七、航海

（繻の大群、下ノ關の櫻。）

十五日午後四時旅館吾妻に歸着した予は、行李を纏め、沼井氏及吾妻旅館の主婦番頭達の見送を受け、五時四十五分汽車に搭じ、六時五十分基隆着、驛前常盤旅館に投宿した。

△四月十六日　快晴　朝　基隆六四

予は此日午前九時基隆發航の蓬萊丸に乘らうとするのである。それで旅行中、釣錢として受取つた、臺灣銀行發行紙幣の交換を求むべく、基隆驛内にある兌換券交換所に行つた。一定の用紙を渡され、それに交換を要する金額、貨幣の種類、住所氏名を記入して差出すのである。朝鮮でも、朝鮮銀行發行の貨幣は、歸途乘船の際、交換せねばならぬが、此處のやうな煩雜は無かつた。且つ此處では、其取扱時間が、午前七時より、八時四十分までと制限されてゐるので、雜沓もする。乘客の迷惑は、少からぬのであつた。

この朝、沼井鐵太郎氏と鹿野忠雄氏は、臺北から船内にまで立越され、別辭を述べられたことは、感謝に堪へぬ。

定刻の九時、蓬萊丸は基隆の岩壁を離れた。船は大阪商船會社が、臺灣就航船中第一といはれる、一萬噸級の優良船である。乘客過多のため、娯樂室まで客室に充てるといふ、盛況さであつた。

予は往路、二等船室に懲りたので、歸路は三等船室を選んだ。予が隣席に、臺灣總督府工務課の藤内隆止氏が居られ、臺灣の山岳寫眞を見せられたのは、山旅の歸路に於ける予には、少からず興味を

與へた。

△四月十七日　快晴

この日は、太平洋上に現はるゝ日輪の眞紅を拜した。船が九州南端の西方を通過する頃、夥しい數の鷗が群游してゐる、中には丈餘の巨物も交り、快速力で船と競爭して、勝利を誇るやの態度を示すも面白い。

△四月十八日　快晴

船は午後三時門司に着き、六時三十分こゝを發した。乘客の下船したのも多いが、新たに乘船したのもある。然し全員の約四分一を減じたとのことである。

下ノ關の後丘には、松林を綴る八重櫻が、滿開の姿を見せる。

六時四十分深紅極まる美しい日輪は、山の端に沒した。

△四月十九日　快晴

午後一時十五分神戸着、二時五十三分三ノ宮發の汽車に搭じた。神崎邊、車窗から眺めた、菜の花の黃金世界も、美しく柔かな感じを與へる。

午後三時四十三分大阪驛着、宮岡氏及び富士雄夫妻の出迎を受け、五時鐘紡大阪支店社宅富士雄方に投じた。

三八、大阪附近

箕面公園、天王寺公園、六甲山、生駒山。

△四月二十日　少雨　朝　大阪　八六　夕　同　七〇

各方面へ、通信の筆を走らせた。

△四月二十一日　晴　朝　大阪五八　夕　同五八

船の疲れを恢復すべく、富士雄、常子の案内にて、箕面公園の新緑美を彩どる、櫻花を賞し、紫雲山中山寺觀音に詣で、寶塚少女歌劇を見る。

△四月二十二日　少雨　朝　大阪五七　夕　同五七

宮岡氏より、支那料理を以て、晩餐を饗せらる。

△四月二十三日　曇　朝　大阪五六　夕　同五七

富士雄の案内にて、仁德天皇の御陵に參拜し、堺の水族館を見、天王寺公園に遊んだ。この公園で、闘らずも臺灣の特産とする珍鳥帝雉の一番を見たのは、驚異と興味の感に打たれた。

△四月二十四日　快晴　朝　大阪四五　夕　同五二

早朝單獨にて大阪を發し、有馬溫泉を探り、六甲山（標高九三二米）を乘越し、薄暮大阪富士雄方に歸着した。

武庫川に沿ふ生瀨、武田尾あたり、コバノミツバツツジが、滿山を紫化するもあり、ヤマブキが崖側を黄化するもある。松の綠を綴る野生の山櫻は、其紅花に濃淡種々の色彩を呈し、嵯峨たる岩巒と相待つて、景致は寧ろ嵐山を凌ぐを感じた。この櫻は、吉野山櫻と同一品種かと思はれる。六甲山の北側には、コバノミツバツツジに伍して、ウンゼンツツジが多い。予は曾て、ウンゼンツツジの名親の本家溫泉岳に登つて、ウンゼンツツジの片影だに接することが出來なかつたが、後那智山で之を見、今又六甲山で、頗る多く目に入つたのは、奇遇の感なき能はずであつた。

ミツバツツジの五雄蕊に對し、コバノミツバツツジは十雄蕊を有し、多く枝を分ち、花附は豐富である、これは近畿地方から、西南地方に亙つて多い。

△四月二十五日　快晴　朝　大阪四三　夕　同五〇

單獨にて大阪を發し、生駒山（六四二米）に遊び、最高地點に登つて、畿内平野を見下し、南は近く金剛山、遠く吉野群峯を望み、煦々たる春光を浴びつゝ、山上を逍遙し、夕方大阪富士雄方に歸着した。生駒山は、麓から寶山寺前まで、ケーブルカーによつて七分間で登り得るのだが、尙ほ山上まで延長すべく目下工事中であつた。

三九、大阪より東京へ

裾野より拜した富士山、御殿場より仰いだ富士山、箱根より眺めた富士山、東京博覽會。

△四月二十六日　快晴　朝　大阪五五　夕　御殿場五二

船の疲れを癒すべく、二十日以來、適度の散歩を取り、氣分は全く恢復したので、東京で待ち受けられる高頭仁兵衞氏を訪ふて後、歸鄕すべく、宮岡氏及富士雄、常子の見送を受け、午前七時三十分大阪驛發の急行列車に搭じた。驛頭日本山岳會員榎谷徹藏氏に邂逅した。氏は二十年前、穗高岳の溪谷で逢つた以來、同好の知人である。

午後二時半、靜岡驛あたりから、銀冠を戴いた富士の秀峯を仰いだ。數十年來の馴染でもあり、何時見ても崇麗である。二三日前寒氣襲來のため、其五合目邊より以上は、新雪を裝ひ、陽光に輝いて、眞に白妙の美觀を極め、裾野驛あたりから仰ぐと、この淸らかな白衣の胸に、寶永山は、其火口を緣どる岩壁の肌を露はし、さながら菊花章を佩用した威儀を添へる。

この莊嚴無比の感に打たれた予は、素通りするに忍びず、急行券を棄權し、俄かに沼津驛で下車し、次ぎの學生列車によつて、四時半頃御殿場驛に下車した。急行列車は、御殿場驛には停車せぬからである。

昔馴染の不老館富士屋に投じ、直ちに郊外を散歩し、夕陽に映えて移り行く、富岳の光景に見入つ

たのである。

△四月二十七日　快晴　朝　御殿場五二　夕　箱根底倉六〇

早めに朝食を攝り、裾野を散歩し、朝日に映ずる富士の光景を拜した。旭光を浴びた新雪は、如何にも鮮麗極まる淡紅美を呈したが、漸次薄らいで、遂に純白に還元した。頂上から麓に向つて、放射狀に引いた幾多の稜線だけが、比較的上方まで、岩石の肌を露はすので、雪面の下端を緣どる、雪と岩との犬牙交錯する景觀は、端麗無比な圓錐狀を呈する、富士特有の誇りであらねばならぬ。

午前十一時二十分御殿場發の自動車に乘り、零時十分長尾峠の茶屋で車を辭した。「標高三千百二十八尺」と註した標柱がある。白衣新裝の富士が餘りに崇高の感を與へたので、乙女峠と、蘆ノ湖畔からの禮拜を希望したのである。

予はこゝから左折小徑を登り、所謂箱根山第一次の外輪壁上を辿つた。丸嶽（一一五四米）の頂上に登り詰め、宏延なる發展を呈した裾野を隔てゝ、富士の峯頭を仰ぐと、御殿場で仰いだよりも、彌高き感じがする。左に駿河灣を眺め、近く脚下に、曲玉式の蘆ノ湖を見下し、展望臺としての雄大な景觀は、長尾峠や乙女峠を凌ぐこと數等である。

丸嶽から乙女に降る途中、四人連れの英國婦人が、芝生の上で、地圖を擴げてゐるので、請ふて一寸見せて貰つた。予が箱根入りは臨時的の思ひ立ちで、地圖の準備が無かつたからである。程なく乙女峠に下つて、茶屋に休んだ、昔ながらの一軒茶屋であるが、近頃自動車道路の開通した長尾峠が繁昌するので、こちらは淋れ行く樣子が見える。標高約三千三百尺である。この茶屋からは、丸嶽に遮られて、駿河灣は見えぬ。北東金時山の側線、芝生地を少し登ると、蘆ノ湖は見下すことが出來る。

急坂を降つて、長尾峠を通過する自動車道路に會し、槭の若葉に伍する、大吉野櫻の花爛漫たる並木街道を、爪先下りに進み、仙石原で自動車に乘り、五時底倉溫泉涵琴樓鶴屋（澤田鉚義）に投宿し

た。こゝは茶代廢止であるが、一泊料五圓五十錢乃至十圓五十錢、設備は贅澤すぎる。

附近に淡紅花の野生山櫻が散點するが、花は稍散りかゝつた。

△四月二十八日　晴　朝　箱根五六　夕　東京五八

午前八時二十三分宮ノ下發の自動車に乘り、蘆ノ湖に向つた。途中小涌谷（コワクダニ）に於ける櫻は稍滿開を過ぎた。この地は自生の山櫻もあり、植ゑ附けた大吉野櫻の樹數も多く、八重櫻も混ずる。樹も、躑躅も亦多い。春花秋葉の粹を集めた所、三河屋旅館がある。

九時十分蘆ノ湖畔にある元箱根（七二六米）に着き、昔を偲ばせる舊箱根街道の杉並木を貫き、離宮を右手に拜し、程なく箱根町に到着した。こゝで自動車を辭し、考古館に於て、史蹟を語る諸參考品を觀、湖畔を迴りつゝ、白雪を戴く富士の英姿を仰ぎ、湖面に涵す所謂倒富士をも眺めた。予は富士を拜すること數十回であるが、碧空を劃して白雪を戴く崇麗な景觀に於ては、今回を隨一とする。殊に雪は二三日前、新たに天降つた純白無比であるのと、山體を被ふ雪の部分が、五合目以上といふ無比の恰好なのと、惠まれた天氣が、無比の晴朗であるのと、相俟つて、予に終生忘れ得ぬ印象を與へたのであつた。

臺灣山岳には、臺灣特有の山岳美がある。富士には亦富士獨特の山岳美を有し、眞に天下の名山たるに背かずと、滿腔の禮讃を捧呈したのであつた。

急行券を投げ棄て、箱根入りを敢行した予は、この得易からぬ天佑を感謝しつゝ、十時五分再び自動車に乘つて小田原に降り、十一時五十二分小田原驛發の汽車に搭じ、午後二時四十五分東京驛に下車し、高頭氏の出迎を受け、自動車に同乘し、小石川區原町十番地に於ける氏が寓居に到着、暫く御世話にあづかることゝした。

この夜日本山岳會有志の方々が、芝區料理店つかさに於て、予がために、歡迎の晩餐會を開かれた

のは、深く感謝する所である。

△四月二十九日　晴　朝　東京六五　夕　同七二

朝日本山岳會評議員武田久吉博士來訪され、氏が東京營林局の委囑により、田村剛博士と共に、筆を執られた『尾瀬地方に於ける保護林と其景觀』と題し、優秀な寫眞を豐富に挿入した、興味津々たる冊子を寄贈された。入れ替つて、同會幹事木暮理太郎氏が來訪された。

午後高頭氏の案内で、芝公園、上野公園に遊び、山王の旗亭ひさごに於て、評判の烏料理を饗された。

△四月三十日　快晴　朝　東京七〇　夕　同七四

高頭氏の案内にて、木暮理太郎氏を、本郷蓬萊町に於ける、日本山岳會編輯所に訪ひ。御大典記念博覽會を觀、其臺灣館には、最近の馴染とて、一種の感興も涌いた。

淺草、本所、日比谷公園にも遊んだ。

四〇、東京より歸郷

雄氷峠、生田の山吹、田口に於ける妙高山。

△五月一日　曇　朝　東京六五　夕　田口五五

臺灣山旅の首尾を通じて、深甚なる好意を寄與された高頭氏に、深く謝意を表し、氏の寓居を辭し、歸郷の途に就いた。氏は自動車に同乘して、上野驛まで見送りされたのは、感謝に堪へぬ。

汽車は、午前八時三十八分上野驛を發した。

雄氷峠にかゝると、野生の山櫻が、ぽつぽつ目に入るが、其花は殆ど白色であり、疎らで淋しい。

淡紫紅色を呈するミツバツツジも多い。

信濃に入り、大屋驛あたり、千曲川の左岸、生田山の崖側を飾る山吹は、頗る廣い區域に密布して、滿目黄化の壯觀を呈する、山吹は、碓氷峠や豐野の北郊あたりにも散點する。長野縣は、野生山吹が多いやうである。

午後六時四十九分、鄉國入口の第一驛田口着、妙高溫泉加島屋（土井民治）に投宿し、馴染の第七號室に陣取つた。室は鄉國の名山、越後富士の尊號を呈される妙高山（二四四六米）に直面するので、熟知の館主は、常に予に此室を提供するのは嬉しい。

△五月二日　曇　朝　田口五五　夕　片貝六五

此朝妙高山には、雲霧去來して、風情豐かな一種の景觀を呈した。

午前九時五分田口驛發の汽車に搭じ、途中鯨波驛下車、晝食を攝り、午後六時二十五分鄉里に歸着し、茲に六十有四日を費した、臺灣の山旅を終結したのである。

尾言

四一、參考圖書

予は臺灣の山旅を思ひ立つてから、始終長岡市立圖書館互尊文庫で、參考圖書を漁つたのであるが、最近十年以内のは甚だ少い。殊に地圖に至つては、全然無いのである。それで熟知の書肆や、東京の知人を煩はしたが、唯陸地測量部の明治三十年輯製二十萬分一の假製圖が手に入つただけである。同圖は平地すら隨分怪しいのが多いが、予が主眼の所要とする山地に至つては、圖上既に多く疑

間符を註する通り殆ど當てにはならない。比較的臺灣には近く、且つ航路の關係上から、幾分の望みを屬して、大阪方面にも物色したが、矢張無い。發程間際に至り、臺灣總督府に勤務される沼井鐵太郎氏、及び臺北旅館吾妻に依賴し、沼井氏からは、總督府警務局が、大正十一年調製された、三十萬分一臺灣全圖、旅館吾妻からは、臺北市新高堂書肆が、昭和二年（同圖には大正十六年一月發行と見越的記入がある）發行した、四十五萬分一臺灣地圖の郵送を受けた。新高堂のは、最近發行のことと て、新高山の標高を、一萬三千三十五尺と記入してあるが、警務局のは、一萬三千七十五尺と註してある。臺灣の山岳は、大正十五年精確の測定を完了したのであるから、それ以前の發行に屬するものは、或る點に於て止むを得ぬことゝし、前記警務局のによつて、初めて著地を、明確に窺ふことが出來た。

尙ほ山岳の狀態を知るには、總督府警察本署の明治四十三年乃至大正四年の測圖にかゝる、五萬分一蕃地地形圖（臺北日々新報社出版）がある。十數年前の製版のこととて、鐵道線路の記入や、地名の改正などに對しては、遺憾の點もあるが、今の處、これ以上のものは無い。標高は尺を以て示してゐる。これは當時品切であつたので、予が入臺後、沼井氏から周旋にあづかつたのである。

別に陸地測量部の大正十四年の測圖にかゝる、二萬五千分一の假製版がある。まだ本島北部地方から、西部臺中附近まで出來ただけである。予は大屯山彙あたりと、日月潭附近のとを、中曾根武多氏から、寄贈に接した。これは申分無い地圖であるが、惜いかな、中央山脈方面には、觸れてゐない。

極大體を知るには、陸測明治四十二年の修正にかゝる、百萬分一東亞輿地圖の、臺北及び臺南がある。又總督府の『臺灣事情』に添附された、百萬分一臺灣全島圖がある。これは非常に鮮明で見良い。

參考書として、武内貞義著『臺灣』（大正三年發行）は、全般を知るには、頗る精細を極めた良書である。又臺灣の風俗を知るには、後藤朝太郎著『現在の臺灣』（大正九年發行）がある。

臺灣山岳會發行の『臺灣山岳』、『新高登山のしをり』、臺灣總督府發行の『臺灣事情』（昭和二年版）、『最近の臺灣』（始政三十年記念、大正十四年刊行）、總督府營林所編輯の『阿里山登山者のために附新高登山案内』（昭和二年發行）、總督府交通局刊行の『新高山登山案内』、臺中州廳刊行の『阿里山口新高登山案内』、新高郡役所刊行の『新高山、日月潭遊覽案内』、臺北州刊行の『北投草山地方案内』、臺灣旅行案内社發行の『臺灣旅行案内』（昭和三年版）等、それぞれ寄贈に接し、多大の利便に浴し得たことを喜び、茲に特筆して、深く謝意を表する。

予は此の行を終るに臨み、日本山岳會、及臺灣山岳會の幹部、並に臺灣總督府、各州廳其他官憲有力者より蒙つた、懇篤なる示敎と、絶大なる援助とに對し、永遠に記念し、深甚なる謝意を表するのである。

四二、臺灣就航船

領臺後、總督府は、大阪商船と日本郵船の二會社に、毎年一定の補助金を給與し、內地臺灣間に、定期航海を命じた。爾來會社では、漸次船舶を改造し、就航回數も增し、大阪商船では、蓬萊丸（總噸數九五〇〇）、扶桑丸（八三〇〇）、瑞穗丸（八五〇〇）といふ所謂一萬噸級甲型巨船三艘を用ひ、日本郵船では、甲型船の吉野丸（九〇〇〇）、乙型船の信濃丸（六〇〇〇）、因幡丸（六〇〇〇）の三艘を用ひ、合計毎月十二回往復であつたのを、昭和三年七月より、四週十二回往復となつた。尙ほ郵船では、乙型二艘も、最近大和丸（九七五〇）、朝日丸（九七三五、各速力十八浬）といふ優秀な甲型船に改めることゝなつた。

甲型船は、正午神戸を發し、四日目の午後四時に基隆に着し、乙型船は、五日目の朝基隆に着する。

發航時刻は、四月より九月。十月より三月までの二期に分つて、相違がある。これは鐵道省の最新刊に屬する。汽車汽船發着表及び、兩會社の臺灣航路案内によれば判る。（終）

（昭和四年四月三日脱稿）

正誤　九頁七行目「六、海航」トアルハ「六、航海」ノ誤ニ付訂正ス。

會報

○第二十二回大會記事

昭和三年十一月二十四日午後六時、赤坂區溜池三會堂に於て、本會第二十二回大會を開催、藤島幹事開會の辭を述べ、左の講演があつた。

山岳スキーに就て　麻生　武治氏

講演の大要は、冒頭先づスキーの北歐に於ける淵源を說き、中歐への渡來に及び、轉じてスキー登山の發達は歐洲に於ても日尙ほ淺く、一八九七年一月、かのプロフェッサー・バウルケに依つて行はれたる、オーバーランド横斷スキー旅行に其の端を發して以來、僅かに三十餘年を閱みしたるに過ぎざるも、獨墺瑞佛等各國山岳會の活躍めざましく、アルプスに於ける著名なる高山にして、スキーによる登山の記錄なきもの稀れなりといふは過言なりとするも、其の甚だ多きを述べられた。次で氏が歐洲滯留中、或はベルナー・オーバーランドに、或はペニンアルプスに、或はチロール地方に於て、夏季若しくは冬季登山せられたる數多き山々に就て、優秀なるスライドに依り、興味ある經驗談、感想談を語られた。岩登り、或は氷河上又は氷の山稜に於ける技術、或は高山に於けるスキーの技術等に關する意見を交へての登山談は、氏一流の諧謔、諷刺、深刻なる皮肉と相俟つて、來會者に深い印象を與へた。殊にオルトラー・エッツタール・シュトウバイ山群、及びセントラル・テロリーズ・アルプス地方の登山は從來本會會員の訪づる者少かりしを以て、一層興味をそゝるものがあつた。

登山の方面に於てのみならず、スキーイングに於ても、一九二八年二月萬國オリンピック大會に我派遣選手と共に活躍せられたる氏の講演が、我國登山界殊に近年益隆盛を來たしつゝある冬季登山のために、極めて有益な寄與であつたことを疑はない。

麻生氏の講演終了後、本會幹事冠氏が昭和二年夏及び昭和三年春、文部省活動寫眞撮影隊を指導

して撮影せられたる、「黒部川」及び「劍岳」の二映畫を上映した。黒部の深谿、劍岳、雪稜、剩すところなく展開せられ、來會者はいづれもその撮影の困難を想ふと共に、自然の美をまのあたり見るが如きに感嘆したのであつた。

十時半、木暮幹事の閉會の辭を以て、來會者四百餘人、場に溢ふるゝの盛會裡にこの大會を終つた。

○第四十二回小集會記事

昭和四年三月二日午後六時三十分より赤坂區溜池三會堂に於て、別宮幹事司會の下に第四十二回小集會を開催し、左記講演あり、午後十時三十分散會す。

ラウテラールグラートの憶出
（附ガートルード・ベルの事（幻燈説明））
會員　松方義三郎氏

黒部川（新越澤より藥師澤）
幹事　別宮　貞俊氏

籠川谷に於ける積雪狀態及びその他雪に關する二三の考察（幻燈説明）
會員　黒田　正夫氏

シュレックホルンとラウテラールホルンを結ぶラウテラール・グラートはベルネルアルペンの最もいゝ Gratwanderung の出來る處で、シュレックホルン、ラウテラールホルンの登山史を簡單に説明せられてから、松方氏が一九二五年の夏サミュル・ブラヴァント及びクリステン・シュルネッガーの二案内者を連れてグリンデルワルトから登山した談である。シュトラールエックの小屋を夜半に出發して、先年辻村、近藤兩氏の通つた經路で午前六時頃シュレックサッテルに到着し、シュレックホルンを目指す登山者が非常に多いので右折してラウテラールホルンに向つた。山稜だけ岩がしつかりして居て、兩側は急に難ぎ落ちて居る痩尾根を文字通り尾根を傳ひ、烈しい西風と戰ひながら、シュタイクアイゼンをつけて三十に近いジャンダルムを一つ一つ越して午後一時頃にラウテラールホルンの頂上に達した。途中で一回ジャンダルムをからむだ時氷が割れて、松方氏が綱で支へ

られた邊は聽者の手に汗を握らせた。頂上から下つて、シュトラールエックバスに來た時雪の少い爲め、道を求めるに苦心を重ねて、シュトラールエックの小屋に歸り、翌日は再びシュレックサッテルよりシュレックホルンに登り、北側の尾根アンデルソングラートを下つた。これに關聯して數十枚の幻燈を示された。遠からず詳細の記文を山岳誌上で見ることが出來ると思ふ。

次ぎの別宮幹事の黑部川は同氏が昭和三年八月廿一日より卅一日に亙つて會員冠松次郎、岩永信雄、渡邊漸の三氏と同行して黑部川を歩いた旅行の梗概である。上流より本流の左岸について下江する豫定で行つた處、大へつりより下は左岸がどうしても行かれず、徒渉點より右岸に移り、それから再び左岸に移ることも不可能だつたので急に計畫を變更して、逆に上流に向つた。道草を喰はずに飛ばせば新越澤合流點から平小屋までは半日行程であるから、新越澤附近の大觀を鑑賞に行くだけなら極めて簡單である。平小屋から東澤までは冠氏の前の經驗より遙かに時間を費し、東澤合流點の上手の川原に露營した。廿七日には東澤泊場を發して川通し進み、黑ビンカ直下でロープを使つて惡場を越し、づつと川通しを左右に亙つて口元タル澤まで來た。そこから上に一寸廊下があるため左岸の二三十米上をからむ。やがて東信步道に合し、廊下澤上手の左岸の川原に泊る。廿八日が最も惡場が多かつた。右岸にある東信步道はそれの唯一のロープ場を過ぎると水から離れて了ふので道を捨てゝ川に從つた。ついに一箇所どうしても普通には通過が出來ないので一同シャツ一枚になつて胸まで浸つて辛うじて通過した。それの少し上手でまた少しばかり左岸をからみ、金作澤下手の川原に泊る。廿九日は朝の內暫く東信步道を利用し、あとは川について立石に至り、それより藥師澤に至り泊る。藥師澤下の鑛山事務所は人が居ず、唯米や工事材料が澤山あつた。その翌日は天候が險惡になつたので、有峯に出て泊り、和田川に沿うて最近出來た道を經て千垣に出た。

黑田氏の講演は積雪の力學的特性を試驗する方法を說明せられてから早大山岳部員と大澤小屋で

共同に各種の現象を研究した結果の梗概であつた。

積雪の層と長野、高山兩測候所に於ける降水量の報告とが極めてよく一致して居る點を示し、それによつて長野、高山兩市の氣象材料によつて日本アルプス地方の降雪狀態を判斷することが出來る。また一日中の積雪表面の溫度の變化と表面から少し下の一日中の溫度の變化とから、雪の熱傳導率を算出した。太陽の輻射熱を雪は非常に吸收し易いからして、氣溫が低くても陽光さへ受ければ雪の溫度はずん〳〵上る。また太陽が蔭れば雪は自己の熱を輻射して、自身の溫度は下る。故に太陽が這入れば氣溫が高くても雪は凍るから、スキー登山の場合には晴れて居ても日が暮れゝばシュタイクアイゼンが必要になる。また氣溫が低くても陽光があたれば雪の溫度が上るので、雪崩の心配が起る。約十枚の幻燈を用ひて說明せられた。

尙當日の來會者左の如し。

松方義三郎、藤嶋敏男、黑田孝雄、酒井忠一、佐藤文二、伊藤一郎、江南武雄、黑田正夫、大賀智、木村久太郎、深山東一郎、柳澤悟、福島昌夫、高橋良之助、吉田喜久治、原田保之助、山崎輝彥、川崎吉藏、會原喜久藏、矢島幸助、笈川一、佐々保雄、茨木猪之吉、野澤英夫、植有恒、冠松次郎、別宮貞俊、岩永信雄、渡邊漸、高畑棟材、神谷恭、磯貝藤太郎、野口末延、長谷川孝一、田中菅雄、島山悌成、吉田竹志、木暮理太郎、高頭仁兵衞の三十九氏及び外に會員外來會者二十四名計六十三名。

○幹事改選

會則第七條に據り、本會幹事の改選を行ひたる結果、五十一名の候補者中より、評議員會の審議を經て、左記の十一名を新幹事に推薦することゝし、其承諾を得た。各自の分擔任務は後の幹事會に於て取り極めたものを序に記したのである。

庶務　別宮　貞俊　　圖書　藤島　敏男
編輯　岩永　信雄　　編輯　冠　松次郎
編輯　木暮理太郎　　外交　植　有恒
記錄　松方義三郎　　庶務　高頭仁兵衞

昭和四年九月發行

編輯　田中　菅雄　　會計　島山悌成
編輯　渡邊　漸（アルハベット順）

新任の岩永、松方、田中、渡邊の四氏は、所謂場數を經た豪の者であり、且つ幹事として最も適任の方々である。其上別宮氏は高頭氏を助けて庶務を擔任し、冠氏は益其健筆を振ひ、藤島氏槇氏は各方面の交渉に當られ、如上の人々が熱心に會務を執掌し處理して下さることであるから、今後は兎角停滯し勝ちであつた會務も刷新され、從つて會の面目が一新されるであらうと信ずる。沼井前幹事は臺灣に赴任されてゐるので、今回は選に洩れたが、現に臺灣山岳會の幹事として活動されてゐる。

幹事の改選につれて、發起人を除いた評議員の互選も行はれた筈であつたが、元幹事である評議員の新候補者は一人も無いので、之はすべて現狀の儘である。それで評議員は

小島久太、高頭仁兵衛、武田久吉、高野應藏、山川默（以上發起人）
辻本滿丸、中村清太郎、田部重治、三枝守博、近藤茂吉（以上元幹事）

之に高頭氏を除きたる現任幹事十名を加へた十九名と決した。

○會務報告

昭和四年三月二日午後五時より、赤坂溜池三會堂に於て幹事會を開き、左の件を協議す。

一、幹事改選の件。一、五月に大會を開き浦松氏に講演を依頼する件。（槇氏提案）

終つて入會申込者に就て詮衡す。

出席幹事　別宮、槇、冠、藤島、木暮、高頭、鳥山。

昭和四年五月四日午後五時半より溜池三會堂に於て幹事會開催。

一、岩永信雄氏を幹事に推薦の件。一、二十五周年記念として山岳寫眞帖發行の件。

出席幹事　槇、冠、別宮、藤島、木暮、高頭、鳥山。

昭和四年六月二十日午後一時、赤坂溜池三會堂に於て評議員會を開き、左の件を決議す。

一、會則第七條に據りて會員より選擧されたる新幹事決定の件。

之より先四月、往復葉書にて「適任と認めたる者四名を會員中より選擧し、同月三十日限り返事あり度旨」を認め、全會員に通牒したのであつた。其結果五十一名の候補者を得て、別項記載の如く新幹事を決定したのである。岩永氏は既に推薦されてゐたのであるけれども、成規の手續を經てゐなかつたので、重任とせず新任としたのである。

出席評議員　小島、高野、近藤、三枝、別宮、木暮、藤島、冠、高頭、槇、鳥山。

昭和四年七月三日午後五時より、溜池三會堂に於て、新任幹事を加へたる初めての幹事會を開き、全員出席の上、今後の方針に就て愼重協議する所あつたが、未だ決定を見るに至らずして、時間が遲くなつた爲に一先づ閉會したのであつた。

○交換及寄贈圖書目

ツーリスト	第十六年第十、十一、十二號第十七年第一、二、三、四、五、六、七號	ジャパン・ツーリスト・ビューロー
歩跡	第二年十、十一、第三年一、二、三、四、五、六、七、八號	テクリ會
管見錄	第四年八、十、第五年一、二、四、五、六號	大阪管見社
キャンピング	第七十六、七十七、七十八、八十、八十二號	ジャパン・キャンプ・クラブ
旅行	第三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十七、四十一號	東京旅行クラブ

昭和四年九月發行

アルカウ趣味	第十五年第十—十二號 第十六年第一—九號	日本アルカウ會	
旅	第八年十—十二月號 第九年一—八月號	東京アルカウ會	
みなかみ	第二年十—十二月號 第三年一—七月號	東京みなかみ會	
山水巡禮	第五年十、十一月號 第六年一、二、四、五、六月號	リュックサック倶樂部	
會報	第四年十、十一號 第五年一、四、五、六號	東京登山會	
會報	第三年九、十號 第四年一、二、三、四、五、六、八號	昭和マウント・クラブ	
山嶺	第七年十、十一號 第八年一、二、三、四、七號	東京野歩路會	
ペデスツリヤン	第百八、九、十、十一號	神戸徒歩會	
日本中部地方山岳の區分と各山岳實地踏査所要時間一覽		秋山敏 佐藤井岐雄	
や	第二十四號	神戸筒台山岳會	
霧	創刊號	商大	
藻	第二、三號	安田山岳部	
みや	第一輯	東京山嶺會	
山岳會誌	第五卷十一、十二號 第六卷一、二、三、四、五、六、七、八、九號	水路部山岳會	
旅		日本旅行協會	
山を思ふ		川端道一氏	
會報	昭和四年一、四、六月號	東京山嶺會	
アミーバ	第一卷第一號	生き物趣味の會	
ヌタック	一號	札幌第二中學山岳旅行部	
霧の旅	第二十八、三十、三十一號	霧の旅會	
臺灣山岳	第四號	臺灣山岳會	
山岳資料	第六輯	關東山岳會	
部報	第一號	立教大學山岳部	
リュックサック	六	早大山岳部	
ベルグ・ハイル	4	四高旅行部	
三高山岳部報告	第六號	三高山岳部	
登高行	(一九二五—一九二九)	慶應山岳部	
屋上登攀者		藤木九三氏	
立山群峯		冠松次郎氏	
劍岳		冠松次郎氏	
地質調査所報告	第九十八、九十九、百號	地質調査所	
地質說明書	伊良湖岬、山口、庄原、嬰橋、室積	地質調査所	
山とスキー	第八十六—九十四號	山とスキーの會	

La Montagne, No. 215, 216, 217. 55e Année 3e Série. No. 1, 2, 3.

Revue Alpine, Vol. 29 No. 3, 4. Vol. 30 No. 1.

Rivista del Club Alpino Italiano, Vol. XLVII, Num. 7-8, 9-10, 11-12. Vol. XLVIII, Num. 1-2, 3-4, 5-6.

Buttleti Excursionista de Catalunya, Any XXXVIII Num. 398, 399, 400, 401, 402, 403. Any XXXIX Num. 404, 405, 406, 407.

The Mountaineer, Vol. XX No. 11, 12, 13. Vol. XXI No. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9.

Bulletin du Club Alpin Belge, 2e Sárie. Tome VI, Nos 11-12, 13, 14-15.

The Geographical Journal, Vol. LXXII No. 3, 4, 5, 6. Vol. LXXIII No. 1, 2, 3, 4, 5, 6. Vol. LXXIV No. 1.

The Alpine Journal, Vol. XL No. 237. Vol. XLI No. 238.

Zeitschrift des Deutschen und Österreichischen Alpenvereins, Band 59, Jahrgang 1928.

Trail and Timberline. No. 119, 120, 121, 122, 123, 124, 125, 126, 127, 128, 129.

Colorado Chautauqua Bulletin, Vol. XVIII No. 1, 2, 3, 4, 5.

The Prairie Club Bulletin, No. 178, 179, 180, 181, 182, 183, 184, 185, 186, 187.

Year Book 1929. (The Prairie Club)

Sierra Club Bulletin Vol. XIII No. 4, 5, 6. Vol. XIV No. 1, 2, 3.

The Scottish Mountaineering Club Journal, Vol. 18, No. 106, 107.

Die Alpen les Alpes. le Alpi, IV-No. 9, 10, 11, 12. V-No. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7.

Natural History, Vol. XXVIII No. 5, 6. Vol. XXIX No. 1, 2, 3.

The Annual of the Mountain Club of South Africa, No. 31-1928.

Summer Appalachia Number (Appalachian Mountain Club)

Boletin de la Sociedad Castellonense de Cultura,

Tomo VII Cuaderno V.

Svenska Turistföreningens Arsskrift. 1929.

Svousk Turist Kalender 1929.

Stock-Holm, Svenska Turistföreningen.

Himalayan Journal, Vol. I No.1.

Mededeelingen der Nederlandsche Alpen-Vereeniging, Zes en Twintigste Jahrgang (1928), (1929).

Mitteilungen des Deutschen und Österreichischen Alpenvereins, Nr. 11, 12.

Canadian Alpine Jaurnal, Vol. XVI.

Akademischer Alpenclub, Bern, 23 Jahresbericht, Vom. 1.

昭和四九年九月發行

昭和四年九月二十六日印刷
昭和四年九月三十日發行

【定價貳圓五拾錢】

著作權所有

新潟縣三島郡深才村深澤
編輯兼發行者　高頭仁兵衛
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷者　島連太郎
東京市芝區高輪南町三十番地

發行所　日本山岳會
振替口座東京四八二九番
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所　三秀舍
東京市神田區表神保町

發賣所　東京堂

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXIII 1929 No. 3